

東京福祉大学大学院  
社会福祉学研究科  
社会福祉学専攻 博士課程後期

2021 年度 博士論文

## 中国人留学生の生活支援

— ケイパビリティ・アプローチの視点からの事例研究による考察 —

Life Support for Chinese Students

From the perspective of the capability approach, Case Study

G15911205 李 亭

指導教員

主査 教育学博士 中島恒雄

副査 医学博士 先崎章

副査 経済学博士 伊東真理子

目次	2
要旨	7
<b>序章 研究の概要</b>	<b>8</b>
1. 研究の背景	8
2. 研究の目的	9
3. 研究の意義	10
4. 論文の構成	10
<b>第1章 先行研究レビュー</b>	<b>11</b>
<b>第1節 中国人留学生の来日前の生活実態</b>	<b>11</b>
1. 中国の「小皇帝」	11
2. 中国の「蟻族」	12
3. 中国の「寝そべり族」	12
4. 中国の「ニート族」	14
5. 中国の「隠婚族」	15
6. 中国の「月光族」	16
7. 中国の「仏系青年」	16
8. 本節のまとめ	17
<b>第2節 中国人留学生の来日後の生活実態</b>	<b>18</b>
1. 外国人留学生の受け入れ政策	18
2. 外国人留学生の支援政策	19
3. 外国人留学生に関係する制度	21
4. 外国人留学生の生活実態	22
5. 中国人留学生の日本留学史	22
6. 中国人留学生の日本観や対日イメージ	28
7. 中国人留学生の日本留学動機	31
8. 中国人留学生の進路選択	32
9. 中国人留学生の異文化適応	34
10. 中国人留学生のアイデンティティ	36
11. 本節のまとめ	38
<b>第3節 中国人留学生の生活支援</b>	<b>38</b>
1. 中国人留学生における生活支援とは何か	38
2. 中国人留学生が抱えている生活問題	40
3. 中国人留学生の主な2つの困難	41

4.	日本人に当たり前のことが中国人留学生には当たり前ではない.....	41
5.	中国人留学生の異文化との共存.....	42
6.	本節のまとめ.....	42
<b>第4節</b>	<b>ケイパビリティ・アプローチ .....</b>	<b>43</b>
1.	アマルティア・センにおけるケイパビリティ・アプローチ.....	43
2.	マーサ・ヌスバウムにおけるケイパビリティ・アプローチ.....	46
3.	ケイパビリティ・アプローチと人間の安全保障.....	49
4.	ケイパビリティ・アプローチと人間開発理論.....	50
5.	ケイパビリティ・アプローチと自由.....	52
6.	ケイパビリティ・アプローチの五要素.....	54
7.	ケイパビリティ・アプローチから見た貧困の問題.....	59
8.	ケイパビリティ・アプローチと福祉.....	62
9.	ケイパビリティと福祉領域の諸概念・モデル・アプローチとの比較.....	63
10.	本節のまとめ.....	69
<b>第2章</b>	<b>事例研究(Case Study) .....</b>	<b>71</b>
<b>第1節</b>	<b>事例研究について.....</b>	<b>71</b>
1.	調査対象者.....	71
2.	調査方法.....	72
3.	調査内容.....	72
<b>第2節</b>	<b>事例分析.....</b>	<b>74</b>
1.	Aさんのライフヒストリー事例分析 .....	74
2.	Bさんのライフヒストリー事例分析 .....	78
3.	Cさんのライフヒストリー事例分析 .....	79
4.	Dさんのライフヒストリー事例分析 .....	80
5.	Eさんのライフヒストリー事例分析 .....	82
6.	Fさんのライフヒストリー事例分析 .....	84
7.	Gさんのライフヒストリー事例分析 .....	86
8.	Hさんのライフヒストリー事例分析 .....	88
9.	Iさんのライフヒストリー事例分析 .....	89
10.	Gさんのライフヒストリー事例分析 .....	91
11.	Kさんのライフヒストリー事例分析 .....	93
12.	Lさんのライフヒストリー事例分析 .....	95
13.	Mさんのライフヒストリー事例分析 .....	97
14.	Nさんのライフヒストリー事例分析 .....	99
15.	Oさんのライフヒストリー事例分析 .....	101

16.	Pさんのライフヒストリー事例分析	103
17.	Qさんのライフヒストリー事例分析	105
18.	Rさんのライフヒストリー事例分析	107
19.	Sさんのライフヒストリー事例分析	109
20.	Tさんのライフヒストリー事例分析	111
21.	Uさんのライフヒストリー事例分析	113
22.	Vさんのライフヒストリー事例分析	114
23.	Wさんのライフヒストリー事例分析	115
24.	Xさんのライフヒストリー事例分析	117
25.	Yさんのライフヒストリー事例分析	118
26.	Zさんのライフヒストリー事例分析	120
27.	αさんのライフヒストリー事例分析	121
28.	βさんのライフヒストリー事例分析	123
29.	γさんのライフヒストリー事例分析	125
30.	δさんのライフヒストリー事例分析	127
<b>第3章 総合分析</b>		<b>129</b>
<b>第1節 修正版グランウンデッド・セオリー・アプローチ</b>		<b>129</b>
1.	修正版グランウンデッド・セオリー・アプローチとは	129
2.	分析方法	129
3.	研究テーマの設定	129
4.	分析テーマの設定	130
5.	分析焦点者の設定	130
6.	逐語録の作成	130
7.	分析ワークシートの作成	130
8.	概念の生成	130
9.	カテゴリーの生成	131
10.	結果の質の確保	131
<b>第2節 調査対象者の基本属性</b>		<b>131</b>
1.	性別	133
2.	年齢	133
3.	出身地	133
4.	最終学歴	134
5.	来日年数	134
6.	在学状況および教育機関	134
7.	調査の期日	135
8.	インタビュー時間	135
9.	インタビュー総時間およびデータの頁数と文字数	135

<b>第3節</b>	<b>中国人留学生の日本留学の動機および日本での滞在理由と帰国理由</b>	<b>136</b>
1.	中国人留学生の日本留学の動機	136
2.	中国人留学生の日本での滞在理由と帰国理由	138
<b>第4節</b>	<b>中国人留学生の生活課題とその対処法</b>	<b>140</b>
1.	中国人留学生の生活課題	140
2.	中国人留学生の生活課題の対処法	143
3.	中国人留学生の偏見や差別を受けた経験について	146
4.	中国人留学生の日中歴史問題による影響について	148
5.	中国人留学生の異文化受容態度	150
<b>第5節</b>	<b>中国人留学生の来日前と来日後の比較</b>	<b>152</b>
1.	中国人留学生の来日前と来日後の自由の比較	152
2.	中国人留学生の来日前と来日後の平等の比較	157
3.	中国人留学生の来日前と来日後の選択の比較	160
4.	中国人留学生の来日前と来日後の機会の比較	162
5.	中国人留学生の来日前と来日後の資源の比較	164
6.	中国人留学生の来日前と来日後の権利の比較	166
<b>第6節</b>	<b>中国人留学生の自己認識</b>	<b>168</b>
1.	自分の長所について	168
2.	自分の目標について	170
3.	自分の資源変換能力について	171
4.	自分の精神と物質について	173
5.	自分の幸福感について	175
6.	自分の潜在能力について	177
7.	自分の潜在能力を引き出す方法について	179
8.	自分の来日後の変化について	181
9.	新型コロナウイルス感染症の影響について	187
<b>第4章</b>	<b>考察</b>	<b>190</b>
1.	中国人留学生の生活課題に関する考察	190
2.	ケイパビリティ・アプローチの視点から見た中国人留学生の生活課題	192
3.	所得による中国人留学生の生活支援の捉え方	195
4.	資源による中国人留学生の生活支援の捉え方	196
5.	効用による中国人留学生の生活支援の捉え方	196
6.	ケイパビリティによる中国人留学生の生活支援の捉え方	197

7. ケイパビリティ・アプローチの視点から見た中国人留学生の自由.....	197
8. ケイパビリティ・アプローチの視点から見た中国人留学生の資源.....	198
9. 中国人留学生の変化と成長する可能性.....	199
<b>第5章 結論 .....</b>	<b>200</b>
1. 五つの結論.....	200
2. 本研究の限界.....	200
3. 今後の課題.....	201
4. 倫理的配慮.....	201
5. 謝辞.....	202
<b>文献.....</b>	<b>204</b>
<b>付録.....</b>	<b>214</b>
<b>英文の抄録.....</b>	<b>216</b>

## 要旨

**【背景】** 外国人留学生を数多く受け入れている一方で、留学生に対する政策や支援の不備などの課題も多く存在していると指摘された。例えば、外国人留学生に対する就職支援や雇用の促進およびグローバル化支援に総合的に取り組んでいるが、大学や大学院生の生活およびその支援は注目されてこなかった。つまり、外国人留学生の生活支援は留学生支援の課題の一つになっている。

**【目的】** 中国人留学生のライフサイクル全体を展望し、谷中輝雄の生活支援の理念に基づいて、外国人ではなく、生活者としての自分らしい生き方の主体的探求を検討しながら、社会側の外的条件と個人側の内的条件に着目し、彼らの生活全般で抱えている課題を明らかにするとともに、ケイパビリティ・アプローチの視点から彼らにおける生活支援について考察することを目的とする

**【対象】** 本研究の調査対象者は、中国人留学生 30 名（男性 12 名、女性 18 名）である。調査方法はオンライン・インタビュー調査として、調査期間は 2019 年 11 月から 2020 年 9 月までである。調査は定型質問と挿入質問を加えながら実施した。

**【方法】** 調査内容は、対象者の基本属性・日本留学の動機・卒業後日本での滞在理由と帰国理由・日本での生活課題とその対処法・来日前と来日後の（自由・平等・選択・機会・資源・権利）の比較・自己認識などの内容である。データの分析は、事例研究と修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて行った。

**【結果】** 事例研究と M-GTA のデータ分析を通して、中国人留学生の基本属性・日本留学の動機・卒業後日本での滞在理由と帰国理由・生活上の苦しみや悩み・来日前と来日後の（自由・平等・選択・機会・資源・権利）の比較・自己認識などの現状を把握し、その背景、経緯、原因を整理し、彼らの生活実態を明らかにすることができた。

**【考察】** ケイパビリティ・アプローチによると、生活の良さは、その人が何をできるか、どんな状態にいるのか、つまり、持っている選択肢の豊かさによって測ろうとする。この意味で、選択肢の幅が広がることで様々な生き方を選択する自由が増すことができる。つまり、ケイパビリティ・アプローチの視点から見れば、中国人留学生の生活や生き方などの不自由を取り除くことで、彼らの自由度を拡大し、同時にケイパビリティも向上させることができる。この立場から出てくる生活支援の対策は、中国人留学生から「価値あるもの」と考える生き方を選択する自由」を奪っている要因を取り除くことである。やるべきことは、中国人留学生の暮らしがどういう点で悪化しているのかを記述することであり、それを機能として理論化し、どの機能が彼らの暮らしにとって不可欠であるかを選択し、それを改善していくことが妥当な生活支援対策となる。

**【結論】** 中国人留学生は、新しい環境の中でやっていく決意を持つことによって、彼らの日本留学生活に対して積極的な態度をとることができるようになる。一方、現在の状況への対処能力を身につけることによって、より良い感情を持つことができるように導かれると考えられる。また、自由・平等・選択・機会・資源・権利の拡大は、彼らの生活困難や課題を改善し、生きたいと思える暮らしを選ぶ、彼らが追求する目的や価値の達成に繋げることができる。さらに、自分の長所や目標などの自覚は、生活に対する満足度のレベルに影響を及ぼしている。

## 序章 研究の概要

### 1. 研究の背景

中国教育部の最新の統計によると、1978年の改革開放以降、中国が海外へ送り出した留学生数は、2019年末までに累計で656万600人に達する。そのうち、165万6200人の中国人留学生が海外の大学又は大学院で学んでいる。ユネスコ（2019）のデータによると、約530万人とされる世界の留学生総数のうち、中国人留学生は約33%を占めており、最大の留学生グループになっている。中国人留学生が増加した大きな要因は、中国国内の経済発展により、留学費用などの経済的な障壁がなくなっていったことと推測される。中国人にとっての留学の意義は、外の世界で異文化を通じて学びを深めることが、学生にとってはかけがえのない私的財産になる。また将来のキャリア形成や人生の選択肢をより豊かにすることである。

一方、日本の留学生受け入れ政策は、1950年台から2000年代初頭まで主な政策目的は、留学生送り出し国の人材養成と日本との友好関係の促進であった。1983年には、中曽根首相により、当時1万人規模だった留学生を2000年までに10万人に増加する計画が提唱された。この計画の目標は2003年に達成されたが、この頃より、少子高齢化と経済のグローバル化という背景により、日本経済団体連合会は「外国人受け入れ問題に関する提言」（2004）を発表し、留学生の日本国内就職の促進を提言している。このような要望を受け、2008年には、福田首相が2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指す「30万人計画」を発表した。その趣旨には、グローバル戦略の一環として高度人材受け入れとともに、優秀な留学生を戦略的に獲得していく（文部科学省、2008）と述べ、留学生政策が育てた人材を母国に帰すのではなく、日本に引き留める方向に大きく転換した。

日本政府は、国際化を目指すため積極的に優秀な外国人留学生の招致が求められている。高度人材獲得政策の一環として、例えば安倍政権下で日本経済再生本部（2016）が発表した「日本再興戦略2016」には、「留学生の日本国内での就職率を現状の3割から5割に向上させることを目指す」という目標値が示されている。これは、「2020年末までに10000人、2022年末までに20000人の高度外国人材の認定を目指す」と記載されている。

2016年11月の入管法改正では、2017年9月1日によって「介護」の在留資格が創設された。専修学校や短大などで介護や福祉を学ぶ留学生が国家試験に合格すれば、日本で介護従事者として働くことができ、留学生政策が国内で不足する介護人材を確保する機能となった。さらに、18歳人口の減少が進む中、留学生受け入れは日本の教育機関にとって、定員を充足し、教育の国際化と学費収入をもたらすものとして期待も高まっている。留学生は日本の労働市場において、例えば2020年に日本で働く外国人は172万人に上り、その内訳は、身分に基づく在留資格者（永住者・日本人や永住者の配偶者・定住者）55万人、専門的・技術的分野の在留資格者36万人、技能実習生の在留資格者40万人、資格外活動37万人（うちの留学生の資格外活動31万人）である。留学生の就職先について、従業員数が30人未満の中小企業に35.8%、30～99人の企業に18.7%、100～499人の企業に22.2%、500人以上の企業に19.4%、不明3.9%を占める（厚生労働省、2021）。

新日本有限責任監査法人（2015）が経済産業省の委託により、日本企業の元留学生社員406人に対して行った調査結果は、今の会社での勤務希望年数について、「できるだけ長く」は35%、10年程度が8%、5年程度が23%、3年以内が12%であった。他方、同じ調



査で日本企業に外国人社員に望む勤続年数を尋ねた結果は、「できるだけ長く」が94%で圧倒的に多く、企業の期待と留学生の将来計画にずれが見られた。また、留学生社員に日本で就職した理由を尋ねた回答では、「将来日本企業の海外拠点で働きたい」が45%と最も多く、次いで「日本企業の技術力の高さ」41%、「日本語を使って仕事をしたい」30%、「衣食住などの環境が良い」26%、「日本企業の人材養成が充実」26%である。

上述のように、留学生政策の多義性を拡大し、留学生には日本で不足している高度人材や介護人材の卵という期待がある。外国人留学生の多くは、卒業後、就職の在留資格への切り替えが奨励されており、将来的に日本社会に入ることを期待される。

## 2. 研究の目的

2019年末まで中国から海外へ送り出した留学生の数は累計で656万人に達し、そのうち、165万人が海外の大学で学んでいる。2021年日本の外国人留学生総数は27万9597人であり、うち中国人留学生は12万1845人(43.6%)で、最大グループとなっている。日本学生支援機構(2021)の調査によると、外国人留学生は、卒業後日本での進学が41.14%で、日本での就職が54.9%であった。また、日本で就職・起業する数は、2020年には3万974人に達し、その中、中国人留学生の数は一番多く1万1580人(37.4%)で、最大を占めている(文部科学省, 2021)。彼らは日本の大学や大学院へ進学することや日本での就職する期間は、日本文化に適応し社会へ定着する段階でのサポートや生活支援を優先的に講じる必要があると考えられる。

他方、海外生活は環境の変化が大きく、外国人留学生は移民予備軍として、簡単に日本国内への定着につながるものではない。外国人留学生を取り巻く問題として、異文化不適應、言語問題、生活環境の未整備、文化的摩擦、生活支援の不足、在留資格の取得、経済的困難、対人関係の困難、差別や偏見(田中, 1996; 栖原, 1999; 殷・青木, 2017)などの様々な問題を指摘された。こうした状況下にある外国人留学生は日本社会に定着して欲しいという希望があるにもかかわらず、ずっと日本で働くことは容易ではない。

外国人留学生を数多く受け入れている一方で、留学生に対する政策や支援の不備などの課題も多く存在している(明石, 2007; 井上, 2011; 佐藤, 2018)と指摘された。例えば、現在の日本では、外国人留学生に対する就職支援や雇用の促進およびグローバル化支援に総合的に取り組んでいるが、大学や大学院生の生活およびその支援は注目されてこなかった。つまり、外国人留学生の生活支援は留学生支援の課題の一つになっている。

中国人留学生に関しては、これまで社会学や心理学などの視点から、数多くの研究が行われている(葛, 2003; 班偉, 2004; 陳・高田, 2008; 孫, 2011; 馬, 2016)。しかし、中国人留学生のライフサイクル全体を展望し、生活者として自分らしい生き方の主体的探求と実践を検討した社会福祉学の研究は、ほとんど見られない。そこで、本研究では、最大グループである中国人留学生の生活全般に着目し、生活者としての自分らしい生き方の主体的探求を検討し、ケイパビリティ・アプローチの視点から彼らにおける生活支援について考察することを目的とする

### 3. 研究の意義

本研究が数ある理論のなかでもケイパビリティ・アプローチを取り上げる理由は、同アプローチが他ならぬ「個人の実質的自由」と「能力の豊かさ」の観点から、中国人留学生の生活支援を多角的に評価することができる数少ない理論の一つだと考えられるからである。最終的に彼らが日本社会で定着して活躍するための示唆を導くことを目指す。人口減少や少子高齢化、急速なグローバル化への対応が求められる中国人留学生は、地域に新しい活力を注ぎ、日本と中国を結ぶ貴重な役割が期待される。

### 4. 論文の構成

本論文は、5つの章から構成されている。

第1章では、先行研究のレビューを行い、中国人留学生を支援する上での来日前と来日後の生活実態を明らかにした。中国人留学生の生活を支えていくには、彼らにとって生活支援はどのようなものか、彼らの生活を支えていくには何か必要するかということ全体のリサーチクエストとして設定した。さらに、国連などで貧困や不平等などの領域に応用されているケイパビリティ・アプローチの概念や応用などについて概観した。

第2章では、本研究の事例研究について述べた。調査対象者は、日本の大学に通学中の30名の中国人留学生を対象としてインタビュー調査を実施し事例研究をした。調査内容は、①基本属性、②日本留学の動機及び卒業後の日本での滞在理由と帰国理由、③日本での生活課題とその対処法、④来日前と来日後の自由・平等・機会・選択・資源・権利についての比較、⑤自己認識である。対象者から得られたデータは、事例研究として分析を行った。

第3章では、第2章の事例研究のインタビューデータを木下康仁が開発された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて総合分析を行った。中国人留学生の日本留学の動機、卒業後日本での滞在理由と帰国理由、彼らが抱えている生活課題とその対処法、来日前と来日後の自由・平等・機会・選択・資源・権利比較、および自己認識をカテゴリー、サブ・カテゴリー、コードとしてまとめてみた。

第4章では、本研究の考察について述べた。まず、中国人留学生の生活課題をマクロな視点、メゾな視点、ミクロな視点に分類し考察を行った。また、所得・資源・効用・ケイパビリティによる中国人留学生の生活課題と生活支援の捉え方について述べた。さらに、ケイパビリティ・アプローチの視点から中国人留学生の生活課題・自由・資源について考察を行った。最後に、中国人留学生の変化と成長する可能性についてまとめてみた。

第5章では、本研究の結論、本研究の限界、今後の課題、倫理的配慮、謝辞について述べた。旧世代と比べ現世代の中国人留学生は多様な留学目的や生き方を持っていること、新しい環境でやっていく決意を持つこと、自由・平等・選択・機会・資源・権利・自己認識は生活に対する満足度のレベルに影響を及ぼしていることを明らかにした。中国人留学生の生活全般における解決すべき課題の実態を正確に把握することができた。彼の生活課題と生活支援にケイパビリティ・アプローチの視点を導入することで、生活課題を事例研究で正しく捉えることができ、生活支援に介入するための根拠も多角的に考察することができた。

## 第1章 先行研究レビュー

### 第1節 中国人留学生の来日前の生活実態

本節では、近年、中国で盛んに使用されている流行語を通して、現代中国の若者の生活実態を概観する。

#### 1. 中国の「小皇帝」

1980年代前半から、改革開放が実施されて以来、中国は高度成長期を迎え、新しい社会現象が次々と生まれてきた。この時期に「小皇帝」という言葉が最も注目された。「小皇帝」とは、中国の一人っ子政策以後に生まれた子どもたちのことである。男児は「小皇帝」、女児は「小皇后」や「小公主」（公主は皇帝の娘であり、お嬢様やお姫様の意味）と呼ばれる。

中国の「一人っ子政策」は、1979年から2014年まで実施され、一世帯の子供は一人までと決まっていた。この政策を用いる目的は人口を抑えるためである。中国の人口減少により2015年から2021までは一組の夫婦につき子ども二人までとされたため、俗に「二人っ子政策」と呼ばれた。さらに、2021年5月31日には中国政府が新たに一組の夫婦が三人目の子どもを出産することを認める方針を示した。

よって、「小皇帝」の世代としては、単に80後（1980年代に生まれ）だけではなく、近年では90後（1990年代に生まれ）、00後（2000年代に生まれ）も含まれている。

「小皇帝」世代が生まれた時は、鄧小平による「改革開放」が打ち出された時期である。この時期から中国社会は配給社会から消費社会に移行して、多くの富裕層や中産階層の夫婦の間では生涯に生まれた「ただ一人の子」として子供を過保護に育て、過度な期待や愛情を注ぐという家庭が多くなっていった。

子供たちは、幼いごろから、両親と、両親のそれぞれの両親という6人の「親」に育てられるという。祖父母が4人、両親が2人、子どもが1人であることから、「421家庭」という言葉もある。そのため、子供たちは両親の過保護だけでなく、祖父母からも過度に甘やかされて育ち、贅沢かつわがままに育ったのである。

一方、彼らが成人してからは、両親と祖父母の計6人の老後生活を支えることになるため、非常に大きな生活、経済的な負担からくる精神的ストレス以外にも、依存心が強く、忍耐力がない、人間関係をうまく築けないなどの問題があり、恋愛や結婚についてもうまくいかないなどの問題が顕在化している。例えば、鈴木（1990）は、一人っ子は甘やかされて育ったため、大人になっても利己的で自己中心的な性格の人が多く、社会に出ても適応できずすぐ会社を辞める人が多い。あるいは結婚してもすぐ離婚し、近年の離婚率の上昇もその現れであると指摘されている。

2018年8月28日の週間現代の記事によれば、2024年になると、年間600万組が離婚する時代になると予測されている。北京や上海などの大都市では、離婚率はすでに4割に達している。離婚率が5割を超えるのも間もなくという。逆に結婚件数は5年で3割減っているので、中国は近未来に、年間の離婚件数が結婚件数を上回る最初の国になるのではという懸念も出ている。

## 2. 中国の「蟻族」

1998年に大学の規模を拡大する政策が実施され、大学の数も定員数も増大した。この大学「大衆化」によって大卒者の数も増大した。1998年に90万人に満たなかった卒業生の数は、2020年には874万人に膨れ上がるまでになった。大卒者がこれだけの数になると、いくら成長が著しい中国でも相応の職場の確保は難しくなる。しかも、職を求めるのは大卒者だけではない。就職先を探す一般労働者や、海外留学からの帰国者も、膨大な数にのぼる。そのため、仕事が見つからず、就職できない若者が増加し、実に大卒者の三分の一が望む仕事が見つからない状態と言われている。そうした就職難を背景に、中国では、大学を卒業しても仕事が見つからず、賃貸の安い部屋で共同生活を送る「蟻族」と呼ばれる若者が急増した。

「蟻族」の多くは農村出身者であり、しかも大半は一人っ子である。彼らは、地方の農村戸籍出身者が都市の大学に進学し、卒業後企業に採用してもらえず、帰省できないまま、都市の狭いアパートで集団生活をしながら、まるで蟻のように振る舞う人間のグループである。

「蟻族」と呼ばれる貧困層の若者は、主に地方から上京した大学生である。彼らは、農家の人々、出稼ぎ労働者、リストラされた人々に次いで、四番目の負け組とされている。しかし彼らは、仕事や収入、生活能力などの面において弱い立場にあるにもかかわらず、自分の夢を捨てきれず、目標を追い求めている。

「蟻族」の増加は、大学卒業生が急速に増えたことと関係するが、若者の都会志向や就職観念も原因である。多くの若者は、夢を叶うように、どうしても北京・上海・広州のような大都市で就職したい。しかし、中国特有の戸籍制度という壁に突き当たり、就職活動にしても、創業にしてもままならないことが多い。

「蟻族」の特徴は、大学卒業者であるが、低所得者として、都市に群集生活をしている若者たちのことである。しかし、彼らは現状に不満があり、個人の努力でもっと良い人生を得ることを目標としており、自分の力で生きようと必死にもがき続けており、その意味では近未来の中国の希望というべき存在であるというポジティブな評価もある。一方で、「蟻族」は、中国の人材活用の観点から言えば社会的損失であるという考え方を持っている人もいる。

上述のように、「蟻族」は大学が出たけれど、中国の都市部に安定的な仕事を得られない低所得者になり、まるで蟻のように暮らしている。そういった状況は、かつての「大卒＝高収入」という生活モデルは潰れつつであるといえる。しかし、それにもかかわらず、彼らは親たちの期待を一身に背負い、仕事が見つからないからといっても、簡単に故郷に戻るわけにはいかないのである。

## 3. 中国の「寝そべり族」

2021年4月17日、「躺平即是正義」（横になることが正義である）というタイトルの投稿があった。その掲示板では、彼が2年以上働いておらず、完全に横になることを選択したと主張していた。その後、中国社会で、「躺平族」という言葉が流行りはじめた。「躺平」とは、日本語に訳すと「寝そべり」「横になる」という意味である。

毎年6月下旬、中国で全国統一大学入試（通称：高考）が行われる。この試験は、中国の若者の未来を大きく左右する大学入試である。中国の多くの大学では、日本と違って、基本的に大学ごとの試験は行われないので、数多くの若者の運命がこの試験で決まる。それゆえ、高い点数を獲得するため、多くの学生たちは12年間、命をかけて勉強してきた。

中国の受験競争は、日本と比べにならないほど厳しく壮絶であり、特に近年、経済の急速な発展が社会競争を激化させ、貧富の差がますます拡大してきた。競争に勝つため、良い点数をとり、良い大学に入り、良い会社に就職し、多くの人にとって高い収入や安定した生活を手に入れることが人生の目標となっている。

また、中国では、経済格差だけでなく、「戸籍格差」も大きな問題となっており、日本のように自由に動くことはできない。中国の戸籍制度は、都市部と農村部（自治体国際化協会の調査、2015）に分けられている。都市部は、都市戸籍（非農業戸籍）である。農村部は、農村戸籍（農業戸籍）となっている。都市戸籍が約4割で、農村戸籍が約6割を占めている。戸籍によって公共サービスや社会保障、教育機会などさまざまな面で大きな差が生じている。

中国では戸籍に登録された地区で、小学校と中学校、高校に通わなければならない。農村戸籍将来所有者は、都市で一般の学校には入れず、教育水準の低い私設学校に通わなければならないなどの問題が生じている。例えば、農村から都市への出稼ぎに来る「農民工」が多くいる。子供だけが「留守児童」として戸籍地である農村に残ることがある。もし子供が親と同じ都市に住む場合は、彼らは都市戸籍を持たないため、都市の学校に入学するためには、多額の学校選択費（入学するために支払う経費）を支払わなければならない。

また、親が働く都市で一般の小学校や中学校に通えたとしても、高校段階から戸籍所在地に戻って受験しなければならない。しかし、地域によって教育課程が異なるため、成績が落ちることが多い。このような都市と農村の教育格差は、進学率の差として顕著に現れている。農村から大学へ進学するのは極めて難しい。

さらに、中国の学校教育は完全に学業成績至上主義であり、テストの点数と進学率を重視するエリート主義的な教育観が根強い。毎年6月は厳しい高考（大学入試）と言う受験戦争が実施される。そのため、少子化が進む中で、家庭における教育投資の集中化が進んだ。近年、進学率の高い小中高校に進学するため、中国の教育熱は幼児教育にも及んでいる。現在、幼児教育の多くは都市を中心に、幼少期から受験に焦点を当てた教育とそれに関連した習い事に重点を置いてなされている。

「高考」の試験においても、大都市に戸籍を持つ学生が優遇され、経済水準の低い農村戸籍の学生は不利な立場に置かれている。そうした中、経済水準の低い農村戸籍の学生にとって、「高考」は自らの将来を変えられる数少ないチャンスとなっている。特に農村部の親は、子どもの運命を変えるため小さい時から子どもに大きな希望を託し、子どもがより多大なプレッシャーを抱えながら受験戦争に参加していく。

それゆえに、より良い大学に入るため、高校の3年間は命がけで勉強する。例えば、河北省衡水市にある「衡水中学」（高校）は、統一試験で好成績をたたき出すことに特化した高校として、中国で最も有名である。この高校は、全寮制でスパルタ教育を行い、「高考工場」「受験訓練所」「鬼の強制収容所」などと呼ばれている。この学校の全ての生徒が高校3年間で休日はほぼなし、毎日教室内に設置されている監視カメラで監視され、忙

しすぎて「歩くことが存在しない」と言われるほど勉強している。卒業生は「まるで地獄だった」と口を揃える。人間の極限を試すような環境に耐えられず、退学する生徒や、体を壊す生徒が後を絶たない。しかし、この学校は、毎年全国の重点大学への合格率は9割以上であり、北京大学や清華大学などの超一流大学の進学生徒の数は数百人に上り、合格者数全国1位の実績を誇り、「奇跡を作る学校」と称されている。

こうした過酷な受験戦争は、小中高生の健康にも害を及ぼしている。イギリスの雑誌「経済学人」の統計データによると、中国の青少年自殺率は世界一となっている。中国の北医児童発展中心の調査では、中国では毎年約10万人の青少年が自殺をしている。平均1分間で二人が自殺で死亡し、8人が自殺未遂となっている。しかし、このような教育現場では、学校側や保護者、あるいは生徒自身が、負担を減らすと進学できないのではないかと心配し、精神的負担が増すばかりである。

確かにこれまで名門大学に入って、大企業に就職できて成功した人もいた。しかし、近年、毎年の新卒が約800万人もいる中で、例えば良い大学を出ても、実力があっても、必ずしも良い就職ができるとは限らない。そうした中、2021年4月ごろ「躺平即是正義」という投稿のきっかけで、「寝そべり族」という言葉が中国の若者の間で大変共感され、大流行となった。この社会現象は、まさに今の中国の若者が置かれている状況を反映しているといえる。

「寝そべり族」は、幼い頃から習い事や受験で厳しい競争にさらされ、社会人になったとしても、不動産バブルによる地価上昇、教育費の異常な高騰で、家を買ひ、子供を持つことは叶わぬ夢になりつつあり、無力感の中で努力する意欲を失った若者たちを指している。彼らは、「家を買わない」「車を買わない」「結婚しない」「子どもを作らない」「消費しない」「頑張らない」という6つの「しない」を心掛け、誰にも迷惑をかけず、必要最低限の生活をするという。

そして、近年では「996」（朝9時から夜9時まで週6日働く）と呼ばれる過酷な労働慣行が広がり、若者に徒労感が蔓延している。「こんなに疲れるなら、いっそ何もしないで寝そべて、楽に暮らしたら」という気持ちになっている。「寝そべり族」になった若者は、社会的な競争を避け、職場と家庭両方のストレス、経済的な困難などのプレッシャーから逃げようとする現実逃避の気持ちを持っているといえよう。

上述のように、若者が寝そべりたがる理由としては、中国では過酷な競争社会を生き抜くことを諦め、格差が拡大する中で、例えば厳しい受験戦争に打ち勝ったとしても、「住宅を買えない」「いい仕事が見つからない」「お金持ちになれない」「成功者になれない」などがあげられる。つまり、いくら頑張っても生活が良くなる。そうであれば、仕事せず、結婚せず、子供を産まず、何も買わず、最低限の仕事しかしないというライフスタイルを選んだ方がよりストレスの小さい人生を歩めると考えているのである。

#### 4. 中国の「ニート族」

中国の経済成長は目覚ましく、日本のGDPよりも上となった。中国の物価は日本の三分の一くらいになっている。近年では物価は上昇傾向にあり、これからもさらに物価が上がっていくと思われる。若者の収入は、職種にもよるが、「2020年中国大学生就職報告」によれば、2019年の大学卒の初任給5440元、日本円換算すると96900円前後である。日本の大学卒の初任給は18万円～20万円ほどである。特に、近年中国の住宅価格が急上昇

し、若者の自分の力だけで住宅が買えず親に頼るといった社会現象が増えてきている。この仕事もせずに親に頼りっぱなしの生活を送る若者は「ニート族」という。

中国の「ニート族」は「年取った人を食べる人」とのことである。ここで言う年取った人とは、年をとった自分の親のことを指す。つまり、親を食べて生きる人達のことを指す。日本では、「ニート」のことであり、いい年になっても働かない人のことを「親の脛(すね)をかじる」という。

ニート族は、中国で特に大学を卒業した23歳から30歳くらいまでの若者を指す。彼らは、大人になっても、独立できずに、親の脛をかじる。このような若者は年々増加しており、社会問題となっている。こんな現象が生まれ原因は、若者自身とその家庭にあると考えられる。

若者自身の原因としては、彼らはわがままで、傷つきやすい、ときどき自信過剰になり、贅沢な生活を求めており、苦しみや辛さを耐え忍ぶ根性が欠如していると言われている。しかも、非現実的な高遠な目標を追い求めている人が多く、社会人になっても社会に融け込む心の準備はできていない。彼らは、プレッシャーやストレスに弱いので、頻繁に職場を変える。つまり、職場に適応できなくなったら、現実から逃避するため、簡単に仕事を辞めて平気で親の支援を受けるのである。

家庭の原因としては、改革開放を経て中国の社会が豊かになったため、遊んでばかりいて働かない人を養う余裕ができたこともあげられる。1979年、一人っ子政策が実施されて以来、中国の家庭構造は子供1人、親2人、祖父母4人のようになってしまった。いわば、子供1人が6人の大人に囲まれているので、家庭の殻によって至れり尽くせりで保護されているのである。

上述のように、ニート族と称される若い人たちは、一人っ子政策が実施された後に生まれ、甘やかされて育ったため、ハングリースピリットが欠けている。彼らは小さい頃から過保護されているため、大人になっても逆境を耐え忍ぶことができず、ちょっとしたつまずきで落胆してしまい、簡単に困難から逃げてしまうのである。そのため、正式な仕事を持たず、学校で職業訓練も受けず、もっぱら親の支援を頼りにして生活している。彼らは親に頼りっぱなしの生活をしていて、多くの親が子どものために住宅のローンを組み、子どもや親ともに十分な貯蓄がないと生活が維持できない。もともと、退職し老後を迎える親の支え手であるはずの若者が、数多くの高齢の親たちを支えきれないという「ニート族」の社会問題が発生し、社会問題となっている。

## 5. 中国の「隠婚族」

中国では、映画「隠婚男女」をきっかけに、自分が結婚していることを隠す「隠婚」をめぐる論議が起きている。“隠婚”は文字通り、結婚のことを隠すという意味である。彼らは「偽独身」とも呼ばれ、実際には人妻だったり、夫だったりするのに、表面上は婚姻状況を隠し、「独身」、「婚姻暦なし」としている。

このような、婚姻届けを出しているにもかかわらず、結婚の事実を隠し続け、独身の姿で公の場で活動する人々のことが“隠婚族”と呼ばれている。「隠婚族」の多くは、多国籍企業や大手企業のホワイトカラーであり、25歳～35歳の女性を中心になっていると言われているが、男性も少なくないと思われる。隠婚する若者は、普段の生活で結婚指輪を

せず、常にひとりで帰宅し、パーティによく参加するものの、結婚に関する話題を避ける傾向にある。

隠婚という現象は北京・上海・広州のような大都会に多く見られ、年々増加の傾向にある。隠婚族の特徴として、「①人との付き合いに熱中するが、祝祭日には会社に姿を現さない。②公の場で異性と親密にするが、単独で異性と付き合うことはしない。③独身貴族と言いふらしているながら、なるべく恋愛関係の話題を避ける。④会社で電話を受け取るときに、得体が知れない口調で話すことがある。」（戦, 2014）と指摘されている。

多くの男女が「隠婚」を選ぶ理由は、「自分を守るため」「職場での競争を高めるため」「自分の立場とより高い給料を求めるため」「既婚男女に魅力がなく、異性から敬遠されるため」「相手にしてもらえなくなったら、職場で同僚たちと触れ合う機会が少なくなり、情報を得にくくなる恐れがある」などの理由が挙げられる。

「隠婚族」の現象は、中国社会の競争の激しさを表わしている。結婚事実が簡単に隠せるということは、政府の規制緩和によって、個人の自由はある程度保障されており、中国社会が昔と比べて進歩したことを示されていると考えられる。しかし、長期的に結婚を隠すことで家庭への責任感が弱まり、離婚へ発展する可能性も高くなると言われている。

現代中国の社会において、改革開放によって社会環境が変わり、「隠婚族」だけでなく、「恐婚族」（結婚の失敗や離婚を恐れる人）、「裸婚族」（マンション・車・指輪・結婚式なしで結婚する人たち）の若者も増加している。

## 6. 中国の「月光族」

「月光族」とは、毎月の給料を使い切ってしまう人たちのことである。中国語の「光」には、「何もない」「何も残らない」の意味がある。実は月末までに給料を使い果たしてスッカラカンになるような勤め人を指す。月光族はもともと、夜間労働をする人を指していたが、いつの間にか、こちらの方が有名になった。

「月光族」と呼ばれる人は仕事を持つ20代の未婚の人が多く、彼らは、中国経済が配給制度から市場経済に移行し、物質的に豊かになり始めた1980年代以降に生まれて成長した世代である。子どものころは「小皇帝」とも呼ばれてきた彼らは何でも自分が優先された環境に慣れて育った世代である。彼らにとって、親の世代まで続いた「貯金をして将来に備える」という伝統的な生活理念は陳腐のように見える。

「月光族」が求めているのは、今現在の喜びとワンランク上の生活である。贅沢な生活を優先にしているので、金を惜しむことなく常に新しいファッションや新しい楽しみをやりみくもに追い求めているのである。高価なブランド製品を買ったり旅行したりして、気楽に愉しく暮らしているのである。

「月光族」は、自己本位で金銭感覚が麻痺していることなどがあげられる。彼らは欲求を実現するために一生懸命に努力し、稼いだ金を全部自分のために使い果たしている。

## 7. 中国の「仏系青年」

仏系青年の由来は、2014年に日本のある雑誌に登場した言葉「仏男子」が語源である。「仏男子」とは、一人でいるのが好きで自分の趣味と生活を大切に、恋愛に時間を費やさない男性のことをいう。日本の仏男子は「草食系男子」に比べて積極的で、恋愛よりも



自分一人の時間を大切にしたいと考える傾向があるという。日本の「草食系男子」は、90年代のバブル崩壊後の長い経済低迷期に生まれた。恋愛に消極的なだけでなく、社会に幻滅し、向上心に乏しく、仕事は生活する上で必要なだけでそれ以上の価値を見出さない。

一方、中国では、2017年12月ごろ「仏系青年」という言葉がSNSで流行語になった。1990年代生まれの“低欲望”な若者を指す。彼らは、「こだわりもやる気もない」「何も求めずにその日一日無事に過ごせられればいい」「競争と距離を置き、自分の世界に閉じこもる」「頑張っても成功できないなら省エネで」「何か聞くと『何でもいい』と答える」などの特徴がある。

例えば、中国のある大学4年生の若者は「典型的な仏系青年」と言われている。彼は、大学の授業以外はほぼ寮のベッドに寝転がり、スマホゲームをしているという。何に対しても“省エネモード”で、「期末テストのときも、平常点がどのくらいあるかを事前に調べて、テストで何点とれば最終成績が（合格ラインの）60点を超えると計算し、最小限の努力で単位を得ようとする」。このような「仏系青年」は、数年間で考えられないほど増えているという。

それに対して、「仏系青年」は決してネガティブではないという声もある。仏系は、「いろんなことをあまり追求しすぎないように」「何ごとに対しても無理にしない」「ストレスを増大させないために仏系の気持ちを保っている」「ストレスを軽減するため、些細なことを真面目に考えすぎないようにしている」などの声もある。中国の仏系青年の実態は、日本の草食系男子に近いと言われている。

上述のように、「仏系青年」という言葉は1990年代生まれの若者の現状を反映しているという。2017年、1999年生まれの最後の一陣が成人になり、一部の若者は職場で力を発揮し始めている。学校を出て社会に進出し、現実と理想のギャップを実感し、現代の速すぎる生活リズムや激しい競争が、彼らのストレスを増出させている。そのため、戸惑ったり、イライラしたり、自分に自信が持てなくなったりする事は、プレッシャーで疲弊した若者の社会に対する一つの対処法でもあるという。

## 8. 本節のまとめ

流行語はその時々々の社会の世相、若者の考え方を表している。前述に述べたように、小皇帝から仏系青年まで、中国の少し厳しい、少し歪んだ貧富の差のある現実、社会を表現していると思われる。近年の中国経済の急速な発展が、社会競争を激化させ、多様化している中国の若者の動き方が注目されている。若者が大都会に惹きつけられ、就職先が少ないため仕事が見つからない人が多く存在している。中国国内の競争を激化させている要素として「内巻化」（インボリューション）という言葉がしばしば注目されている。インボリューションとは「閉鎖的な環境で内部の激しい競争に巻き込まれる状況」を指す。こうした状況の中、若者たちは激しい競争にさらされ、その競争から逃げ出したいという若者が多く存在している。

このような状況を改善するためには、「若者たちは自立し」、「自分の意思で自由に選択でき」、「心身の調整を積極的に行い」、「自分の好きなことや夢を叶える」ように努力する必要がある。また、彼らもそのような機会に巡り合えることを望んでいる。以前の留学は経済的な理由が主たる動機であったが現在は中国の豊かさとともに、その動機も変化してきている。中国人の若者たちが中国でおかれている立場を中国の流行語でしめし

た。彼らが置かれている中国の厳しい現状とそれを脱却したいという願望が、現代の留学の動機の一つにもなっているのではないかと考えられる。

以下、日本留学を選んだ中国人留学生の日本での生活実態について概観する。

## 第2節 中国人留学生の来日後の生活実態

本節では、日本における外国人留学生の受け入れ政策や制度、今日の外国人留学生の現状を見たとうえで、中国人留学生をめぐる課題について概観する。

### 1. 外国人留学生の受け入れ政策

#### 【留学生受け入れ 10 万人計画】

日本の留学生受け入れ政策は、1983年に中曽根首相により、当時1万人規模だった留学生を2000年までに10万人に増加する「留学生受け入れ10万人計画」が提唱された。同計画が策定された時代背景には、当時アジア諸国が日本に留学生を派遣し始めており、留学生の送り出し側に日本留学への需要が存在していたという事情があったとされている。特に、中国においては、私費留学が自由化され、海外留学の需要が高まっていた時期であった。

同計画で示された主な理念は、日本の「国際人材の養成」という目的よりも、経済大国としての「国際的貢献を果たすこと」と「開発途上国の発展」に協力するものである。同計画の策定を受けて、日本政府は、中国を含む外国人留学生の学費の免除、私費留学生への奨学金制度の充実、留学生宿舎の建設、出入国管理の規制緩和など多くの政策が実施された。当時の留学政策は、経済的支援が中心であり、「質」より「量」を重視していた。

同計画の策定から20年目の2003年、留学生数10万人の目標は達成された。日本社会は、1980年代後半から多文化・多民族化の様相を強め、外国人との共生に向けたさまざまな動きが顕在化された。例えば、外国人を取り巻く就労や教育などの諸課題に対処するための「外国人集住都市会議」（2001）を発足させた。また、外国人の生活環境の整備についての「外国人受け入れ問題に関する提言」（2004）を発表した。さらに、多文化共生社会を築くために、日本政府・総務省(2020)は「多文化共生推進プログラム」（2006）を公表した。

1950年代から2000年代初頭まで主な政策目的は、留学生送り出し国の人材養成と日本との友好関係の促進であった。一方、留学生受け入れ数の増加に伴い、就労目的の留学生の失踪、不法残留、犯罪への関与などが起こるようになった。そのため、留学生の量的拡大に伴い、質の低下を招いているのではないかと議論がなされるようになった（明石2007）。その後、2003年11月から留学生の入国にかかる各種審査が厳格化され、翌2004年には、特に中国人留学生の受け入れ数が減少した。

#### 【留学生受け入れ 30 万人計画】

人材獲得をめぐる国際競争が過熱し、高等教育の段階から人材をリクルートしなければ、国際的頭脳獲得競争に負けるという日本政府の危機感があった。このような背景に基づいて、留学生10万人を達成してから5年後の2008年には、福田首相が2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指す「30万人計画」を発表した。その趣旨には、グロー

バル戦略の一環として高度人材受け入れとともに、優秀な留学生を戦略的に獲得していく（文部科学省，2008）と述べ、留学生政策が育てた人材を母国に帰すのではなく、日本に引き留める方向に大きく転換した。

この計画趣旨においては、高度人材受け入れと連携させながら、優秀な留学生を戦略的に獲得することが述べられている。特に「量」から「質」への転換が強調されている。その内容について、グローバル戦略展開の一環として、日本留学への関心を引き起こす動機付けの段階から、入試・入学・入国といった入口、大学等や社会での受け入れ、就職等の卒業後の進路に至るまで体系的な方策を実施し、関係ある諸機関等が総合的・有機的に連携して計画を進めると表明した。

## 2. 外国人留学生の支援政策

留学生 30 万人の達成を目指し、大学の国際競争力強化策として、2009 年に文部科学省による「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」が開始された。この事業は、日本の大学において、「英語による授業等の実施体制の構築」、「留学生受け入れに関する体制の整備」、「戦略的な国際連携の推進」など、日本を代表する国際化の拠点としての総合的な体制整備を図ることに加え、「産業界との連携」、「拠点大学間のネットワーク化の推進、資源や成果の共有」など、広く日本の国際化推進を目指した取り組みを行うというものである。

この事業では、中国人留学生を対象とした取り組みとしては、採択大学における中国語版ウェブサイトの開設や、中国人学生向けの日本語による短期研修講座の実施、中国での留学フェアの開催などが挙げられる。2014 年度から日本の大学の体制国際化をさらに促進するために「スーパーグローバル大学等事業」が開始された。「スーパーグローバル大学創成支援」事業は、徹底した国際化と大学改革を断行する大学を重点支援することにより、日本の高等教育の国際競争力を強化することを目的としている。

一方、日本企業に対する中国人の人気は下降を続けている。例えば、中国の求人・求職の情報を発信している「中華英才网」が毎年発表している大学生の就職先人気企業を見ると、上位には中国石油、中国移动通信といった国営企業のほか、Google、Apple、P&G などの欧米企業が人気となっている。日本企業は、2009 年に広州本田が 49 位にランクインしたが、2010 年からは上位 50 社から姿を消した。

留学生は日本の労働市場において、例えば 2020 年に日本で働く外国人は 172 万人に上り、その内訳は、身分に基づく在留資格者（永住者・日本人や永住者の配偶者・定住者）55 万人、専門的・技術的分野の在留資格者 36 万人、技能実習生の在留資格者 40 万人、資格外活動 37 万人（うちの留学生の資格外活動 31 万人）である。

留学生の就職先について、従業員数が 30 人未満の中小企業に 35.8%、30～99 人の企業に 18.7%、100～499 人の企業に 22.2%、500 人以上の企業に 19.4%、不明 3.9%を占める（厚生労働省，2021）。

外国人留学生は、卒業後、日本で就職・起業する数は、2020 年には 3 万 974 人に達し、その中、中国人留学生の数は一番多く 1 万 1580 人で、37.4%を占め、最大のグループである（文部科学省，2021）。

新日本有限責任監査法人（2015）が経済産業省の委託により、日本企業の元留学生社員 406 人に対して行った調査結果は、今の会社での勤務希望年数について、「できるだけ長

く」は35%、10年程度が8%、5年程度が23%、3年以内が12%であった。他方、同じ調査で日本企業に外国人社員に望む勤続年数を尋ねた結果は、「できるだけ長く」が94%で圧倒的に多く、企業の期待と留学生の将来計画にずれが見られた。また、留学生社員に日本で就職した理由を尋ねた回答では、「将来日本企業の海外拠点で働きたい」が45%と最も多く、次いで「日本企業の技術力の高さ」41%、「日本語を使って仕事をしたい」30%、「衣食住などの環境が良い」26%、「日本企業の人材養成が充実」26%である。

一方、中国の大学生の多くは、日系企業に対してネガティブな印象を抱いている。例えば、2011年のある大学の学生への就職志望調査によると、卒業後日系企業に就職したいという学生はわずか18%であった。その要因として選択率が高かったのは、「ストレスの高さと給料が一致しない」(36%)、「昇進が難しく、自身のキャリア発展に望ましくない」(33%)、欧米企業と比べ、日系企業の待遇はあまり良くない（一般財団法人・自治体国際化協会、2015）などが指摘された。

こうした留学生の日本企業の就職件数の減少問題を解決するために、日本の多くの大学は、学生への就職支援やキャリア教育に取り組んでいる。文部科学省は2010年度に「大学生の就職力育成支援事業」を開始し、公募を経て計157大学に補助金の配分が為された（井上、2011）。2011年4月には、同じく文部科学省によって、前年の大学設置基準の改正を受け、「社会的・職業的自立に向けた指導など（キャリアガイダンス）」が制度化された。

また、安倍政権下で日本経済再生本部が発表した「日本再興戦略2016」には、「外国人留学生の日本国内での就職率を現状の3割から5割に向上させることを目指し、留学生に対する日本語教育、中長期インターンシップ、キャリア教育などを含めた特別プログラムを各大学が設置するための推進方策を」という目標値が示されている。これは、「2020年末までに10000人、2022年末までに20000人の高度外国人材の認定を目指す」と記載されている。

少子高齢化と経済のグローバル化という背景により、2016年11月の入管法改正によって、この改正は2017年9月1日によって「介護」の在留資格が創設された。専修学校や短大などで介護や福祉を学ぶ留学生が国家試験に合格すれば、日本で介護従事者として働くことができ、留学生政策が国内で不足する介護人材を確保する機能となった。さらに、18歳人口の減少が進む中、留学生受け入れは日本の教育機関にとって、定員を充足し、教育の国際化と学費収入をもたらすものとして期待も高まっている。

2021年3月31日の「留学生30万人計画」骨子検証結果報告によると、「日本国内への定着について、2019年日本の高等教育機関を卒業・修了した者の約8割（約4.5万人）はその後日本国内に留まり、就職又は進学している。しかし、彼らが日本社会に定着していくために、生活の質の高めやケイパビリティの向上および選択肢を増やすことが必要と考える。

上述のように、留学生政策の多義性を拡大し、留学生には日本で不足している高度人材や介護人材の卵という期待がある。外国人留学生の多くは、在学中よりアルバイトで日本の労働市場の現場を支え、卒業後、就職の在留資格への切り替えが奨励されており、将来的に日本社会に入ることを期待される。

### 3. 外国人留学生に関する制度

外国人留学生とは、「留学」の在留資格を取得し、大学、大学院、短期大学、高等専門学校又は専修学校（専門課程）に在籍して学習に専念する者及び日本の大学に入学するための準備教育課程を設置する教育施設において教育を受ける者を指している。これらの教育機関で在籍する場合の在留期間は、2年3月、2年又は1年3月、1年であり、差異がある。しかし、「入管法等改正法」が平成24年7月に施行されたことに伴う、新しい在留管理制度では、在留状況をこれまで以上に正確に把握できるとされ、在留期間の上限がこれまでの3年から5年に変更された。これを受け、在留資格「留学」に認められる在留期間として、4年3月、4年、3年3月、3年及び3月が創設され、従来どおりの2年3月、2年、1年3月、1年、6月に追加された（総務省行政評価局，2013）。

また、日本への留学生は、国費外国人留学生（日本政府奨学金留学生）、私費外国人留学生、外国政府派遣留学生、短期留学生・交換留学生の4種類に分類することができる。国費外国人留学生とは、日本国政府と国交のある国の出身で（無国籍でも応募可能）、日本の高等教育機関で学ぶ意欲のある者を対象として、大使館推薦、大学推薦、国内推薦の3つの方法で選考が行われる。教育機関・課程により給付期間は異なるが、渡航費及び日本国内での滞在費が、日本国政府から支給される。私費外国人留学生とは、日本に留学する学生の大半が、経費を自己負担する私費外国人留学生である。外国政府派遣留学生とは、諸外国の中には、人材養成を推進するため、当該国政府の経費負担により留学生を派遣し、日本国政府に対して、その受入れについての協力を要請するところがある。これらの留学生は国費外国人留学生ではないため、私費外国人留学生に位置付けられている。短期留学生・交換留学生について、短期留学とは、主として大学間交流協定に基づいて、母国の大学に在籍しつつ、他国の大学等における学習や異文化、語学の習得等を目的とし、おおむね1学年以内の1学期間又は複数学期留学するものである。交換留学とは、このように大学間協定を結んだ大学が相互に留学生を派遣し、受け入れる留学のことをいう。学費は通常、在籍中の大学に支払うことが多い（総務省行政評価局，2013）。

外国人留学生のアルバイトについて、入管法では、留学生は資格外活動許可を受けた場合に、アルバイトを行うことができる。一般的に、アルバイト先が風俗営業又は風俗関係営業が含まれている営業所に係る場所でないことを条件に、1週28時間以内を限度として勤務先や時間帯を特定することなく、包括的な資格外活動許可が与えられる。一方、夏休みや冬休みなどの学校が定める休業中は、1日8時間、1週間40時間までの就労が認められている。

外国人留学生は、3か月を超えて日本に滞在する場合、全員が日本人と同じ「国民健康保険」へ加入する義務がある（「短期滞在」の場合は加入できない）。この国民健康保険の対象となる治療の場合は、医療費の70%がカバーされ、残りの30%が自己負担となる。また、日本年金機構によれば、日本国内に居住している20歳以上60歳未満の方は、国民年金の被保険者となる。外国人留学生でも、日本で住民登録の対象となる人（在留カードが発行されている人）は、国民年金に加入する義務がある。

上述のように、外国人留学生は、在留資格やアルバイトに関する規定および奨学金制度があり、さらに国民健康保険や国民年金に加入する義務もある。

#### 4. 外国人留学生の生活実態

日本においては、2020年5月1日現在、27万9597人の外国人留学生が日本の大学などで学んでいる。そのうち、中国人留学生は12万1845人（43.6%）となり、最多を占めている。

独立行政法人日本学生支援機構（2021）の「令和元年度（2019）私費外国人留学生生活実態調査」によれば、外国人留学生が日本留学前の状況について、日本を留学先として選んだ理由は「日本社会に興味があり、日本で生活したかったため」（61.3%）、留学するまでに特に苦労したことは「日本語学習」（53.8%）、留学情報の入手方法は「親戚や友人に相談して」（42.0%）が最も多い回答であった。在日年数が4年未満の者は全体の約8割（82.4%）であった。

また、留学後の日本への印象などについて、日本人に対する印象が「良くなった」とする回答は37.7%であった。日本へ留学しての全体的な印象が「良かった」とする回答は92.7%であった。留学後の苦労は「物価が高い」（75.0%）が最も多い回答であった。収入の平均月額額は148,000円であり、関東地方が162,000円と全国で最も高く（東京のみでは166,000円）、四国地方が119,000円最も低かった。収入は主に「アルバイト」および「仕送り」であった。支出の平均月額額は148,000円であった。支出額のうち「学習研究費」が最も多く、次いで「居住費」「食費」の順であった。

アルバイトについて、全体の7割以上（70.4%）が何らかのアルバイトに従事していた。職種は「飲食業」が全体の約4割（40.2%）であった。従事時間は週平均「20時間以上25時間未満」が約4割（39.2%）と最も多く、次いで「15時間以上20時間未満」が約2割（19.2%）であった。

居住の形態について、「民間アパート・マンション等」に居住する者が77.4%と最も多かった。約8割の者が個別のキッチン・バス・シャワー・トイレ付きの部屋に居住していた。単身・同居別では、単身（58.2%）の方が多かった。健康保険に加入している者は、ほぼ全員で加入率は98.4%であった。

卒業後の進路希望などについて、「日本において就職」を希望した者が54.9%で最も多く、次いで「日本において進学」が41.4%であった。

この結果から、外国人留学生の最大グループである中国人留学生の生活実態も窺い見ることができないではないかと考えられる。

#### 5. 中国人留学生の日本留学史

##### 【清朝時代の日本留学】

日本における中国人留学生受け入れの歴史は、日清戦争直後の1896年に清朝政府から13名の若者が日本留学に派遣され、これで中国人の日本留学が始まった。昔、日本の留学生や留学僧が中国にわたり、中国の文化や政治制度を学んだ。しかし、今度は「先生」と「弟子」の立場がまったく逆になって、教えていた「先生」が学んでいた「弟子」に学び始めたのである。「青は藍より出でて藍より青し」という荀子の言葉が示したように、弟子と先生との間の学んで超えるという緊張関係は当然ことと認められていたはずである。

1894-1895年の日清戦争の敗北である。日本に負けた中国は窮境に陥り、主権を失い、国を辱める「下関条約」を締結させられた。この時から、中国人の知識人たちは中国の敗

戦の原因と日本の発展の理由について考え始めた。この点については「中国は日本が強大になった原因を解明した結果、日本が教育を重視すること、特に留学教育が日本の飛躍および近代化に役に立ったことに気づいた」（実藤，1960）と指摘されている。

1898年に出版された張之洞の『勸学篇』の「遊学」篇では、日本への留学生派遣の利点などを力説した。その利点として以下の5つを挙げられている。「遊学の国として、西洋より東洋（日本）がよい。一は、地理的に近く、費用を節約できる。一は、中国に離れていないので考察し易い。一は、日本語は漢文に近くて理解し易い。一は、西洋書は複雑であるが、西洋の学問の要点は日本人がすでに選択している。一は、中国と東洋（日本）の情勢風俗が近く、半分の労力で倍の成果を収めることができる。」と述べている。

清朝時代の日本留学への早期派遣は規模が小さかったが、厳選された官費生が主であり、優秀な成績の持ち主が多かった。この時期を「少数良質の時代」と呼んでいる（実藤，1960）。清朝政府の科举制度の改正や廃止に伴い、知識人たち、特に若者は新知識を求めするために、自発的に海外に赴いていった。

清朝政府が「新政」を展開した以降のことである。「新政」の推進に伴って、各分野において新知識を身につける新式人材が大量に必要とされたが、当時の中国は旧教育から脱皮しはじめる段階にあり、新式人材の大量養成は当分困難であった。この状況に対応するため、清朝政府は外国に視察員の派遣、海外留学の奨励や外国人教師の招碑などの措置を取った（楊，2000）。

こうした背景のもとで、20世紀に入ってから日本留学が隆盛期を迎えた。その時の日本留学は、次のような特徴がある。

① 官費生だけでなく自費生も数多くあったことである。清末の日本留学の初期に派遣されたのはほぼ官費生である。1901年から自費による日本への留学が提唱されたことで、自費生が徐々に増加し、科举制度が廃止されたあとには自費生の人数は官費生を上回って、その後ずっと多数を占めていた。

② 法政や師範を学ぶ人が圧倒的に多かったことである。特に多くの留学生が国内の教育改革の要求に応じ、帰国後の新式学童での教職を目指して、日本で師範を学んだのである（李・田，1997）。

③ 私立学校と速成科が多いことである。清末の留日学生の在籍学校をみれば、私立学校が90%以上を占めて、官立学校（日本の文部省直轄学校）はわずかである。私立学校では、速成科が60%を占め、普通科（中学レベル相当の知識を教える）は30%を占めている。当時、優秀な人材も多数いたとはいえ、留学生全体の質には問題があった。その質の低さは、授業内容は専門学ではなく普通学であったこと、および正式の教育でなくて速成教育であったことと指摘された。

④ 留日学生の政治的関心が高かったことである。知識人たち実際日本へ留学して、日本の改革と富国強兵の経験を勉強し、日本に取り入れられ、吸収された西洋文化を学ぶことは愛国心と志を持っている中国の若者が多かった（段，2003）。

⑤ 日本留学生と欧米留学生が違うことである。欧米留学生の中から科学者が多く出たのに対して、日本留学生からは政治家、軍人、また文学者と芸術家が多く出ている。例えば、周恩来・李大釗・陳独秀・董必武・蒋介石などが政界・軍界の有名人で、魯迅・郭沫若・田漢・何香凝などが文学家・芸術家として名が知られている（巖，1991）。

清末に出版された各種の日本留学のガイドブックでは、「経費は遊学の母なり」というほど留学経費の重要性が示されている。また、清政府が日本を留学の派遣先とした客観的

な要素は、欧米より距離が近くて留学経費が節約できることであった。日本への留学経費が安いと、中央から各省まで全国的に困窮する財政状況の中、多くの留学生を日本へ派遣することができた。実藤恵秀（1981）の著作には当時の中国国内の知識人向けの留学案内書を利用して、学費、寄宿舍、書籍・筆・ノート、雑費及び日本までの旅費など、日本留学にかかる必要な費用を紹介している。

張之洞（1998）の主導で行われた湖北省の日本への留学生派遣及び留学経費の調達などについて、一時的に400名以上の官費生が在日しており、湖北省の鉄道建設を担う人材を専門に育成するために、その運営にかかる全ての費用を湖北省が負担するまでを論じたうえ、1910年になってから湖北省の財政状況はますます悪化したため、日本に留学していた官費生の全体を中国に引き揚げることを検討せざるを得なくなった過程を明らかにすることができた。また、官費生に支出した医薬費の負担を巡っては、絶えず不正の問題が持ち上がり、会計の管理が大きな問題として指摘され、官費生の留学費用の全体の中に占める医療費の比率は7%を占めていることがわかった。

当時留学中の呉稚暉（1902）は、「学費の不足を補うには、日本の教科書を翻訳するのが最もよく利用される方法である。もし日本語ができ、かつ漢文も優秀な学生であれば、一日に一・三千字を訳すのに、二・三時間しかかからない。翻訳で稼いだお金は学費を補充するのみならず、家計の助けにもなる。ただこのような方法は学生各自の能力によるもので、すべての者に適応するわけではない。しかし、例えば学費の準備が整わないで、軽率に日本へ渡ったとしても、時を経て各自で生きていく道がきっと見つかる。」と語っている。すなわち、当時の生活費に困っている留学生は、現代の留学生と同じようにアルバイトを通して留学費用を稼ぐことができる。

以上のように、日清戦争の敗北をきっかけに、中国人留学生は日本留学の舞台に登場した。この舞台に最初に立ち現れた彼らは、日本の地で波瀾万丈の物語を展開し始めたものである。

### 【中華民国時代の日本留学】

1911年の辛亥革命で清朝が倒れ、中華民国が誕生した。その時から1945年終戦までの30年あまりの間には、中国国内の情勢変動と中日関係の変化に伴って、在日留学生の数が増えたり減ったりしたにもかかわらず、中国人の日本留学はその後も継続していた（李・田、1997）。この時、国家の未来を建設するため日本にきた人もいるし、混乱社会に不満を持ち救国の道を見つけるため日本にきた人もいた。政府派遣の公費留学生もいれば、多くの自費留学生もいた（李・田、1997）。

第一次世界大戦中の1915年1月18日に日本が中華民国政府に対して21カ条の要求を提出した。この要求に対して中国本国で起きた反対運動がおこり、日本の留学生たちも「中華留日学生会」を組織し、日本国内でも反対運動が広がった。結局、「中華留日学生会」は駐日中国公使館の命令によって解散させられ、反対運動は失敗したが、それに憤慨した留学生は相次いで帰国し、本国で活動を継続した。

1931年「九・一八事変」が起こり、中日両国の関係が急激に悪化して、長期的な敵対戦争状態に陥っていることは学生の日本留学にも重大な影響をもたらした。その後、日本にいる留学生は休校宣言を始め、10月末まで既に2000人もの学生は帰国して、その中、たくさんの学生は救国運動の流れに投入した（段、2003）。



1933年～1934年の間に再び日本留学の人数が段々増えてきて1000人ぐらいに回復した。その原因は、この時期進歩活動に投身した青年インテリは当局の迫害を避けるため次から次へと日本留学に駆ける一方、政府も自費留学を提唱していたからである。そして、当時の留学費用は低く、手続きは簡単で「旅券無し」で日本へ行ける。

1935年～1937年の時、在日留学生は改めて五、六千人に増えて、第三次留学ブームとなった。その原因、第一には「新興満州国」乗り出そうということよりも、抗日救国のためにはまず日本を見極めようという意味がはるかに強く動いていたからである。第二には、経済的原因で、1935年「対日為替相場が好転(金貨が下がり、銀貨が上がる)したことも原因している」。中国の場合は当時銀本位なので、中国人が日本に留学するのが有利になったのである(実藤, 1960)。

民国時代に入ってから中日戦争勃発の1937年までは、多少の増減があるが、大体毎年三、四百人の卒業生が出ている。数量的には清末極盛期(六、七百人)に及ばないが、その内訳を見れば、大学特に東京帝大や京都帝大のような名門大学の卒業生(1939年までは両方とも合計200人以上に達している)の増加が目立っている。清朝末期・民国以来、留学生派遣政策の改善による留日学生の質的向上が裏付けられている(実藤, 1960)。

1937年7月7日に「盧溝橋事件」が起こり、日中全面戦争が始まった。民国の駐日大使館・留学生監督処が閉鎖され、留学生も総帰国し、ここに留日学生史は中断することになった。この時期、日本留学生には喬冠華、孫平化という有名な外交官および夏衍、田漢、杜宣、鐘敬文などの有名な作家や学者が現れた。

### 【中華人民共和国成立から改革開放までの日本留学】

1949年、中華人民共和国が成立し、戦後の日中国交はまだ回復されないで、両国の文化と留学交流は低調な状況に止まっているので、中国からの留学生が減多にいなかったのであった。冷戦の影響で、新中国は同じ社会主義国家である旧ソ連と東ヨーロッパに留学生を派遣した。

1950年から第一次経済五か年計画が終了する1957年までの8年間、その派遣数は7,862人であった。そのうち、ソ連への留学生が7,053人と圧倒的多数を占めていた。50年代末から、中ソ関係が悪化したため、中国は留学生派遣の規模を縮小した。1966年、文化大革命が始め、留学生の派遣を中止した(大塚, 1991)。

中華人民共和国成立から改革開放までの中国人海外留学の特徴をまとめると、三つのことが指摘できる。①国家派遣中心であること、②政治・外交情勢に影響され50年代の社会主義国家への派遣から70年代の西側諸国への派遣と転換されたこと、③留学生の専攻分野は自然科学系より文科系、特に外国語が中心とされたことである(李・田, 1997)。

1972年アメリカのニクソン大統領の訪中が契機となり、中国と西側諸国との関係が急速に改善され、中国は西側諸国に留学生を派遣しはじめた。1972-78年末までの派遣数は1,548名で、その専攻分野は、外国語関係が1,451人で、93.7%を占め、自然科学関係がわずか97人で、6.3%に過ぎなかった(石附, 1989)。日本へは中日関係正常化の翌年1973年にわずか7名の留学生が来日し、日本語や日本史などを学んだ(田中, 1990)。

### 【改革開放後の公費留学生】

1978年12月に開催された中国共産党第十一期委員会第三回全体会議で改革開放政策を提出され、その後、中国国内体制の改革および対外開放政策が始めた。中国政府は、文化大

革命の路線を完全に否定し、鄧小平の指導体制の下で、農業、工業、国防、科学技術の「四つの現代化」を国家目標として、経済建設を中心とした改革開放を打ち出し、対内に「改革」、対外に「開放」という路線を正式に確立した（李・田，1997）。

この政策は、中国の近代化路線への歴史的転換点であり、市場経済へ移行になった。この路線に従って、中国は先進諸国の技術や資本、優れた経験を積極的に取り入れはじめた。しかし、文化大革命中、高等教育の質と量ともに後退したため、改革開放当初、中国は深刻な人材不足となった。高等教育に対する需要に対応して、その規模は急速に拡大した。こうした中で、人材養成のため、中国政府は留学生派遣数を大幅に拡大する方針を高めた（李・田，1997）。

1978年6月23日に鄧小平は、清華大学での講演で「私は留学生派遣に賛成である。中国の水準を向上できる重要な方法の一つである。8人や10人ではなく、千・万を単位に派遣すべきだ」と発言した。この提案を受け、教育部は毎年2億元規模の予算で、年間3000人の留学生派遣政策を制定した。この時は国家派遣が中心で、派遣先は主にアメリカ、日本、ドイツ、イギリスなどの先進国であった。1978年中国政府は公費派遣留学生1750人を世界35カ国に送り出した。その大半はアメリカとイギリスが中心で、日本は3番目の派遣対象国であった。しかし、当初は数名の留学生しか日本に来なかった。本格的な留学再開は1979年からであった（王，2001年）。

80年代の中国人留学生は半数以上が公的派遣によるものである。大塚（1991）の調べによると、1978年～1989年日本に来た中国人留学生は約9000人である。その内、公的派遣留学生は4600人であり、残りは所属機関による「単位派遣」および私費留学生である。このような公費留学生は留学終了後、大体中国に帰国した。その時、日本に派遣された公費留学生は、中国青年のエリート層に属する大学生や大学院生の中から試験を通してさらに選抜された超エリートなので、優れた素質を持ち、研究意欲も強くて、日本語と英語の両方が堪能であり、留学先の大学で優秀な成績を取っていたので、大変評判がよかった。彼らは、文化交流にも熱心で、日中両国の友好の懸け橋としての役割を果たした（李・田，1997）。

### 【改革開放後の私費留学生】

1980年の留学人員工作会議で私費留学政策が確立され、私費留学生も徐々に増加してきた。しかし、80年代前半では、極少数の人が私費留学生として来日した。彼らの多くは30才前後で文化大革命を経験しており、文革後本格的に再開された大学に入って、高等教育を受けた人々である。彼らは全国統一の学力試験で選ばれた優秀な青年である。文革の動乱で真面に勉強できなかった損失を補おうと、勉学意欲が高く、大学卒業後、修士課程や博士課程へ進学し、更に先進国である日本の技術や運営管理の経験などを学ぶため、日本に来た人々である。しかし、多くの私費留学生は経済面などでいろいろ苦勞し、様々な困難を切り抜け、豊富な社会経験を生かし成功した人も数多くいた。私費留学生は公費留学生と違って、帰国の義務がないので、卒業後日本で就職したり、日本人と結婚したり、あるいは第三国に行ったりして、結果的に帰国者が少なかった（李・田，1997）。

80年代後半になると、改革開放政策の推進に伴って私費留学に対する制限が緩和されたため、日本留学生が大幅に増えた。その人員構成も複雑になり、大卒以上の学歴者もいれば、そうでない人も多かった。工場労働者、店員や個人経営者など、来日前の職業も様々であった。先輩の私費留学生と比べて、これらの留学生や就学生の来日目的は様々で

あった。勉学のほかに、今までの職業や地位を変えるためとか、外国での生活を体験したためとか、あるいはお金を稼ぐためとか、彼らの動機は実に多様であった。彼らは来日するため、仕事を辞め、入学金や授業料のため、普通の中国人給料の10何年分のお金を用意しなければならなかった。莫大な借金を背負った人も多かった。来日後、収入もないし、国からの送金に頼れないので、彼らはアルバイトで生活費と学費を稼がなければならなかった。こういう私費留学生、日本語もよくできないまま来日した人が多かったため、彼らは日本社会にうまく適応できず、日本人とのトラブルも多発した（李・田，1997）。

### 【改革開放後の留学の自由化】

1976年10月「文化大革命」は漸く終息となり、経済建設への政策転換によって国の政治や経済、および社会の全面的な荒廃から立ち直るための人材は極めて不足である。この問題を解決するため、1977年7月に鄧小平は科学・教育の担当副総理として「四つの現代化の実現」の目標に向けて教育システム回復の課題に取り組んだ。

1977年10月21日に鄧小平の決断で「大学入試に関する意見」を公表し、10年ぶりの「全国大学統一入試テスト」を再開することを正式に決定した。

これによって1977年初冬に大学入試試験は直ちに再開し、570万人の受験者のうち、27万3000人の合格者が発表された。それ以来、大学の受験システムが定着し、合格者数は1997年に100万人を超え、さらに2018年に715万人に達した。

1978年6月23日に鄧小平は「清華大学の問題」について懇談会で派遣留学のことについて、「私は大量派遣に賛成し、八人か十人かの派遣だけではなく、自然科学を中心に数千数万人の派遣すべき」という有名な談話を行った。留学派遣についての鄧小平の談話は、改革開放期のもっとも重要なシンボルであった。さらに、これは中国における留学史上の非常に重要な出来事の一つとも言え、今日までの留学政策においてもっとも重要な指導方針でもあった。

1979年12月末から1980年初頭にかけて、「全国出国留学人員工作會議」を開催し、一年來の留学送出し状況を総括し、質を保つ前提として1981年から大学教員と研究者を養成する理工系院生の派遣を主としていく留学派遣政策を明確に打ち出した。当時の原則としては、広い分野で優秀な人材を選抜し、質重視の同時に多数派遣留学を求めた基本方針であった。

90年代に入ってから、それまで公的派遣による留学生が主だった状況が逆転し、私費留学生が主流となった。1989年の天安門事件の後、留学生の不帰国が多発し、中国政府は不帰国問題に対して柔軟な姿勢を示すようになり、私費留学の制限が少しずつ取り除かれていった。

1992年1月に鄧小平は留学政策に対して、「すべての出国者が本国に戻ることを希望し、彼らの過去のどういう政治態度を問わずに、みんな国に帰ってよい。さらに戻ってから適材適所の仕事を与えてよい。この政策は変えちゃいけない。彼らに言って貢献するのは帰国が一番良い」と強く促していた。これらを背景にして、長く停滞した留学政策にとって大きな転機を迎えることになった。

1992年、鄧小平が深川、珠海の両経済特区を視察した際、より一層の経済発展と開放改革を呼び掛けた南巡講話を受けて、再び高度成長に乗り始めた。1993年1月15日に、中国政府が留学の歴史上に最も開放的な「留学支持、帰国奨励、自由往来」という新たな留学

政策の基本方針を発表した。この政策は、1990年代に極めて重要な留学政策として、非常に高い評価を受けた。

上述のように、継続して留学生派遣政策の支持を打ち出すと共に、帰国促進策の推進、さらに留学後帰国せず海外に定住している同胞が自由に往来して国家建設に参加することを認めたのである。この方針は、政府がある意味中国人の海外移住を容認した政策でもある（坪井，2005）。その結果、若者たちには海外へ留学するチャンスが生まれ、海外への留学ブームが起きた。

## 6. 中国人留学生の日本観や対日イメージ

中国人の日本に関する情報の獲得は依然としてメディアに依存していることが明らかである。テレビに関して、CCTVの影響力が地方と海外テレビを遥かに凌駕し、ニュース報道とドラマがその他のテレビコンテンツより対日イメージとの関連性が強かった（江，2014）と指摘された。そして、社会心理学では、ある刺激に繰り返さらされることで、刺激に対する態度の変化が生じ、特に好意度や印象が高まるという「単純接触効果」が長年提唱されてきた（宮本・太田，2008）。さらに、中国人留学生の批判的な対日イメージについては、中国人留学生の社会的アイデンティティのあり方と関連づける視点と同時に、日中関係の歴史的背景や、中国のメディアによる対日報道のあり方などの社会的、歴史的要因も中国人青年の対日イメージに多大の影響を与えているであろう（毛里，2006）と推測している。それゆえ、メディアは中国人の対日イメージへの影響力がかなり強いと考えられる。

中国では、「留美的親美、留日的反日」（アメリカに留学した者は親米派になり、日本に留学した者は反日派になる）という言い方がある。ある意味では、日本に対しマイナスイメージを持っている中国人留学生が存在していることは否定できない。また、中国の学校教育において、中国や中華民族を称揚する愛国心教育を社会学習や徳育の中心に据えている（劉，1999）。愛国心教育によって中国という国家への帰属や誇りが強調される文脈でアイデンティティ形成が行われる中国人留学生の場合は、中国対日本という国家レベルでの対置の構図が意識の前面に出やすく、それゆえにまたホスト国日本に対するイメージもより批判的、否定的なものになりやすいと予想されるのである。そして、異文化コミュニケーションの研究分野で、異文化集団間の接触回数を増やせば、その対象に対する偏見や排外意識が低減されるという考え方「接触仮説」（稲増，1982）がある。

小林(2010)の調査によれば、留学生の社会的アイデンティティと対日イメージとの関連を示唆され、中国人留学生が国家に焦点づけされた社会的アイデンティティを強くもっている。また、中国人留学生が日本社会の秩序正しさや科学技術水準の高さを賞賛する一方、日本人の閉鎖性に対する不信感や日本社会での疎外感を言明することが多かった。中国人留学生にとって、日本は科学技術の進んだ先進国であり、経済的、社会的成功とも結びついたキャリア形成の地である。

中国人留学生は、中国文化と日本文化に対する文化的アイデンティティについて、日本の大衆文化から生成された肯定的な対日認識と、歴史問題で生成された批判的な対日認識を持っている（鈴木，2008）。しかし、中国人留学生の異文化接触における不満の決定因は、アルバイト先に由来するという結果が出ている。日本人とかかわりの多いのは、バイト先の日本人であって、中国人留学生の日本観もアルバイト先の体験が彼らの日本に対す

るイメージの決定因となっている(邵, 2000)。また、山崎(1996)の研究によると、対日態度に影響する要因として挙げられるのは、滞日期間・経済状況・差別経験・対人関係である。そして、対人関係・差別経験は決定的な要素であると述べている。葛は、中国人留学生の来日前の対日イメージおよび来日後のイメージ変化が適応に大きな影響を及ぼし、来日前の対日イメージが良く、来日後もポジティブに変化する者ほど適応度も高いことを明らかにした。

以下では、来日前の中国人留学生・中国人就学生・私費留学生・国費留学生・帰国留学生の対日イメージについて概観してみる。

来日前、対日観や日本人イメージについて、好感派が24%、反感派が11%、中間派が65%という結果だった。日本のプラスイメージは、「日本は先進国である」「日本の多くの人が豊かな生活を送っている」「マナー意識が強い」「環境がいい」「日本の技術は先進的」「医療発達」「日本人は真面目・勤勉・責任感があり・忍耐力が強い」と考えている人が多い。一方、日本のマイナスイメージは、「物価が高い」「軍国主義」「外国人が住みにくい」「歴史的感覚が悪い」「日本文化は閉鎖的」「日本人は排他的・冷たい」「男尊女卑」「上下関係が厳しい」と思っている人が多い。来日前に約7割以上の中国人留学生が日本人と接することがなく、イメージの形成は主にマスメディアや学校の教育によるものであった(鄭, 2008)と示された。

中国人就学生の対日イメージについて、日本人とのバイト先でのトラブルは、就学生は大学生の3倍近く(大学生は13.6%、就学生は36.4%)であって、日本社会に対する不満度が、大学生の2倍になる(岡・深田, 1995)と示された。また、日本での生活に、孤独・苦痛・つまらないといった否定的な感情を抱く者は、大学生では42%であるのに対し、日本語学校生では75%にも達している。中国人就学生の80%以上が、ブルーカラーの職種についていて、そしてアルバイト先での処遇や日本人の態度が差別的であるという不満が最も多いと指摘されている(加賀美, 1994)。したがって、中国人就学生がアルバイト先で感じた不満や被差別感や日本人に対する不信感を深め、日本人との接触を回避させ、敵意を助長させ、上述の「留日反日」という傾向が存在する一因となると考えられる。

中国人私費留学生の日本観は、否定的なイメージで、対日感情は反日的である。彼らは私費で来日し、肉体労働のアルバイトで留学生生活を支え、都市下層に組み込まれる不愉快な生活体験と、アルバイト先の日本人との人間関係に基づいて、彼らの対日観を決定する、という。また、日本人の欧米重視・アジア軽視という風潮も中国人留学生の対日観をマイナスの方向に向かわせる(邵, 2000)。また、私費留学生の日本での悩みは、一位は「生活費・学費が高すぎる」(52.7%)、二位は「日本人が中国人をバカにしている」(37.5%)と答えている。しかし一方、バイト先で日本人と良い関係を築きあげた例も少なくはない。例えば、「アルバイト先のおじさんがとても親切にしてくれた」「工場で仕事をしていて、親方は二人いるが、二人とも人情味が厚くて本当にいい人だ。日本に来て良かったと思う」と、アルバイト先の人間関係によって、中国人留学生の日本に対する感情は、プラスかマイナスの方向へと変化する。一方、周りの日本人との関係において、アルバイト先の日本人との関係より、むしろ日本人学生の先輩・後輩との関係に戸惑いを感じている(丁, 1994)と示された。

中国人国費留学生は生活面での深刻な問題が少ないために、研究面で先生や日本人学生と相談するが、生活面ではほとんど相談しない。国費留学生が普段付き合っているのは、

大学の先生、日本人学生に限定されがちである。彼らは私費留学生と違って、アルバイト先での辛い体験を持っておらず、周りの親切にしてくれた日本人によって、彼らの日本・日本人に対する肯定的なイメージが形成されるわけである。このように、経済的な圧迫が無く、研究に専念できる国費留学生は、日本人との付き合いに満足し、その日本観はおおむね肯定的である。しかし、彼らは私費留学生と同様、大学内における人間関係に戸惑いを感じる場合が少なくない。国費留学生は、大学内の日本人の勤勉さを高く評価しながらも、日本の大学内における「上下関係」「表裏・本音と建前」「希薄・疎遠」「集団主義」というような日本文化様式に戸惑いを強く感じ、否定的に評価すること（邵，2000；浅野，1997）と指摘された。

帰国留学生は留学を終え、国に帰って日本での留学をふりかえる時、日本人の公衆道徳、社会規範、集団主義的傾向、仕事への勤勉な態度、国民性など、中国人が学ぶべき点としてよく挙げられる（遠藤，1994，1995，1996）。しかし、同時に多くの帰国留学生が「日本社会の閉鎖性」、「欧米を崇拜し、アジアを見下す」、「偏見や差別」など、そうした対人関係に直結する要因を大きな問題として強く感じていて、自分たちに対する日本人の態度に心奥の民族的自尊心を傷つけられ、それが「留日反日」という原因になるのではないかという指摘もある（徐，1996）。さらに、中国人留学生の日本人イメージを考察した李（2007）によると、調査対象の大半は日本で差別された経験を持ち、それが日本人に対するネガティブなイメージにつながっているという。しかし、一方、帰国留学生の日本観に関する研究（徐，1996；奥川・梶川，1999）では、日本での経験は、帰国してから自分の人生に対する貴重な経験であるにとらえる人が少なくない。そして、中国人帰国留学生の日本観は全体として、プラスイメージを有しているという。これらは、帰国留学生の日本に対するいいイメージと悪いイメージの形成要因といえよう。

青木（2011）の調査によると、日本留学を経験した中国人大学生は自分に自信が出て、前向き志向になり、日中友好の必要性を感じるようになっていくことが示された。しかし、対日感情には大きな変化は見られなかった。また、日本での滞在期間が長くなるほど、内面的、社会的アイデンティティは安定し、生活上の困難が減少し、友人も増えたが、対日感情は悪化傾向にあり、祖国を想う気持ちが高まる。その一方で、対人関係に困難を感じた学生が多くいたことが明らかになった。日本留学中に対人関係に困難を感じた学生の多くは、来日前から日本に対してネガティブな感情を少なからず抱えていたと指摘された。対人関係に困難を感じた学生は、来日後も対日感情が大きく好転することは少ないと示された。

上述のように、中国人留学生の多くは、「日本人の考え方」や「外国人に対する日本人の態度」などが日本人との人間関係の形成に直接関わっている。中国人留学生の来日前や来日後、私費や国費を問わず、日本人との人間関係の良し悪しが対日イメージへの影響が何よりも重要な役割を果たしている。これによって、プラスイメージ・マイナスイメージが形成される。すなわち、中国人留学生は日本での体験によって、日本に対し、共通する認識を持つ一方、それぞれの境遇の違いによって、違う認識を持っている。特に日本で差別を受けた経験がある留学生は、彼らの日本観には厳しいものがあると見られた。

## 7. 中国人留学生の日本留学動機

留学のためには高額なコストが必要なので、その投入がどの程度の便益を生み出せるのかという経済的試算が必ず行われる。このコストというのは、留学するために支払う授業料・生活費・渡航費などの直接費用のみでなく、留学せずに国内に残る場合に得られる収入、機会、社会的ネットワークなどのいわゆる放棄所得も含まれている。つまり機会コストも考慮に入れるということである。そのほか、家族や友人と離れる精神的苦痛や、未知の世界に入る時の不安などの精神的要因もコストの一つとして計上されるべきであろう。したがって、留学するためのコストには、①直接コスト、②機会コスト、③精神的コストの3つが含まれている。一方、留学を通して何の便益が得られるかということ、先進的知識・技能以外に、文化体験やネットワーク作りなどを挙げられる。また、それによってよりよい就職機会、高い社会経済地位を獲得できるメリットもある(李, 2016)。

海外留学のチャンスが広く開かれる中で、中国人留学生が日本留学を選択するメリットはどこにあるのか。また、日本留学の経験は将来的にどのように役立つのか。すなわち、日本留学の効果はどのくらいあるのかを先行研究から概観し、中国人留学生個人の留学動機に着目する。中国人留学生の約9割以上が私費留学である。一般的に来日の動機は、学問や知識の習得を目指す「苦学型」、海外生活を楽しむ「享楽型」、職場への不満や家庭の不和などから海外脱出を実行した「逃避型」、アルバイトを狙う「出稼ぎ型」という四つのタイプに分けられるが、現実には複合型が最も多い(班, 2004)と指摘された。

日本国立国語研究所と中国人民大学の共同研究で中国の5都市(北京市、大連市、西安市、ウルムチ市、唐山市)で実施された報告によると、日本語を第一外国語とする人の学習動機について、「学校の指定する必修科目だから」(40%)を挙げる人が最も多く、次いで「進学のため」「学びやすいため」「仕事・研究上の必要があるため」(26%)「日本が好きだから」(13%)を大幅に上回っているという結果(劉, 1998)を示されている。

中国留学発展報告(2013)の日本への留学動機についての調査によれば、①「見識の増強、他国文化の理解」か、②「先進的知識、技能の学習」、③先進的教育の享受、④職業総合競争力の増強という順になっている。この結果から、教育レベルが主要動機になっていることがうかがえる。中国人留学生の日本留学動機について、主に「見識の増強、他国文化の理解」「先進的知識、技能の学習」「先進的教育の享受」「職業総合競争力の増強」と指摘された。

方・松岡ら(2016)の研究では、中国人留学生が日本に留学を希望する理由の一つとして、漢字圏の国であり、読み方がわからなくても漢字の内容で授業がなんとなく理解できるという。また、日本文化への興味や大学への期待として、語学力向上のプログラムの期待が挙げられた。

中国メディア・東方網(2020)は、日本留学する中国人学生が考える「日本留学を選択した理由」として、①日本が国を挙げて教育を重視している点である。日本に1000校以上存在する各種大学が日本の発展の原動力となっているとしたほか、日本政府も巨大な教育経費を投じていると伝えた。②就職に有利な点である。日本には中国市場に関係する企業が多く、日本語ができる中国人人材の就職率が比較的高い。また、中国国内大学の外国語学部の中でも、日本語学部の就職率はトップクラスであり、日本においても中国においても就職するうえで有利だとしている。③日本政府が外国人留学生を積極的に呼び込んでいる点である。少子高齢化の加速により日本国内では人材不足に陥ってお

り、留学生の呼び込みと支援が強化されているとし、学費や医療費、交通費などの補助に加え、日本の大学を卒業後に滞在可能な期間が半年から1年に延長されるなど、日本でのキャリア形成がしやすくなっている。④欧米に比べて日本留学はコストパフォーマンスが高い点である。⑤日本語の発音が簡単であるうえ大量の漢字が使用されている点である。中国人にとって日本語が学びやすい言語である点を挙げている。

中国人海外留学生発展傾向報告書(2016)によると、「中国人留学生の年齢構成に急速な変化が起きており、中高生を主体とする低年齢の留学生が急速に増えている」という。中国の留学サービス機関「啓徳教育」は、「中国人留学生は、数量的に増加し続けているだけではなく、その構造にも新たな変化が生じており、高校生と中学生の留学生数が明らかに増加している。留学の低年齢化という傾向が高まった背景には、学生の社会実践力の育成をより重視するようになり、保護者が子どもの語学力や自立能力を高めることを希望している」と指摘した(人民網, 2017)。

中国人留学生の留学動機は過去と比べて明らかに変化している。「2018年中国海外帰国者就職創業調査報告」によると、中国の新世代の若者たちが、従来の若者たちと比べ、考え方を大きく変化させていることを示している。旧世代にあたる70年代、80年代初頭生まれの留学生は、留学理由として、主に「学歴の取得」と「就職の将来性」を挙げるものが多かった。これに対して、85年以降に生まれた留学生は、留学理由として、「異国文化・生活の体験」と「人生経験を豊かにする」との回答が76%を占め、次に「独立的で自主的な生活能力を磨きたい」という回答が多かった。海外留学生が帰国する主な原因とされるのは、両親との密接な関係である。帰国者に対して帰国理由を調査すると、「中国にいる家族や友人にとっても会いたい」が67%を占め、7割近くに上った。現在留学中の若者の多くが80~90年代生まれの一人っ子で、兄弟がおらず、留学生と家族の依存関係が極めて強い。さらに、帰国後の都市選択も、61%の帰国者は自身の出身地(故郷)で就職するという。残りの帰国者は、13%が北京へ、8%が上海へ、7%が広東へ移住する(CCG研究報告, 2018)。従来は、「名門校学位の取得」「海外で勉学に励み」「経験を積むこと」が主な目的となっていた。最新の留学データによると、「人生経験の充実」と「グローバル的な視野の開拓」を留学の目的(人民網, 2018)としている人が明らかに増えている。

上述のように、中国人留学生の日本留学の動機はさまざまである。この結果から、教育を受けるための主要動機になっていることがうかがえる。日本留学の高額のコストを考慮した上で、進学すること、学位を取得すること、経験を積むこと、卒業後の就職に有利となることが日本留学の主な目的となっている。

## 8. 中国人留学生の進路選択

日本で学んでいる外国人留学生の卒業後の進路選択について、①日本就職と進学、②帰国就職と進学、③出身国以外での就職と進学、④一旦日本で就職し、暫くして母国に転職する、⑤結婚するなどとの5つに大別されると考えられる。以下の調査で概観してみる。

日本学生支援機構(2021)によると、2019年度に日本の高等教育機関を卒業した留学生は64,725人であり、日本国内(就職23,014人、進学16,356人、その他7809人、合計47179人)、出身国(就職4,487人、進学298人、その他8,996人、合計13,781人)、日本・出身国以外(就職173人、進学336人、その他942人、合計1,451人)、不明2314人である。



労働政策研究・研修機構（2009）による、留学生の今後の日本での就労可能性についての留学生調査では、「日本でずっといまの会社で働きたい」が 33.6%となっており、3分の1が現在の会社で働きたいとしている。一方、「いまの会社であるかどうかはこだわらないが、ずっと日本で働きたい」が 28.4%、「いずれ母国に帰って働きたい」が 28.9%、「いずれ日本・母国以外の国で働きたい」が 5.9%となっており、残りの3分の2は今の会社で働くことにはこだわっていないことが窺える。母国や第三国で働きたいとする割合は 34.8%と3分の1は日本以外で働きたいとしている。

21世紀に入り、中国から海外へ留学する学生は増加しながらも、同時に中国経済の顕著な発展が留学生の帰国を促進している。特に2008年から2010年にかけて、先進国を中心とする経済危機の影響があり、帰国留学生数は急増した。中国国家统计局によると、2013年以降の帰国率は、ほぼ80%を占めている。留学生の「帰国ラッシュ」が起こった背景には、中国国内企業の急成長と留学先国における移民政策の厳格化、中国政府の人材招致戦略などによる留学帰国者優遇政策などがある。特に近年、中国国内でアリババをはじめとしたIT業界や金融業界が飛躍的に発展している影響が大きい。これらの業界では、高い賃金水準や幅広い将来性を見込め、起業家が求める新規ビジネスチャンスもある。このように、政策や経済的变化が、若者の海外留学を拡大させ、同時に、肯定的かつ積極的な「帰国」を促す要因になっている（独立行政法人、労働政策研究・研修機構、2019）。

「2019海外帰国者就職力調査報告」によると、帰国者は中国で就職する際に何らかの壁にぶつかるという。70%の帰国者が「帰国後に文化的理念、定住・就学にかかわる戸籍の取得、政策による各種制限などの難題に直面する」、30%が「帰国後最初に勤めた仕事は完全に希望通りではない」。一方、留学帰国者は、「言語コミュニケーション能力と異文化理解」、「国際的な視野」「生活適応能力、独立性」など、就職に有利な点を持つ一方で、就職活動中に、「国内の就活状況や国内企業の需要」に対する理解不足と「キャリアプランが明確でない」などの不利な点があることも指摘された（オンライン職業教育ユニキャリア研究報告、2019）。

佐藤（2014）は、留学生の進路選択についての制約条件（経費・家族・ビザ等）を考慮した上で、①能力向上・発揮の機会、②よりよい就労機会、③よりよい社会環境（就労環境・生活環境）などの希望を最大限に満たす留学先、就職先を選択すると仮定し、政策的・制度的・経済的・文化的要因も考慮した留学生の進路選択モデルを作成している。

馬（2016）は、日本で学ぶ中国人留学生について、出身地の違い、配偶者・恋人の有無、一人っ子という属性に基づき、これらの要因が中国人留学生の進路選択に影響を与えると示している。徐・阿部（2012）の中国人帰国者に聞き取り調査では、帰国就職した主な理由は、①就職先が見つからない、②希望と現実のギャップ、③中国からの就職のオファー、④家族と生活したい、であるとしている。

竇・佐藤（2017）は、日本で就職した中国人留学生に関する調査によれば、生活面で必要な支援に関する調査によれば、日本勤務者では、「子供の教育」（10.7%）最も多く、次いで「年金・保険制度の改善」（9.0%）、「外国人の相談窓口」（6.2%）、「外国人への情報提供」（3.4%）、「配偶者の生活支援」（2.3%）、「日本語教育の支援」（1.1%）の順であった。「子供の教育」に関する支援希望の内容は、「中国語教育の支援」と「幼稚園などにいる時間の延長」が多い。「年金・保険制度の改善」については、納付額の減少や加入を選択できるシステムを希望する声が多い。「外国人の相談窓口」については、労働保障の権利や医療に関する相談を求める者が多かった。また、帰国理由について、

果、「親の面倒を見る必要がある」「中国のほうが仕事の将来性がある」「日本で学んだ専門は中国でもっと必要とされる」「外国ではストレスが多い」「職場での昇進は限られる」「職場環境が好きではない」「子供に中国で教育を受けさせたい」「配偶者や子供が中国にいる」を挙げられた。

上述のように、中国人留学生の進路選択は、就職した国に関わらず、最も重視する要因の一つとしては「キャリア形成・能力向上」である。中国での能力向上・発揮機会があれば、帰国を選ぶ留学生も多く存在している。そのため、彼らの進路選択は留学生本人の利益の最適なバランスによって決められると言えよう。

## 9. 在日中国人留学生の異文化適応

中国人留学生の来日動機は異文化適応に影響し、来日動機が自発的ではなかった場合は、望ましくない適応に陥りやすい可能性がある（葛，1999）と指摘された。異文化環境での適応は、異文化適応と呼ばれる。留学生は自文化から異文化へ移行する際に、異文化適応の問題に直面する。異文化社会に適応していくことは、心身の健康のみならず、学業目標の達成とも深く関わる重要な問題と示している（Berry, 1997）。異文化適応の内容によって「心理的適応」と「社会文化的適応」と分類される（Ward & Rana-Deuba, 1999）。心理的適応は、個人の心理的や身体的健康状態を指している（Schmitz, 1992）。社会文化的適応は、新しい環境に適合できる能力を指している（Berry & Sam, 1997）。社会文化的適応が心理的適応に影響を及ぼす傾向が観察されている（Berry, 2006）。

異文化適応に対する関心は、アメリカにおいて最も強く、戦前から研究が進められてきた（Kim, 1988）。その中心課題は移民の文化適応の研究であったが、それに加えて、留学生の異文化適応の問題が注目されるようになった。こういった留学生を対象にした適応研究は、英米両国の研究者を中心に第2次大戦後より行われており、異文化適応研究の中では最も数が多いといわれる。

異文化受容態度として、統合・同化・分離・周辺化の4タイプに分類している。統合は、異文化と自分化の両方を認める。同化は、異文化を認め、自文化を否定する。分離は、異文化を否定し、自文化を認める。周辺化は、異文化と自文化の両方を否定する（Berry, 1997）。

異文化適応は静的なものではなく「過程」であるため、絶えず変化してゆく心理的な状態だとされている（高井，1989）。異文化適応のプロセスに関する古典的な研究として、Lysgaard（1955）によって提唱されたUカーブ理論、この理論は、滞在地での異文化の適応の過程をU字曲線で表わしている。また、Gullahorn & Gullahorn（1963）によって提唱されたWカーブ理論は、帰国後の自文化での再適応曲線のU字曲線と合わせて全行程の適応曲線をW字曲線で表わして説明したものである。

異文化適応の本質において文化変容のプロセスとして捉えられる。文化変容は、文化間移動に伴うアイデンティティの危機状況であるカルチャーショックに直面した時、自らの文化的、心理的特質を変化させることで異文化環境への適応を図ろうとする過程のことを指す（星野，1992）。

適応に成功すれば、異文化適応といえる。逆に、適応に失敗すれば、異文化不適応になる。異文化への適応の困難さが原因となる不適応症状はカルチャー・ショックと呼ばれる。カルチャー・ショックは異文化における適応・不適応の問題を考えていくうえで、避

けて通れない概念である。カルチャー・ショック概念を最初に提起したのは Oberg(1960)である。Oberg(1960)は「社会的な関わり合いに関するすべての慣れ親しんだサインやシンボルを失うことによって突然生じる不安」と定義し、そこに生じる不安な精神状態がカルチャー・ショックであるとしている。これに対して、Adler(1975)は、「病的」と見られがちなカルチャー・ショックも、それを新しい文化の学習と個人の人間的成長という広い視野の中で見ると、異文化理解だけでなく自己理解の深化とそれに基づく変容(成長)をもたらす学習経験と捉えることができることを明らかにした。

カルチャー・ショックには個人差があることを指摘した上で、一般的な傾向としてその過程には4つの段階があると提唱した(河内, 2014)。その4つの段階とは、①新しい文化に魅了される「蜜月期」、②様々な現実的問題に直面する「敵対・攻撃期」、③新しい環境に適応し始める「回復期」、④現地社会の習慣・文化を受け入れ順応する「適応期」である。さらに、Adler(1975)は、適応段階を、①「異文化接触期」、②「崩壊期」、③「再統合期」、④「自律期」、⑤「自立期」の5つの段階に分けて示し、認知、感情、行動のそれぞれの面からその心理過程を解釈している。

留学生は、カルチャーショックを乗り越えない場合は、異文化ストレスに陥るケースが多い。例えば、留学生は日常生活の中でストレスを体験することが、精神的健康に望ましくない影響を及ぼしていることが古くから実証されている(松本, 1999)。特に、言語・修学・経済・人間関係・生活・健康の領域での影響(伊藤・井上, 1998)を見られた。

留学生の適応に影響する個人的要因、留学生の友人関係に焦点を当て、適応との関係を見るものといった研究が行われてきた。異文化間対人関係においては、互いに相手の国際や民族を含む文化背景を意識することが多く、当事者の文化的帰属がどのように認識され評価されるかという問題が前面に出やすい(小林, 2010)。しかし、稲村(1980)は、留学生がこれまで慣れ親しんできたソーシャルネットワークから離脱することに伴って、身体的、心理的な病気が増加したり、不適応を起こしたりすることを示唆している。

銭(1993)は、中国人留学生の異文化適応の調査について、アイデンティティの発達状態の良い者ほど適応状況が良いという傾向を見出した。しかし、青年期に留学など文化間移動を体験する者はアイデンティティの二重の危機にさらされる。その一つは、身体的・認知的発達や親子・友人などの人間関係の変化、さらに社会的居場所の変化などの諸変化に伴い、自我が揺さぶられることである。二つは、長年に渡って生活してきた社会的・文化的環境が変わったことは、自我の根幹が揺さぶられることである(塘ら, 2008)。

中国人留学生の異文化体験におけるアイデンティティの形成について、アイデンティティ達成をしていた人ほど、時間的展望をもつ、異文化適応ができていた。一方で、アイデンティティ達成していない人は心理的・身体的なネガティブな反応が激しかった(梁, 2012)と示された。これに対して、新井(1995)は、日本人の自我アイデンティティが希薄であり、アイデンティティの一貫性をウチにではなくソトとの関係に求める傾向があるため、ソトとの関係に変更を迫れると、アイデンティティの一貫性にも変更を加える必要性を意識する。

上で述べたように、中国人留学生は、異文化適応がうまくできるか否かは、日本留学生生活の達成感を大きく左右することになると考えられる。異文化に適応すれば、留学目的を果たし自己実現ができる。同時に異文化適応を促進させることがメンタルヘルスの向上につながる。

## 10. 中国人留学生のアイデンティティ

アイデンティティは、アメリカの精神分析家であるエリクソンによって提唱した概念である。Erikson (1959) は、アイデンティティを「自我同一性は、その主観的側面からみると、自我のさまざまな統合方法に対して自己斉一性と連続性が存在するという事実と、これらの統合方法が、他者に対して自分もつ意味の斉一性と連続性を保障する働きをしているという事実の自覚である」と述べている。

谷 (2004) は、エリクソンの青年期におけるアイデンティティの感覚について、①自己斉一性・連続性、②対他的同一性、③対自的同一性、④心理社会的同一性、と整理した。自己斉一性・連続性とは、自分が自分自身であるという一貫性を持ち、時間的連続性をもつ感覚である。対他的同一性とは、他者から認められている自分が本来の自分自身と一致している感覚である。対自的同一性とは、自分自身を明確に意識する感覚である。心理社会的同一性とは、自分自身と現実社会との適応的な結びつきの感覚である。すなわち、青年期のアイデンティティは、自分自身から見られている主観性と他者や社会から見られている客観性をもつ概念である。

アイデンティティを「どのように人が自己と世界との関係を理解し、どのようにその関係が時空を越えて構築され、どのようにその人が未来への可能性を理解するのか、ということに言及する用語」 (Norton, 2000) と定義している。

日本では、アイデンティティを「自己同一性」「自我同一性」「自己認識」などと訳されることが多い。アイデンティティとは、文化的価値を形成するある特定の集団に対する帰属意識である。帰属意識こそが個人が誰であるかを表現する基盤になっている。その対象は、宗教、民族、ジェンダー、人種、言語、国家、社会、経済と多様な形をとる

(Segal, 1997)。つまり、アイデンティティは、自分とは何者なのかという問に対する自覚化された統合的自己像を意味するといえよう。

エリクソンによるアイデンティティ理論の提唱後、アイデンティティはさまざまな学問において広がっていった。その中で大きな流れの一つとなったのが社会的アイデンティティである。社会的アイデンティティは、「社会の集団ないし社会的カテゴリーの成員性に基づいた、人の自己概念の諸側面、およびその感情・評価その他の心理学的関連物」 (Turner, 1987) と定義されている。

社会的アイデンティティ理論によれば、人間は単一の個人的アイデンティティをもつだけでなく、自らが所属するさまざまな社会集団に対応して複数の社会的アイデンティティを構築している (Tajfel, 1982)。しかし、社会的アイデンティティにおいて問題となるのは、本人が特定の社会集団への帰属をどのくらい中核的なものと受けとめるかという帰属の重要度、およびその帰属集団をどの程度高く評価しているかという評価感情である。

社会的アイデンティティには、異文化間の対話や相互理解を促進する側面と、自文化中心主義を強化し異文化に対して排他的に働く独善的な側面とが並存している (青木, 1988)。社会的アイデンティティのあり方が他集団に対する態度を方向づける以上、異文化適応においては自分1人の個人に関わる自尊感情 (遠藤ら, 1992) だけでなく、集団の一員としての自分に向けられた集会的自尊感情にも注目する必要がある。集会的自尊感情とは、自らの所属集団に向けられた評価感情である (Crocker・Luhtanen, 1990)。アイデンティティは、個人の内部の意識としてだけ成立するものではなく、他者との相互作用や関係性の中で形成されるものとされている (児美川, 2006)。

異文化適応において社会的アイデンティティが問題となるのは、それが外集団としての異文化に対する態度を規定するからである。異文化に対する排他的な態度は内集団ひいきによって助長される。内集団ひいきとは、自分の所属する内集団の価値を過度に高く認知し、外集団の価値を否定的に認知することで自己の価値を高めようとする防衛機制である。内集団ひいきは、社会的アイデンティティの安定が脅かされた時に顕著に起こることが示されている (Tajfel・Turner, 1986)。

文化的アイデンティティは、社会的アイデンティティの一種である。どの社会にも、またどの民族にもある伝統的な生活習慣や固有の言語や感情・認知・行動の様式がある。つまり、文化によって培われた個人のパーソナリティや自己のことを指す。それは概ね、「国や地域、宗教や民族などと結びついた伝統や慣習によって支えられた、集団的なまとまりを持つ心性、およびそこへの帰属感といったようなものを指している」(梶谷, 2004) と述べている。その帰属対象が特に国家や民族といったマクロレベルの文化集団に向けられた時に用いられることが多い。文化的アイデンティティは、自分がある文化に所属しているという感覚・意識と定義され、個人がもつ文化的帰属感・帰属意識を表す概念(鈴木, 2008)として捉えられている。

人間は言語を学ぶことによってアイデンティティが形成、変容され、人間として成長していくのである。中国人留学生は、日本で暮らしていると、国籍も言葉も異なる人々と触れ合うので、自分のアイデンティティに気づくことが多数あると考えられる。堀場(2013)は、第二言語の習得過程を通して、新たな言語環境との相互作用により、個人のアイデンティティは変容していくと指摘されている。

また、Collier(2009)は、異文化にいる留学生が言語環境の変化に伴い、さまざまなアイデンティティを保持しており、文脈・状況・他者との関係性によって異なるアイデンティティが顕在化されていると指摘された。さらに、は、留学という文化間の移動もアイデンティティを再構築していくきっかけになる(Block, 2007)と言われている。

中国人留学生は、日本留学を通して、自分のアイデンティティについて考えるようになり、日常生活の中でも考えさせられる場面が多いと思う。自分がどんな人間であるかを理解し、それを言葉として表せるようになると、自信も湧いてくると考える。しかし、アイデンティティを確立すべき時期に異国に留学すると、アイデンティティが拡散してしまう危険性が高い(牧野, 2002)。また、アイデンティティの構成は適応性に強い影響を及ぼし、青年のメンタルヘルスに種々の不利益をもたらす(清水ら, 2008)と指摘した。

Adler(1972)は、アイデンティティ・クライシスがカルチャーショックやステータス・ショックによって起こされる。異文化間体験は、その体験自体の結果として人間的成長や学習、そして変化というものを気づかせてくれる。カルチャーショックの過程を経て、個人は新しく自己の視点を持ち、自分自身の明確なアイデンティティの理解に到達することができる。アイデンティティ・クライシスは異文化適応過程において人間的成長の鍵と捉えることができるのである。つまり、留学生がアイデンティティ・クライシスに陥った時期こそ成長において最も貴重な局面であるといえよう。

長期の海外生活でのアイデンティティの揺らぎについて、末弘(2006)は自分から望んで他の文化に同化しようとしても、アイデンティティの混乱や葛藤を生じるケースがあると指摘している。他の文化に好意的であればあるほど、そのことにより、自己の文化への気づきにつながり、混乱を招くと指摘している。また、大学以降の留学の特徴として、能動的アイデンティティが確立されていれば、異文化に接触してもアイデンティティに混乱

は生じないと述べている。能動的アイデンティティとは、自我の欲求と社会的規範の間に立ち、それぞれを能動的かつ主体的に選び取り、更に自己の中にそれらをうまくバランスよく統合できる力を持っている状態のことをいう。

異国に住むということは、「日本の空間」の中で発達してきたアイデンティティが「別の空間」に移動したことにより、なにがしかの方向転換を余儀なくされて混乱が起きている状態とも考えられる（迫，2015）。

青年期にあたる留学生のアイデンティティは文化間移動により、その確立はより複雑になっていることが明らかになっている。アイデンティティの危機について、現在の社会で生きていくために自分の意に添わぬ方向に自分を変えた体験、過去の社会で達成した成果や獲得した能力を喪失し、あるいは現在の社会で通用せず否定される体験などを挙げている（小沢，2002）。

上記のように、中国人留学生は、自分がどういう生き方をしたいのか、どんな職業やライフスタイルを選択し、どんな信条を支えに生きていくのか、自分とは何か、本当に自分らしい生き方とはどういうものか、というアイデンティティの問いを立てて、アイデンティティは成長するにつれて大きくなっている。自分のアイデンティティを確立したりすることは、貴重な経験であると思う。

## 11. 本節のまとめ

本節では、まず、外国人留学生の受け入れ政策という「留学生受け入れ10万人計画」と「留学生受け入れ30万人計画」について紹介した。そして、外国人留学生の就職支援政策と「スーパーグローバル大学創成支援」および彼らに関する制度と現在の生活実態について述べた。また、中国人留学生の日本留学史からはじめ、彼らをめぐる日本観や対日イメージ・日本留学動機・進路選択・異文化適応・アイデンティティなどを概観した。このように、中国人留学生の生活実態を把握することができたと思われる。

中国人留学生の9割以上は現在私費留学生である。彼らが上手く日本社会に定着するためには、就職の支援や経済的支援だけでなく、生活の質を高める生活支援の仕組みも必要と考える。今後、適切な生活支援により、中国人留学生が抱えている異文化適応やアイデンティティクライシスなど生活課題を解決し、暮らしやすい地域づくりや、彼らが能力を發揮しながら活躍できる機会の提供などを通じ、地域に活力をもたらすとともに、留学生との長期的なネットワークを築いていけるよう引き続き取り組んで行くことと願っている。

以下、中国人留学生の生活支援について紹介する。

### 第3節 中国人留学生の生活支援

#### 1. 中国人留学生における生活支援とは何か

「生活」というものを常識とされる基本的視点として、生活を3つの次元で捉え、「①生命活動としての側面、②日々の暮らしの側面、③人生・生涯といった側面である。これら3つを視野に入れた時初めて、『生活の全体性』を見失わずに捉えることができる」と述べている。さらに、「社会福祉は3つの側面の中で特に、②日々の暮らしの側面を中心

に仕事をしてきた。もちろん、①生命活動としての側面と③人生・生涯といった側面も切り離しがたく結びつきの『日々の暮らし』なのである。このことを大切にすることが生活支援の出発点である。…日々の暮らしの中からこそ『生活習慣』は生み出されるものである。『生活リズム』というものが個体・生命活動のリズムでもあり、社会的に、歴史や文化の中で生態のリズムも含めたものとして規定されてくるのも、生活の中からである。…そのように考えた時、『どういう人生を行きたいのか?』という問いは、日々の暮らしに深く影響してくるものなのである。…『日々の暮らしにおける変化』から、日々の暮らしと結びつきの『生活目標』というものが生まれてくる」（窪田，1998）と整理している。

生活支援という言葉は、谷中輝雄を中心とした「やどかりの里」の25年間の先駆的実践から生まれた言葉である。生活支援の概念は、障害者の自立生活運動やノーマライゼーションの影響と、さらには、ソーシャルワークが「医学モデル」から「生活モデル」にパラダイムに転換し、ソーシャルワーカーによる一方向性の「援助」から、パートナーシップによってクライアントが地域社員の一人として主体的に生活が送れるように支える「支援」へ、という新しい実践と深く結びついて発展してきた（新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会C，2012）。

谷中輝雄は、生活支援の理念を「ごく当たり前の生活」とし、①当たり前の人として、②当たり前の付き合い、③当たり前の生活、④ごく当たり前の生活の4つに分けて説明している。①の当たり前の人としては、「例え『症状』を持っていても、…『病者』として扱うのではなく、『生活者』として見なすこと」が基本的考え方、視点であるとした。②の当たり前の付き合いは、「一人前の人として、責任能力ある人として、彼らと当たり前に付き合っていくことが大切」であり、自己決定を尊重していくことが中心となるとした。③の当たり前の生活では、「権利としての当たり前の生活を保障するという側面と、当たり前の生活を可能にしていく過程という側面との両側面」を指摘された。④のごく当たり前の生活では、「ごく」に「その人なりの」とか「その人らしい」といった意味を込め、「…その人なりの生活、その人らしい生活を認めるということは、普通の状態へ持っていくための訓練や指導を抜きにして、生活を支えていくということであり、それが『生活支援』の原点なのである」（新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会C，2012）とした。

上述のように、谷中輝雄の生活支援の理念に基づいて、中国人留学生の当たり前の人としては、彼らを「外国人」として扱うのではなく、「生活者」として見なすことが基本的である。また、中国人留学生の当たり前の付き合いは、責任能力ある人として、彼らの自己決定を尊重することが大事である。さらに、中国人留学生の当たり前の生活としては、彼らの当たり前の生活を保障し、当たり前の生活を可能にしていくことが必要である。なおさら、中国人留学生のごく当たり前の生活は、その人なりの生活、その人らしい生活を認め、生活を支えていくことが、中国人留学生にとしての本当の「生活支援」であると考えられる。しかし、彼らの生活を支えていくには、まず彼らが抱えている生活問題を把握しなければならない。そのため、以下、中国人留学生が抱えている生活問題について紹介する。

## 2. 中国人留学生在抱えている生活問題

中国人留学生在抱えている生活問題として、言葉の不自由、文化や習慣の違い、家族や友人・学校の先生やクラスメイト・アルバイト先の上司や同僚などとの人間関係の問題、学校・職場・地域社会などとの社会関係の問題、在学や卒業後の進路選択の問題などがあげられる。

例えば、井上(1996)は、日本語学校から進学した留学生在の留学生活の満足感に関して調査結果は、留学生在の生活や発達を援助するためには、留学生在自身の文化や社会関係、アイデンティティを尊重し、日本の学術・文化、社会関係の獲得ができるような文化統合的な援助が必要であることが示された。

また、酒井(2015)は、中国人留学生在の進路選択と留学生活満足感に関する調査結果は、現在の留学生活に対する満足感に影響があるのは、日本語学校在学時の進路選択に対する満足感ではなく、日本語学校在学時の進路未決定の有無、進路選択に対する柔軟性の有無、主な相談相手の有無であることが示唆された。

生活援助の展開は、本人の自己決定を基本とし、本人の目標・夢・希望に向かう本人の生活中心の生活支援が唱えられる。しかし、日本では在日外国人留学生数は増加の一途を辿っているが、留学生在の支援体制は十分と整っていないのが現状である(井上, 2001)。

中国人留学生在は、このよう支援体制が不備の状況で、かつ環境の変化によりストレスが溜まりやすくなり、さまざまな不安や悩み、苦しさ、孤独感を感じるが多くなる。こうした自身の生活問題を理解し、「生活者」として知ることと、「自己覚知」を深めることが最も大切である。

生活者について、「①生活の中の全体性を把握する主体を指す。②静的な形態ではなく、『生活者』へと生き方を変えていく一つのダイナミックな日常の実践を指す」(天野, 1996)と定義している。

また、社会生活を形成する要素として、「①社会生活の基本的欲求の主体者たる個人、②各々の基本的欲求に対応する社会制度、③この両者を結びつける社会関係の三つがあるとし、基本的欲求の内容を、経済的安定、職業的安定、家族的安定、保健・医療の保障、教育の保障、社会参加ないし社会的協同の機会、文化・娯楽の機会の7つをあげている。そして、これらの個人の基本的欲求を充足するために社会制度との間に取り結ぶ関係を社会関係と規定して、社会関係と規定して、社会関係こそが生活の本質的な条件である」(岡村, 1983)としている。

さらに、WHOでは「生活の質」を「一個人が生活する文化や価値観のなかで、目標や期待、基準、関心に関連した自分自身の人生の状況に対する認識」と定義されている。そして、その生活の質の評価は他人によるものではなく、生活者自身の主観的判断に任されるべきである(新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会d, 2012)としている。

以上のことから、中国人留学生在は「生活者」として、自らが自分の歩いてきた人生や、現在の生活をどのように感じて受け止めているのかという自己覚知が必要である。彼らが日本社会で生活するという事は、積極的に社会との関係を持ちながら、主体的に自らの日々の生活を営むことであり、生活全体を自分自身で把握する必要がある。そして、自らライフスタイルを保持し、自己責任を全うするために、さまざまな社会経験や日常の営みを実践することが求められる。



### 3. 中国人留学生の主な2つの困難

中国人留学生は、日本で滞在している間に、楽しい経験とともに、いくつかの困難も感じたことがある。主な困難として、一つは言葉、もう一つは文化や習慣の違いである。

一つの困難は、言葉である。例えば、日本学生支援機構（2021）の「令和元年度（2019）私費外国人留学生生活実態調査」によれば、外国人留学生が日本で留学するまでに特に苦労したことは「日本語学習」（53.8%）が最も多かった。学校の先生や日本人の友人が言っていることが十分にわからない。自分の言いたいことが言えないという苛立ちの気持ちが生じる。アルバイトをしている時、上司や同僚およびお客さんとのコミュニケーションに困る。複数の人が話す場合は理解が難しいし、どこで会話に入り込んでいいかわからない。また、相手は自分のことを外国人だから理解できないのも仕方がない、そのように思われると自尊心を傷つくことになる。言葉が通じない時に相手から見下しすることで、自分が馬鹿にされているのではないかと思うことがある。このような言葉が不自由である留学生に対して時、そのような気持ちを十分に理解しなければならない。

もう一つの困難は、文化や習慣の違いである。日本人は自己主張が苦手であり、言葉で明確に自分の意思を示さない。それに対して、中国人は自己主張が強くて、自分の考え方をはっきりと相手に伝えることができる。日本では遠慮が美德という考え方があるため、何をしたい、どうしたいということを主張しない傾向がある。授業でも、会議でも、誰かから質問しないと、決して自分から発言しない。それゆえ、日本では発言しない人は意見がないのではなく、遠慮しているからである。しかし、中国ではそういう習慣はない。遠慮は美德ではないので、駄目なものは駄目とはっきり相手に伝えることが大事である。

ここで指摘しておきたいのは、日本と中国が同じ漢字文化圏に含まれているけれども、両国民の思考経路と表現の仕方の違いが大きい。

### 4. 日本人には当たり前のことが中国人留学生には当たり前ではない

日本に住んでいる日本人にとっては当たり前のことは、中国人留学生にとっては新鮮で不思議なことがたくさんある。例えば、日本では、親子間・家族間で普通に「ありがとう」「ごめんなさい」という人が多い。それに対して、中国では、親子間や家族間および親しい仲で、「ありがとう」や「ごめんなさい」は言わない人が多い。その理由は、親子や家族および親しい仲のために何かをしてあげるのは当たり前のことだから、わざわざ「ありがとう」と言われると他人みたいなので、だから言わない。

ちなみに、中国人は「ごめんなさい」もあまり言わない理由は、「ありがとう」と同じ理屈で「親子や家族および親しい仲に迷惑をかけてしまうのは避けられないことであり、許すのが当たり前だから」ということである。この「ありがとう」と「ごめんなさい」という2つの言葉に対する日本人と中国人の考え方は大きく違うようである。

日本人は、自分が悪くなくてもすぐに「ごめんなさい」と謝る。しかし、中国人が謝らない理由は、①「すみません」「ごめんなさい」という言葉が謝罪を表しているからである。中国では、謝罪は自分の非を認めることと同じことであり、自分が悪いからすべての責任を取らなければならない。中国人は言い訳をして謝罪をしないことが一種の自衛手段であるといえる。②面子を守るためである。中国では、小さい頃から親に「人前で恥をかかないような人間になりなさい」という教育を受けている。つまり、中国人にとっては面

子を守ることが何よりも重要である。謝罪することは、心理的に自分のプライドを傷つけられるので、自分のプライドを守るために必死で言い訳をしながら謝罪を避ける要因になっている。

また、日本人は、相手に気を遣い「はい」と返答しているようで実は遠回しに「いいえ」と拒否していることが多々ある。しかし、中国人は、はっきりと「Yes」「NO」を口にするため、どちらとも取れない返答では中国人は困惑してしまう。そのため、日本人が遠回しの拒否では相手に伝わらなかったということがある。さらに、仕事の終わりに「お疲れ様」と言い合うこと、車は左側通行すること、マスクをつけている人が多いことなど多々ある。

このように、日本人に当たり前を受け入れることは、中国人に当たり前ではない。互いに「当たり前」を理解することが重要であり、そういう自分の内なる偏見をチェックする必要がある。

## 5. 中国人留学生の異文化との共存

在留外国人が増加し、言葉や習慣の違いのため必要な公共サービスが受けられないこと、雇用が不安定で労働条件が低いこと等の生活者としての問題が生じていた。また、日本における急激な文化の変動は、ある意味で異種文化の混入とも考えられ、さまざまな葛藤を生み出している可能性がある。

さらに、1998年版の『世界人口白書』は、「近未来では、先進諸国の少子高齢化と、開発途上国の労働力の膨張がぶつかりあって深刻な問題となり、否応なしに国際的な移民政策の緩和が必要となる」と述べている。この「移民政策の緩和」は、人種・宗教・言語・文化などが異なる人びとの共存をテーマとするものであり、まさに異文化との共存である。異文化との共存の問題は、家庭（親と子の文化的摩擦、家庭内暴力、夫婦・内縁関係者でのドメスティックバイオレンスなど）、学校（いじめ、校内暴力、学級崩壊など）、そして地域社会（差別、隣人無視、無関心など）において日常的に見られる現象である。

一方、社会的には、留学生政策や留学生の問題は大きな課題としてとらえられてきており、異文化間教育学会による留学生教育・交流の参考文献をみると、教育制度論から社会的な分析、人類学的な考察、臨床報告、語学教育の実践、散文的な報告やノンフィクションその他にわたって、さまざまな報告がみられる（異文化間教育，1987，1991，1996）。

こうしたこと等を背景に、日本政府は、国内で就労・生活する外国人について、社会の一員として日本人と同様の公共サービスを受生活できるような環境を整備するため、2006年12月25日に日外国人労働者問題関係省庁連絡会議決定を開催した。この会議で、「『生活者としての外国人』に関する総合的対応策」を策定し、①外国人が暮らしやすい地域社会づくり、②外国人の子供の教育の充実、③外国人の労働環境の改善、社会保険の加入促進等及び④外国人の在留管理制度の見直し等の施策を実施することとした（総務省，2020）。

## 6. 本節のまとめ

本節では、中国人留学生における生活支援について述べてみた。生活の基本的視点は、①生命活動としての側面、②日々の暮らしの側面、③人生・生涯といった側面を含まれ

る。社会福祉では、「日々の暮らし」の側面を中心に仕事をしてきた。生活支援の出発点としては、「生命活動」と「人生・生涯」といった側面と結びつきの「日々の暮らし」なのである。

谷中輝雄は、生活支援の理念を「ごく当たり前の生活」とし、①当たり前の人として、②当たり前のつき合い、③当たり前の生活、④ごく当たり前の生活の4つに分けて説明している。谷中輝雄の生活支援の理念に基づいて、中国人留学生の「ごく当たり前の生活」とは、「外国人」として扱うのではなく、「生活者」として見なすことが基本的な考え方である。したがって、中国人留学生のごく当たり前の生活は、その人なりの生活、その人らしい生活を認め、生活を支えていくことが、中国人留学生にとしての本物の「生活支援」であると考えている。

中国人留学生の生活を支えていくには、まず彼らが抱えている生活問題を把握する必要がある。彼らが抱えている生活問題として、言葉の不自由、文化や習慣の違い、家族や友人・学校の先生やクラスメイト・アルバイト先の上司や同僚などとの人間関係の問題、学校・職場・地域社会などとの社会関係の問題、在学や卒業後の進路選択の問題などがあげられる。これらいくつかの困難の中に、主な困難として、一つは言葉、もう一つは文化や習慣の違いである。

しかし、外国人労働者や外国人留学生が増加し、言葉や習慣の違いのため必要な公共サービスが受けられないこと、雇用が不安定で労働条件が低いこと等の生活者としての問題が生じていた。そのため、国連などで貧困問題や女性問題などの領域に応用されているケイパビリティ・アプローチの視点から中国人留学生の生活支援について考察してみたい。

以下、ケイパビリティ・アプローチについて紹介する。

#### 第4節 ケイパビリティ・アプローチ

本節では、ケイパビリティ・アプローチの基本的概念と、人間の安全保障、人間開発理論、自由、貧困、福祉などについて概観する。

##### 1. アマルティア・センにおけるケイパビリティ・アプローチ

ケイパビリティという概念の初出は、1980年にセンがスタンフォード大学のターナー講義「何の平等か」で提唱されたものである。アマルティア・セン (Amartya Sen) は、1933年に生まれ、インドの経済学者・哲学者であり、政治学、倫理学、社会学にも影響を与えている。1943年9歳の時に、彼の出身地であるベンガルで200万人を超える餓死者を出した大飢饉の衝撃を受け、インドはなぜ貧しいのかという疑問から経済学者となる決心をした。

センの研究は、飢饉、人間開発理論、厚生経済学、貧困のメカニズム、男女の不平等、および政治的自由主義などである。1998年経済の分配・公正と貧困・飢餓の研究における貢献によりアジア初ノーベル経済学賞を受賞し、受賞理由は厚生経済学への貢献である。

センの「ケイパビリティ」「人間開発」「人間の安全保障」などの概念は現在日本でもよく知られている。その中でもっとも有名な概念は「ケイパビリティ」である。ケイパビリティとは、人が善い生活や善い人生を生きるために、「どのような状態にありたいのか」「どのような行動をとりたいのか」としている。

具体的には、「よい栄養状態にあること」「健康な状態を保つこと」から「幸せであること」「自分を誇りに思うこと」「教育を受けている」「早死しない」「社会生活に参加できること」など幅広い概念である。そして「人前で恥ずかしく話ができること」「愛する人のそばにいられること」も潜在能力の機能に含めることができるとしている。

センによる問題提起は、①財の生産と消費という経済活動と「よき生(well-being)」の関係性そのものについて再考を促すことである。②人間の幸福とは何か、価値的生活とは何かという倫理的・規範的問題に導くことである。

センにとって、ケイパビリティとは、個人が機能の実現に関してどれだけの「選択の自由」を持っているのかを明確に捉えようとしたものである。ケイパビリティ・アプローチは、機能・ケイパビリティ・エージェンシーという三つの視点がある。「ケイパビリティ」は「機能」の集合として表される。機能は、ケイパビリティ・アプローチで最も基本的な概念である。水谷(2006)は、機能とは、ある人の状態の部分を示すものであり、特に人が生活をするに当たってすることができるもの、あるいはなることができるものを指す」と訳している(水谷, 2006)。また、後藤(2017)は、「機能とは、一定の財や資源を利用して実現される個人の行いや在りよう」と述べている。池本(1999)は、「機能とは、人の福祉(暮らしぶりの良さ)を表す様々な状態(〇〇であること)や行動(〇〇できること)を指す」と表している(後藤, 2017)。

センのケイパビリティ・アプローチは、財、特性、機能、効用という概念を持っている。その諸概念の関連性について、『福祉の経済学』と『不平等の再検討』に記述している。これらの概念の関係としては、財→特性→機能→効用という性質を表している。財とは、その人が持つお金や物のことである。特性とは、物理的、社会的、文化的、政治的環境によって決まってくる。機能とは、その人が現在具体的にどのような状態にあるのか、そしてどのような行動が可能なのかをみる指標のことである。効用とは、願望の達成として解釈することができる。これらの特性を人はその個人的な特徴によって機能へと変換する。

ケイパビリティの概念は、財(客観的)と効用(主観的)の両極の中間に位置しており、人間の固有性や多様性に焦点をあてるのが可能となる為、社会福祉の人間観とも十分に適合的であり、社会福祉研究として潜在能力アプローチを取り扱うことは意義があるとかんがえられる。

センは、富裕や効用を用いて福祉や優位を評価する新しいアプローチの展開に努めた。人がその達成に成功するさまざまな「機能」(すなわち人がなしうること、あるいはなりうるもの)と、人がこれらの機能を達成する「ケイパビリティ」に関心を集中するアプロ

ーチは潜在能力アプローチである。このアプローチは、福祉を、人が享受する財貨（富裕）とも、快樂ないし欲望充足（効用）とも区別された意味において、人の存在の良さの指標と考えようと試みる。

センは、ケイパビリティ・アプローチを福祉、貧困自由、生活水準、正義と社会倫理などといった社会問題を分析する際にも活用し、その応用範囲を広げている。センのケイパビリティ・アプローチは、対象となる人の福祉という側面を評価する際に、人がどれだけ福祉の水準を達成しているかを評価する既存の方法としては、一つは、その人がどれだけ財を有しているのかに着目する資源アプローチであり、もう一つは、その人の幸福や欲望充足に着目した効用アプローチである。

資源アプローチは、人がどれだけ財を有しているのかに着目し、その有する財を十分に利用して福祉を実現することができる。しかし、財を目的とすることは「物神崇拜」の落とし穴にはまりやすくなる。それに対して、効用アプローチは、ある人の幸福や欲望充足に着目し、僅かな施しにも喜びを感じることができる。しかし、それは福祉が実現されているのを判断することが難しく、「物理的条件の無視」となってしまう。そのため、ケイパビリティ・アプローチは、上記の伝統的な2つのアプローチの利点を踏まえた上で、それらの欠点を批判的に展開することである。

そのため、ケイパビリティアプローチの利点は、主観に基づく心理的な評価に頼らず、より客観的な尺度で個人の「福祉」を評価できる点にある。例えば、久野・Seddon（2003）は、ケイパビリティアプローチを障害に応用することの利点について、「①ケイパビリティという一つのフレームワークによって捉えることを可能にする。②障害という側面だけではなく障害者の生活・課題全体を捉える包括的なフレームワークを提供する。③人間の多様性を反映する。④人間か環境かのどちらかではなく両者に着目する。⑤実質的な生活の質の向上に着目する。⑥達成ではなく自由を見る。」などを挙げている。つまり、ケイパビリティアプローチは、ある問題を論じるにあたり、問題から切り離して扱うのではなく、また主体者だけに注目するのでもなく、主体者を取り巻く様々な問題や要因に幅広く着目している。

上述のように、ケイパビリティ・アプローチは、他のアプローチと比べると、大きく異なるのは「人間の多様性」に重点を置いていることである。センは、人間の多様性について、以下のように述べている。

センによれば、「人間は、様々な面でお互いに異なった存在である。外的な特徴や環境の面で異なっている。異なった資産や負債を相続して人生をスタートする。異なった自然環境の中に住んでいる。属している社会やコミュニティは、人々ができること、できないことに関して非常に異なった機会を齎す。住んでいる地域の疫学的環境は人々の健康や福祉に大きな影響を与える。このような自然的・社会的環境や外的特徴の差に加えて、個人的な特徴（例えば、年齢、性別、身体的・知的能力など）の面でもお互いに異なってい

る。平等を評価する場合、人間につきまとう外的な特性と個人的な特性を考慮せざるをえない」と示されている。

## 2. マーサ・ヌスバウムにおけるケイパビリティ・アプローチ

マーサ・ヌスバウムは、アメリカの哲学者であり、センと共同してケイパビリティ概念を作り上げた。ヌスバウムは、人間の本質的な機能に着目し、彼女の『女性と人間開発』によると、ケイパビリティを応用可能なものとするために次のような「人間の中心的な機能的ケイパビリティ」というリストを提示している。

①生命：正常な長さの人生を最後まで全うできること。②身体的健康：健康であること。適切な栄養を摂取できていること。適切な住居に住めること。③身体的保全：自由に移動できること。性的暴力、子どもに対する性的虐待、家庭内暴力を含む暴力の恐れがないこと。性的満足の機会および生殖に関する事項の選択の機会を持つこと。④感覚・想像力・思考：想像し、考え、そして判断が下せること。読み書きや基礎的な数学的科学的訓練を含む適切な教育によって養われた“真に人間的な”方法でこれらのことができること。自己の選択や宗教・文学・音楽などの自己表現の作品や活動を行なうに際して想像力と思考力を働かせること。政治や芸術の分野での表現の自由と信仰の自由の保証により護られた形で想像力を用いることができること。自分自身のやり方で人生の究極の意味を追求できること。楽しい経験をし、不必要な痛みを避けられること。⑤感情：自分自身の回りの物や人に対して愛情を持てること。私たちが愛し世話してくれる人々を愛せること。そのような人がいなくなることを嘆くことができること。一般に、愛せること、嘆けること、切望や感謝や正当な怒りを経験できること。極度の恐怖や不安によって、あるいは虐待や無視がトラウマとなって人の感情的発達に妨げられることがないこと。このケイパビリティを擁護することは、その発達にとって決定的に重要である人と人との様々な交わりを擁護することを意味している。⑥実践理性：良き生活の構想を形づくり、人生計画について批判的に熟考することができること。⑦連帯：A. 他の人々と一緒に、そしてそれらの人々のために生きることができること。他の人びとを受け入れ、関心を示すことができること。様々な形の社会的な交わりに参加できること。他の人の立場を想像でき、その立場に同情できること。正義と友情の双方に対するケイパビリティを持てること。B. 自尊心を持ち屈辱を受けることのない社会的基盤を持つこと。他の人々と等しい価値を持つ尊厳のある存在として扱われること。労働については、人間らしく働くことができること、実践理性を行使し、他の労働者と相互に認め合う意味のある関係を結ぶことができること。⑧自然との共生：動物、植物、自然界に関心をもち、それらと関わって生きること。⑨遊び：笑い、遊び、レクリエーション活動を楽しむこと。⑩環境のコントロール：A. 政治的：自分の生活を左右する政治的選択に効果的に参加できること。政治的参加の権利を持つこと。言論と結社の自由が護られること。B. 物質的：形式的のみならず真の機

会という意味でも、(土地と動産の双方の) 資産を持つこと。他の人々と対等の財産権を持つこと。不当な捜索や押収から自由であること。

ヌスバウムは、このリストを完成したものとは見なしておらず、可変的で文化や地域によって常に改訂されるべきものと述べている。ケイパビリティのリスト提示を積極的に提示するヌスバウムのスタンスと対照的に、センはケイパビリティのリストを提示することに消極的である。センは、自身がケイパビリティのリストを積極的に作成しない三つの理由を述べている (Sen, 1999)。第一の理由は、汎用性が高いケイパビリティの利用者が焦点を当てるものは利用者の使い方と動機に左右されることである。第二の理由は、ケイパビリティのリストが提示する社会的状況や優先事項の変更可能性である。第三の理由は、仮に固定化されたリストを提示した場合、公共的討議や推論による改善が停滞する可能性へ危惧である。

ヌスバウムは、ひとりひとりの個人に焦点を当てるべきであることを「ひとりひとりを目的とする原理」「ひとりひとりのケイパビリティの原理」と呼んでいる。個人に着目するという点では「人間の安全保障」と同じである。

以下、ケイパビリティ・アプローチと人間の安全保障について紹介する。

## 人間の中心的な機能的ケイパビリティ

- (1) 生命:正常な長さの人生を最後まで全うできること。
- (2) 身体的健康:健康であること。適切な栄養を摂取できていること。適切な住居に住めること。
- (3) 身体的保全:自由に移動できること。性的暴力、子どもに対する性的虐待、家庭内暴力を含む暴力の恐れがないこと。性的満足の機会および生殖に関する事項の選択の機会を持つこと。
- (4) 感覚・想像力・思考:想像し、考え、そして判断が下せること。読み書きや基礎的な数学的科学的訓練を含む適切な教育によって養われた“真に人間的な”方法でこれらができること。自己の選択や宗教・文学・音楽などの自己表現の作品や活動を行なうに際して想像力と思考力を働かせること。政治や芸術の分野での表現の自由と信仰の自由の保証により護られた形で想像力を用いることができること。自分自身のやり方で人生の究極の意味を追求できること。楽しい経験をし、不必要な痛みを避けられること。
- (5) 感情:自分自身の回りの物や人に対して愛情を持てること。私たちが愛し世話してくれる人々を愛せること。そのような人がいなくなることを嘆くことができること。一般に、愛せること、嘆けること、切望や感謝や正当な怒りを経験できること。極度の恐怖や不安によって、あるいは虐待や無視がトラウマとなって人の感情的発達が妨げられることがないこと。(このケイパビリティを擁護することは、その発達にとって決定的に重要である人と人との様々な交わりを擁護することを意味している。)
- (6) 実践理性:良き生活の構想を形づくり、人生計画について批判的に熟考することができること。
- (7) 連帯: A.他の人々と一緒に、そしてそれらの人々のために生きることができること。
  - ① 他の人びとを受け入れ、関心を示すことができること。様々な形の社会的な交わりに参加できること。他の人の立場を想像でき、その立場に同情できること。正義と友情の双方に対するケイパビリティを持てること。
  - ② 自尊心を持ち屈辱を受けることのない社会的基盤を持つこと。他の人々と等しい価値を持つ尊厳のある存在として扱われること。労働については、人間らしく働くことができること、実践理性を行使し、他の労働者と相互に認め合う意味のある関係を結ぶことができること。
- (8) 自然との共生:動物、植物、自然界に関心をもち、それらと関わって生きること。
- (9) 遊び:笑い、遊び、レクリエーション活動を楽しめること。
- (10) 環境のコントロール:
  - ① 政治的:自分の生活を左右する政治的選択に効果的に参加できること。政治的参加の権利を持つこと。言論と結社の自由が護られること。
  - ② 物質的:形式的のみならず真の機会という意味でも、(土地と動産の双方の)資産を持つこと。他の人々と対等の財産権を持つこと。不当な搜索や押収から自由であること。

『女性と人間開発』 (Nussbaum, 2000)



### 3. ケイパビリティ・アプローチと人間の安全保障

「人間の安全保障」という概念が広く注目を浴びるようになったのは、1994年の国連開発計画(United Nations Development Program: UNDP)による「人間開発報告書」によってであった。前年の1993年の「人間開発報告書」において、アマルティア・センの「ケイパビリティ」概念の影響を受けた「人間開発」の観点から「人間の安全保障」概念が提唱されていたが、1994年「報告書」はそれをさらに体系的に説明したのである。「報告書」によれば、「人間開発」とは「人びとの選択の幅を拡大する過程」と定義されるが、「人間の安全保障」は「これらの選択権を妨害されずに自由に行使でき、しかも今日ある選択の機会を将来も失われないという自信を持たせること」だとされる。後者は参加型開発に必要である。というのは最低限の必要を満たし、生計のための機会を与えられれば、人びとは解放され、自らの能力を開発し、地域社会・国家・世界の開発に全面的に貢献すると考えられるからである。このように開発の観点から提起された「人間の安全保障」が、世界共通、相互依存、早期予防、人間中心という「四つの特徴」を与えられて、「報告書」によって説明される。その「人間の安全保障」という包括的概念には、「二つの主要な構成要素」があるという。「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」である。「報告書」は、国連設置を決議したサンフランシスコ会議の経緯を政府に報告した際のアメリカの国務長官を引用し、この二つの自由が国連発足当初から認識されていたと指摘する(篠田, 2003)。

2001年に日本政府の呼びかけで有識者による「人間の安全保障委員会」を設置したことを契機として、より広く国際社会にその重要性を理解されることとなった。アマルティア・センと緒方貞子が共同議長を務める人間の安全保障委員会(2003)では、「人間の安全保障」を「人間の生にとってかけがえのない中枢部分を守り、すべて人の自由と可能性を実現すること」と定義している。人間の安全保障の概念は、「人間の安全保障とは、人間一人ひとりに着目し、生存・生活・尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守り、それぞれの持つ豊かな可能性を実現するために、保護と能力強化を通じて持続可能な個人の自立と社会づくりを促す考え方である。グローバル化、相互依存が深まる今日の世界においては、貧困、環境破壊、自然災害、感染症、テロ、突然の経済・金融危機といった問題は国境を越え相互に関連しあう形で、人々の生命・生活に深刻な影響を及ぼしている。このような今日の国際課題に対処していくためには、従来の国家を中心に据えたアプローチだけでは不十分になってきており、「人間」に焦点を当て、様々な主体及び分野間の関係性をより横断的・包括的に捉えることが必要となっている。また、人間の安全保障を「人間の生にとってかけがえのない中枢部分を守り、すべての人の自由と可能性を実現すること」と定義している(外務省, 2016)。

センの「人間の安全保障」という著書によれば、「人間の安全保障は、人間の生活を脅かす様々な不安を減らし、可能であればそれらを排除することを目的としている。この考

え方は、国家の安全保障の概念とは対照的である。国家の安全保障は、何よりも国家を安泰に強固なものに保つことに重点をおいて、そこで暮らす人々の安全には間接的にしか関わらない」となっている（東郷，2006）。

また、人間の安全保障の概念は、従来からの貧困削減への取り組みに対し、「人々や社会が自らの力ではどうにもならない原因により安全を脅かされている状況、さらには「状況が悪化する危険」に焦点を当て、貧困(欠乏)が悪化する側面や人間開発を阻害する要因(脆弱性)を考える」といった新しい視点を提供した。リスクをもたらす要因には紛争や自然災害など急速に人々の恐怖と欠乏を増大させる「非日常的な大きな脅威(外的ショック)」と、病気や不衛生な生活環境、社会的差別など人々の「日常生活の中に埋め込まれた脅威」とがあり、これらは人々の貧困状態をさらに深刻化させるものである（独立行政法人国際協力機構・公共政策部，2009）。

以下、センのケイパビリティ・アプローチと人間開発理論について概観する。

#### 4. ケイパビリティ・アプローチと人間開発理論

ケイパビリティ・アプローチは、国連開発研究の人間開発指数にも影響を与えるなど、世界各国の開発状況を分析し、人間開発を促す枠組みとして用いられていることから理論のみならず、実践にも大きな影響を与えているといえる。

1990年に Human Development Report(人間開発報告書)は初めて『人間開発報告書』を発刊する。報告書はその「概要」で、人間開発を「人々の選択肢を拡大する」プロセスとして定義している。人間開発報告書は、「人間開発」という新しい概念による貧困削減戦略論を展開している。その背景はアマルティア・センの潜在能力アプローチを基に立脚され、「人間開発とは、つまるところ、潜在能力の実現に関わっている。」としている。人間開発報告書は、人間開発の状態を把握するために、「人間開発指数(HDI: Human Development Index)を作成している。これは「人間生活にとって不可欠の3つの要素」である「寿命、教育、所得」によって構成される。寿命を測る尺度として、「出生時平均余命」を、教育は、「成人識字率(2/3加重)」と「初・中・高等教育就学率(1/3加重)」という教育に関する2つの変数によってはかり、そして、所得は、「購買力平価による一人当たりGDP」をとり、この3指数の単純平均からなる複合指数を作成し、この指数の大きさによって各国を順位づけた。また、人間開発報告書によると、「人間開発は目的であり、経済成長は手段である。したがって、成長の目的は人々の生活を豊かにすることにある」としている。人間開発戦略では、経済成長は人間開発の必要条件であるが、十分条件ではなく、経済開発と人間開発をしっかりと結びつけるために、確固たる政策的な行動が必要である。

人間開発概念については3つの構成要素を挙げている。第1に、よき生(Well-Being): 人々の実質的な自由を拡大すること。その結果、人々は開花することができる。第2

に、エンパワメントと行為主体性(Empowerment and Agency):人々や集団が活動できるようにすること。その結果、価値ある結果を生み出すことになる。第3に、正義(Justice):公平性を拡大し、長期的に成果を持続し、人権とその他の社会のゴールを尊重することである。これは センの「Well-Being を達成する自由」と「行為主体的自由」という2つの自由に価値をおく考え方を具体的に踏襲したものと解される。この過程は人々のエンパワメントと政治的参加が含まれ、開発と環境を考える際の基本原理の一つである「持続可能な開発」あるいは持続可能性が「人間開発」の概念に含まれることを示唆する(永吉, 2008)。

センは、開発というものを、所得や富の増加させることではなく、人々が享受する自由を増大させることであると捉えている。富の蓄積は自由を拡大する手段として重要であるけれども、それは目的ではない。このような問題を考えるために、ケイパビリティを導入した。ケイパビリティは、ある人が価値を見出し選択できる機能の集合のことである、その人に何が出来るかという可能性を表している。機能とは、「ある状態になること」や「何かをすること」を指している。例えば、健康状態にあること、栄養を得ていること、自尊心を持てること、社会生活に参加できることなどである。ケイパビリティの独創性は、諸機能の客観的特徴に注目しつつも、これらの諸機能を感情ではなく理性的な評価に基づいて判断することにある。

人間開発理論の系譜は、人的資本理論、BHN 理論、人間開発論となっている。人的資本理論は、教育を人間への投資と扱い、将来への生産性を上げるための投資として考える。BHN 戦略は、生きるために必要な BHN(衣食住・保健・教育・雇用などの財とサービスの必需品)を充足することを重視している。人間を経済成長の手段として考察し、労働力としての人間を開発することによって、いかに生産性を向上させるかを重視していた。人的資本理論は、人間を資本として扱い、手段としての人間に注目している。BHN 戦略は、目的としての人間に焦点を当てているものの、人間を参加者としてみる側面より、受益者として扱う傾向がある。人的資本理論は、人間を資本として扱い、手段としての人間に注目しているが、逆に、BHN 戦略は、目的としての人間に焦点を当てているのである。

つまり、「焦点が最終的には人間の自由、価値を認める理由のある生活を送る自由の拡大に置かれるとすれば、経済成長の役割は開発のプロセスの一側面として統合されなければならない。」とし、「経済開発は人間がもっと生きがいのある、もっと自由な生活を送るためのケイパビリティの拡大である」としている(野上・佐藤, 1999)。ケイパビリティの拡大は、いわば自由の拡大である。

以下は、ケイパビリティ・アプローチと自由について紹介する。

## 5. ケイパビリティ・アプローチと自由

自由とは何か？古代から現代に至るまで、繰り返し議論されてきた。例えば、ヘーゲル（1806）は、「人類の歴史とは自由をめぐる戦いの歴史である。人間は、誰もが多種多様な欲望を持っている。人間的欲望の本質は自由である。自由というと、人はまず何でもやりたい放題ができることとか、あらゆる束縛から解放されていることとかを思い浮かべる。しかし、私たちはそのような自由を自由の本質ということは決してできない。なぜなら、このような自由は、現実にはあり得ないものであるからだ。欲望という諸制限の乗り越えの感度が自由の本質である」と述べている。

アイザイア・バーリンによれば、自由の概念は、消極的自由と積極的自由の二つに区別される。消極的自由とは、他者の権力に従わない状態、他者による強制的干渉が不在の状態を意味する。一方、積極的自由は自己実現や能力によって規定される概念であり、自己の意志を実現しうること、能力のあることが自由である。

人権には、基本的人権と基本権という関連する概念がある。基本的人権の概念は、自由権を意味する。自由権は、基本的人権の一つとして、「国家から制約も強制もされず、自由に物事を考え、自由に行動できる権利のこと」（樋口，1994）をいう。つまり、「国家からの自由」を求める権利を指す。自由権には、精神的自由権、経済的自由権、身体的自由権などに分類される（宮沢，1958）。自由は、自由権として展開されたものであり、「障害の存在しないこと」（世界大百科事典第2版，1964）と定義した。

ミル（1859）が論じている自由とは、「他人に迷惑をかけない限り、自分の利益を追求できる。また、他人に損害をかけない限りで私たち一人一人が個性を発揮することが望ましい。他人に迷惑をかける行為には刑罰を与えることは正当であると彼は主張している。なぜなら、他人に迷惑をかけるような犯罪行為は、相手の自由を侵害することになるため、刑罰を与えることによって、より良い社会を形成することができるからである。」と言った。

フリードマンは、「自由主義者が究極の目的とするのは個人の自由である。自由主義者にとって重要な自由の意味は二通りある。一つは他との関係における自由である。自由主義者はこの意味での自由を最も重んじる。もう一つは自由を行使する個人にとっての意味である。こちらは個人の倫理観や価値観に委ねられる。」と述べている。ここで含意されている自由とは、「他からの干渉を受けることなく生きたいと思える人生を生きること」（馬上，2009）と解釈している。

アクセル・ホネットが「自由であることの苦しみ」を抱えてしまっている。即ち、「人間は必ず自由に生きたい欲望がある。しかし、現代の私たちが過剰な自由の中で、ひどい不自由をしばしば抱えてしまっている点にある。どう生きても自由だと言われると、かえってどう生きればいいのかわからなくなってしまうことがある。さらに言えば、人間は自らが生きたいように生きたいという欲望は、時に互いに対立し合う時がある。美味しいも

のを食べたい、でも太りたくない。夢を叶えたい、でも努力したくない。こうした互いに対立し矛盾し合う無数の欲望を持っているが故に、これら全てを叶えることも、またこれら欲望の一切から解放されることもできないのだ」（苫野，2014）と述べている。

以上の観点より、つまり、自由とは、他からの干渉を受けることなく生きたいと思える人生を生きることであり、何でもやりたい放題のことで一切の欲望から解放のことでなく、他人に迷惑や損害をかけない限り、自分の利益を追求し個性を発揮することである。一方、過剰な自由の中で、ひどい不自由をしばしば抱えてしまっている。

一方、センによれば、様々なタイプの生活を送る自由は、その人のケイパビリティ集合に反映される。ある人のケイパビリティは、その人の個人的特質や社会的習慣といった様々な要素によって決まって来る。個人の自由を十分に把握するには、もちろんその人の個人生活レベルのケイパビリティにとどまらず、その人がもつ他の目標にも注意を払わなければならない。

しかし、人のケイパビリティは、その人の個人的な自由の重要な部分を占める。例えば、それを選びさえすればある種のライフスタイルを送ることができるでしょう。しかし、それを選ぶ勇気がなかったとしたら、そのような生活をする自由、即ちそれに呼応するケイパビリティをもっていると言えるだろうか。

人間が「自由」に活動するための環境的要因を分析したうえで、それらの要因を当該社会に属する諸個人が実際に利用できるかどうかという視点から各種のケイパビリティを評価し、それを如何に高めていくか、という問題設定で考える。簡単に言うと、「自由」を実質的・機能的に支えているケイパビリティの向上に焦点を当てるわけである。

センとヌスバウムの自由観は、以下のように述べている。

セン（1992）は、「我々が大切にしたいという理由のある自由の拡大は、暮らしをより豊かで束縛の少ないものにするだけでない。それは私たちが社会的により十全な人間になることを可能にしてくれるのである」と述べている。また、「ケイパビリティは、選択可能な機能セットの集合として、どのような機能セットをそこから選んで達成させようとするのか、その自由を表す。選択すること自体が生きることの重要な一部であるが、それは両刃の剣であるとする。選ばなければならない選択肢が増えるということは、機会が増えることではあるものの負担でもある。特定の選択肢や義務が広がることは必ずしも価値ある自由が広がることではないとし、どんな決定の機会が自分にとって大切なのか、価値判断が必要だ」とする。

ヌスバウム（2000）は、「人々は自分自身の道を決定できる自由を与えられるべきである。どんな生き方をするのかを他から強制されるのではなく生きたいと思う人生を自ら選ぶということを、人間らしさの核をなすものとして重視する」と述べている。また、「自由とは、価値あると思うものを追求し、生きたいと思う人生を生きることであり、その機能を自ら選び発現させていくことである。しかしこの自由は自由放任から生まれるものではない。政府による積極的な関与によって、機能を発現させられるように環境が整備され

なければならない。さらにこの自由は、何にも心煩わされることなく安穩と生きることでもない。価値あると今信じているものを批判的に捉え、何が本当に価値あることなのか最奥の欲望を日々探求する努力によって開発されていかなければならないのである。」とする。

上述のように、センとヌスバウムのケイパビリティアプローチにおける自由とは、「生きたいと思う暮らし、生き方を選ぶこと」であり、また、「生きたいと思う人生を自ら選ぶということを、人間らしさの核をなすものとして、価値あると思うものを追求し、生きたいと思う人生を生きること」である。

以下、ケイパビリティ・アプローチの五要素について概観する。

## 6. ケイパビリティ・アプローチの五要素

ケイパビリティ・アプローチの中心となる要素は、個人らは何が可能になるかという点である。センは能力を評価する要素について、以下の5つを主張した。①人の長所を評価する際での、真の自由の重要性、②資源を価値ある活動に変換する能力が、個人によって違うこと、③幸せを感じる活動は、多変量な性質をもつこと、④人の厚生を評価する上での、物質的なものと非物質的なものもバランス、⑤社会における機会分布の考慮、となっている。

要素①について、センによれば、選択可能な社会状態に対して、一定の個人的評価値を対応させる仕方を個人的評価関数と呼ぼう。個人的評価とは、それぞれの社会状態のもとで実現する個々人の客観的境遇とも、それぞれの社会状態で個々人が得る効用・厚生とも、あるいは、個々人の選好もしくは理性的評価とも解釈可能であるとする。また、本人が形成した評価であるとも、政策主体がその個人に割振った評価とも解釈可能である。ただし、ここでいう社会的状態とは、現在の状態を含めて、異なる代替的な環境のもとで実現可能となる代替的な状態を表すものとする。さらには、「すべての個人に基本的ケイパビリティを保障する」社会状態の選択は可能となる。

機能やケイパビリティ自身の評価を願望の強さによって行ってはならないとする特別な理由がある。幸福や願望といった心理的尺度を利用することによって間接的評価をおこなっているという共通点を持っている。幸福であることは重要な機能の一つと見なされるとしても、それが人生を送るためのすべてであると見なすことはできない。もし願望の達成が基準としてとられたとすると、ケイパビリティと機能を評価するために特定の方法が選ばれたことになる。この特別な視点に基づくケイパビリティと機能の評価の妥当性には、議論の余地が残されている。なぜなら、理性的な評価の問題に直面することなく、ただ願望の尺度を機械的に当てはめるやり方は、規範的な評価の仕方としては不公正だからである。

要素②について、センは、所得や財などの資源を機能やケイパビリティに変換する能力が人によって違うと述べている。また、後藤（2017）によれば、ケイパビリティとは、本人が利用可能な資源（モノやサービス、時間：財）と本人の資源変換能力のもとで、実現可能となる複数の機能の組み合わせ方を表す」と述べ、個人の「福祉的自由」（Well-being freedom）を表すと解されるとしている。

では、資源とは何か？資源はどんなものがあるのか？

資源とは、人間の生活や産業などの諸活動のために利用可能なものをいう。この語源は、英語の「resource」に当てた中国語「資源」である（増井，2012）。資源とは、単なる原料（モノ）ではない。1931年に出版された「大英和辞典」では「資源」とは「力を借りるもの」とあるが、ここには人間があるものに力を借りるという意味で、人間と物との関わり合いがうまく表現されている。これは、使い手がいなければ、さらには使う方法がわからなければ「資源」にはならないということでもある。資源には、その所有形態から公共財と私有財に分類されるが、公共財を更に分けて道路などの社会的資源と水などの自然的資源に分けることができる。この自然的資源が、環境資源と呼ばれる。また、各種天然資源や観光資源のような物的資源と、人的資源とがある。さらに、経済上投入可能な資源として経済的資源という区分もある。

著名な経済学者で資源研究の権威であるジンマーマン（1985）は、資源という言葉は、「事物または物質に当てはまるのではなく、事物または物質の果たしうる機能、あるいはそれが貢献しうる働きに当てはまる」のであり、「資源は存在するものではなくて、生まれるものであり、静的なものではなく、人間の欲望と人間の行動に応じて拡大したり収縮したりするものである」と述べている。また、佐藤仁（2011）は、「資源はさまざまな原料・エネルギーを生み出す源であり、原料そのものではない。石炭や鉄は原料なのであって、資源ではない」として、資源という用語を「働きかけの対象となる可能性の束」と捉え、資源は人間社会からの働きかけを受けて初めて有用性を発揮するとしている。さらに、科学技術・学術審議会資源調査分科会（2010）は、「資源とは人間が社会活動を維持向上させる源泉として働きかける対象となりうる事物」、また「資源は物質あるいは有形なものに限らない」と定義している。

資源は、あらゆる有益、有用、必要なものであると定義されている。個人が持っている内的資源は、体力や気質、知能、自尊感情を含む。個人に所有されていない外的資源は、ソーシャル・サポート、職業、経済地位、自然資源を挙げられる。資源維持理論では、資源同士が互いに影響し合うと論じられている。特に内的資源から外的資源に対する管理的動きが示唆されている（Hobfoll, 1998）。

資源は、自由を達成するための手段である。しかし、資源はそのままでは機械にまで昇華することはない。資源は、制度や諸個人を取り巻く転換要素を潜り抜けることで選択可能な財の組み合わせであり、すなわちケイパビリティ集合に昇華する。人は、所得や富と

いった資源、すなわち生きる手段を持っているからといって、必ずしもその人が有意義と考える実際の機会を持つことができるとは限らない（福士，2014）。

資源管理の高い個人は積極的にソーシャル・サポートを求め、得られたサポートの量が多く、異文化適応状態もよい。積極的にソーシャル・サポートを求めた人は、得られたソーシャル・サポートの量も多い（孫，2011）。損害回避および個室は資源管理について、損害回避は、行動の抑制に関わる。損害回避が高い個人は、悲観的、内気、疲れやすいので、周りに存在する資源に対しても回避的で、意欲的にアプローチしようとはしない。一方、固執とは、一生懸命さ、忍耐の強度を示すものである。固執の高い個人では、物事に熱心に取り組み、野心的で完全主義という傾向を持つ。つまり、個室の高い個人は、目的を遂げるに有利な資源に関心が高く、資源の開発、利用、調達などに意識的に努力すると示唆された（孫，2011）。

多くの個人内要因や環境要因は、直接的に心理的適応を左右するのではなく、社会文化的適応を介して、それに影響を及ぼすことを示唆している（孫，2011）。

ロールズの社会的基盤財は、所得、富、自由、機会、自尊心の社会的基盤、つまり、社会的な資源を含む（Rawls, 2010）。しかしながら、社会的基盤財は個人の物理的・精神的な特徴、つまり、内的資源を含まない。そのため、センは、ロールズの社会的基盤財において批判されている。その理由は、以下の通りである。「基本財と資源から諸機能とその他の達成の代替的な組み合わせに関する選択の自由への変換は個人ごとで非常に異なる可能性があるため、基本財や資源の保有が平等であったとしてもそれぞれの個人が享受する実質的な自由は深刻な不平等を伴っているかもしれない」（Sen, 1992）と述べている。

一方、資源概念について、ドウオーキンは資源の平等を提唱し、資源概念は個人の物理的かつ精神的な特徴を含む。したがって、ハンディキャップを抱えて生まれた者は他者より資源の点でより劣った状態から人生を開始する（Dworkin, 2000）。また、ドウオーキンの資源概念が社会的資源と内的資源の両方を含み、それゆえに、ある種の意味では、ドウオーキンの資源概念は、ケイパビリティに近い概念とみなすことができるといえよう（Dworkin, 2000）。

前述にあげたように、資源は、人間の生活や産業に利用できるすべてのものを指している。しかし、時代が変われば資源も変わる。人間の活動に利用可能なものが資源とされるため、何が資源と認識されるかはその時代や社会によって異なり、これまでは単なるゴミなどとされていたものでも技術の発達に伴い資源とされたり、逆にこれまで利用され資源と認識されたものでも、社会の変化と共に資源でなくなったりする（駒形，1955）。

このように、時代が変われば資源も変わったり、社会の変化と共に資源でなくなったり、資源の変換能力も個人によって違うことが自然であると考えられる。

要素③について、幸せを感じる活動とは、つまり幸福を感じる活動である。センにとって、幸福を評価する焦点は、ある社会においてその人に開かれた価値ある生活を選び取る「自由」の大きさということになる。幸福は、QOLと部分的に共通性をもつ類似概念である。その共通性としては、幸福も究極的に測定できない性質がある。一方、QOLという概



念には幸福と異なる部分もある。それは、QOLには必要最低限度を考えることができるが、幸福になるための必要最低限を措定することはできないということである。近代社会においては、幸福が何であるかは不可知であるとしても、人びとが幸福を追求する自由については保障する（猪飼，2014）と述べている。

一方、QOLとは、生活を質という観点から評価する産物である。しかし、実際の生活に行われる意思決定の多くはQOLの増進を意図して行われている。QOLは、生活改善のための基本的参照軸である。それ以上、改善されたり最適化されたりということは究極の目標である。しかし、QOLは客観的にも主観的にも測定することができないものである。

ケイパビリティ・アプローチは、その人の「生活の質」が人間にふさわしいものであるのか測る指標の一つである。このアプローチは、人間が何を実現しているのかを測るのではなく、それらを実現する能力の豊かさに着目するものである。例えば、中国人留学生は、ただ日本語を勉強するだけではなく、日本の友人や同僚と一緒に楽しく会話することや、仕事をする、食事をするなど、多くのことができる。こうした「○○できる」「○○になりうる」がケイパビリティ（潜在力・可能性）と呼ばれる。

また、幸福と消費について、セン（1992）は以下のように述べている。

人々の幸福は、財やサービスの消費のみによって決まるという仮定にある。財やサービスの消費量が多ければ多いほど、人の幸福度は高まり、幸せになれると考える。どれだけ消費したとしても限界幸福度はプラスであり、満足するということを知らない。消費できる財やサービスはどれだけ所得を得ているかによって決まり、結局、人々の幸せはどれだけ所得を得ているかによって決まる。限界幸福度はいつまでたってもプラスのままなので、所得を増やすことがいつまでたっても追求される。したがって、幸福は間接的に貧困の定義となっていると見なせないわけではない。その理由は、幸福を貧困の定義として新たに提示することに理由があるならそれは「幸福は所得のみによって決まるのではない」と考えているからである。どんな財でも手に入れられる大金持ちは、本人が幸せだと感じなければ貧困であると見なされる。逆に、どんなに貧しくても、本人が幸せであれば、貧困であるとは見なされない。

つまり、単に生きているではなく、人間らしい生活ができていないかをチェックするものである。つまり、ケイパビリティ・アプローチは中国人留学生の幸福どの測定の手段であって目的ではなく、何よりも求められる社会の幸福の実現それ自体である。

要素④について、セン（1992）によれば、豊かな生活は、単に物的に満たされているだけでなく、精神的なもの、例えば自尊心も満たされていることを意味している。例えば、物質的なものは、財やお金とする。非物質的なものは文化とする。以下は、ケイパビリティの観点でそれぞれについて述べてみる。

ある社会が持つべき財を設定し、それを持っていないならば貧困であると見なす。例えば、食器、家具、テレビやラジオ、自転車などを必需品として設定することが考えられる。しかし、何を必需品とするかは恣意的であり、その国で一般的に多くの人が持つべき

財と考えられれば、必需品のリストに加えられる。しかし、一旦、そのリストに加えられると、すべての人がその財を購入することが貧困対策となり、それは特定の産業と結びつく結果になる。さらに、センはコミュニティ・レベルでも同様の基準が考えられる。財によって貧困を判定しようとするような問題が起こる。例えば、自転車があっても、それを乗りこなせなければ意味がないのと同じである。したがって、貧困の基準は財にあるのではなく、それを用いて何ができるのか、できないのかで判断すべきなのである。どのような財が必要かは環境によって違い、文化によって違い、信条によっても違う。このような大きな多様性を考えると、財によって「貧困」を測ろうとすることも容易なことではない。これらの財は金額に換算され、資産やそこから生まれる所得として計算し直せば、所得による定義と同じ問題を引き起こすことになる。

文化は人間の生活を守るための手段的価値を持つという点を重視するならば、文化を失うことはその保護的機能が失われ、人々は貧困化するという議論も成り立つだろう。文化が人々の暮らしに重要な役割を果たしているのは明らかである。しかし、極端な場合には、文化を究極の目的と見なし、文化を守るためであれば人々の生活は犠牲にしてもよいと考えるかもしれない。文化の価値は、人々の生き方の豊かさをもたらす手段として捉えられるべきであり、ヌスバウムのケイパビリティのリストには文化的な豊かさに関連する項目が多く含まれている。貧困を文化の喪失と捉える人たちは文化を焦点変数と見なしており、文化が失われることこそが貧困である。逆に、貧困とは、その選択肢の幅（あるいは自由）が制約を受けていることを意味する（池本，2007）。

要素⑤について、社会と個人の両方の面から考慮する必要があると思う。センのケイパビリティ・アプローチは、日常生活が「何かをする」「どんな状態である」「何かできる」という自由、可能性、能力、機会が最も大事である。つまり、個人の自由の拡大、選択肢の広さなどを重視しながら、人々何かできるかどうか、実際に何かできる自由や機会があるかを分析していく。ケイパビリティは、日常的にいうと、何かをするのに必要な資質や能力、また、受け入れる余裕といったニュアンスがある。このように、人々の選択の自由や機会を広げて、生活の質を高める政策を策定する。

また、セン（1992）は、社会における人の立場は、①その人の実際の成果、②それを達成するための自由、という二つの視点から評価することができる。視点①は、その人実際に達成した成果に関わっている。視点②は、その人が行う価値があると認めることを達成するために、実際にどれだけ機会が与えられているかに関わっている。つまり、成果の効率性と、成し遂げる自由の効率性という二つの面からみることができる。成果を判断するさまざまな方法がある。例えば、得られた快樂や満たされた欲望などによって表される「効用」、稼いだ所得や享受した消費などによって表される。

そして、選択の機会は、単に好ましい財の組み合わせの良さのみを考えるのではなく、選択の自由の範囲も考慮する必要がある。セン（1992）は、社会制度についていかなる領域において平等を要求するものである。平等はケイパビリティ・アプローチの中で最

も重要な概念である。平等という概念は、二つある。一つ、人間とはそもそもお互いに異なった存在であるということである。二つ、平等を判断する時に用いられる変数は複数存在するということである。人間はお互いに異なった存在であるために、異なった変数によって平等を評価すると多様な結果が導かれる。平等は、ある人の特性（所得、富、幸福、自由、機会、権利など）を他の人の同じ側面と比較することによって判断することができる。このような不平等の判断はそのような比較を行う変数（所得、富、幸福など）の選択に依存している。このような変数のことを「焦点変数」である。焦点変数の選択（すなわち空間の選択）の問題を不平等の評価に伴う諸問題と区別するために、それを利用することにする。

以下、ケイパビリティ・アプローチから見た貧困の問題について概観する。

## 7. ケイパビリティ・アプローチから見た貧困の問題

ケイパビリティアプローチは、貧困や発展の尺度として所得以外の様々な指標に注目する根拠となった。貧困分析において最も基本的な問題は、何をもって貧困を計り、評価するかという問題、つまり数学的言えば貧困評価の空間をどう定義するかという問題である。一般に、物質的豊かさは、より良い生活と同一視することはできない。より多くの財を手に入れ、自由にできることは、より良い生活を実現するための手段に過ぎないし、その手段をより良い生活へと結びつける際には、年齢、性別、健康状態など、他の様々な要因が影響を与えるからである。そこでセンは、不平等や貧困、さらに生活水準そのものを判断する空間として、「機能」と「ケイパビリティ」という概念を提示した（黒崎・山崎，2017）。

貧困について、貧困は、人々の生活における何らかの欠乏を意味している。しかし、どのような欠乏、あるいはどの程度の欠乏を貧困と呼ぶかは、その捉え方によって異なっている。そして、センは「ケイパビリティ」に着目した貧困に関する議論は、財や所得はあくまである厚生(well-being)水準を達成する一手段にすぎないとして、貧困を議論する際には、人間としての「機能」(functioning)、すなわち「ある状態にあること」(being)と「何かをなすこと」(doing)を直接的に問うべきであると主張する（独立行政法人国際協力機構・公共政策部，2009）。

貧困を所得や消費などの経済的厚生の観点から捉える考え方を根本的に問い直したのがアマルティア・センの著書「貧困と飢饉」であった。同著書において、貧困とは基礎的な潜在能力、すなわち「個々人に与えられた選択の幅、自由度」が欠如している状態のことであり、開発とは個々人の潜在能力の拡大を意味すると考え、これ以降貧困において潜在能力の考え方が大きな流れを形成するようになった。

貧困の定義や測定方法は1960年代末以降、変遷しており、大きく分けると所得と消費を尺度とする経済的厚生を中心とした考え方から生活の質、人間開発や潜在能力の概念へ

と、大きな変化を遂げてきたといえる。貧困と開発の問題を考えるために、センは潜在能力という考え方を導入した。センの潜在能力概念は、国連開発計画（UNDP）による人間開発の概念をはじめ、貧困の概念全般に大きな影響を与えた。主な貧困の捉え方としては、所得や消費に着目した所得貧困や潜在能力に着目したものがある（JICA 企画・評価部 環境・女性課，2002）。

1990 年代になると国連開発計画は、開発途上国の貧困を所得だけでなく生活の質や社会的側面も含めて捉えるようになった。1990 年から毎年出版している人間開発報告において、国ごとに平均余命、識字率、就学年数、1 人当たり GDP、購買力などをもとに算出した人間開発指数(HDI)を公表しているが、1997 年の人間開発報告では新たに人間貧困指数(HPI)を導入した。HPI はその国の中で人間貧困がどの程度発生しているかを示し、全人口中に占める 40 歳未満での死亡率、社会医療サービスと安全な水へのアクセス率、5 歳未満の低体重児の割合、成人非識字率 等を合成した指数である。例えば HPI が 25%であれば、その国の全人口中の平均約 25%が当該指標項目を満たしていないことを示す。さらに、この「潜在能力アプローチ」を基礎として、経済協力開発機構(OECD)の開発援助委員会(DAC)が2001年4月に発表した「DAC 貧困削減ガイドライン」では、貧困とは人間が基礎的生活を送るために必要な能力が剥奪されている状態を表すとしている（JICA 企画・評価部 環境・女性課，2002）。

「DAC 貧困削減ガイドライン」(2001 年)の中で、貧困とは「経済的能力(収入・資産)、人的能力(教育・栄養)、保護能力(安全保障・脆弱性)、政治的能力(権利・影響力・自由)、社会文化的能力(地位・尊厳)が欠如した状態である」と定義している（JICA 企画・評価部 環境・女性課，2002）。

経済的能力(生活手段の確保および収入向上)とは、所得を得ることができ、消費することができ、資産を持つことができる能力。また、衣食住の充足に直接的な関わりがある能力である。但し貧困層の特徴として、ひとつの手段だけでは安定的な生活を維持することが困難であることから、可能な限り生活手段を多様化させる戦略を選ぶ場合が多い。これらは食糧確保、物質的豊かさ、社会的な地位を決定する要因である。この経済的要因は、貧困層に対し、生産のための経済的・物質的資源、土地、家畜、森林、漁業、クレジット、適切な雇用へのアクセスと関連する問題として指摘される。

人的能力(基礎的生活能力の向上)とは、保健、栄養、教育、安全な水や住居などの確保など人間の根本と関わる問題。人間として基礎的な生活を送るには、健康で基礎的な教育が受けられること、また衛生的で安全な生活環境が安定的に確保されることが不可欠である。人的能力の不足は、経済的能力や社会文化的能力をも低め、脆弱性を高める。病気や非識字は生産活動や経済的向上など貧困削減のための障害となる。

政治的能力(政治)とは、人権や政治的自由の保障。人間としての尊厳を持ち、社会的地位が認められること、そして人権が保障され、政治的意思決定過程や政策決定過程に

影響を与えられること（政治参加）に関する能力である。これらが剥奪されていると、独裁や不公正などが横行し、暴力や紛争などを生み出し貧困層に多大な被害を与える。

社会文化的能力とは、政治的、社会的、文化的、宗教的、人種的に多様な人々が、自身が所属する集団の社会的・文化的特性を価値あるものと認識し、それを保持、あるいは必要に応じて変化、発展させていく自由と能力である。また地域社会に価値あるメンバーとして参加し、社会の一員であるという意識を持つこと（社会参加）に関する能力である。貧しい人々は地理的・社会的な疎外や孤立を貧困状態の1つであると捉えている。

保護能力（脆弱性の克服）とは、経済的、外的ショックに抵抗する能力。貧困層は慢性的な貧困にあり、外的ショックに対応する余裕がないために、社会の他の人々に比べて、ことのほか被害を受けやすい。また外的ショックは慢性的貧困にある人々だけでなく、貧困ラインの線上にいるような脆弱な人々を一時的に貧困に陥れ、そのまま貧困に定着させてしまう恐れがある。外的ショックに対応するには、外的ショック軽減能力と外的ショック対応能力の2つが必要である。

これら5つの能力は当然のことながら独立したものではなく、相関関係が強く、かつ横断的に関係する要素として「ジェンダー」、「環境」を位置づけている。これら能力の欠如や相関関係の機能不全が貧困の状態であることを示している（独立行政法人国際協力機構・公共政策部、2009）。

独立行政法人国際協力機構（JICA）は貧困を、「人間が人間としての基礎的生活を送るための潜在能力を発揮する機会が剥奪されており、併せて社会や開発プロセスから除外されている状態」と定義する。またJICAの貧困削減協力の目的を、「貧困層自身が潜在的に持つ経済的、人的、保護、政治的、社会文化的能力を強化し、これらの能力を発揮できる環境を整えることで、貧困層の一人ひとりが貧困状態から脱却すること」とする（独立行政法人国際協力機構・公共政策部、2009）。

JICAの貧困削減協力の最終目標は、貧困層が主体的に基礎的生活を確保できるように、また社会に参加できるように、貧困層の政治、経済、人間、社会、保護の各潜在能力を高めることにある。また貧困の背景には、貧困層を取り巻く環境、社会構造、制度に貧困をつくりだし、固定化させている要因があることから、貧困層を取り巻く環境を変化させ、貧困の悪循環を断ち切ることにより、貧困層の人々の潜在能力の強化を支援することも目標とする（JICA「貧困削減」課題別指針チーム JICA企画・評価部、2002）。

ケイパビリティ・アプローチでは、生活の良さは、人々が何をできるか、つまり、持っている選択肢の豊かさによって測ろうとする。この意味で、開発（発展）とは選択肢の幅が広がることであり、表現を変えれば様々な生き方を選択する自由が増すことである。豊かな生活は、単に物的に満たされていることだけではなく、精神的なもの、例えば自尊心も満たされていることを意味している。逆に、貧困とは、その選択肢の幅（あるいは自由）が制約を受けていることを意味する（池本、2007）。貧困の問題を解決することにより、人々の健康と福祉を達成することが可能となる。

## 8. ケイパビリティ・アプローチと福祉

ケイパビリティ・アプローチは、貧困や不平等および福祉など多様な領域において活用されて、その研究は急速に進展している。このアプローチは、個人の福祉を評価、分析するためのものである。ここでいう個人の福祉とは、その人の「生活の質」や「生活の良さ」を意味している。生活の質とは、ある人がどれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生に幸福を見出している。幸福とは、生き甲斐、心身の健康、良好な人間関係、やりがいのある仕事、快適な住環境などさまざまな観点から計られる。

センの「福祉の経済学」(Sen, 1985)という本は、鈴木興太郎教授が英語から日本語に翻訳した。この本の焦点は、主に福祉一般の評価、とりわけ生活水準の評価に合わせられている。福祉とは、満足のいく状態、安寧、幸福などと訳される。個人の福祉はその人の生活の質、いわば生活の良さとして見ることができる。

センは、厚生経済学において、「人間の生活の良さ」を適切に計測するには、既存の経済学の考え方では不十分であると考え、幸福や福祉を用いるべきであると主張した。例えば、心身ともに健康であっても、偏見や差別などを受けている場合は、幸福や福祉は良好であるとは言えないだろう。

従来の厚生経済学では、豊かさをどれだけ財やお金を所有しているかで測った。その人の持っている財の量という豊かさに着目することで幸福や福祉を計測していた。しかし、物質的豊かさだけでは、心身の健康状態といった幸福度を計測することができないという限界がある。例えば、多くの財産があつたとしても不健康である場合は、生活の質が高いとは言えない。そのため、物質的側面だけに着目した方法が不十分であると言えよう。

そこで、センは、幸福や福祉を機能で測るべきだと主張した。機能とは、その人による行為やあり方によって達成されたことである。機能は、達成している状態と言い換えることができる。例えば、健康であるか、教育を受けているか、社会参加しているか、コミュニケーション能力があるかといったことが挙げられる。機能は、どのように機能し、どのような行為でどのような状態になっているかを反映し、物理的側面と精神的側面の両方をカバーしている。また、その人ができることとその人の状態を区別し、達成できることで幸福や福祉を測るべきであると言われている。あくまで個人の状態や状況を反映しているものであるため、それを達成するための財やお金の豊かさとは区別されるべきである。例えば、自転車所有していることと、自転車に乗ることは区別すべきということである。

このように「福祉」とは暮らしぶりの良さを表す言葉であつて、福祉政策や福祉サービスを指すものではない。個人の福祉は、その人の生活の質、いわば「生活の良さ」として見ることができる。生活とは、相互に関連した「機能」の集合からなっていると見なすことができる。このような観点からすると、個人が達成していることは、その人の機能のベクトルとして表現することができる(鈴木, 1988)。

## 9. ケイパビリティと福祉領域の諸概念・モデル・アプローチとの比較

日本におけるソーシャルワーク実践においてはこれまで、生活モデル（社会福祉養成講座編集委員会，2015）、医学モデル（猪飼，2014）、ストレングスモデル、心理社会的アプローチ、機能的アプローチ、問題解決アプローチ、課題中心アプローチ、危機介入アプローチ、行動変容アプローチ、エンパワメント・アプローチ、エコロジカル・アプローチ、解決志向アプローチ・ナラティブ・アプローチ（いとう総研資格取得支援センター，2019）、ICF（大川，2006）、QOL（新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会，2012）などさまざまな「概念」「モデル」「アプローチ」が紹介され、かつそれらについてさまざまな議論が繰り返されてきた。これらは、対象となるクライアントが抱えている生活課題を解決するために展開されるものである。それぞれの定義や目的、意図などをケイパビリティ（Sen, 1992）と比較してみる（表 2-1）（表 2-2）。

クライアントのもつ多様な生活課題を解きほぐして解決に導くためには、さまざまなアプローチを活用し支援が必要となる。その中で生活モデルや医学モデルが最もよく使われている。「生活モデル」（Germain・Gitterman, 2008）は、1970年代末頃から社会福祉領域において使われるようになった。1980年にジャーメインとギッターマンにより提唱された。ジャーメインは、アメリカのコネチカット大学社会福祉学部名誉教授である。ギッターマンとともに人と環境との相互作用に焦点を当て、個人と環境の間での継続的な相互交換のなかで、個人と環境は相互に影響し合うと提唱した。生活モデルには、人と環境の相互作用の下位概念として、相互交換や適応、ストレス、対処（コーピング）がある。

中村が、ジャーメインや一般システム理論について、「生物と環境の間のバランスのとれた相互依存関係について追及する学問である生態学の特徴を『人と環境』との関係において考究したもの」である。また、「生態学の特徴を人と環境との関係において考究したもの、人と環境の相互作用がこのモデルの一大焦点」とし、「生活モデル」の特徴として、「人と環境の相互作用、関係性、生活ストレスと対処、適応、コンピテンス、包括・統合的視点」と述べている。

生活モデルは、人が生活環境と共存するための能力を対処能力（コーピング）、そして環境が人間のニーズに適応することを応答性（レスポンス）と呼び、対処能力が弱かったり、応答性が親和しない場合に生活ストレスが発生するとした。このモデルでは、社会福祉援助技術は、生活ストレスを改善するために、利用者の能力が高められるよう能力付与（エンパワメント）を行い、周囲の環境を変えたいという動機に働きかけると同時に環境に対しては組織集団による圧迫や支配的な権利の乱用を指摘し、その修正に働きかける一連の活動ということになる。

生活モデルと医学モデルではケア目標が異なっている。すなわち、生活モデルはQOLの増進を目標としている。それに対して、医学モデルが治療医学的な意味での治癒を目標としている。しかし、単にケア目標が違うだけではなく、重要なのは、問題の原因についての考え方の違いである。

医学モデルの特徴は、医学モデルが病気/変調のカテゴリーに問題の原因を還元していることである。一方、生活モデルは、問題の原因を因果の連鎖として捉える視点を持つところに特徴がある。要するに、生活モデルの最大の特徴は、QOLに貢献する要因をさまざまなレベルで捕捉、各レベルで方策を考えるという点にある。すなわち、医学モデルの基本戦略は、原因を医学的要因のレベルに限定して把握し、それに対応する効果的な方法を探してゆくというものである。また、健康状態の改善方法も、高度かつ標準化された方策へと繋がってゆく。これに対して、生活モデルの場合は、当事者のQOLを改善することに貢献する無数の手段を連動させてゆくという方策へと繋がってゆくのである（猪飼，2014）。

WHO（世界保健機関）によれば、健康の概念が医療分野におけるQOLの概念に相当するものとして用いられることが多く、健康とは「単に疾病がないということではなく、完全に身体的・心理的・社会的に満足した状態にあること」（1946年）と定義されている。すなわち、身体的、精神的な苦痛がなく、その人らしい生活を送れるとされている。また、レクリエーション活動を含む余暇活動は、健康でいかにによりよく生きるかというQOL向上に多に役立つ。基本的な生活時間に加え、他者との交流を図ることで孤独感を解消し、人と関わる楽しさや喜びを見出すこともできる。

QOLは今や「生活の質」として一般的に通用する言葉となっている（新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会，2012）。英語の「Life」は生活、生命、人生など幅のある意味を持つ言葉なので、QOLという概念もそれが用いられる文脈に応じて多様な含意を持つ。QOLという概念は、医療や福祉の現場で多く使われてきた言葉である。1970年代にQOLが注目されると同時に、医療分野においてもその注目度が高まってきた。

QOLをめぐる議論が医療現場から一般社会へと広まりつつあった1980年代、心理学の世界では違った文脈で「質」が問われるようになっていた。数量化して測定できるデータをもとに人間の行動を解明することを心理学は伝統的に重視してきたが、数量化できない人間の主観的経験を解明しようとする「質的研究」と呼ばれる方法が勢いを持つようになったのだ。質的研究にもいろいろな立場があるが、本人がみずからの経験について語る言葉をデータとして重視する傾向は共通している。とくに、重要な出来事や人生についての本人による語りは「ナラティブ(narrative)」と呼ばれる。フランスの哲学者リクールが、「人はみずからの人生を物語ることで、自己アイデンティティを見出す生き物だからである」と述べている。

世界保健機関（WHO）は生活の質（QOL）を「一個人が生活する文化や価値観の中で、目標や期待、基準、関心に関連した自分自身の人生の状況に対する認識」と定義されている。この評価基準として、QOL基本調査票を開発した。この基本調査票は、QOLの構成を「身体的側面」「心理的側面」「自立の程度」「社会的関係」「生活環境」「精神性・宗教・信念」の6つの領域により複雑に影響を受ける概念である（新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会，2012）と規定している。



QOL 向上のポイントは「本人が何をもちて幸せとするか、何を大切にしているか」が軸になる。本人の努力によって克服できることなので、本人の能力が発揮できれば、その人の QOL も高める。とはいえ、実際のところ、本人自身も「自分は何を求めているのか」ということが漠然としている場合がある。この場合に、その人の QOL を低下させないためには、客観的な評価や見解、ヒアリングやコミュニケーションなどで紐解いていくことが大事である。

一人ひとりの人生の内容の質や社会的にみた生活の質のことを指す。ある人がどれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生に幸福を見出しているか、ということをも尺度としてとらえる概念である。QOL の概念は、歴史的に遡れば、ソクラテスの「なによりも大切にすべきは、ただ生きることではなく、よく生きることである」といった哲学的追求することである。QOL の幸福とは、生きがい、心身の健康、良好な人間関係、やりがいのある仕事、快適な住環境、十分な教育、レクリエーション活動、レジャーなどさまざまな観点から計られる。また、QOL には、国家の発展、個人の人権や自由が保証されている度合い、居住の快適さとの関連性も指摘される。

現代の QOL の概念に注目が集まってきたのは 1970 年代頃に、技術の進歩によって物が簡単に豊富に手に入るようになったため、生活の豊かさを評価する基準が、物の量ではなく、質の良さになってきたことがきっかけであったと考えられる。つまり、QOL とは、「より多く」よりも「より良く」という価値観であり、「物質的な豊かさに満たされた生活」ではなく、「毎日が充実し、心身が満たされた生活」に焦点をあてた考え方となる。

社会という環境のなかで資源不足（所得）、自分が活かされる職場、快適な住居がないときに、ストレスの要因となり、人間の内面に無力感、解決の諦めが生じ、エネルギー、動機づけを損なうという影響を及ぼす。無力な態度は、環境にも影響を与え、他のメンバーにも影響を与えるか、マイナスの評価につながる。これらにより、人と環境の問題に、人間は対処し、または追い詰められる（社会福祉養成講座編集委員会，2015）。

社会福祉領域における社会資源の活用と開発について、『精神保健福祉の理論と相談援助の展開』には、社会資源の活用と開発について、「地域の社会資源には、①本人自身（個人）が持っている資源、②家族が持っている資源、③親族・友人・知人が持っている資源、④ボランティア活動・自治会活動など市民が持っている資源、⑤民間市場が持っている資源、⑥社会福祉法人・特定非営利活動法人など公益法人が持っている資源、⑦法律や制度に基づく行政機関が持っている資源がある」と示している。また、「社会資源の有効な活用のためには、ここにある『人』・『集団』・『機関』・『制度』・『資金』・『情報』などの社会資源を地域のなかで連結して協働する『社会資源のネットワーク化』が不可欠である。社会資源の開発には、既存の資源を活用する『資源化』と、新たに創出する『資源創出』がある」と述べている。

『相談援助の理論と方法』には、社会資源は、「福祉ニーズの充足のために利用・動員される施設・設備、資金・物品、諸制度、技能、知識、人・集団などの有形、無形のハー

ドウェアおよびソフトウェアを総称するもの」と定義している。社会資源とは、援助に活用できる「ひと・もの・かね」を含むあらゆるものである。援助に使えるものはすべて社会資源という発想が求められる。

社会資源は、生活環境に実在し、目標を達成するために活用できる制度的、物的、人的の各要素及び情報を指す。「社会資源」ばかりが資源ではなく、利用者の内面にある問題解決の力、援助への動機づけでも資源である。援助者は、社会資源を動員しながら、利用者が依存し自らの能力を低下させるのではなく、利用者の能力といった内的資源を刺激し活用することで利用者の「自律性」を高めることを目指す。ネットワークとして連携することで、個々の社会資源の有効性を高めると認識されている。

社会資源はフォーマル、インフォーマルな資源に分類できる。フォーマルな資源の特徴として、サービスの提供者は提供機関の職員であり、サービス提供を職業として行っていることから、専門性は一般的に高く、またサービスの安定性も高い反面、時間や内容の随時変更などのクライアントの要望に対しては対応しにくい等、融通性は低い。インフォーマルな資源の特徴は、フォーマルな資源に比べて専門性は低く、長期にわたる支援では安定性に欠けるが、クライアントとの関係性は親密であり、融通性が高い。杉本らによる社会資源の分類について、①物的資源（公私の諸施設、各種制度や法規、条例などを指す、制度的資源）、②人的資源（住民、ボランティア、専門職などを指し地域資源）、③情動的資源、④関係的資源（人的資源などと関係を結んでいくときの媒体になる資源。貨幣、地域、信用など）を含む。

利用者の資料の収集は、その取り巻く環境の情報に加え、個々のインフォーマルな資源やフォーマルな社会資源の状況、利用者との関係なども、情報収集する必要がある。問題解決のため、制度に基づく社会資源・サービス及び、インフォーマルな支援とのネットワークを形成することが、必要である。家族・親戚・友人・同僚・近隣・ボランティアなど、インフォーマル資源も積極的に取り入れる。

内的資源とは、その人が有する 知識、技術、能力、経験、自信、自負、体力、気力などを指している。クライアントが「本来、内的に備えている適応能力、解決能力」、「人が環境に働きかけてそれを変化させる能力である。コンピテンスは「動機づけ」、「環境の質」、「生活能力の技能」という三つの要素によって促進され、発揮される。クライアントのストレングスは、強さである。例えば、①熱望（希望など）、②能力（才能など）、③自信（自己の効力感）に焦点を当て、発揮できるように支援することを重視する。専門職は、クライアントの内的資源を発見し、発揮できるように支援するとともに、内的資源をも、フォーマル、インフォーマルな社会資源（外的資源）と同様に活用することが必要である。

表 2-1 ケイパビリティと福祉領域の諸概念との比較

項目	訳語・定義・目的・視点・意図など
ケイパビリティ	「能力・才能・素質・将来性・可能性・潜在能力など日本語の意味が含まれる。「人が行うことのできるさまざまな機能の組み合わせ」、「どのような生活を選択できるのか」という個人の自由を反映している。主な観点は、個人らは何が可能になるかという点である。
ノーマライゼーション	「標準化・正常化・常態化」という意味がある。以前は特異と思われていたことがあたりまえの状態になっていることである。障害のある人が障害のない人と同等に生活し、共にいきいきと活動できる社会を目指す。「障害がある人を変える」という意味合いではなく、彼らがありのままに健常者とともに生活ができるように「周りが変わる」という視点も持ち合わせている。
エンパワメント	人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を湧き出させることである。生活ストレスを緩和させるための精神的支援など、利用者へのあらゆる働きかけを意図するエンパワメントには3つの種類がある。セルフ・エンパワメント（自分力エンパワメント）、ピア・エンパワメント（仲間力エンパワメント）、コミュニティ・エンパワメント（組織力、地域力エンパワメント）である。これらを組み合わせて使うことがエンパワメントの実現に有効であり、「エンパワメント相乗モデル」という。
ストレングス	クライアントの個別的な状況を自ら解決する能力のことである。クライアントが抱えている問題を否定的ではなく肯定的にとらえ、クライアントの能力、意欲、嗜好などの側面を支援すれば、クライアントの希望や励ましにつながる。
リカバリー	人々が生活や仕事、学ぶこと、そして地域社会に参加できるようになる過程である。ある個人にとって障害があっても充実し生産的な生活を送ることができる能力であり、他の個人にとっては症状の減少や緩和である。
レジリエンス	「回復力・復元力・弾力性」とも訳される。逆境に対する反応としての精神的回復力や自然的治癒力であり、ストレスや逆境にさらされても、適応し、自分の目標を達成するために再起する力。ストレスと言った外的な刺激に対する柔軟性を表す言葉であり、ストレス社会と言われる現代において、レジリエンスは心身ともに健康を保ち、仕事で成果を出すために必要な要素として注目されている。
QOL	「生活の質・生命の質・生きることの質」などと訳される。一人ひとりの人生の内容の質や社会的にみた生活の質のことを指す。ある人がどれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生に幸福を見出しているか、ということを目尺度としてとらえる概念である。
ICF	ICF（国際生活機能分類）は、ICIDH（国際障害分類）から改定したものである。ICIDHが「疾病の結果に関する分類」であったのに対し、ICFは「健康の構成要素に関する分類」であり、新しい健康観を提起するものとなった。生活機能上の問題は誰にでも起りうるものなので、ICFは特定の人々のためのものではなく、「全ての人に関する分類」である。ICFは、「生活機能」（「心身機能・構造」、「活動」、「参加」）の分類と、それに影響する「背景因子」（「環境因子」、「個人因子」）の分類で構成される。
生活モデル	QOLの増進を目標とし、問題の原因を因果の連鎖として捉える視点を持っている。人が生活環境と共存するための能力を対処能力（コーピング）、そして環境が人間のニーズに適応することを応答性（レスポンス）と呼び、対処能力が弱く、応答性が親和しない場合に生活ストレスが発生するとした。このモデルでは、社会福祉援助技術は、生活ストレスを改善するために、利用者の能力が高められるよう能力付与（エンパワメント）を行い、周囲の環境を変えたいという動機に働きかけると同時に環境に対しては組織集団による圧迫や支配的な権利の乱用を指摘し、その修正に働きかける一連の活動ということになる。
医学モデル	治療医学的な意味での治癒を目標とし、病気/変調のカテゴリーに問題の原因を還元していることである。原因を医学的要因のレベルに限定して把握し、それに対応する効果的な方法を探してゆくというものである。また、健康状態の改善方法も、高度かつ標準化された方策へと繋がってゆく。

表 2-2 ケイパビリティ・アプローチと福祉領域の諸アプローチとの比較

アプローチ	定義や捉え方など
ケイパビリティ・アプローチ	個人の福祉 (well-being) を評価、分析するための包括的な分析枠組みであり、その人の生活の質や生活の良さを意味している。「機能」と「潜在能力」という2つの視点とし、資源を自分にとって価値ある活動に変換する能力という観点から捉えている。
心理社会的アプローチ	「状況の中の人」という視点を中心に、特に心理社会的状況下にある人間の行動や成長に着目する。クライアントの社会的に機能する能力の維持・向上を支援目標としている。
機能的アプローチ	クライアントが潜在的可能性をもつ者と捉え、援助過程の中で社会的機能を高めるための力を解放する。クライアントが自らの意志で解決の方向性を決定できるように、抱えているニーズが明確化されることを助ける。
問題解決アプローチ	クライアントのワーカビリティを活用し、ソーシャルワークを問題解決過程と捉える。接触段階・契約段階・活動段階による過程で展開される。クライアントが社会的役割を遂行する上で生じる葛藤の問題を重視し、その役割遂行上の問題解決に取り組む利用者の力を重視する。
課題中心アプローチ	アメリカの実用主義とし、伝統的なケースワークの長期にわたる処遇ではなく、短期の計画的援助を行う。
危機介入アプローチ	精神保健分野で発達してきた危機理論をソーシャルワーク理論に導入したもので、危機状況に直面した利用者や家族への迅速な効果的対応を行う。
行動変容アプローチ	学習理論をソーシャルワーク理論に導入したもので、条件反応の消去あるいは強化によって、特定の問題行動の変容を働きかける。
エンパワメント・アプローチ	クライアント自身が、問題解決に必要な知識やスキルを習得することを支援する。社会的な弱者は差別などを受け、自らをコントロールしていく力を奪われた人が、本来に持っている力を取り戻していく過程となる。
エコロジカル・アプローチ	クライアントを個人としてではなく集団の一員として捉え、人と環境との相互関係を重視し、環境との相互関係で利用者を捉える。利用者のエンパワメントを高め、利用者と環境との問題を調整する。
解決志向アプローチ	解決のための資源はクライアント自ら持っているとして捉え、解決イメージを面接過程の中で作り上げて行う。
ナラティブ・アプローチ	クライアントの現実として存在し、支配している物語を重視して、新たな意味の世界を創り出すことを援助する。クライアントの言葉から、クライアントの解釈を理解するためである。

## 10. 本節のまとめ

本節では、ケイパビリティ・アプローチについて概観した。このアプローチは、アマルティア・センとマーサ・ヌスバウムが共同して作り上げた理論である。この理論は、国連開発計画による「人間の安全保障」や「人間開発理論」においても大きな影響を与えている。それ以外に貧困問題やジェンダーなどの領域に応用されており、さらに、経済学はもちろん、公共哲学、国際保健、教育、総合人間学、幸福論、農村開発など様々な分野で関心がある。

ケイパビリティ・アプローチは、伝統的な「資源アプローチ」と「効用アプローチ」の利点を踏まえた上で、それらの欠点を批判的に展開されたものである。資源アプローチは、人がどれだけ財を有しているのかに着目し、その有する財を十分に利用して福祉を実現することができる。しかし、財を目的とすることは「物神崇拜」の落とし穴にはまりやすくなる。それに対して、効用アプローチは、ある人の幸福や欲望充足に着目し、僅かな施しにも喜びを感じることができる。しかし、それは福祉が実現されているのを判断することが難しく、「物理的条件の無視」となってしまう。

センによれば、ケイパビリティ・アプローチは、「機能」「ケイパビリティ」「エージェンシー」(Sen, 1992)という三つの基本概念が含まれている。「機能」とは、「ある状態になること」「何かをすること」と定義されている。例えば、「良い栄養状態にあること」「健康状態にあること」「教育を受けていること」「病気にかかっていないこと」「幸福であること」「自尊心を持っていること」「社会生活に参加していること」など多岐にわたる。「ケイパビリティ」とは、「個人の自由を反映した機能のベクトルの集合」「人が行うことのできる様々な機能の組合せ」と定義されている。すなわち、人が実際に「何ができるか」、「何になれるか」という「選択肢の幅」(川本, 2012)、「生き方の幅」(池本・野上ら, 1999)のことである。「エージェンシー」とは、「行動し変化をもたらす人物、そしてその業績を何か外部の基準によっても評定するかどうかはともかく、その人自身の価値と目的を基準に判断されるような人物」と定義されている。センは、人には個人の「福祉(良い生活)」を追求する側面とは別に、「エージェンシーとしての達成」を追求する必要もあると主張している。すなわち、ある人のエージェンシーとしての達成とは、その人が考えている目標や価値の全体を成し遂げることをいう。

センは人の能力を評価する要素について、以下の5つを主張した。「①人の長所を評価する際での、真の自由の重要性、②資源を価値ある活動に変換する能力が、個人によって違うこと、③幸せを感じる活動は、多変量な性質をもつこと、④人の厚生を評価する上での、物質的なものと非物質的なものもバランス、⑤社会における機会分布の考慮」を主張した。

ケイパビリティ・アプローチは、個人の福祉を評価、分析するためのものである。貧困や不平等および福祉など多様な領域において活用されている。このアプローチは、政府から与えられた権利、福祉だけでなく、それを活用できる個人の能力を評価、分析するためのものである。また、人間が何を實現しているのかを測るのではなく、それらを実現する「能力の豊かさ」に着目している。このアプローチの特徴は、人が単に生存できるかではなく、「人間らしい生活」ができていないかをチェックすることである。

そこで、本研究では、数ある理論のなかでもケイパビリティ・アプローチを取り上げた理由は、このアプローチが他ならぬ「能力の豊かさ」の観点から、中国人留学生の生活課題と対処法を多角的に評価することができる数少ない理論の一つだと考えられるからである。

## 第2章 事例研究 (Case Study)

### 第1節 事例研究について

21世紀の日本社会は、少子高齢化が進行し、その一方で人口減少社会に転じている。しかし、グローバル化の進みにつれて、外国人留学生は急増し、2020年5月1日現在、約28万人になっている。紛れもなく日本は多文化共生社会である。当然ながら、多文化共生社会に対する社会保障政策・制度の整備、そのニーズの多様化・複雑化に対応できる議論が一層としていると考える。

社会福祉においては、在日外国人労働者や在日外国人留学生の個々人の生きてきた歴史、文化的背景を理解し、さらに、彼ら個々人の生活ニーズの発見から適切な生活支援について検討するのは時代的使命であろう。特に、在日外国人留学生の生活問題における生活の習慣・文化を尊重した生活支援のあり方の模索は喫緊の課題であると思われる。

今回の博士論文のテーマを「中国人留学生の生活支援—ケイパビリティ・アプローチの視点からの考察—」と設定している。具体的に、今現在日本の地域で生活している中国人留学生は、どうして日本に来て、どのような動機や目標を持って、生活上の苦しみや悩みはどこにあるのか、またどんな生活ニーズが必要で、どうして欲しいのかなどの現状を把握し、その背景、経緯、原因を整理し、実態を明らかにし、生活支援の視点から、さらに、生活困難の軽減、緩和、援助方法は何かを提示するいわゆる「根拠に基づく実践」研究を試みることにしている。

本研究では、谷中輝雄の生活支援の理念に基づいて、中国人留学生を「外国人」として扱うのではなく、「生活者」として、社会の側の外的条件（自由・平等・選択・機会・資源・権利）を社会福祉学の立場と、個人の側の内的条件（個人の特性・生活歴・文化的背景・価値観・自己認識・生活課題など）を中国人留学生の生活上の視点から個別事例分析を行った。

本研究において、個別事例分析を行った理由として、①質的研究の方法から調査対象者の特性に照らすこと、②事例研究は、質的調査研究の歴史の中でも今日においても、重要な位置を占めていること、③マイノリティとしての中国人留学生の異文化理解すること、④生活支援において全面的な背景を把握すること、⑤調査対象者は全部中国の出身者であり、筆者も中国の出身であることからインタビューには言葉の障壁がなく、調査研究のラポールの成立と倫理的問題の親和性などからも自らの研究目的と課題を遂行するに当たって、この個別事例分析は適合点が高いからのである。

#### 1. 調査対象者

本研究は、日本の大学に通学中の中国人留学生を対象として事例研究を実施した。調査期間は、2019年11月から2020年8月まで調査項目の調整や対象者の選定などを準備し、2020年9月に中国人留学生30名によるオンラインインタビュー調査を行った。

## 2. 調査方法

新型コロナウイルス感染症の影響によって直接会うことが困難のため、オンラインインタビュー調査を行った。オンラインインタビュー調査は、インターネット上で調査を行う手法である。ビデオ通話や音声通話で行われていた。

オンラインインタビュー調査のメリットは、①感染リスクを避ける。②ネット環境があればどこでもできる。③時間と場所の制限がない。④移動時間や移動費などのコストを抑えられる。⑤わずかな時間でもインタビューができる。⑥対象者は気楽に参加できる。⑦対象者は自宅などの場所で行うことでリラックスしてインタビューを受けることができ、よりプライベートに踏み込んだ話や正直な意見を引き出すことができると考えられる。

オンラインインタビュー調査のデメリットは、①通信環境や設備などでタイムラグが起きてしまうことがある。②声が聞きづらいことがある。

本研究のインタビュー調査対象者は、日本の大学で通学中の中国人留学生（30名）である。調査への同意を得られた対象者に対してインタビューを行った。インタビューは、対象者と筆者の1対1により、オンラインで中国語より実施した。インタビューは、対象者の同意のもとICレコーダーに録音記録した。

インタビュー時間は30分～60分程度で行うようにした。対象者ごとに時間の長さが異なっている。インタビューは、できるだけ自由に幅広い内容で話してもらえるよう挿入質問を行った。定めたとおりに質問するのではなく、話し手との自然な流れを乱さないように柔軟に質問を変えたり、使う言葉も柔軟に変えたりしていた。データは、インタビュー終始を逐語化したものであり、調査対象者1名あたり、A4用紙（1,200字、中国語）5枚から20枚である。

## 3. 調査内容

調査内容は、研究目的を明らかにするために、中国人留学生の生活全般を中心に調査（事例研究）を行った。インタビューガイドとして、①基本属性、②日本留学の動機および卒業後の日本での滞在理由と帰国理由、③日本での生活課題とその対処法、④来日前と来日後の自由・平等・選択・機会・資源・権利の比較（ケイパビリティ・アプローチと関連する重要な概念）、⑤自己認識（ケイパビリティ・アプローチにおける人の能力を評価する五つの要素と関連する質問）（表3-1）。どのように話せばいいかわからない、質問の意味を解釈することが難しい、あるいは自分から語ることが難しい対象者には、さらに詳細な挿入質問を交えることとした。対象者が答えやすいために、主に以下のような流れでインタビューを行った。



表 3-1 インタビュー調査内容

<p>1. 基本属性</p>	<p>1. 性別 2. 年齢 3. 出身地 4. 最終学歴 5. 来日年数 6. 教育機関 7. 専攻 8. 学年</p>
<p>2. 日本留学の動機および卒業後の日本での滞在理由と帰国理由</p>	<p>1. 日本留学の目的 2. 日本留学の理由 3. 卒業後の予定 4. 日本での滞在理由 5. 中国への帰国理由</p>
<p>3. 日本での生活課題とその対処法</p>	<p>1. 日常生活での悩みことや困難 2. 悩みことや困難の対処法 3. 日本文化と中国文化の違いについて 4. 日本の教育と中国の教育の違い 5. 日本で偏見や差別を受けた経験の有無 6. 偏見や差別を受けた時の具体的状況 7. 日中の歴史問題による影響の有無 8. どのような影響を受けましたか？ 9. 日本での印象深い人や事 10. 日本文化への適応状態 11. 異文化受容タイプ（統合・同化・分離・周辺化） 12. 日本文化への同化程度 13. 来日前後の社交力について 14. 普段よく付き合っている人は誰ですか？ 15. 日本での収穫 16. 日本での変化 17. 日本で高めた能力</p>
<p>4. 来日前と来日後の比較（ケイパビリティ・アプローチと関連する重要な概念）</p>	<p>1. 自由の比較 2. 平等の比較 3. 機会の比較 4. 選択の比較 5. 資源の比較 6. 権利の比較</p>
<p>5. 自己認識（ケイパビリティ・アプローチにおける人の能力を評価する五つの要素と関連する質問）</p>	<p>1. あなたの長所は何ですか？ 2. あなたの目標は何ですか？ 3. 資源変換能力はどうですか？ 4. 物質と精神はどちら重視ですか？ 5. 物質と精神のバランスの取り方 6. あなたは幸せですか？ 7. どんな事をすると幸せを感じますか？ 8. どんな潜在能力を持っていますか？ 9. 自分の潜在能力を引き出す方法は何ですか？ 10. 新型コロナウイルス感染症の影響について</p>

## 第2節 事例分析

以下では、中国人留学生の個別事例分析を紹介したい。個人が特定されないように、具体的な年齢、性別、出身地、来日年数などを示さないようにしている。

### 1. Aさんのライフヒストリー事例分析

Aさんは、留学生として来日した。最初は語学学校で一生懸命に日本語を勉強し、その後日本の有名大学に進学した。両親が離婚したことにより、大学2年生からアルバイトをはじめ、自分で生活費と学費を賄うようになった。両親が離婚する前に、日本でアルバイトせずに、全ての費用は両親からの仕送りで暮らしをしていた。

しかし、両親が離婚した後、Aさんが父にお金くださいと言ったら、父が母にもらってくださいと言われた。母にお金くださいと言ったら、母が父にもらってくださいと言われた。両親が急に誰もお金がくれなくなって、帰国もしたくないし、思い切って自分で稼ぐことを決めた。その後、朝6時から8時まで2時間のアルバイトをしてから、学校に授業を受けていく。授業が終わってから、中国人が経営するレストランでお皿を洗う仕事も始めた。お金を節約するため、できるだけ電車も乗らないようにしていた。家から学校まで歩いて40分、学校からアルバイト先まで歩いて1時間、アルバイト先から家まで歩いて1時間20分、アルバイトが終わって家に帰っていつも夜中の1時くらいになる。ルームシェアしていた中国人の友達が帰国したので、その友達から自転車ももらった。その後、自転車で学校やアルバイト先へ行くようになった。このような生活は1年以上を続けた。

Aさんの日本留学の理由は、「中国のいい大学への進学が失敗し、普通の大学に進学したくない。欧米の留学費用も高く、英語もそんなに流暢ではない。日本は先進国だし、日本製品も世界で人気がある。日本に興味もあるから来日した。日本で勉強し自分を変えて、人生を変えて、自己実現を果したい。また、日本で留学しながら、日本の社会や日本の文化を理解し、生活経験を増やして視野を広げたい」と語ってくれた。

Aさんの卒業後の帰国理由は、「中国は発展中なので、混乱しているけれども、同時に多くのチャンスも伴っている。日本での生活は快適だが、何だか物足りない気がする。日本人は融通がきかず、柔軟性が足りない。日本の社会は成熟しすぎて、分業も細かくて、社会全体がすでに定型化されていて、些細な変化でも非常に難しい。日本の友達も少なく、以前仲が良い中国人の友達も皆帰国した。日本で長くなると、闘志が失われやすくなり、考え方も単純になり、何も考えなくなってしまう。もしいつか帰国すると中国の環境を慣れなくなるかもしれない」という。

日常生活での悩みことについて、「一番の悩みことは、勉強と卒業後のことです。これからどんな仕事をするかよくわかりません。目の前のことがありすぎて、勉強とアルバイトをしなくてははいけません」。

悩みや困難の克服法について、「勉強の面では、無理せず少しずつ努力していけばいいです。経済の面ではお金を大事にして、必要ないものを買わない、できるだけ節約します。何かある時は、先輩や友達と相談してから決めます」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日中文化は両方とも儒教文化を尊重し、中庸を重視しています。しかし、国民性から見ると全く違います。中国人は大雑把、日本人は用心深い性格です。中国人は短期で怒りやすい、日本人は気長で我慢強いです」。

日本の教育と中国の教育の違いについて、「ある日、バイトの帰りに前に歩いている2歳ぐらいの子供が突然転んで、地面に伏せて倒れました。しかし、そばに立っているお母さんは何もせずにじっと子供を見つけて、全く子供を助けようとしません。それを見て私が我慢できずその子を抱き上げました。するとそのお母さんは少し不愉快な顔をして、何も言わずにすぐ子供を連れて行きました。その後、私が反省して自分は何か間違えたかなと思って、中国では子供が転んだら、親がすぐ子供を抱き上げる習慣があり、日本では中国の両親とは全く違って、子供が転んだら助けずに自分で立ち上がるのを見守っているのが普通です。だから、そのお母さんは私がやったことを『余計なことをするな』という顔をしたかなとようやく理解できました」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「差別されたことがある。ある日、少し小さな白いシャツを着てデパートで買い物をする時、隣にいるふたりの日本人から『やっぱり外国人は太っているね』と言われました。また、夜のアルバイト帰りに、よく警察から自転車をチェックされたり、在留カードをチェックされたり、外国人だからよく警察にチェックされるかなと思いました」。

日本での印象深い人や事について、「日本で何人かの親友と知り合いました。学校でもアルバイト先でも、親切な人がたくさんいます。日本人も優しく、道が迷ったら、案内してくれたこともあります。このような暖かい思い出がたくさんあります」。

日本文化への適応状態について、「日本での適応状態はいくつかの段階がありました。第一段階は、日本のすべてがいいなと思う時期です。第二段階は、好きでもなく嫌いでもなくボトルネック期です。第三段階は、飽きる時期です。例えば、日本人の新型コロナに対する対応法です。他人に迷惑をかけない日本人はどうしてコロナに対してあまり気にしないかよくわかりません。知り合いの日本人クラスメイトは『マスク嫌いです。どうなってもマスクをつけないよ』とみんなに言いました。しかも、コロナが怖くないからお酒を飲みに行こうと何回も誘われたことがあり、本当に訳かわからない人です。そして、大学での授業がつまらなくて、習っても何の意味があるがよくわかりません。ゴミを捨てることも面倒臭いです。特に、インターネットの発展が遅すぎます」。

異文化受容タイプは分離である。日本文化への同化程度は、「日本人と同じように挨拶する時、すぐお辞儀するようになりました。そして、大雑把な性格なのに、日本人と一緒にいる時非常に気をつけて、何か悪いことをしたのではないかと気を使うようになりました」。

日本での不自由について、「日本人と一緒にいる時、いつも気を遣って非常に疲れます。だから、あまり日本人と一緒に食事や遊びなどしたくありません。自由に食べることができなくて、半分しか食べられず、お腹いっぱいになりません。遊びも相手の気持ちを考えすぎて、好きなように遊ぶことができません」。

中国での自由について、「中国では、社会的ルールやマナーは日本みたいに厳しくありません。日本では、食事のマナー、座るマナー、歩くマナー、服装のマナー、温泉でのマナー、目上に敬語を使うマナーなど様々な制限があります。これもだめあれもだめ、ゴミも決まっている日に捨てなければなりません」。

中国での不自由について、「中国では、言論の自由以外に日本とほぼ同じだと思います」。

日本での平等について、「日本の国民皆保険制度から平等を感じます」。

日本での不平等について、「外国人に不平等です。例えば、外国人に部屋を貸さない物件が多いです」。

中国での平等について、「中国で同僚の間に先輩や後輩という地位の差がありません」。

中国での不平等について、「中国では、田舎の人や貧しい人がよく差別されます。しかし、日本では田舎の人だから、お金がないからとあまり差別されません」。

一方、Aさんは「どこの国でも大部分の国民は平等ですが、社会的特権を持っている少数のエリート階層があります。例えば、池袋の自動車暴走事件で死亡した母子の犯人に対する取り扱いは非常に不平等だと思います」と言った。

日本での機会について、「私から見れば日本でのチャンスは多いです。日本は発達した国ですが、国民は伝統的で古い考え方を持っている人がかなり多いです。社会全体も保守的で、新しいことに挑戦をする人が少ないです」。

中国での機会について、「中国は発展途上国なので、いろいろな点で未成熟で、チャンスも多いと思います」。

中国での選択範囲について、「就職において、中国の選択範囲が広いです。日本の有名大学の卒業生は、ほぼ日本の幾つかの限られている大手企業を選ぶしかありません。しかし、中国では、大手企業だけでなく、中小企業を選んで挑戦する人もいれば、自分で起業する人もいます。日本の優秀な人材の選択肢が少ないです。中国の優秀な人材の選択肢は広いです」。

来日前と来日後の資源の比較について、「中国に資源がないし、日本にも資源がありません。区別は、中国での知り合いは、住んでいる町にいる数人の友達だけです。しかし、日本では、様々な都市から来た中国人と知り合うことができます。いろいろな人と接することで私への影響も大きいです。教育資源なら日本の方が多いです。日本で有名大学への進学ができます。中国では絶対にできないと思います」。

来日前と来日後の権利の比較について、「権利がよくわかりません。中国では活動範囲が広いからもっと持つ権利が多く感じられます。しかし、日本では家の中だけで生活する権利だけを持っています。日本では、一人の国民ではなく留学生としての限られた権利しか持っていません。外国人の場合は、マイホームを買うことや会社を作る場合など何でも永住権が必要です。権利の面では中国と日本は比べられません」。

来日前と来日後の社交力の比較について、「社交力は日本にいる方がもっと強いです。中国でいろいろやりたいことがあっても親が認めないから、何もできません。日本では一人生活なので、何でも自分一人で解決しなければなりません。経験を積んでいけば、さらにもっと多くのことができるようになります」。

普段よく付き合っている人について、「以前、何人の仲いい友達が全部帰国しました。現在、日本に残っている仲いい友達は四五人しかいないです。知り合いの日本人のクラスメイトは何人かいるけど、普段の連絡が非常に少ないです」。

日本での収穫は、「日本での収穫は、一生の親友3人および彼女です。そして、先進国である日本での〇年間の生活経験および有名大学学歴です」である。

来日後の変化は、「来日後の考え方が変わりました。来日前はこれも欲しいあれも欲しい、いつもお金を稼ぐことばかりを考えていました。来日後、どうしたらより良い自分になれるかを考え始めました」である。

来日後高めた能力は、「日本語能力、英語能力、コミュニケーション能力を高めました」である。

自分の長所について、「私の長所は失敗を恐れず、挑戦することが好きで、好奇心や向上心および行動力があり、家族を大事にすることです」である。

自分の目標について、「勉強の目標は、さらに多くの知識を身につけることです。仕事の目標は、一人前になり、家族により生活環境を提供することです」である。

資源変換能力について、「人脈の資源なら一番得意です。もし友達から頼みごとがあればできることなら絶対に断りません。今、友達を助けてあげれば、次回に相手も助けてくれるから、このようにお互い助け合いながら友情も深めることができます」である。

物質重視と精神重視について、物質重視である。その理由は、「物質を重視していますが、精神も大切だと思います。精神状態が悪ければ、物質生活がいくら良くても無駄だと思います。例えば、毎日気分が悪くて、いくら美味しいものがあったても、豪邸や高級車があったても、楽しむことができません。でも、比べると、やはり物質がもっと大事です」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「普段、彼女や友達と一緒にいる時は、とても楽しくて幸せです」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は、前向き、向上心が強い、勇気がある、楽観的、好奇心旺盛、我慢強い、行動力があることです」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「たくさん勉強して、たくさん鍛えて、自分より優秀な人とコミュニケーションをとることです。たくさん勉強して、たくさん歩いて、いつも家にいて外出しないわけにはいかない」。

新型コロナウイルスの影響について、「外的影響は、外食や旅行、および友達に会うことができなくなり、アルバイトもやめています。内的影響は、自分が感染することをいつも心配しています。アルバイトもやめています。良い影響は、家でのおんびりすることができ、自分の体調や健康を気遣うようになりました。悪い影響は、体重が増えて太くなってしまい、収入も減りました」。

上述のように、Aさんは、現在の自身の状態を「アルバイトと勉強の両立がとても大変けれども、自分で稼ぐようになったことで、とても誇りに思う」と述べている。「でも、両親が離婚し、しかも誰もお金がくれないことに対してとても悲しいです」と言った。また、Aさんは「たまに、夜中に寝ている時に突然起きて、部屋の中を歩き回り、ウロウロと部屋の外に行こうとする行動もあった。ある時、悲鳴を上げたい気持ちもあった」。Aさんは、「今の新しいルームシェアの友達は、小学校からの知り合いなので、まるで兄弟みたい、お互いに助け合って生活している。しかも、現在は好きな彼女もできている」という。Aさんは、インタビュー中も自分の考えや気持ちを隠せず素直に話してくれた。また、自らの体験や感想を客観的に捉えることもできていた。そうした意味で、現時点でAさんは経済的による苦しいでいるけれども、ある程度精神的に満たされているのではないかと筆者が感じた。しかし、両親が離婚した後、誰もお金がくなくて、自分が捨てられた精神的苦しみは暫く続きそうであり、専門家より心理的な援助が介入することが望ましい。

## 2. Bさんのライフヒストリー事例分析

Bさんは、中国で約2年間を仕事したことがある。たまたまチャンスがあり、日本へ留学に来た。小学校からおじいちゃんとおばあちゃんと一緒に暮らしていた。そのため、自立性が高く、独力心も強いのである。Bさんは、「日本と中国での生活は、あまり変わらない」という。

Bさんの日本留学の理由は、「以前、日本での交換留学をしたことがあり、とてもいい国だなと感じて、その後日本に留学に来ました」である。

卒業後の帰国理由は、「様々な理由があるけど、主に家族のためです」。

日常生活での悩みことは、「主に日本語の問題です。ちゃんとした日本語の授業を受けたことがないから、ほぼ独学していたので、日本語の基礎がしっかりと把握していないので、論文を書くとき論理的に書くことが非常に難しいです」。

悩みことや困難の対処法は、「勉強の面では、無理にせず、少しずつ努力していけばいいです。経済の面ではお金を大事にして、必要ないものを買わない、できるだけ節約します。何かある時は、家族や友達と相談してから決めます」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本のいいところは、皆忙しいから、誰も他人のことを気にする時間がありません。余計なことも一切言われなし、このような希薄な人間関係が好きです」。

日本での印象深い人や事は、「多すぎです。例えば、大学で知り合った先生達とか」。

日本文化への適応状態について、「日本と中国の違いがほとんど感じません。どこにいても同じような感じがします」。

異文化受容タイプは、統合である。

自由について、「中国と日本での自由の差はあまり感じていません」。

平等について、「よく考えてみると、どこも同じかもしれません」。

中国での機会について、「中国と日本の発展方向が異なるから、自分の選択も違うと思います。例えば、インターネット業界なら、中国はチャンスが多いと思います」。

中国での選択について、「中国の様々な領域はまだ発展中なので、いろんなことを試すことができます。日本はすでに成熟しており、社会全体が変わりにくいです」。

資源について、「資源はすでに存在するものとこれから生じものがあります。これからどんな領域を選ぶか、どんな人生を送りたいのか、全て自分で資源を作り頑張るしかありません」。

権利について、「中国でも日本でもほぼ同じで、ほとんど差がありません」。

社交力について、「社交力は中国にいる方がもっと強いです。子供の頃からその環境に馴染んでおり、やりたいかあるいはやりたくないかの違いだけです」。

日本での収穫について、「日本での収穫は、日本式のコミュニケーション方法および仕事のやり方を学びました。以前の話し方は非常に率直で何も考えずにすぐ言う、今は少し考えてから言うようになっています。仕事も以前よりずっとまじめにするようになりました」。

来日後の変化は、「物事の考え方が少し変わりました。来日後、より客観的になりました」。

来日後高めた能力について、「判断力を高めました。中国でほとんどのことは親と相談していました。日本に来てから、親も日本の状況が分からないから、全部自分で先生や友達と相談して決めています」。

自分の長所について、「私の長所は、客観的、計画性があり、受容度が高く、分析力があることです」。

自分の目標について、「目標は早く卒業することです」。

自分の変換能力について、「資源によります。例えば、人間関係なら苦手です。専門的な知識なら得意です」。

物質と精神について、「物質重視です」。その理由は、「精神がもっと大事であり、物質的には普通にあれば十分です」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「私にとって幸せは平常の状態です。例えば、好きなものを買ったり、美味しいものを食べたり、小さな目標を達成したりなどで」。

自分の潜在能力について、「私の長所はすべて私の潜在能力です」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「適切なチャンスと環境が必要であり、他人と競争するときにもっと発揮しやすいと思います」。

新型コロナウィルスの影響について、「影響がかなり大きいです。収入が減り、すべての計画もほぼ停止状態です」。

### 3. Cさんのライフヒストリー事例分析

Cさんは、現在友達とルームシェアをしている。

Cさんの日本留学の理由は、「高校で日本語を習ったので、大学は日本で勉強したかったです」である。

卒業後の帰国理由は、「家族が中国にいるから、家族と近いところで暮らしたいです」。

日常生活での悩みことは、「日本では勉強しながらアルバイトもしなければなりません。非常に忙しくて試験の準備もしなければなりません」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「ある。アルバイト先の店長は中国人が嫌いみたい、いつも私を見つめて、些細なことがあってもすぐわあわあいろいろ言われます。あんまりにも不愉快だからすぐ辞めました」。

日本での印象深い人や事は、「見知らぬ人から声をかけられることが多くで、不思議です」。

日本文化への適応状態について、「日本人のはっきりしない、曖昧な言い方がまだ慣れていません。後は、日本のうどんや生の刺身と冷たいお弁当もまだ慣れていません」。

異文化受容タイプは、統合である。

日本での自由について、「日本に来てから『30歳結婚しなくてもいい、結婚すれば家を買わなくてもいい』という生き方があることに気づきました」。また、「自由というものは、どこに住んでいても、経済が独立すれば真の自由を得ることができます」。

日本での平等について、「日本はわりと平等と思います。努力すれば誰でも好きな大学に合格できます」。

日本での機会について、「日本は平等な社会であり、外国人であっても努力すれば日本人と同じように競争できます。中国では、複雑な人間関係が苦手な人であれば、機会が非常に少ないです。しかも、日本は労働力が不足しているから、競争もそんなに激しくありません」。

日本での選択について、「日本でやりたいことを選ぶと生きていけるが、中国でやりたいことだけをやると生きていけないかもしれません」。

資源について、「中国で利用できる資源がほぼありません。中国は人間関係の社会なので、私の性格は人に頼むことが苦手であり、自分で努力するしかありません。しかし、個人の努力だけでは、目標を達成することは難しいです。それに対して、日本では、努力すれば目標を達成することも可能です。だから、日本で利用できる資源は私本人です」。

来日後高めた能力について、「忍耐力を高めました。以前は、短気であり、飽きたらすぐやめます。今は嫌でも我慢して続けるようになりました」。

自分の長所について、「私の長所は、本を読むことが好きであり、何かする前にいろいろ考えてからやります。独立性があり、自分のことを自分でやれます」。

自分の目標について、「今、最も大事な目標は大学に合格することです」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「精神がもっと大切だと思います。物質なら少し我慢すればいいです。しかし、精神的には悲しくてコントロールが難しい場合があります」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「テレビや映画を見る時、好きな本を読む時に一番楽しいです」。

自分の潜在能力について、「私もどんな潜在能力を持っているか知りたいです。知っていれば、既に発揮しています」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「時間とエネルギーを使って、様々な活動に参加し、いろんな経験を積んで、徐々に刺激を得ることで引き出すことができると思います」。

新型コロナウエルの影響について、「主に経済的な影響です。アルバイトできないから収入が大幅に減少しました。メリットは、自分の時間が多くなり、やりたいことをたくさんやれるようになりました」。

#### 4. Dさんのライフヒストリー事例分析

Dさんは、一人っ子なので、大事に育てられていた。子供の頃から、自分がやろうとしたことは、親がいつもできるかぎり協力していた。今回の日本留学も同じである。

Dさんの日本留学の理由は、「卒業してからずっと大学院に入るか仕事に入るか迷って、結局日本の大学院に来て、日本のアニメを勉強することにしました」である。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本は静かでうるさくない、雰囲気が大好きです。アルバイトする時、上司や同僚も優しく、いつも熱心に教えてくれます。日本で勉強だけではなく、いろんな社会経験をして見たいです。卒業後、日本で1年か2年くらい仕事してから帰国しようかなと思っています」という。

日常生活での悩みことは、「主に言語問題です。学校では先生と何とか通じるけれども、アルバイト先では通じない時が多くて、特に年上の人との会話はほとんど聞き取れま



せん。大学受験のために、たくさんの資料も勉強しなといけないので、ストレスが溜まって、すぐにでも帰国する気持ちもあります」。

日本の教育と中国の教育の違いについて、「例えば絵を描く時、中国では、先生からいろいろな枠を指導され、先生の要求に応じて絵を描かなければなりません。日本では、先生がこのような要求は一切せず、自分で好きなように描きます。実際は先生が何も要求されないほうが描きにくいです。あまりにも自由すぎて、かえってどうすればいいかわかりません。日本では個人の考えをより重視し、思想的にも自由であり、こういうところが中国と違います」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「偏見や差別を受けたことがあります。家を借りるときに外国人には貸さないと言われました。そういうことは理解できるけれども、そんなやり方は受け入れられません」。

日本での印象深い人や事は、「夜中、地震があり、携帯電話の警報音も怖かったです。そして、日本のコンビニの便利さ、郵便局や銀行がこんなに早く閉店するなど、かなり印象的です」。

日本文化への適応状態について、「日本の留学生活にとっても満足しています。ずっとこのまま日本で静かに暮らしていきたいなと思います。学校での勉強とアルバイトも順調に進んでいます」。

異文化受容タイプは、統合である。

日本での自由について、「勉強での自由が感じます。例えば、絵を描くとき、日本の先生は何も言わずに、自分で考えて絵を描くようにしています。中国の先生は、いろいろな枠を決めて、その枠の中で絵を描かなければなりません。日本は個人的な考えを重視し、思想的には自由です」。

日本での不自由について、「日本人は時間やルールに厳しいから、いつも緊張してのんびりできません」。また、自由について、「どこにいでも自由を得るために、多くの不自由なことをしなければなりません。絶対的な自由はどこにもありません」。

平等について、「日本と中国はほぼ同じです」。

日本での機会について、「日本の若者は大学院への進学率が低いので、大学院進学なら日本の機会が多いです」。

中国での機会について、「アニメ関係の仕事なら、中国はチャンスが多いと思います。中国のアニメ業界はまだ上昇段階にあり、日本は飽和状態となっています」。

日本での選択について、「日本の学習資源が豊かだから、仕事を探すこともそんなに難しくないとします。日本で普通の仕事をすれば生活できます」。

資源について、「よく考えれば私は本当に何の資源もありません。もしあるとしたら、一緒に住んでいるルームメイトや学校の先生、および潜在的な人脈関係です。これらの資源を利用するより自分が強くなるのが最も大事です。そのため、自分の能力を高めることが一番大切です」。

普段よく付き合っている人について、「日本での時間がそんなに長くないので、知り合った友達もそんなに多くないです。ルームメイトと一緒に住んでいるから、かなり助かります」。

来日後の変化は、「来日前、衝動的であり、来日後、理性的になりました。性格が落ち着くようになり、思考方法が柔軟的になり、物事を別の角度から見るようになりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、計画力を高めました。例えば、試験の準備、お金の使い方などです。日本の教育は学生の考え方を重視しているので、思考の独立性を鍛えます。考え方が多様化しました。以前よりもっと自信を持つようになりました」。

自分の長所について、「私の長所は、真面目です。しかし、たまに真面目すぎて融通がきかなくなることがあります」。

自分の目標について、「短期の目標は、大学に合格することです。長期の目標は、好きなことをやることで達成感を楽しむ、将来は良い会社やチームに入って、私の作品がもっと多くの人に見せられることです」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「精神面であるべきです。お金があれば必ず幸せになれるとは限りません」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「私の幸福感は達成感から由来します。例えば、描いた絵は先生に褒められるととても幸せです。また、電話で家族と楽しい会話をする時もとても幸せです」。

自分の潜在能力について、「私は人とのコミュニケーションが大好きな性格です。何かわからないことがあればすぐ相手に聞きます。多くのことはコミュニケーションによって解決できると思っています」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「勉強を我慢強くして、最善を尽くしてよく反省することです」。

新型コロナウエルの影響について、「コロナの影響で気づいたことは、新興産業の抵抗力が強く、伝統的な産業はたくさん倒産しました。これから就職する時、必ず新興産業を選ぶようにしなければなりません。悪い影響は7月の試験は12月に延期になりました。一生懸命に準備したのに残念です。良い影響は、自分で学習計画を立てて、たくさんの過去問題をやりました」。

## 5. Eさんのライフヒストリー事例分析

Eさんは、現在、彼女と同居生活している。二人とも日本が大好きで、卒業後、日本で就職する予定である。

Eさんの日本留学の目的は、「大学院に進学するため日本に来ました。卒業してから日本で二、三年間仕事してから帰国するつもりです」という。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本の『道に落とし物を拾わず』というところがとても感動しています。財布や携帯が失って、その後全部戻ってきたことがありました。日本社会も平和であり、国民も優しいし、医療や食品も安心感があります」である。

日常生活での悩みことは、「日本で知り合いが少ないので、中国にいる家族や友達とも長く会えないし、彼らとのコミュニケーションが取りづらいです」。

悩みことや困難の対処法は、「嫌いなことは無理にしない、できるだけ好きなことをします。苦手な人ならできるだけ接しないようにします」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本と中国の違うところは、人と人の中に一定の距離感があり、公私がはっきりしていることです。日本人は相手のプライベートを尊重し、他人のプライベートを干渉しないことです。アルバイト先の日本人の同僚は友達になりにくいです。中国ではどんな関係でも友達になれます。このような人間関係であれば、確かに仕事をしやすいです」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「偏見や差別を受けたことはありません。普段、差別ということをおもひにしています。たまに不愉快なことがあっても、外国人や中国人だからということではなく、相手がその時気分が悪いだけかもしれないと考えています。ほとんどの日本人は例え外国人が嫌いとしても顔には現れないから、例えある中国人が嫌いでも、全ての中国人が嫌いではありません」。

日本文化への適応状態について、「日本社会があまりにも成熟しすぎです。だからどこも変わらず、日本人や日本の会社もあまり融通がきかないと思います。それが良いところでもあり悪いところでもあります。このところは私に影響を与えるかもしれない、変えたいと思う時もあるし、変えられなければ適応していくしかありません」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「元々細かい性格ですが、日本に来てからもっと細かくなりました。また、仕事は仕事、プライベートはプライベート、はっきり分けるようになりました」。

日本での自由について、「日本社会では受容度があり、他人に迷惑をかけなければ、様々な生き方ができます。また、精神的、思想的な自由があります」。

日本での不自由について、「仕事の面では、日本の会社は融通がきかない、柔軟性はありません」。また、自由について、「中国では、『人生、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳従う、七十にして心の欲する所に従う』という諺があります。これも自由に対する解釈であり、世界で通用すると思います」。

日本での平等について、「日本は表面的に平等です。本質を考えると、不平等はどこでも存在しています。日本人は中国みたいに貧乏な人や田舎の人を差別しません。礼儀正しさやマナーを通して本人の人格の高さを表しています。中国はお金や高級な車などを通して自分の偉さを表しています。つまり、日本人は人格の素晴らしさで自己評価します。中国人はお金や物などを通して自己評価します。これらも平等の表し方だと思います」。

機会について、「中国のチャンスが多いけど人口も多いから競争が激しいです。日本はそんなにチャンスが多くないけど人口が少ないから競争が緩いです。区別は中国では狼が多い、日本は羊が多いです」。

日本での選択について、「人脈以外に、日本の選択範囲がかなり広いと思います」。

中国での機会について、「中国の人脈が多いから、もちろん選択範囲も広いです」。

資源について、「資源なんかありません。お金を除いて、アルバイト先の同僚やクラスメートのような人脈しかありません。それ以外に、インターネットを利用して収集した情報です。私は友達と一緒にお酒を飲んだり、食事をしたり、一緒に遊んだりすることが苦手なので、これは欠点だと思います。つまり、人脈の資源を利用できない人間です。日本の医療資源が多いと思います。様々なクリニックがあるから非常に便利で、医師への信頼度も高いです。中国の大病院に行くときだけで疲れます」。

権利について、「どこに住んでも本当の権利は持っていません。生きている権利しかないと思います。日本ではもっと尊重されているような感じがします。それは日本人の教養の高さと礼儀正しさとの関係があると思います」。

普段よく付き合っている人について、「普段よく付き合っている友達は、主に中国の友達です」。

来日後の変化は、「日本社会は非常に平和的であり、このような雰囲気の中で心も穏やかになりました。来日前は劣等感があり、来日後は自信を持つようになりました。来日前

はすぐ怒る、来日後はそんなに怒らないようになり、いろんなことを受けとめるようになりました」。

自分の長所について、「私の長所は、辛抱強い、自己反省、明るい、楽観的、積極的、受容度が高いなどです」。

自分の目標について、「卒業後、よい仕事を見つけて、英語の受験を合格することで」。

物質と精神について、「物質重視です」。その理由は、「現在なら物質がもっと重視です。物質が一定のレベルになれば精神を追求します」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「家族と一緒にいると安心感がありとても幸せです。たまに公園で座っている時だけでも幸せです。欲しいものを買った時も幸せですが、物質からの幸せはあまり長く続きません」。

新型コロナウイルスの影響について、「良い影響は、家にいる時間が増え、英語を勉強したり、本を読んだり、自分を高めるいいチャンスだと思っています。悪い影響は、今年帰国できず家族と会えなくなりました」。

## 6. Fさんのライフヒストリー事例分析

Fさんは、親が会社を経営しているので、経済的にかなり豊かである。アルバイトしてもお金のためではなく、社会経験を積むためであると言った。毎月、親からの仕送りで暮らしている。

Fさんの日本留学の理由は、「親戚は日本にいるので、親が高卒後日本に留学に行きなさいと言われたから、日本に来ました」である。

卒業後の日本での滞在理由は、「卒業後、日本で会社をつくりたいです。親戚も日本にいるので、一緒に仕事をしたいです」。

日常生活での悩みことは、「普段やるべきことがいっぱいあって、何をすればいいかわからなくなってしまいます」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本人は人との付き合いは表面的であり、距離感を感じます。だから日本でうつ病になる人がこんなに多いのは、彼らがお互いに話し合う相手がないからではないかと思います。何でも我慢して、我慢強い人は素晴らしいと思っている」。

日本の教育と中国の教育の違いについて、「普通の勉強では、日本の先生たちがあまり何も言われません。宿題しなくても叱れません。中国で全く違うから、先生はかなり厳しくて勉強や宿題などしなくてはなりません。しかし、無理にされるほど勉強をしなくなります。日本の先生のように、何も言われなほど、自分で勉強するようになります」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「偏見や差別を受けたことがあります。差別されるとしたら、自分の能力や実力が足りないということをしめています。しっかりとやるべきことがやれば誰も差別しません」。

日本での印象深い人や事は、「日本に来て、初めて学校に行った時、駅から出て、あっちこっち行っても学校が見つからず、ある日本人に聞いて見たら、彼がわざわざ学校の近くまで案内してくれました」。

日本文化への適応状態について、「日中文化の違いはあまり気にしていません。どこでも同じような気がします。ただ、日本語が聞き取れない時があって、恥ずかしいから聞き返すことができません。日本語をもっと上手にならないといけないと思います」。

異文化受容タイプは、統合である。

日本での不自由について、「日本の大学で勉強は自由ですが、もし卒業できなければ不自由です」。

中国での不自由について、「勉強において、中国では本当に不自由です。親や学校および同級生など周りのすべての人たちに監視されて、勉強しなければなりません。例え、勉強したくてもしたくなくてもしなければなりません。そのため、勉強を嫌いになります」。

また、自由について、「中国では外的な力に制約され、日本では自分の力で制約されます。本当の自由は、したくないことはしなくてもいいことです。ですから、私は中国でも日本でもどこでも本当の自由がありません」。

日本での平等について、「日本では平等か不平等の問題は誰も気にしていないような気がします。日本人はお互いに尊重し合い、どんな仕事をやっている人に対しても軽蔑や差別をしないから、心の中でどう思っているかは分からないけど、少なくとも顔に出ません」。

中国での不平等について、「中国は貧富の差が大きいから、富裕層の人はますますお金持ちになり、貧乏人はますます貧乏になります」。

日本での機会について、「日本に住んでいる中国人として、日本と中国の架け橋になりたい。そうすれば、両国のチャンスを掴むことができます」。

日本での選択について、「私が卒業後やりたい仕事は、日本での市場が広いです」。

中国での機会について、「中国のインターネットと配達サービスが発達しているから、衣食住などの日常生活は中国の選択範囲がもっと広いです。何でもオンラインで解決することができます」。

資源について、「日本で利用可能な資源は周りの友人です。何かある時に彼らと相談します。お金の資源なら中国にいる親から貰います」。

来日後の変化は、「来日後、質的な変化が現れました。まずは視野です。来日前に毎日身の回りのつまらないことばかりしか見えないし、どんなことにも関心がない、来日後は好奇心が非常に強くなり、日中関係・米中関係などの国際的な事に関心を持つようになり、昔に嫌いな歴史や政治、経済などにも興味を持つようになりました」。

自分の長所について、「私の長所がよく知らないけれども、短所がよく知っています。例えば、怠け者であり、行動力がありません。好きなことは、人とコミュニケーションを取ることです」。

自分の目標について、「現在の目標は、早く大学を卒業して、日本で会社を作ることです」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「物質と精神が半分ずつです。普段は物質をそんなに重視していないが、しかし、ないと生活できません。精神的な追求は無限だと思います。もっと多くの物質を得るには、まず脳を充実しなければならぬと思います。両者は相補的で、どちらも欠かせません」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「友達と一緒にドライブに行く時が一番幸せです。遊びに行く時が一番幸せです。帰国時に飛行機から降りた瞬間も幸せです。そして、自分で問題を解決した瞬間の達成感と満足感からも幸せを感じます」。

自分の潜在能力について、「日本語能力が向上すれば、今まだ発揮できていない社会力やコミュニケーション能力、リーダーシップも著しく向上するはずです」。

新型コロナウエルスの影響について、「私にとって大きいな影響がありません。しかし、毎日家にいると、うつになりそうです。毎日家で日本語を勉強したり、テレビをみたり、ゲームをやったり、外との接触はほぼありません。幸いなのは、親からお金をもらっているから、アルバイトをしなくても大丈夫です。経済的に問題がありません。大自然の前では、人間は小さい存在です。自然を大切にしなければならないと思うようになりました」。

## 7. Gさんのライフヒストリー事例分析

Gさんは、来日前に中国の看護師になるための専門学校で学んでいた。将来、優秀な福祉人材になるため、来日した。来日後、老人ホームでのアルバイトを見つかり、仕事が大変けれども一生懸命に頑張っている。

Gさんの日本留学の目的は、「わざわざ日本の福祉を勉強に来ました。卒業してから日本で何年間か働いてから帰国するつもりです」という。

卒業後の帰国理由は、「卒業後に仕事を探すなら、中国で仕事を探してくださいと親から言われました。一人だけ日本にいると心配するから、私自身は日本で仕事したいと思っています」。

日常生活での悩みことは、「日本での留学生活は本当に大変です。中国では勉強することだけやればいいのに、日本ではアルバイトや家事などすべて自分でやらなければいけません」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日中文化の違うところは多すぎです。まず、日本人の生活習慣が健康的で、だから長生きの人が多いです。日本人の独立性が素晴らしいです。一人でやる仕事なら一人でしっかりやる。皆でやる仕事なら皆と一緒に完成します。しかし、日本人のよう何も言わない性格はあまり好きではない、相手の本心を知るのが難しいです」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「偏見や差別を受けたことがあります。日本に来たばかりの時、日本語が下手だから、いじめられることがありました。でも、今はほぼありません」。

日本での印象深い人や事は、「日本に来たばかりの時、買い物で帰りの時、どうしても自分の家が見つからなくて、ある日本人に聞いて見たら、すぐ案内してくれました。この件は、日本に対する暖かい初印象です」。

日本文化への適応状態について、「日本での生活はかなり満足していますが、日本での人間関係に困っています。中国人は距離が近いから人間関係が上手くいくと当たり前に思っています。しかし、日本人は他人と距離間を保っていても仲良く付き合うことができます。どうしてですか？よく分かりません。今は私も日本人みたいに人との距離を取るようになっています。非常に困惑しているので、人との付き合いがますます怖くなってしまいました。これからどうすればいいかよく分かりません」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「日本人と同じように自分のプライベートのことを他人に言わないようになり、他人のプライベートを聞かないようになりました」。

日本での自由について、「日本では他人のプライベートを尊重するところに自由度を感じます」。

中国での不自由について、「中国では、個人のプライバシーへの干渉は親戚の挨拶用語です。会う度に、成績、仕事、結婚、給料など平気に聞かれて、本当に災厄です」。

日本での平等について、「日本で区役所などの公的機関に行く時、必要な資料を提出して、番号をとって、必要な資料を提出したら、順番にやってくれます。そこの職員さんもしっかり優しいから、尊重と平等を感じます」。

機会について、「チャンスと言えば、個人の能力によるものであり、能力のある人ならどこでもチャンスが多いと思います」。

日本での選択について、「日本でしたいことを選び、自分の気持ちに従えばいいです。誰も干渉せず、他人のことを気にする必要もありません」。

資源について、「日本での最大の資源は学校の先生です。先生からたくさんのアドバイスを貰うことができます。また、先輩たちから様々な意見もあります。そして、インターネットを通じて収集した多くの情報です」。

権利について、「日本の法律は中国よりはもっと整備されています。例えば、国民皆社会保険、児童を守る児童福祉法、母子を守る母子及び父子並びに寡婦福祉法、年寄りを守る老人福祉法、障害者を守る障害者福祉法、貧しい人を守る生活保護法などがあります。多分日本は福祉国家だから、これらの法律は普通の国民にかなり普及しているような感じがします」。

普段よく付き合っている人について、「普段、よく付き合っている友達は主に中国人が多いです。アルバイトで知り合った日本人との交流が少ないです。ルームメイトと二人で助け合いながら暮らしています。しかし、他のクラスメイトとの連絡もそんなに多くありません」。

日本での収穫について、「日本に来てから、新しい目標や夢を見つけました」。

来日後の変化は、「来日後、生活習慣と思考方式が変わりました。生活習慣において、来日前は不健康な食べ物をたくさん食べたり飲んだりした。来日後は健康意識が強くなり、もっと健康な食生活を始めました。思考方式において、来日前は学歴ばかり考えていました。来日後は学歴より自分が本当にやりたいことを大事にするようになりました。来日前は結果を重視し、来日後は過程を重視するようになりました。現在、結果はどうでもいいから、過程を楽しむことが最も大事であり、最後は成功しても失敗してもあまり気にしません」。

来日後高めた能力について、「問題解決能力を高めました。中国では何かあると、いつもすぐ親に電話して助けを求めています。日本でも親に電話できますが、ほとんどは自分で問題の解決方法を考えるようになりました」。

自分の長所について、「多くの人から親切と言われました。これが私の唯一の長所かもしれない」。

自分の目標について、「現在の目標は、修士論文を完成し、できるだけ早く卒業することです」。

自分の変換能力について、「資源変換することをあまりしたことがないです。人脈を利用することが苦手です。他人にお願いする時はとても恥ずかしくて、なかなか言いづらいです。しかし、私自身をもっと価値のあるものを生み出すことができると信じています」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「私はもっと精神を重視する性格だと思います。例えば映画ときれいなドレスの場合は、きっと映画を選びます。私は物質をあまり気にしません。食べたり飲んだりして、人の最も基本的なニーズを満たすことができればいいです」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「私はとても満足しやすい性格です。幸福感を得ることが得意です。例えば、美味しいものを食べたら一日中も幸せです」。

自分の潜在能力について、「この質問はあなたに聞きたいです。私もどんな潜在能力を持っているか知りたいです。普段このことをあまり考えたことはありません」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「できるだけ仕事の過程でもっと多くの経験を積むべきだと思います」。

新型コロナウエルの影響について、「私にとって一番大きな影響は、帰国して調査することができなくなりました。普段の生活も不便で、夏もマスクをしなければならないです」。

## 8. Hさんのライフヒストリー事例分析

Hさんは、現在、彼氏と一緒に暮らしている。卒業後、二人は結婚する予定です。Hさんは帰国したいけれども、彼氏は日本に残したいから、帰国するかどうかまだ決めていないようである。

Hさんの日本留学の目的は、「海外で視野を広げ、海外で生活して見たかったからです」である。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本のいいところは、日本人が真面目であり、礼儀正しくて教養があり、公共施設も良くて、サービスもいいし、生活水準が高くて、食品も安全です。日本の人間関係もとても単純であり、毎日の気持ちが落ち着くことができ、生活も穏やかで、いつも幸せを感じることができます」と語った。

日常生活での悩みことは、「日本での生活リズムは中国より早い、中国でアルバイトする必要もないし、家族もそばにいます。日本では友達も少ないし、日本人と本当の友達になることがなかなか難しいです」。

日本の教育と中国の教育の違いについて、「喫茶店でアルバイトをしている時、店長の娘が偶に店に遊びに来ています。閉店した後、掃除する時、店長の娘も手伝ってくれます。その時、店長がいつも自分の娘に「ありがとう、ありがとう」と言います。日本では自分の家族に「ありがとう」や「ごめんなさい」というのが当たり前かもしれないが、中国では家族や親友とかにあまり言わないから、言うとかえって疎遠になったような気がします」。

日本文化への適応状態について、「日本での生活がいい感じがします。日本人は仕事で融通が効かない、人間関係が薄いというところが少し気になります」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「日本で小さいミスや失敗などますます怖がるようになりました」。



中国での自由について、「中国では家族がいるから、お金のことを考えたことはありません。日本では自分でお金の管理をしないとイケません」。

日本での平等について、「日本の貧富の差が小さいから、ここから平等と感ずます」。

中国での機会について、「日本人は一本調子で、中国人は柔軟性を持っています。これから中国のチャンスも多いと思います」。

中国での機会について、「日本でアルバイトの場合でも休みを取ることが難しいです。少なくとも一週間前か二週間前に上司と相談しないとイケません。例えば、急に体調が悪くなり、用事がある時も上司にかなり言いにくいです」。

権利について、「日本で感ずたよい権利は、例えば子供の教育において、金持ちの人も貧乏な人もほぼ同じくらいです。どの学校に行っても大丈夫であり、しかも基本的に無料です。しかし、中国の幼稚園は高いところは本当に高いです。中国の子供が多いから、競争も激しいし、いい学校に入るにはかなりお金をかかります」。

普段よく付き合っている人について、「日本の友達が少ないです。彼氏と一緒に住んでいます」。

来日後の変化は、「来日後の変化は生活習慣です。日本人はきれい好きで、私もきれい好きになりました。毎日、部屋の掃除やシャワーをするようになり、環境や自分がきれいになる事は精神的によい影響を与えます。それ以外は、自立性です。日本で頼れる人がいないから、以前よりもっと自立できるようになりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、主に日本語能力を高めました」。

自分の長所について、「私の長所は、真面目であり、責任感が強く、勉強好き、細かいところ気がつく、綺麗好き、優しいなどです」。

自分の目標について、「私の目標は、自己実現することです」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「もちろん精神が大事です。物質の有無は気にしません」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「旅行に行った時、および友達と一緒にいる時も幸せです」。

自分の潜在能力について、「やりたいことなら最後まで頑張ることできるのが私の潜在能力であると思います」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「勇気を持ってできる限り試してみる。失敗を恐れずに実践してみる。一旦やってみたら思ったほど難しくないかもしれません」。

新型コロナウエルスの影響について、「帰国したくても帰れません。旅行に行きたくても行けません」。

## 9. Iさんのライフヒストリー事例分析

Iさんは、日本での生活は大好きであり、日本旅行も大好きなのである。将来、日本と中国の架け橋のような人材になりたいと語った。

Iさんの日本留学の理由は、「中国の大学で勉強したくないから、環境を変えて見たかったからです。しかも日本のアニメも大好きで、日本と中国も近いし、だから日本に留学に来ました」という。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本が大好きで、日本で暮らしたいです。中国の間関係が複雑であり、日本の方が単純です。仕事とプライベートをはっきり分けており、生活しやすいです」である。

日常生活での悩みことは、「一人暮らしなので、やることも多いです。例えば経済面では、できるだけ収支のバランスを取り、親の大事なお金を使わないようにしなければなりません。一方、日本人との付き合いは中国人と違うので、日本の文化や生活習慣がわからないと誤解が生じやすいです。日本人の自閉的なところはあまり好きではありません」。

悩みことや困難の対処法は、「経済的には、普段アルバイトをしながら、奨学金も利用しています。学校の部活に参加することで、多くの日本人の友達と知り合うことができます。時間があればできるだけやりたいことをたくさんやります」。

日本の教育と中国の教育の違いについて、「日本人の親の教育方法は中国と全然違います。中国のように学費や生活費など全部親から貰うのではなく、日本の学生が高校や大学からアルバイトします。日本では全部親から貰うのではなく、学費や生活費を自分で稼ぐ学生が多くいます。アルバイト先で知り合った同僚が最近車を買いました。その車を買うお金は半分が自分のお金、半分が親から借りたお金です。彼は毎月給料の一部を親に返しています。中国人では、基本的親から貰ったお金は返す必要がないから、そこは日本と違って、日本人の親や兄弟姉妹の間でお金を分け合っているの、他人みたいな感じがします」。

日本文化への適応状態について、「学校の部活に参加する時、先輩と後輩の関係がはっきりしていることが気になりました。例えば、先輩と話すときは敬語を使わないと、先輩が不愉快そうでした。最初は気付きませんでした。その後気付いてからなるほどとやっとわかりました」。

異文化受容タイプは、統合である。

日本での自由について、「中国で親や先生たちはいつも「勉強なさい、宿題をやりなさい」などばかり言われて本当にうるさいです。しかし、日本の先生はあまり言わないから、自分で好きな時間に勉強することができます。これは日本で感じた自由です」。

日本での平等について、「日本では、東京の出身でも、田舎の出身でも、地域差別が小さいです。また、大都市と地方の教育レベルほぼ同じで、誰でも良い教育を受ける機会があり、良い仕事を得る機会もあります」。

中国での平等について、「中国は男女平等です。しかも、家庭内では女性の地位は男性よりも高いです。上下関係も日本ほど厳しくありません」。

日本での機会について、「私は、中国語ができるし日本語もできます。中国の文化に詳しいし、日本の文化も詳しいです。周りの留学生は対日貿易の仕事をかなり見つけています」。

日本での選択について、「日本の教育レベルはどこでも同じくらいです。勉強したい専攻があればゆっくり選んだらいいです。仕事も同じです。中国で就職したことがないけれども、親の話によると、中国で仕事を探す時に、学歴や人脈などが大事であり、競争も激しくて、本当のやりたい仕事を見つけるのは非常に難しいです」。

資源について、「日本での資源は留学生と関係のある日系企業です。人脈は、イベントに参加するとき知り合った日本の友人や在日中国人です。知り合いはそんなに多くないけれども、仲の良い友達が何人います。そして、学校で学んだ知識も私の資源であり、日中

文化についての理解も資源です。中国の資源は主に親の資源であり、親の資産と人間関係です」。

権利について、「外国人として、日本で選挙権や被選挙権がありませんが、全く気にしません」。

普段よく付き合っている人について、「東京にいる時は、中国人の友達が一番多かったです。現在の国立大学に進学した後、東京から離れて中国人との付き合いが少なくなりました。現在の学校は留学生が少ないので、大学の部活を参加しているけれども、友達もそんなに多くないです」。

来日後の変化は、「来日後の変化は主に考え方の変化と独立性の変化です。考え方において、今まで中国人として形成した生活習慣や文化習慣などは当たり前のことと思いましたが、日本に来てから、日本の生活習慣や文化習慣を経験して、中国の当たり前のことは日本で当たり前ではなく、日本の当たり前のことは中国で当たり前ではありません。独立性において、来日前、生活の面ではすべて親が世話してくれました。来日後はすべて自分でやるようになりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、観察力を高めました。普段よく日本人と中国人の違いを観察して、その理由を友達に聞いたり、自分で調べたりしています」。

自分の長所について、「私の長所は、様々な人とコミュニケーションをとり、聞き上手な点だと思います」。

自分の目標について、「今の目標は、日本のすべての地域に行ってみることです。現在は日本の半分以上の地域に行きました」。

自分の変換能力について、「資源転換能力はまあまあ有ると思います。例えば、アルバイトの仕事は、殆ど友達から紹介してくれたものです。旅行に行く時も、友達と一緒にいたり、あるいは友達の家で宿泊したりしています」。

物質と精神について、「物質重視です」。その理由は、「物質をもっと重視していると思います。もちろん物質的にも精神的にも両方が豊かであれば最高です。今はしっかりコントロールしているので、バランスがよくとれています。勉強の時はしっかり勉強する、アルバイトの時はしっかりアルバイトする、休憩する時はゆっくり休む、できるだけやりたいことをします。もし一定の物質レベルを維持できなければ、現状も維持できません」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「例えば、旅行に行ったり、買い物をしたり、ゲームをしたりなどの時は楽しくて幸せです」。

自分の潜在能力について、「リーダーと管理者になりたいので、指導や調整などのことが好きです。他人が解決できない問題を解決できるように努力できることが私の潜在能力であると思います」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「多くのところに行ってみて、多くの人の意見を聞いてみる。洞察力を高め、視野を広げて普段よく考えることです」。

新型コロナウエルの影響について、「私にとって一番大きい影響は、今年、親が日本に来ることができなくなった点です。私も帰国することができなくなったことです」。

## 10. Gさんのライフヒストリー事例分析

Gさんは、勉強が大好きで、来日後独学で様々な資格をとった。

Gさんの日本留学の理由は、「当時、中国の大学で経営を勉強しました。日本に来て日本語を勉強してから、中日貿易関係の仕事をしたかったです。しかし、日本に来てから福祉を勉強して、ようやく一生も続けたい仕事を見つかったような気がします」という。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本で好きなことをしたいです。福祉と関わる仕事、例えば、老人ホーム、NPO、人材交流などの仕事をしたいです」。

日常生活での悩みことは、「今、一番の悩みは論文です。それ以外に、勉強したこと多いし、やりたいことが多い、時間が足りません」。

悩みことや困難の対処法は、「時間が足りない時は、スケジュールを作ります。大事なことを先にやって、どうでもいい事はしなくてもいいです。日本人との付き合い方がわからなければ、時間がたつと段々分かってきます。日本人は曖昧な言い方をする人が多いから、本当の意味が分からなければ直接に聞けばいいです。外国人だから、理解できないのが当たり前です。知らないのに知るふりをするとう誤解が生じやすいからしない方がいいです」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「日本で差別されたことはありません。日本では、ルールに違反しなければ、他人に迷惑をかけなければ、ほぼ差別されません」。

日本での印象深い人や事は、「日本に来たばかりの時、日本語もあまり喋れません。ある日、自転車でアルバイト先に行きました。途中で自転車が壊れて、修理する場所もなく、困っていると、ある日本の方が、何も言わず修理してくれました。その後、日本人はとても親切だという印象が残りました」。

日本文化への適応状態について、「日本での生活は、勉強とアルバイトを両立することで、中国よりかなり充実していると思います。勉強したいことがたくさんあるし、勉強するチャンスも多いです。外国人を最も困惑させたのは日本人の曖昧さです。日本人の本当の意図を知るのが難しいです」。

異文化受容タイプは、統合である。

中国での自由について、「日本では、留学生としての身分だけが不自由と感じます。例えば、留学生に対するアルバイトや就職の制限があります。中国では、大学院の学生はもっと自由に自分がやりたいことができます」。

日本での平等について、「日本では、収入が高いと高いほど税金が高くなり、収入が少ないと少ないほど税金も低くなります」。

日本での不平等について、「仕事の面では、外国人にはまた不平等と感じます。例えば同じ仕事であれば、外国人と日本人がいれば、日本人を選ぶ会社が多いようです。また、給料も不平等です。知人が勤務している会社では、同じマネージャーの場合は、日本人のマネージャーの給料は外国人のマネージャーよりずっと高いです。外国人が日本の会社で出世することも難しいことがよく知られています。しかも、こんなことは、少数の会社ではなく、たくさんの会社で見られることです」。

中国での不平等について、「教育において、中国の地域差があります。大学への進学も地域ごとに点数も違います。中国と日本の人口の差が大きいから、教育体制も違うし、比べられないかもしれません」。

日本での機会について、「勉強の機会があれば、日本でのチャンスはかなり多いです」。

中国での機会について、「仕事のチャンスと友達作りのチャンスなら、中国が多いと思います。日本人は内向的で、自分の世界に閉じこもる人が多いからです」。

機会について、「チャンスは自分が関心のあること、および時間をたくさん使ったことに存在すると思います」。

中国での機会について、「さっきの自由と同じで、留学生の身分として制限していることが多く、中国にいるなら選択範囲はさらに広がります」。

資源について、「まず言語の資源です。日本語ができるから、多くの日本の友達を作ることができます。また、日中翻訳の仕事もできます。日本の人脈を通して、お互いに勉強をしたり、仕事をしたりなどのことができます」。

権利について、「日本で留学生としての身分に様々な制限があり、仕事と勉強は両立できません。留学生は社会人と全く違います」。

普段よく付き合っている人について、「日本でいろんなイベントや活動に参加しています。友達はそんなに多くないけれども、まあまあ普通です。一緒に勉強する友達、アルバイトの友達、旅行に行く友達など何人がいます」。

来日後の変化は、「来日後、性格が良くなりました。来日前、短気であり、自己中心で非常にわがままです。来日後、福祉を勉強してから、他人の立場に立って物事を考えるようになりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、日本語能力、生活能力、コミュニケーション能力が向上しました。アルバイトの時、日本語で同僚やお客さんと会話するようになりました。日常生活では、以前は自炊や家事ができなかったが、今は全部できるようになりました。以前、自分の考え方とかあまり言わないけど、今は躊躇せずに言えるようになりました」。

自分の長所について、「私の長所は、怒らない、勉強好き、行動力があり、他人の立場に立って問題を考えるなどです」。

自分の目標について、「私の目標は、早く卒業することです」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「物質も精神も大切だと思います。物質的に足りない時がないので、普段は精神をもっと豊かにしています」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「美味しいものを食べると幸せを感じます。お花を買くと幸せを感じます。目標を達成する時も幸せを感じます」。

自分の潜在能力について、「絵画と芸術の面で潜在能力があると思います。また、漢方医と栄養および健康管理の面でも一定の潜在能力があると思います」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「時間をかけて深く勉強し、学んだだけでなく、学んだことをよりうまく利用し、少しずつ引き出すことです」。

新型コロナウエルの影響について、「今年は旅行に行きませんでした。以前は毎年2回くらい旅行に出かけていました。また、帰国して調査する予定も延期になりました」。

## 11. Kさんのライフヒストリー事例分析

Kさんは、来日前に中国で仕事をしたことがあり、たまたまのチャンスがあり、日本留学に来た。自分が欲しいものをはっきり知っているので、迷わずに計画通りにコツコツと努力しているようである。

Kさんの日本留学の目的は、「自分の能力を高めるために、日本留学を決めました」である。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本の生活に慣れています。帰国すると慣れるまで時間がかかるから、このまま日本で暮らしていきたいです」。

日常生活での悩みことは、「論文を書くことが一番の悩みです。調査は中国でしないといけない、大量な文献を調べなければならなりません」。

日本の教育と中国の教育の違いについて、「日本の教育では、学生の個性的な発展を重視していないみたい感じがします。学校では知識を重視ではなく、全体的な教養や興味の育成を重視しています。「他人に迷惑をかけない」という教育文化は、ある程度学生の個性が押さえられます」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「差別された覚えがありません。でも周りの中国人が差別されたことをたくさん見たことがあります。基本的に2種類の人がよく差別されます。1つは個人の能力が不足している人、もう1つは日本の規則を守らない人です。どうして同じ環境で差別される人がいれば、差別されない人もいますか？自分で原因を探す必要があると思います」。

日本文化への適応状態について、「日本での生活にはずっと前から慣れています。現在の生活にも満足しています」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「主に生活習慣と人間関係に同化されたことが多かったです。生活習慣では、ゴミを家まで持ち帰ること、電車の中で電話しないこと、大声で会話しないことなどです。人間関係では、常に他人に迷惑をかけないことを注意することです」。

日本での自由について、「日本での経済的な自由および結婚やシングルマザーに対する自由度を感じます」。

日本での不自由について、「日本の他人に迷惑をかけないと言う教育文化は、個人の個性を殺してしまいます」。

中国での自由について、「文化において、もちろん中国でももっと自由であり、好きなように生活することができます。友達と会いたいならすぐ会えるし、会いたくないなら気にせずキャンセルすることもできます。日本で約束を守らないと相手に迷惑をかけるから、簡単に変更やキャンセルすることが難しいです」。

平等について、「中国でも日本でも差別を受けたことがないから、平等は個人の能力と関わっていると思います」。

中国での機会について、「中国は発展途上国であり、就職と起業のチャンスなら、中国は日本より多いと思います」。

中国での機会について、「機会と資源は中国が多いから、経済能力や発展空間もあり、もちろん選択範囲も中国が広いです」。

資源について、「資源においては、中国と日本は同じだと思います。自分で必要な資源を作ります」。

権利について、「私にとって、権利はどこでも同じです。自分の努力により得たものです」。

社交力について、「社交力は中国の方がもっと強いです。文化的な違いや価値観および思考方式の違いがないからです。しかし、日本では日本人のやり方に従うしかない、いくら日本語が上手でも日本人の特有な「裏」のものが分かりません」。

普段よく付き合っている人について、「私の友達がかなり多いです。友達を作ることが好きだから、アルバイトで知り合った人もいれば、中国人の友達もたくさんいます」。

日本での収穫について、「日本での収穫は主に視野です。中国で経験できないことが日本で経験でき、現在の生活にとっても満足しています。明るい未来にも希望を持っています」。

来日後の変化は、「来日後、心がより強くなりました。視野が広がり、より客観的になり、教養も高めるようになりました。アルバイトを通して、お金を稼ぐ能力も大幅に高くなりました」。

自分の長所について、「私の長所は、適応力が強い、計画性があり、行動力があり、率直であり、正しい人生観と価値観があり、学習能力が強いなどです」。

自分の目標について、「現在の目標は、アルバイトを頑張ってお金に困らないことです」。

自分の変換能力について、「資源の変換はかなり強いです。資源がなければ自分で作り出して、あればできる限り利用して、最大な価値を生み出していきます」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「両方とも重視しています。割合を言えば、精神がやや高いかもしれません。物質的には一定のレベルに達すればいいです。精神的に不安な時は、本を読むと心が落ち着きます。勉強することは心の不安を解消することができます」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「私は幸せを感じやすい性格です。普段、散歩する時小さなお花を見つけた瞬間、朝目が醒める瞬間、カーテンが開いた瞬間など多くの小さな瞬間から幸せを感じることができます」。

新型コロナウイルスの影響について、「仕事できなくなりました。収入も少なくなりました。けれども、生活には困っていません」。

## 12. Lさんのライフヒストリー事例分析

Lさんは、将来、日本で仕事するために日本留学を選んだ。

Lさんの日本留学の理由は、「中国の大学で日本語を習いました。日本に来て、将来、関連する領域で仕事をしたかったです」である。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本の生活環境や仕事環境がきれいで、暮らしやすいです」。

日常生活での悩みことは、「勉強しながらアルバイトもしないといけない、試験の準備もしなければなりません。かなり忙しいです」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本人は曖昧であり、中国人は率直です。日本人は仕事をする時融通がきかず、中国人は仕事をする時柔軟的です。日本人は慎重すぎ、中国人が勝手すぎです。これはメリットでもあり、デメリットでもあります。日本人は小さなことを直接言えばいいのに、わざわざ遠回しに言います」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「差別された覚えがありません。多くの日本人は中国人が勝手だと思ったり、ルールを守らないと思う人がいます。でも、全ての中国人が勝手やルールを守らないではありません。ある日本人のお客さんから「これからずっと日本で住んでいきますか？中国の環境が悪いし、食品も不安全だし、日本で住むことができ幸せでしょう？」と言われたことがあります。中国にもいいところがたくさんあるのに、ただ彼らが知らないだけです」。

日本での印象深い人や事は、「東京に来たばかりの時、地下鉄の乗り換えする線が見つからなくて、ある日本人がとても親切にその乗り換えする場所まで連れてくれました」。

日本文化への適応状態について、「日本での生活に満足しています。日本文化にも慣れていきます」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「日本に来てから身だしなみや服装の色に気を配るようになりました」。

中国での自由について、「生活においては、中国がもっと自由です。例えば、インターネットで買い物することができ、お弁当はいつでも何時でも配達できるし、外出する時インターネットでタクシーを予約したりなどができます。日本では、まだ昔のように、非常に不便だと思います」。

日本での平等について、「日本人は大学への進学をそんなに重視していないような気がします。中国人は一生懸命に大学へ進学しようとしています。多分の日本の教育チャンスが多いから、だから大学への進学もそんなに気にしていないかもしれません」。

日本での不平等について、「日本の会社の上司と部下、先輩と後輩の間は、非常に不平等に感じます。呼び名までも違います。例えば、後輩に「君」「ちゃん」とかつけてもいいけど、先輩には絶対にダメです」。

中国での平等について、「同僚関係なら、中国もっと平等です」。

日本での機会について、「私の専攻なら、日本で仕事を見つけやすいし、給料も中国より高いです」。

日本での選択について、「私の専攻なら、日本での選択範囲の方がもっと広いです。中国では限られています」。

資源について、「利用できる資源を考えたことはありません。例えば医療資源なら日本が多いです。日本は国民皆保険制度なので、病気になってもそんなに心配することはありません」。

権利について、「日本で一般人として尊重され、いいサービスを受けることができます。日本の警察も庶民的で、いつも自転車で回っています。これは中国であり得ないから、本当に珍しい風景です」。

社交力について、「日本では、真摯な気持ちを保つことができます。相手が言ったことはどういう意味かを推測する必要がありません。だから、日本での人間関係はとても楽です」。

普段よく付き合っている人について、「現在の人間関係はかなり簡単です。アルバイト先ではただの同僚だけなので、中国人の友達もそんなに多くありません。彼氏と一緒にいる時間が一番多いです」。

来日後の変化は、「来日後、礼儀正しくなり、生活習慣もよくなりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、自信を持つようになりました。中国で働いたことがないからよくわかりません。日本に来てからアルバイト先で、上司や同僚とのコミュニケーションを通して、勉強や問題解決をすることでもっと自信がありました」。

自分の長所について、「私の長所は、真面目であり、効率的、責任感が強い、思いやりがあるなどです」。

自分の目標について、「今の目標は、目の前のことをしっかりやることです」。



物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「精神をもっと重視していると思います。日本でマイホームや車を買うことがそんなに難しくことではないので、精神的な幸せを求める傾向が高くなると思います」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「普段、幸せを感じる瞬間は、主に家族の存在です」。

自分の潜在能力について、「私は潜在能力を持っている人だと思います。一つのことをやり続けることができ、やりたいことなら必ずできると思っています」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「これはすべて追い詰められないと、分かりません。解決しなければならぬ問題に遭遇したときは潜在能力を引き出せると思います」。

新型コロナウエルの影響について、「私への影響がかなり大きいです。普段、できるだけ外出を押さえ、どうしても外出しなければならない場合も外でびくびくしています」。

### 13. Mさんのライフヒストリー事例分析

Mさんは、中国の元彼と同じ大学で学びたくないから、思い切って日本留学に来た。しかし、中国にいる時、勉強ばかりして、生活能力が低くて、部屋の片付けができなくていつも悩んでいる。だが、勉強が得意なので、日本の一流大学院に進学することができた。

Mさんの日本留学の理由は、「中国の大学院に進学したくなかったから、海外で勉強したくて、大学で少し日本語を習ったから日本に来ました」という。

卒業後の帰国理由は、「日本の雰囲気重すぎ、人間関係も希薄で、友達がつくれな。とても寂しいです。生活コストも高くて、気楽に旅行にいけません。生な寿司や海鮮料理、冷たいお弁当なども好きではありません」。

日常生活での悩みことは、「日本に来る前はほとんど悩み事がなかったです。日本に来てから急に悩み事が増えて、どう解決すればいいかわかりません。勉強が大好きけれども、何だかストレスがたまりやすく、いつも不安でたまりません。試験の時には試験のストレスがあり、論文を書く時には論文を書くストレスがあり、アルバイトするとアルバイトのストレスがあり、自分ではストレスを拡大しているみたいです」。

悩みことや困難の対処法は、「我慢してやるしかないです。そうしなければ帰国するの？勉強しないといい大学に進学できません。論文を書かないと卒業できません。アルバイトしないと生活ができません。例えばたくさんお金があっても、世の中を見て見たい、いろいろを経験して見たいです。そうしないと成長できません。なりたい自分になれません」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本の美しさは、孤独で悲しい感じがします。中国の美しさは、多種多様で明るい感じがします」。

日本の教育と中国の教育の違いについて、「日本人は何でも粘り強さや忍耐力にこだわっています。もし本当にその人がやりたいことであればいいけど、もし嫌なことでも我慢しなければならないのであれば、本当に可哀想だと思います。しかし、日本は学歴にあまり拘っていません。中国少し拘りすぎます」。

日本文化への適応状態について、「日本の雰囲気が重苦しいです。至るところが静かです。明るくてにぎやかな雰囲気が好きです」。

異文化受容タイプは、分離である。

日本での自由について、「日本的は個人的自由と社会的自由を感じます。個人的自由は、中国では全て母がやってくれたり、決めてくれたり、全く自由がありません。でも、日本では好きな洋服、好きな食べ物、好きな専門科目、好きなアルバイトなど全部自分で選ぶことができます。社会的自由において、中国の社会ではいろんなストレスを感じます。結婚、仕事、家や車の購入など、周りの人が持っていれば自分も用意しなければなりません。日本では他人に余計な干渉をしないから気楽です。そして、日本でアルバイトを通してお金を稼ぐことができ、これもある程度の自由だと思います」。

日本での不自由について、「日本の職場での上下関係、失敗やミスを許さない、何もかも我慢しなければならないなど非常に不自由と感じます」。

日本での平等について、「日本の大学院では、純粋な教師と生徒の関係から平等感を感じます」。

中国での機会について、「能力があれば中国でのチャンスが多いです。普通人なら、日本でのチャンスが多いです」。

中国での機会について、「中国で仕事しながら、他の副業もできます。インターネットを利用して買い物やご飯を作る時間を節約することができます。余った時間をいろいろ試すことができます」。

資源について、「中国の可利用資源が多いです。中国は人情社会なので、例えば人脈資源がなくても何とかして作ることができます。日本では何かをするときにほぼ人脈を使いません。人脈以外は日本と中国はほぼ同じです」。

権利について、「日本の国民の権利は中国よりよく保障されているような感じがします」。

社交力について、「きっと日本の方がもっと強いです。日本では誰とでもコミュニケーションを取ることができます。学校の先生やクラスメート、アルバイト先の上司や同僚、すべての人間関係は自分一人に対応しなければなりません。中国の先生や年長者はいつも説教することが好きで、あまり話したくありません」。

普段よく付き合っている人について、「現在、よく付き合っている人は主に中国人の友達です。時間がある時は、一緒にご飯に行ったり、買い物に行ったりしています。コロナのため、今年は一人で家にいる時間が一番多いです」。

日本での収穫は、「日本で最大の収穫は成長です。例えば、中国にいる時は、勉強以外に何もしません。しかし、日本では勉強とアルバイトを両立しながら、自分で部屋を探し、引越し、家事をする。周りの人間関係への対応、毎月の支出の配分など全部自分でできるようになりました」。

来日後の変化は、「来日後、本当の自分を見つけるようになり、自己認識する能力を高めました」。

来日後高めた能力について、「来日後、全体的な能力を高めたことができたと思います。例えば、自分で学校を選んで進学準備をする、自分で住む場所を決めて契約する、自分で料理や家事をする、自分で友達を選んで仲良く付き合う、自分でアルバイトを探す、自分で好きな専攻を選ぶなど数え切れないほど一人でできるようになりました。これこそが成長だと思います」。

自分の長所について、「私の長所は、ユーモア、勉強好き、面白い、目標があり、思考力があることなどです」。

自分の目標について、「私はあまり大きな目標を持っていません。人生の目標は楽しく過ごすことです」。

自分の変換能力について、「資源転換が苦手だと思います。一つだけのことを深く掘り込むことが得意ですが、広く浅くすることが苦手です」。

物質と精神について、「重視物質です」。その理由は、「物質はまず必要だと思います。しかし、物質ばかりを追求すると本末転倒になります。物質が高めれば高めるほど、精神的な追求も高めることができます」。

幸福感について、「幸せではない」。その理由は、「幸せって、難しいです。分かりません。美味しいものを食べた時に嬉しいけど、その時の感情は幸せであるかどうかは知りません」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「無理にすることではなく、自分の心に従い、自由に発揮することができれば一番いいと思います」。

新型コロナウイルスの影響について、「悪い影響は帰国できなくなったことです。いい影響は、オンラインの授業を受けているので、学校に行かなくても大丈夫です。家から学校までかなり遠いから、時間とお金を節約できました」。

#### 14. Nさんのライフヒストリー事例分析

Nさんは、彼氏と一緒に日本留学に来た。来日後、彼氏と一緒にアルバイトしてお金を稼いで、両親にプレゼントを贈っていたことで、自信を持つようになり、早く一人前の人間になり親孝行をしたいと語った。

Nさんの日本留学の理由は、「クラスメートである彼氏が日本に留学に来たし、彼の親戚も日本にいます。成績もそんなに良くないから国内より海外に留学した方が良いと思って日本に来ました」という。

卒業後の帰国理由は、「いつか帰国すると決まっているから、そうであれば卒業したらすぐ帰国したほうがいいと思っています。日本で就職しても日本の会社では出世することが難しいです。また、日本の会社も融通が効かず不自由です」。

悩みことや困難の対処法は、「新しい環境に適応していくしかありません。前に進むしかありません。誰でも適応力を持っています。適応していくには時間の長さが違うだけです。数日間でできる人もいれば、何ヶ月もかかる人もいます」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「差別を受けたことがあります。以前、学校の数学の先生が私たちの全ての中国人留学生を軽蔑していました。毎回、授業を始める前に、私たち中国人留学生に『私は日本人のために生きています。外国人のために生きていてではありません』と言った」。

日本文化への適応状態について、「日本の生活がかなり好きです。ただ、これからの仕事はどうすればいいか心配です」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「たまに帰国しても、日本人と同じようなやり方や考え方を持っています。非常に頑固でこだわり強いです。例えば、列を並べない、ゴミ投棄、サービス悪いなどの行為を見ると腹が立つようになりました。もし、日本に来なければ、中国でこのようなことを見てもそんなに気にしないと思います」。

日本での不自由について、「もし卒業後日本で仕事するなら、多分一生もこの仕事を続けなければなりません。日本人の考え方では、何度も転職することは許されません」。

中国での自由について、「日本では、勉強とアルバイトは本当に疲れます。周りの人たちがみんな忙しくて、ほとんど休まないような気がします。たまには友達とのんびりお茶を飲みたいです。中国での生活はもっと緩やかです」。

日本での平等について、「日本の医療や福祉の面では、非常に平等と感じます」。また、「努力すればどこでも平等に生きて行くことができます」。

機会について、「日本で暮らすなら、日本のチャンスが多いです。中国で暮らすなら、中国のチャンスが多いです。私ならどこで暮らすはどこでチャンスを作ります」。

中国での機会について、「中国でいろんな生活スタイルを選ぶことができます。もしのんびりしたいなら結婚します。もし一人前になりたいなら仕事を頑張ります。北京上海みたいな大都市を選ぶことができれば実家を選ぶこともできます」。

資源について、「資源も同じです。日本に住んでいれば、日本での資源が多くなります。日本に住んでいるなら日本で必要な資源を作ります」。

権利について、「日本で選挙権がないだけです。他は全部同じような気がします」。

社交力について、「社交力は年齢と経験および性格が関係あると思います。恥ずかしい人はどこでも恥ずかしい、話す勇気がなく、友達が作れません。性格が明るい人はどこでも明るい、誰とでも会話ができて、友達がいっぱい作れます」。

普段よく付き合っている人について、「日本の友達がいません。中国人のいい友達なら何人がいます」。

日本での収穫は、「日本での収穫は、独立、考え方と視野です。もし日本に来なければ、中国の普通の大学生と同じように、卒業したら就職して、その後ある男と結婚して子供を作ります。そうすると、現在の自分と出会えなくなります。やはり、今の自分、今の状態が好きです」。

来日後高めた能力について、「来日後、精神的に強くなりました。親と離れて一人でどうやって生きるべきかを自分で考えなければなりません。どんな辛いことがあっても親に何も言いません。いつも良いことばかり言って悪いことは隠す、親に心配をかけたくないからです。これはとてもいい経験だと思います。アルバイトで苦勞して稼いだお金を使って、買い物する時は非常に誇りを思います」。

自分の長所について、「私の長所は、主に心が強くて、独立性があり、目標が明確、問題解決能力が高いなどです」。

自分の目標について、「今の目標は、早く卒業して、給料高い仕事を見つけ、できるだけ多くのお金を稼ぐことです」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「今でも精神的な幸せとは一体どんなものがよくわかりません。だからもちろん物質を重視します。精神はご飯になりません。ご飯を食べないと歩く力もできません。物質と精神は両立できないので、どちらを選べなければならなりません。精神は現実的ではないので、まず物質を追求したほうが良いと思います」。

幸福感について、「幸せではありません」。その理由は、「私にとって幸せは、衣食住の心配がなく、お金もあり、愛してくれる人がいることです。しかし、現在、何もないから不幸です」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「準備ができている人は必ずいいチャンスと出会います。能力は後天的に鍛えられたものだと思います。すべての方法を考えて、自分より能力の高い人と知り合い、勉強を続けて楽観的にしていけば良いと思います」。

新型コロナウエルスの影響について、「私にはかなり影響が大きいです。災厄なことは今年あまりアルバイトをしていないから、生活水準もかなり下がりました」。

## 15. 0さんのライフヒストリー事例分析

0さんは、将来、大企業を持ちたいという大きな夢を持っている。しかし、現在、学校の授業に興味がなく、いつも自分で資料を探し、独学しているという。

0さんの日本留学の理由は、「進学した大学に失敗したので、別の専攻にも興味ないし、だから日本留学を選びました」という。

卒業後の帰国理由は、「卒業したら中国で会社を作りたいです。中国では日本より会社を作りやすいです。また、中国の必要な資源は日本より豊かです。そして、彼女も中国にいます」。

日常生活での悩みことや困難は、「経済的悩み以外に、大学では充実感がなく楽しくありません。大学で習ったものは何の意味があるがよくわかりません。今の専攻が大好きですが、授業を受けても達成感がなく、独学や自分で資料を探して勉強したほうがいいと思っています。様々な理論より、問題解決方法を習いたいです」。

悩みことや困難の対処法は、「自分の得意な方法で勉強します。問題がある時に逃げるのではなく、解決方法を考えます。困ったら諦めるではなく、簡単に諦めたら一生も何もできません」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「差別を受けたことがあります。ある日、友達と韓国焼肉を食べに行きました。友達が肉を食べる時に骨が地面に落ちてしまいました。隣にある年寄りの日本人がすぐ私たちに「ここは日本です。骨を勝手に地面に捨ててはいけません」と言われました。友達がわざわざ捨てたではないのに、あんなことが言われて本当に腹が立ちます。日本で骨を勝手に捨ててはいけない、どこの国で骨を勝手に捨てることができますか？」。

日本での印象深い人や事は、「印象的な人は、例えば大学1年生の時に聞いた日本人のクラスメートの発表です。その発表はとても論理的で、問題解決の方法も素晴らしくて、日本の若い世代に対する好印象を持つようになりました。日本の若者たちに対する印象は、あまりにも極端で、優秀な人は非常に優秀です。優秀な人と、そうでない人の差が大きく、真ん中の人たちについては印象に残っていません。他の印象深いことは、日本で何回も財布を忘れたことがあります。全部戻ってきました」。

日本文化への適応状態について、「私の適応能力がかなり強いから、日本の文化や生活習慣も理解し尊重しています。中国と違って全く気にしません」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「日本人の素晴らしいところは、相手の立場に立って問題を考えることです。心理学で共感能力と言います。この能力は元々少し持っているのだから、日本に来てから、もっと強化されるようになったと思います」。

日本での自由について、「言論においては、日本の方が自由です。好きなように言えばいいです。中国では少し考えてからという必要があります」。

日本での平等について、「日本で平等を感じたことはありません。外国人留学生は日本の社会的少数者として特殊なグループです。多数の日本人と比べられません。不公平や不平等な扱いを受けたことがないけど、平等を感じていません」。

中国での平等について、「中国では社会階級が同じなら、わりと平等です。周りにそんなに権力がある人やお金持ちの人がいないから、劣等感が感じたことはありません」。

中国での機会について、「就職のチャンスなら、日本も中国も就職活動に参加したことがないので評価できません。しかし、見たところ、中国には就職をサポートするAPPがたくさんあります。オンラインで就職者の性格や特徴によって、自分に似合う仕事を見つけることができます。しかし、日本の多くはまだ対面式の面接が多く、毎年の就職期間も限られます」。

日本での選択について、「中国は学歴重視なので、大学受験の道しかありません。日本はあまり学歴に拘っていないから、大学以外に短期大学や専門学校など多様な道があります」。

中国での機会について、「医療においては、中国で予約しなくても大丈夫です。オンラインサービスがあり、総合病院も多いです。就職の場合、中国の選択範囲も広くて、豊かです。特にインターネット業界は日本より豊富です」。

資源について、「人脈資源ならもちろん中国が多いです。日本で私たち外国人留学生は少数グループとして、人脈も限られています。中国なら、様々なコミュニティやグループがあり、そのようなところに参加すれば多くの人と知り合うことができます。例えば、夏休みや冬休みに1ヶ月くらい帰国する間に100人くらいの友達を作ることができます。日本で何年間住んでも、知り合いは数えるくらいの何人の友達しかありません。これは少数グループと多数グループの違いです。教育資源なら日本が多いです。日本は中国みたいにそんなに成績を重視していないから、私立学校や公立学校も多くて、日本の教育資源は本当に豊かです。医療資源なら日本は本当に不便であり、予約しないとイケません。中国ならそのままいけるし、時間も自由です。最近、オンライン診療も流行っているから、簡単に写真を送って見てくれて、とても便利です」。

権利について、「権利はマクロな面から考えなければならぬと思います。例えば、中国は14億の人口、日本は1.2億の人口がいます。日本の貧富の差は中国ほど大きくありません。中国の6億人の収入は毎月15000円以下です。彼らはどうやって生きていますか？また、中国の面積も大きくて、民族も多いので、中国政府の力が弱いとこんなに大きな国をどうやって管理しますか？アメリカやヨーロッパなどの国のように民主主義となると、毎月15000円以下の収入しかない6億人の意見を聞かなければなりません。14億人も彼らと同じようにしなければなりません。先進国の制度と現在の中国の現状と比べることはあんまりにも不公平です。だから、権利は前提条件を見なければならぬと思います」。

社交力について、「社交力は中国にいる方がもっと強いと思います。日本人とのコミュニケーションは本当に詰まらなくて、どんなことをいっても「すごいね」「素晴らしいね」しかいえません。日本人は自分のことや自分の意見とかあまり言わないから、ルールに従って仕事をすると同じのように、話す内容や使う言葉もほとんど同じです。だから、日本であまり日本人とコミュニケーションを取りたくないです」。

普段よく付き合っている人について、「日本人と友達になろうと思っていません。日本で知り合った仲いい友達は全部中国人です。現在、中国人のルームメイトと一緒に住んでいます」。

日本での収穫は、「日本で最大の収穫は、1) 何でも話せる中国の友達ができたことです。彼らとの知り合い、新しい世界を見つけて、人生の可能性が高まりました。2) 際的な視点です。中国にいる時は周りの人達や住む都市しか見えません。日本では中国と日本だけでなく世界中を見るようになりました。3) 独立性です。中国にいる時に頼れる人がいるからすぐ家族や親友などを頼ってしまいます。しかし、日本では一人だけなので頼れる人が誰もいない。自分で何かしないと生きていけません」。

来日後の変化は、「来日後は、判断や考え方がもっと深慮深くなりました。コミュニケーション能力も高くなりました。つまり、成長した感じです」。

来日後高めた能力について、「来日後、日本語能力と問題解決能力を高めました」。

自分の長所について、「私の長所は、第一真面目、第二楽観的、第三問題解決能力が高い、第四負けず嫌い、第五調整力が強いことです」。

自分の目標について、「私の目標は、来年卒業後、自分で起業し、会社を大きくすることです」。

自分の変換能力について、「他人の力を借りて、資源を最大化することが非常に得意です。例えば、友達の中で、誰が何をしているのか、誰が何を得意なのか、すべて携帯に記録します。必要な場合はすぐその友達と相談します」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「誰も2つの夢を持っています。1つは精神的な夢で、もう1つは物質的な夢です。物質の夢は馬雲のような人になることです。精神的な夢は神のような生活をするということです。私は将来に起業家になりたいので、物質を追求しなければなりません」。

幸福感について、「幸せです。」その理由は、「彼女と一緒にいる時、一番幸せです」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は目標を作り、問題を解決する能力が高いことです」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「これは難しいと思います。すべての能力が全部あるわけがない、できるだけ頑張ってみれば良いと思います」。

新型コロナウイルスの影響について、「私にほとんど影響ありません。いつも心配してもしようがないです」。

## 16. Pさんのライフヒストリー事例分析

Pさんは、日本も中国も両方とも好きで、どちらか就職のチャンスがあるかによって将来を決めようとしている。

Pさんの日本留学の理由は、「日本はあらゆる面がよいと思って、中国にも近いし、中国の日系企業も多くて、日本語を勉強していつかは使えるじゃないか日本に留学に来ました」である。

卒業後の日本での滞在理由は、「高校を卒業した後、日本で暮らしていたから、生活はもう慣れていました。しかも、収入も中国より高いから、卒業後日本で就職したいです」。

日常生活での悩みことは、「日本で部屋を借りる時に、保証人や保証会社が必要であり、手続きも面倒臭いです。それにもかかわらず、様々な費用も多くて、特に電話代や光熱費などもとても高いです。日本では、勉強するだけでなく、生活上の様々な問題も自分で解決しなければなりません」。

悩みことや困難の対処法は、「兵が攻めてくれば将が防ぎ、大水が出れば土でふさぐ」という諺があります。最初に解決方法が分からなくても、何回か経験してから段々分かってきます。柔軟性があれば変わることができ、学習能力があれば解決できない問題はありません」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本人は比較的謹厳であり、必ずルールに従って物事をします。中国では、もし日本人と同じようなやり方であれば、周りから頭がおかしいと言われるかもしれない。日本では上から下まで、年寄りから子供まで、皆一つのルールに従って10年でも20年でも変わらず続けていきます。日本での生活は時代の変化はあまり感じません。中国では毎年変化しています」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「偏見や差別を受けたことがあります。ある日、友達とデパートで買い物する時、中国語で会話をしていました。後ろあるお爺さんが「中国人が大嫌い、早く中国へ帰れ」と罵り終わったらすぐ逃げました。わけがわからないなと思いました」。

日本文化への適応状態について、「日本の生活が大好きです。日本のような平凡な生活はとても適していると思います」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「来日前、性格がせっかちで、何かあれば落ち着かずすぐ怒ります。来日後、日本の雰囲気の中で、徐々に性格が落ち着くようになり、もっと冷静になるようになりました」。

日本での自由について、「服装においては、日本が自由です。日本で奇抜な服装を着ても、誰も変だなと言われません」。

日本での自由について、「仕事なら中国の方が自由です。日本みたいにいろんなルールや規則がないから、上下関係も日本みたいに厳しくないし、もし休みたいなら上司と気楽に相談することもできます。日本では、簡単に休めないから、例えば風邪や熱が出てても我慢して出勤しないとイケません」。

日本での平等について、「日本人は謙虚な人が多いです。例えば、自分がいい仕事があるから、社会的地位が高いから、お金がたくさん持っているから、偉そうに他人を苛めたり、差別したりというようなことをしません」。

機会について、「どこもチャンスがあると思います。どうやって自分の強みを引き出すかは重要だと思います」。

日本での選択について、「質から言えば、日本で普通の職員であっても、生活の質は確保されます。中国では、給料も低くて、生活の質を保証することが難しいです」。

資源について、「人脈資源なら中国が多いです。日本は人脈をほぼ使わないから、もし使おうと代わりに逆効果になります」。

権利について、「日本人は法律やルールに従って物事を行なっています。すべての人に与えられる権利と義務は非常に明確です。国民が持っている権利や福祉も明らかに決まっています。中国では主に義務を強調され、権利は薄れているような感じです」。

社交力について、「中国ではもっと社交しやすいです。中国人は会ったばかりでも、思わず自己開示をして深いところまで会話ができて、親しみを感じてすぐいい友達になれます」。



す。しかし、日本人は自己開示に抵抗感があり、少しずつ時間をかけて受け入れてくれるかもしれないし、あるいはずっと受け入れてくれないかもしれません。いつも表面的な会話しかできず、親しいな友達になり難いです。これは日本人と中国人の一番違うところで

す」。普段よく付き合っている人について、「現在、彼氏と一緒に住んでいます。普段、友達とたまに連絡するけど、アルバイトや論文など忙しいから、友達と会うチャンスそんなに多くありません」。

日本での収穫は、「日本での最も大事な収穫は穏やかな心です。中国にいる時、いつもそわそわして落ち着きません。日本に来てから、周りの日本人を見て自分の考え方や性格も変わりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、独立力が向上しました。中国で親と一緒に暮らしていたから、一人生活をしたことがありません。日本での一人生活は、相談する人がいない、親が日本の状況や問題がよく分からないから、自分で処理するしかありません」。

自分の長所について、「私の長所は、自己開示が高い、拘りが無い、性格が明るい、素直です」。

自分の目標について、「私の目標は、早く卒業して、仕事を見つけることです」。

自分の変換能力について、「この能力は弱いかもしれません。自分がどんな資源を持っているかを認識していないからかもしれないし、あるいはこのような問題を考えたことがないからかもしれないです」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「精神をより重視する人間だと思います。物質にそんなに強い欲望がありません。逆に精神では欲望が強いです。私の希望は、毎日楽しくて、何の悩みもなく、周りの人と仲良く暮らしていくことです」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「誰かが笑ってくれる時にとっても幸せです。家族と一緒にいるすべての時間が幸せです。他の人にとって普通のことでも私は幸せを感じます」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は勇気があり、他人に頼らず、困難を克服し、文句を言わないことです」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「できるだけ早めに独立し、能力を持つ友達をたくさん作れば、徐々に同じ能力を持つようになります。また、自分を見知らぬ環境に置くことで、能力育てることもできると思います。そうすることで、段々強くなり、落ち着くようになります」。

新型コロナウエルの影響について、「マイナスの影響は、帰国できず家族と会えなくなりました。アルバイトも影響され、収入が減りました。友達と会うと感染する可能性があるからできるだけしないようにしています。プラスの影響は、医学知識に関心があり、新型コロナやインフルエンザなどの予防措置も学びました。マスクをつけることと手洗うことを習慣となり、他の病気の予防にも効果があります」。

## 17. Qさんのライフヒストリー事例分析

Qさんは、日本語を教える先生になるため、来日した。来日後、日本での生活が慣れたため、将来、彼氏と結婚して一緒に日本で暮らしていこうと考えている。

Qさんの日本留学目的は、「日本の大学院に進学し、卒業してから日本で仕事をしたいからです」という。

卒業後の日本での滞在理由は、「帰国したら中国の医療や食べ物、人間関係なども馴染めないから、このまま日本で暮らしたいです」。

悩みことや困難の対処法は、「普段、哲学や心理学の本を読むことが大好きです。こういう本は性格の形成に役に立ちます。これらの本を読むことで、ストレスの解消になり、気持ちも穏やかになります。後は、経験を積むことです。最初は苦手かもしれないが、同じことを何回やっていると段々慣れていきます」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本人は仕事する際に一途に思い込み、必要がない事でもしなければなりません」。

日本文化への適応状態について、「かなり日本が好きです。逆に帰国すると慣れないかもしれません。これからもこのまま日本で暮らして行こうと思っています」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「少し同化されていると思います。長く滞在すると、日本社会に溶け込むために考え方ややり方を変えなければなりません」。

日本での自由について、「中国では、時間についてそんなに厳しくありません。会社の管理ももっと柔軟性があります」。

日本での平等について、「日本では努力した分と収穫した分がほぼ同じです」。

中国での機会について、「以前は、日本のチャンスが多いです。今は、中国のチャンスが多いと思います。特に中国南の都市は今後さらに発展すると考えられます」。

中国での機会について、「中国の新しいものが多すぎです。ものの更新が速いし変化も早いです。大都市だけでなく地方も毎年様子が変わっています。中国のオンライン授業も何年前から始まっています。日本は今回のコロナの影響で最近ようやく始まりました」。

資源について、「中国の利用できる資源が多いと思います。中国の情報伝達が早いから、情報量も非常に大きいです。いろんな話題がすぐ流行り、新しいものも多いです」。

権利について、「日本では国民の権利を保障され、とてもいい国だと思います」。

社交力について、「社会力は中国にいる時もっと強かったです。日本でたくさんの日本人と出会ったけれども、仲のいい友達を作れなかったです。日本人との文化や性格の違いが大きいため、なかなか深い交流ができません。中国人と同じような友達になるのがほぼ不可能です。日本人との交友関係は、荘子の諺「君子の交わりは淡きこと水の如し」と同じです。しかし、中国人から見ればこれは本当の友達ではありません」。

普段よく付き合っている人について、「日本に来てから、友達を作ることあまり興味がなくなってしまいました。勉強やアルバイトも忙しくて、わざわざ時間をとって友達を作る余裕がありません。彼氏と一緒に住んでいるから寂しい時もほとんどありません」。

日本での収穫は、「日本での最大の収穫は、知識と視野です」。

来日後の変化は、「来日後、考え方の変化が一番大きいです。例えば、人間関係、家族関係、生き甲斐などに対する認識はかなり変わりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、独学能力を高めました。中国では、先生が知識を教えてくれて、先生の教えた通りに覚えればいいです。しかし、日本の大学や大学院は、先生から教えてくれるだけでなく、自分で勉強して調べてレポートを書いたり発表したりする授業が多いです」。

自分の長所について、「私の長所は、目標が明確、おおらか、コミュニケーション能力が高いことです」。

自分の目標について、「現在の目標は、少しずつ前に進んで、博士を卒業することです」。

自分の変換能力について、「資源転換能力は高くありません。お金に対する欲望が少ないから、自分が学んだ知識をお金になろうと考えたことがなく、いつも好きだからやっているだけです」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「もちろん精神が大切です。私の人脈や知識や能力などをお金に変えようと一度も考えたことはありません」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「今はとても幸せです。何も欠けていません」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は勉強好き、足るを知ることです」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「これは欲望の問題だと思います。ある程度の欲望があれば、目標を達成するため最大な潜在能力を発揮することができると思います」。

新型コロナウイルスの影響について、「コロナのため、正常な生活や勉強および仕事もできなくなりました」。

## 18. Rさんのライフヒストリー事例分析

Rさんは、完全に現実逃避のため、日本留学を選んだ。しかし、彼氏が中国にいたので、帰国しなければならない。日本留学を通して、自分を見つめ直すチャンスを得られた。

Rさんの日本留学の理由は、「当時、中国の大学で卒業してから半年仕事をしました。毎日夜中まで残業し、飽きてしまいました。他のやりたい仕事もなくて、日本に留学に来ました」。

卒業後の帰国理由は、「彼氏は中国にいたので、家族も私が帰国することを望んでいます」。

日常生活での悩みことは、「主な悩みは日本語です。日常会話なら大丈夫けれども、専門的用語ならなかなか聞き取れません」。

日本文化への適応状態について、「日本人のように人付き合いで距離感を保った方が良いと思います。この距離感で相手と仲の良い友達になれないけれども、お互いに快適な生活ができるから、それでもいいじゃないかと思います。中国のように人との距離感が近すぎるのも色々な悩みがあると思います」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「生活習慣や言動仕草など同化されたことが多いです。例えば、時間を厳守、約束を守る、電車やレストランで小さい声で会話するなどです」。

日本での自由について、「中国で一人生活をしたことがないから、家族と一緒に住んだり、学校の寮でルームメイトと一緒に住んだりしていました。好きなようにできません。日本に来てから完全な一人生活ができ、好きなようにできるから非常に自由と感じました」。

日本での平等について、「日本の職種ごとの収入差はそんなに多くありません。例えば、以前アルバイト店のバーテンダーの収入と大学教授の給料がほぼ同じです。日本では等級序列があるけど、等級間の差別が少ないです」。

中国での機会について、「日本のチャンスはほぼ社会が必要とする固定的な職場であり、社会が提供できる新しい職位が非常に少ないです。しかし、中国は発展段階で、社会が必要とする固定的な職位があれば、社会から提供する新しい仕事も多いと思います」。

日本での選択について、「日本は仕事の職種において階級差別がないから、大企業で仕事しても、コンビニで仕事しても、差別されないし、給料の差もそんなに大きくありません。そうするとほとんどの人は自分がしたい仕事を選びます。また、未婚者や単身ママに対する社会的受容度も高いので、自分の好きな生き方を選ぶことができます」。

資源について、「利用できる資源なら誰でも自国の方が多いではないかと思えます。自分の国についてよく知っているし、利用できるものも多いと考えられます。就職といえば、外国人としてまずある程度の日本語レベルがないと就職できません。能力ないと仕事ができず、虐めと差別される可能性も高いです。教育資源なら量的に中国のほうが多く、質的には日本のほうが多いです」。

権利について、「日本は非常に生活しやすい国だと思います。例えば北京上海のような大都市では、社会保険や戸籍およびたくさんのお金がなければ、マイホームや車をほぼ買えません。日本でちゃんとした仕事があれば、普通のサラリーマンでもマイホームや車を買えるし、普通の日本人とあまり変わりません。外国人として選挙権がないけれども、安全や医療および福祉などが保障されます」。

社交力について、「日本での社交力はもっと強いです。日本社会に溶け込みたいなら何も気にしない方がいいです。外国人として、例えば日本で80歳まで暮らしても外国人です。日本人の文化や考え方が分からないのが当然です。ある単語の背後に隠されている意味がわからないのも当然です。分からない時は素直に「すみません、分かりません」といえばいいです。「もっと分かりやすく説明してください」と頼めばいいです。恥ずかしいとか、挫折感があるとか、何も気にする必要がありません。もし中国にいるなら、中国人として中国人の言ったことが理解できなければ、それが本当のショックです。頭悪い人や異常な人間として見られるかもしれません。しかし、日本ではこのような心配が全くないです」。

普段よく付き合っている人について、「友達は本当に少ないです。学校やアルバイト以外に、家でのおんびりする時間が多いです」。

日本での収穫は、「日本での最大の収穫は、一人の時間です。以前は一人生活をしたことがないから、自分の意見も言えない人間でした。いつも周りの言いなりに行動します。日本に来てから、自分がどんな人間で、どんなことが好きで、どんな人生を生きていきたいかなどを考えるようになりました」。

来日後の変化は、「来日後、一人暮らしが始めてから気にすることが少なくなり、心が広くなりました」。

来日後高めた能力について、「日本語能力と独立性を高めました。以前より自信を持つようになりました」。

自分の長所について、「以前の長所は、行動力があることです。最近はぐずぐずになってしまいました。ストレス耐性も段々弱くなりました。長所といえば、人を助けたい気持ちが強いことかもしれません」。

自分の目標について、「最近の目標は、もっと痩せて、肌をもっときれいになることです」。

自分の変換能力について、「この能力はかなり弱いと思います。やり続けることが少なく、いつもすぐ飽きてしまいます。だから理想な結果がなかなか得られません」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「私は普通の人だと思います。物質がないときは物質を追求し、精神がないときは精神を追求します。だから両方が大事です」。

幸福感について、「幸せではありません」。その理由は、「社会的環境から見れば幸せな人間と思います。親との仲がいいし、彼氏との関係もいいし、仲の良い友達も何人かいます。お金も足りるし、日常生活にもそんなにストレスを溜まっています。しかし、本当に幸せですかと聞かれると、そうではありません。なぜならば、今やっていることは本当に意味があるのか、続けていく必要があるのか、たまに疑問に思います。現状では、やっている多くのことがなんの意味もありません。生活はとても退屈です。ただしょうがないからやっているだけです。だから、私は物質面から見れば幸せですが精神的には幸せではありません」。

自分の潜在能力について、「私は共感能力があり、他人を助けることを通して自分の存在価値を感じることができます」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「自分の強みと得意なところをできるだけ利用することです。それ以外はありのままでいいと思います」。

新型コロナウイルスの影響について、「就職のつもりですが、コロナのため諦めました」。

## 19. Sさんのライフヒストリー事例分析

Sさんは、来日後、ますます低欲望になり、何も欲しく無くなってしまい、頑張っていく動機も少しずつ失っていることで、かなり悩んでいる。大学院を卒業後、すぐ帰国する予定である。

Sさんの日本留学の理由は、「大学は外国語大学であり、学校で日本語を学びました。うちの大学では、言語ごとに対応する留学プロジェクトがあり、それ利用して日本に留学に来ました」である。

卒業後の帰国理由は、「もともと日本で卒業してから帰国するつもりだったです。日本の生活が嫌いではなく、家族がそばにいないと、帰属感がないからです」。

日常生活での悩みことは、「アルバイトの面ではとても順調けれども、指導先生と相性が合わなくてすごく悩んでいます。中国人留学生のことがあまり好きではないみたいで、どうしていいかわかりません」。

悩みことや困難の対処法は、「不幸の裏には幸いがあり、幸いなことには災が潜んでいる。どんなことがあっても気楽に受け入れればいいです」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本のサービス業は本当に素晴らしいです。日本こそ「顧客は神である」ことを実感することができます。買い物する時とても楽しいです」。

日本での印象深い人や事は、「日本で知り合ったすべての人が忘れられません。みんなが一生の大事な思い出です。どれが印象深いか本当に難しい、みんな印象深いです」。

日本文化への適応状態について、「日本での生活すぐには慣れませんが、時間が経つとだんだん慣れていきます。他の人みたいにすぐ慣れるのは困難です」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「日本に来てからますます低欲望になってしまいました。中国にいるなら、いろいろ頑張って、努力してからこれ以上良くなれないと分かれば諦めます。しかし、日本でいろいろ見て、まだ頑張っていないのに、自分の能力も分かっていないのに、努力する気がなくなって、これ以上何も追求したくなくなりました。また、誰がと会う時に顔くやお辞儀をするような習慣になりました」。

日本での自由について、「経済、生活や勉強ではもちろん日本の方が自由です。経済において、中国では服や携帯電話などを買う時、両親の同意をえないといけません。日本では親の力が及ばないから、好きな物を買うことができます。生活において、日本では一人生活だから、どんなことをやっても文句を言われません。勉強では、中国の先生がとても厳しいです。宿題をやらなければいけません。日本の先生は勉強に緩いです。宿題もそんなに多くないし、やらなくても厳しく言われません」。

日本での不自由について、「日本で就職したことがないけれども、友人たちによると、社内での上下関係や先輩後輩などの等級制度は中国よりずっと厳しいです」。

日本での平等について、「日本では、例えばホームレスのような人でも堂々とレストランに入って、店員も追いかけてやしません」。

日本での機会について、「例えば大学院への進学は、日本のほうが中国より本当に多いです。中国の大学院進学は本当に競争激しいです」。

中国での機会について、「就職において、中国の選択肢はもっと多いです。人口が多いから競争が激しいかもしれないけどチャンスも多いです」。

資源について、「学習の資源なら、日本で関連する使える資料を集めやすいと思います。就職の資源なら、中国の資源が間違いなく日本より豊かです。インターネットの資源は、日本は中国に及ばないです。日本は知的財産の保護はやりすぎで、ほとんどの音楽や映画をダウンロードできず、費用も高すぎです。比べると中国のインターネットが便利で、音楽や映画をダウンロードする選択肢がたくさんあり、費用もかなり安いです」。

社交力について、「日本人との付き合いが非常に少ないから、日本人や日本文化はそんなに詳しくありません」。

普段よく付き合っている人について、「勉強したいものがたくさんあるから、わざわざ友達を作ろうと思っていません。たまに中国人の友達と一緒に食事に行きます」。

日本での収穫は、「日本での収穫はまず日本語です。その次は生活能力です。また、情報収集能力と学習能力です。さらに自己投資です。以前は勉強したいものがないから悩むけど、今は勉強したいものが多すぎて悩みます」。

来日後の変化は、「来日後、いろんな人と出会い、一生懸命に頑張る人がいれば、何もせずに遊んでばかりの人もあります。視野が広がり、生活や経験も豊になりました。もし中国にいるなら、周りの人達が多分ずっと変わらず同じような人ばかりです。将来、どのような人生を歩んでいきたいのか分かりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、自分なりの考え方や判断力を持つようになりました。海外で暮らして見ないと、中国の生活はすべて当たり前のように感じてしまいます。様々なニュースや専門家が言ったことに疑わずに信じてしまいます。しかし、海外で暮らして見ると、同じ事に対して、様々な認識や考え方がありと分かりました。ある事に

対してどのように受け止めるかは他人の言いなりを聞くだけではなく、自分で考えて自分で決めます。これは海外留学の一番良いところです」。

自分の長所について、「長所は思い出せません。しかし、短所なら例えば軽い強迫症があり、完璧すぎてよくない、優しすぎて虐められやすいなどです」。

自分の目標について、「現在の目標は、早く卒業し帰国して仕事を探すことです」。

自分の変換能力について、「まあまあと思います。現在、利用できる資源は日本語くらいです。仕事で日本語が利用するならきっと大丈夫です」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「物質と精神を両方大事です。私は「物質を追求する人は悪い、精神を追求する人が偉い」とは思いません。お金や物のため一生懸命に頑張る人は非常に素晴らしと思います。人の追求や欲しいものはそれぞれであり、どっちがよいかどっちが悪いかは分かりません。私は思想のある人間になりたいです。自分なりの見方や考え方が持ってあれば、人間関係もうまく行きます」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「幸せな瞬間はたくさんあります。例えば、美味しい料理を食べる時、お金が足りている時、普段の小さなことがらに幸せをかんじます」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は自己認識感が高く、直感でものごとを判断できることです」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「これはよくわかりません。ずっと学校で勉強しているから、仕事をしたことがありません。仕事をすれば段々わかると思います」。

新型コロナウイルスの影響について、「すべての人が大変だと思いました。実際の生活への影響もたくさんあります。例えば、帰国できなくなり、学校へいけなくなり、外出やアルバイトもできなくなりました。良い面は、ようやく家でのんびりすることができ、お金の節約、旅費の節約、時間の節約などができました」。

## 20. Tさんのライフヒストリー事例分析

Tさんは、中国の学校で日本語を学習したことがあり、親の意見で日本に留学に来た。日本で、彼氏と出会い、結婚する予定である。将来、できれば親と近い都市で生活したいと考えている。

Tさんの日本留学の理由は、「親が海外留学に行った方がいいと言われました。大学で日本語専攻なので、日本の大学院に進学しました」という。

日常生活での悩みことは、「悩み事結構多かったです。特に日本に来たばかりの時、日本語もうまくないし、日本人との付き合い方もよくわかりません」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本の職業に関する受容度が高いです。どんな仕事をする人でも尊重されます。例えば、博士卒業したらコンビニでバイトしでも誰もおかしいと思われません」。

日本文化への適応状態について、「今は日本の生活もう慣れていました。これからのことは彼氏の仕事によって決めます。どこで住んでいても大丈夫です」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「日本人と同じように周りの人と距離を保つようになりました」。

日本での自由について、「中国では、大学や専攻を自分で選ぶことができません。日本では、全て自分で選ぶことができます。日本に来なければ多分もう結婚しているかもしれ

ません。一定の年齢になると結婚しないと周りから色々言われます。でも、日本ではそんな心配がしなくてもいいです」。

日本での平等について、「日本では裏口を利用したり、コネを使ったりする人が少ないです」。

日本での機会について、「日本の社会的自由度が高いからチャンスも多いと思います。怠け物じゃなければ何とか生きていけます」。

日本での選択について、「個人の時間から見れば、日本は仕事とプライベートをしっかりと分けているから、休みの日は仕事を考えずに、ゆっくりと休むことができます」。

資源について、「今、利用できる資源はほぼありません。帰国しても母が既に退職したし、父もすぐ退職する予定です。中国でも日本でも頼れる人は自分しかありません。例えば、親の関係で仕事が見つかったとしても、本当にやりたい仕事ではないかもしれません」。

権利について、「日本の法律は非常に透明です。例えば、今住んでいる家に、毎月1回無料の雑誌が届きます。その雑誌には地方の収支、交通事故や犯罪記録などが記録されています。それを読むといつも心が温かく感じます」。

社交力について、「社交力は日本にいる方がもっと強いです。もともと社会力が不得手なため、アルバイトで中国人や日本人とコミュニケーションを取らなければならない、現在は以前よりずっと良くなっています」。

普段よく付き合っている人について、「休みの時は、いつも彼氏と旅行に行ったり、ご飯を食べに行ったりしています」。

日本での収穫について、「日本での収穫は、心の持ち方がよくなりました。以前はいつも落ち着かなくて、負けず嫌いだから、心理状態が悪かったです。次は独立性です。中国で生活費や生活費は当たり前のように親から貰っていました。日本に来てから、少なくとも生活費は自分で稼ぐようになりました。日常生活の問題もすべて一人で対応できるようになりました」。

来日後の変化は、「来日後、独立心が強くなりました。お金に対する見方も変わりました。以前、教育を受ける目的は、いい仕事を見つけるためであり、たくさんのお金を稼ぐためと思っていました。しかし、日本では平凡な生活が慣れて、お金を気にしなくなりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、学習能力が向上しました。中国では、何を勉強するか、何を勉強しないかはほとんど学校の先生や親が決めます。しかし、日本では、半年や一年の学習計画表が既に決めています。その間は、その計画表に沿って勉強すれば良いです。普段、先生はほとんど何も言わないから、勉強は自分ですることになりました」。

自分の長所について、「長所なら、彼氏からいつも心が綺麗と言われるます。そして、共感力があり、時間やルールを守る、責任感が強い、行動力があるなどです」。

自分の目標について、「私の目標は、早く卒業することです」。

自分の変換能力について、「資源転換能力は良くないです。メンツを重んじるから、なかなか他人に助けを求めるのがむづかしいです。他人に迷惑をかけたくありません」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「物質と精神は両方大事だと思います。物質的な幸せを全く追求しないことは無理で、ある程度があれば十分です」。



幸福感について、「幸せです」。その理由は、「幸せの時はとても多いです。例えば、旅行の時、彼氏とドライブの時、太陽に浴びる時、親が健康であることなどすべて幸せを感じます」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「潜在能力を発揮するためにチャンスが必要だと思います。いつか大好きな仕事を見つけたら、あらゆる面の能力が普段の仕事の中で鍛えられるかもしれません」。

新型コロナウエルの影響について、「まず、仕事がなくなって、収入もなくなりました。買い物の回数、外出の回数、友達と会う回数などが大幅に減少しました。いいところは、手料理ができるようになり、自分と家族の健康管理を重視するようようになりました。生きているだけで幸せと思うようになりました」。

## 21. Uさんのライフヒストリー事例分析

Uさんは、性格が明るくて、いつも元気そうである。やりたいことがあれば、最後までやり遂げる力を持っている。

Uさんの日本留学の目的は、「福祉を勉強するために日本に来ました」という。

日常生活での悩みことは、「私は日本に適しているかもしれません。ここでアルバイトも勉強も順調です。私は楽天主だからかもしれません。時には小さなロックダウンがあるかもしれませんが、私はあまり感じていません」。

日本文化への適応状態について、「日本と中国の違いについては全く考えたことはありません」。

異文化受容タイプは、統合である。

自由について、「日本でも中国でも同じだと思います。日本に来てから自由に関してあまり変わっていません」。

日本での平等について、「平等ならどこの国でも同じだと思います。比較する必要はないと思います」。

機会について、「チャンスは自分で作ったものであり、どこにいるかとは関係ないと思います。もし日本のチャンスが多いなら日本で頑張ったからです。もし日本のチャンスが少ないなら日本で頑張らなかったからです」。

社交力について、「どこにいても同じだと思います」。

日本での収穫について、「日本での最大の収穫は、彼氏です。彼氏との出会いで自分の人生も変わりました」。

自分の長所について、「彼氏から言い訳をしないとよく言われます」。

自分の目標について、「私の目標は、早く卒業することです」。

自分の変換能力について、「資源転換能力かなり得意と思います。何か困ったことがある時に、気にせず友達に頼むことができます。普段、自分の最大価値を出す方法もいつも考えています」。

物質と精神について、「物質重視です」。その理由は、「私は物質を重視しています。精神は物質の基に成り立っていると思います」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「毎朝、目が覚めた瞬間に、生きているだけで幸せと感じます。食べたいものを食べて、やりたいことがやれます」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は非常に多いと思います。例えば、ケーキ職人、画家、フラワーデザイナー、良いお母さんになれると思います。様々な可能性があることは私の潜在能力です」。

新型コロナウエルの影響について、「帰国するつもりですが、結局帰れなくなりました。他にはほぼ影響がありません。いつもとおりの生活です」。

## 22. Vさんのライフヒストリー事例分析

Vさんは、来日前に、中国で何年間を仕事していた。仕事が上手くいかなかったため、人生のやり直しとして、日本留学を選んだ。日本の生活が穏やかでだんだん好きになり、卒業後、日本で就職する予定である。

Vさんの日本留学の理由は、「小さい頃から日本のアニメが大好きだったので、大学を卒業後中国で何年間仕事してから、チャンスがあって日本に留学に来ました」である。

日常生活での悩みことは、「日本に来たばかりの時はとても興奮していましたが、その後、段々気持ちが落ち込んで、特に日本語の習得と友達作りが上手く行かなかったです」。

悩みことや困難の対処法は、「日に三度我が身を省みる。どこが間違えているかをよく反省し、できなければありのままを受け入れます」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本と中国の人を評価する標準が全く違います。中国人は口の上手さと頭のよさを重視し、日本人は努力と真面目さを重視します」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「私はあまり差別されたことがないけど、他の中国人が差別されることを見たことがあります。日本人は、服や髪型などの外見から外国人であるかどうかを判断します。もし、中国人だとわかれば、すぐ嫌な顔がします」。

日本文化への適応状態について、「だんだん日本の生活に慣れてきました。このように静かに暮らしてもいい感じじゃないかと思います」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「同化されたところは、ますます他人に無関心になり、人と付き合わなくなり、一人で過ごすようになりました。例えば、アルバイト先の同僚と一緒にいると、わざわざプライベートな質問をしないようになりました」。

日本での自由について、「政治的には日本の方が自由です。生活と仕事では中国の方が自由です。様々な束縛がないし、上下関係や先輩後輩の間もそんなに厳しくありません」。

中国での自由について、「中国では、生活と仕事においてはもっと自由です。そんなにたくさんの束縛やルールがないから、上下関係も日本ほど厳しくありません。日本では、先輩と後輩の呼び方までも違います」。

日本での平等について、「日本人は他人を尊重する民族です。店員でも弁護士でも同じような態度で接します」。

中国での機会について、「中国は発展途上国として、成功したい欲望が高く、失敗しても気にせず新しいことへ挑戦する気持ちも高く、そうすることでチャンスも多いと思います。日本は発達国として、低欲望社会と言われ、失敗を恐れる人が多く、新しいことに挑戦せず昔のままを維持する会社や個人がたくさん存在しており、当然チャンスも少ないと思います」。

中国での機会について、「中国の市場が大きいので、選択肢も多いです」。

資源について、「もちろん中国の資源が多いです。知識も人脈も、自分の国や故郷でもっと多いと思います」。

社交力について、「社会力はかえって日本でもっと強いと思います。日本の人間関係はモデル化しているので非常に簡単です。そのモデルに従えてやっていけばほぼ問題ないです。例えば、挨拶の場合は一言が言われたら、一言で返せばいいです。中国の場合は、人によって話しの内容や話し方も変わる必要があります、さらに複雑です」。

普段よく付き合っている人について、「クラスメイトは年下の子が多く、考え方や趣味が違うため、仲良くなるのは無理じゃないかなと思っています。アルバイト先の同僚は日本人が多いから、親友になることも難しいです。普段、一人で散歩したり、家でゆっくり休んだりしています」。

日本での収穫について、「日本での最大の収穫は、平凡であり素朴な生活です。以前、中国で毎日忙しくてトイレに行く時間ありません。今はゆったりした生活ができて、何よりです」。

来日後の変化は、「来日後の変化は、以前より顔が若くなり、心も若くなりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、日本語能力と生活技能が向上しました。もともと家事は一切できない私でも、現在は料理や洗濯など全部できるようになりました」。

自分の長所について、「私の長所は、客観的、観察力が高いことです」。

自分の目標について、「現在の目標は、本当のやりたいことを見つけることです」。

自分の変換能力について、「中国にいる時は、まあまあいいです。しかし、日本に来てから悪くなりました。日本でなかなかいい友達を作れないから、何もかも自分で解決しなければなりません」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「物質も精神も重視しています。物質的には好きなものを買ってご褒美します。精神的には適度に休んで、好きなことをすることです」。

幸福感について、「幸せではありません」。その理由は、「幸せ？ この問題はとても難しいです。生活から見れば確かにとても幸せかもしれません。しかし、好きなことをやっているかどうか、理想を達成しているかどうか、求めている夢のために頑張っているかどうかから見れば、幸せな人間ではないかもしれません」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は、講演者と政治家になれる可能性がある点です」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「能力は生まれつきの先天的な才能と後天的に学習した能力があると思います。私は極普通な人間として、先天的な才能を持っていないから、後天的に努力するしかありません」。

新型コロナウイルスの影響について、「私にとってあまり影響ありません。日本で一人生活なので、家に子供や年寄りもいないし、心配する必要がないです」。

## 23. Wさんのライフヒストリー事例分析

Wさんは、高齢社会となる中国で、一流の福祉人材となるため、日本へ福祉を勉強に来た。勉強とアルバイトの両立が大変けれども、諦めずに頑張っていきたいと強い決心を持っている。大学を卒業後、大学院へ進学する予定である。

Wさんの日本留学の目的は、「社会福祉を勉強するために日本に来ました。中国も高齢化が進んでおり、福祉人材も非常に不足しています。将来、中国の福祉産業のために微力を尽くしたいです」という。

卒業後の日本での滞在理由は、「卒業後、日本で2、3年間働いて、様々な社会経験を積んでから帰国したいです」。

日常生活での悩みことは、「一番悩んでいることは進学です。他のことであれば、何とか解決できます」。

日本での印象深い人や事は、「日本に来て2ヶ月ぐらいのことです。ある日、アルバイト先行く時、交通カードにお金を入れる方法がわかりません。400円を持って入れようとしたらどうしてもできなくて、隣の日本人に聞いてみたら、彼は「500円じゃないとチャージできないですよ」と言ってくれました。しかし、ポケットをひっくり返し探しても400円しかありません。その日本人が見て、すぐ100円をくれました。その時の感動さが本当に言葉になりません」。

日本文化への適応状態について、「日本はとてもいい国だと思います。これから帰国すると慣れないかもしれません」。

異文化受容タイプは、統合である。

日本での自由について、「法律上では中国が自由です。日本の法律はかなり成熟しているから、法律の執行も非常に厳しいです」。

中国での不自由について、「中国では、自分のために生きているのではなく、他人のために生きているような感じがします。例えば、親や周りの人のためにいい成績を取らないといけない、いい大学に進学しないといけない、いい仕事を見つからないといけないなどがあります」。

日本での平等について、「平等は法律に基づいているから、法律があれば平等もあります。日本の法律はかなり整えています」。

中国での機会について、「日本は先進国として、社会全体も成熟しており、自分が考えたチャンスは、既にほかの人が考えています。市場は大手企業や財閥に独占され、若者に残すチャンスが少なく、例え起業しても全く競争相手になりません。こう考えるとやはり中国のチャンスが日本より多いと思います」。

資源について、「教育資源と医療資源は、日本の方が多いです。人脈資源は中国の方が多いです」。

社交力について、「社交力は中国でもっと強いに違いありません。まず、中国では一クラスの学生が多いです。私はクラス委員として、知り合いも多いです。そして学生会にも参加し、また数百人と知り合うことができました。その上、毎日いろんな会議や活動に参加することで、たくさんの先生や学生とますます仲良くなりました。しかし、日本ではクラスの学生も少ないし、クラスとクラス間の交流も少ないし、学校の活動も少ないです。知り合いがかなり限られています。アルバイト先では、仕事は仕事、プライベートはプライベートとははっきりと分けているので、同僚が友達になる可能性も少ないです。日本での社交範囲は中国と全く比べに成りません」。

日本での収穫について、「日本での最大の収穫は、個人の実力の大切さを実感するようになりました。以前、いつも一夜にして成功することばかり考えていたが、現在は慌てず一步一步前に進むようになりました」。

来日後の変化は、「来日後は、礼儀正しくなりました。以前は、悪い習慣が多かったです。例えば、挨拶しない、感謝や謝りをしないなどです」。

自分の長所について、「私の長所は、苦しみや辛さを耐え忍ぶ力が強いことです」。

自分の目標について、「私の目標は、順調に大学を卒業し、大学院に進学することです」。

自分の変換能力について、「資源転換能力を高める必要があります」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「精神の方がもっと大事だと思います。社会に貢献できる人間になることは、人生の価値を表れます。このような人間になるには精神的に豊かにならないとできません」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「現在は一般です。期待している幸せはパートナーと一緒に好きなことをやって、同じ目標のために頑張っていくことです」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は管理能力と組織能力およびイノベーション能力です」。

新型コロナウエルの影響について、「学校に行けなくて、仕事も影響されて、アルバイトの店が倒産しそうです」。

## 24. Xさんのライフヒストリー事例分析

Xさんは、すでに内定を決めているので、卒業後、すぐ働く予定である。仕事はかなり大変そうけれども、いちようやってみようと考えているそうである。

Xさんの日本留学の理由は、「ずっと日本が好きだったので、中学校の時にも来たかったけど、手続きがうまくいかなかったから、高卒後日本の大学に進学しました」という。

卒業後の日本での滞在理由は、「すでに内定しています。来年の3月に卒業したら、そのまま日本で就職できます」。

日常生活での悩みことは、「日本に来たばかりの時は、一番の悩みはお金がなくて、人間関係も苦手です。今は、少しずつよくなっています」。

悩みことや困難の対処法は、「どこにいても、頭を下げて、くれぐれも謙遜心を忘れ」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「買い物する時に差別されたことがあります。クリスマスに新しい腕時計を買って自分にプレゼントしようかなと思いました。前にある日本人も同じ腕時計を買いました。店員がその人に新しいものを持ってきたが、私が買う時、店員から新しい時計がありません。販売カウンターに展示されている物だけと言われました。不思議に思って買わずに帰りました」。

日本文化への適応状態について、「日本での留学生活は、勉強もアルバイトもしなければならぬ、かなり大変だと思います。でも、全ての努力は価値があります」。

異文化受容タイプは、統合である。

中国での不自由について、「中国で出世するには、個人の能力だけでなく、人脈やお金、権利などに関わっていると良く聞かれます。この点において、非常に不自由と感ぜます」。

日本での平等について、「日本の地域差別がますます良くなっています。外国人への受容度もますます高くなっています」。

機会について、「チャンスについてはほとんど気にしていません。どこにいても同じように感じています」。

中国での機会について、「留学生にとって、中国で親や親戚および友達がたくさんいるから、頼れる人がいます。しかし、日本では自分しか頼れません。その上、言葉と文化も違うし、選択肢も少ないです。留学生にとって、中国で親や親戚および友達がたくさんいるから、頼れる人がいます。しかし、日本では自分しか頼れません。その上、言葉と文化も違うし、選択肢も少ないです」。

資源について、「利用できる資源なら、やはり中国が多いです。中国の情報は日本より多いです。例えば、日本で就職の場合は、友人の紹介や就職説明会に参加すること、およびインターネットから履歴書を投稿するだけです。しかも、会社の応募や入社時期は4月くらいに限られています。中国では、ほぼ毎日に様々な就職会があり、会社の応募や入社時期はいつでもできます」。

権利について、「日本の警察は権利の侵害が多様な感じがします。いつも在留カードを調べたり、自転車を調べたりしています。何も悪いことをしていないのに、調べられることは本当に警察の権利かなと思います」。

社交力について、「社交力といえば、年齢との関係が大きく、住む場所と関係ないと思います。例えば、私が日本に来たばかりの時は、単純に経験がなく、言葉や文化の違いとは関係ありません。その時は若すぎて、学校ではずっと勉強ばかりしていました。人間関係の重要性を全く意識しなかったです。その後、少しずつ練習してから、他人との付き合いも段々上手くなれるようになりました」。

日本での収穫について、「日本での最大の収穫は、熟考の上実行することです。やり始めてから考えるやり方は、考えてからやるようになりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、私の包容力が高くなりました。アルバイト先の上司や同僚から学びました」。

自分の長所について、「私の長所は、拘りしない、よく自己反省することです」。

自分の目標について、「来年卒業後、現在内定した会社で転職せずにしっかりと仕事をして、優秀な人材となり、お金を貯めて、マイホームを買うことです」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「精神をもっと重視しています。人生を楽しみながら思想のある人間になりたいです」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「友達と一緒に美味しいものを食べるだけで楽しくて幸せがいっぱいです」。

新型コロナウエルの影響について、「最初の時は、毎日不安で堪らなかった。時間が経つと段々慣れてきました。しっかりと防護すればほぼ大丈夫です。一番のメリットは、外出せずに家でんびりでき、やりたいことを楽しむことができました」。

## 25. Yさんのライフヒストリー事例分析

Yさんは、日本の生活が大好きけれど、日本人との人間関係がうまくいなくて、卒業後帰国する予定である。

Yさんの日本留学の理由は、「高校の時に、一回日本に旅行に来たことがあって、いい国だなと思いました。その後、日本に留学することを決めました」である。

卒業後の帰国理由は、「ずっと日本にいと親が心配するから、卒業してから日本で2、3年働いてから中国にいる日系企業に就職したいと考えています」。

日常生活での悩みことは、「アルバイトの時は一番大変です。特に日本人との人間関係が一番ストレスを感じます」。

日本での印象深い人や事は、「日本で最初のアルバイト先で、知り合った日本人の店員さんがすごく優しくかったです。その時、日本語を3ヶ月くらい勉強しただけで、メニューに書いてある多くの漢字が読めません。その店員さんがわざわざメニューにある漢字をすべて仮名で書いてくれました。そして一緒に料理名を練習してくれて、やっと覚えるようになりました。今でもこの方にととても感謝です」。

日本文化への適応状態について、「生活はいい感ですが、日本人との付き合いが難しいです。やはり卒業してから帰国して仕事を探したいと思います」。

異文化受容タイプは、分離である。日本文化への同化程度について、「すぐ「ありがとう」や「ごめんなさい」をいうようになりました」。

日本での自由について、「中国の親が成績重視、日本の親は成績にあまり拘らなくて、子供が自由に成長していくことを重視していると感じます」。

中国での不自由について、「中国では、親が厳しくて、例えば、朝起きる時間や夜寝る時間など何もかも干渉されます」。

日本での平等について、「日本は弱い人や貧しい人を守る国なので、この点から非常に平等と感じます」。

日本での平等について、「日本の会社の階級観念は本当に恐ろしいです。しかし、現在の若者は昔の日本人と全然違うから、これから少しずつよくなっていくのではないかと思います」。

機会について、「チャンスは中国と日本ほぼ同じだと思います。外国人は日本の会社に入社したいなら、日本人よりも厳しいそうです」。

資源について、「現在、利用できる資源なら日本は少し多いかもしれません。日本で4年間も住んでいるから、少なくとも学校の先生やクラスメイトおよび友人と知り合うことができました。しかし、この4年間は中国にいないし、以前の友達との連絡も少なくなり、中国の発展も早いし、もしかしたら中国についていけないかもしれません」。

権利について、「普段あまり触れないことなので、権利というものはほとんど知りません」。

社交力について、「どこでも同じような気がします。私は会話が好きだから、相手が話したくない時は私が話す、相手が話したい場合は私が傾聴します」。

普段よく付き合っている人について、「日本人とコミュニケーションが取れるますが、仲いい友達となることは難しいです」。

来日後の変化は、「来日後、独立心が強くなりました。中国で、アルバイトをしたことがありません。日本に来てから自分でアルバイトを探し、自分で生活費を稼いでいます。以前よりもっと自信を持てるようになりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、独立力と適応能力が向上しました。独立しないと生きていけない、適応しないと帰国するしかありません」。

自分の長所について、「私の長所は、性格が明るく、コミュニケーション能力も良好であることです」。

自分の目標について、「現在の目標は、卒業論文を完成することです」。

自分の変換能力について、「まあまあいいと思います。将来に役に立つアルバイトをやったり、自分の得意ことをやったりしています」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「精神的追求がやや多いと思います。魚や猫、植物などが大好きです。これらの小さなものを大事にすることで精神的な満足感を得ることができます」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「普段、友達と会話すること、お互いに助け合うこと、健康であれば十分幸せです」。

自分の潜在能力について、「私はどんな潜在能力があるのか分かりません。知っていればとくに発揮しています」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「学生の場合は発揮するチャンスが少なく、仕事の中で様々な能力を育てる方がいいと思います」。

新型コロナウイルスの影響について、「あまり影響ありません。ひどい時はアルバイトの店が1か月休業しました。その1か月はずっと家でゆっくり休みました」。

## 26. Zさんのライフヒストリー事例分析

Zさんは、来日前に、中国で仕事をしたことがあり、毎日同じような生活が続き、だんだん飽きてしまいました。新たな暮らしを求めるとして来日した。日本での生活もそんなに楽ではないけれども、日本で結婚したからこれから日本で暮らすために頑張っていく予定である。

Zさんの日本留学の理由は、「中国で何年間仕事をしました。生活様式を変えたいと思って、日本に留学に来ました」という。

卒業後の日本での滞在理由は、「日本で結婚したから、これからも日本で暮らしたいです」。

日常生活での悩みことは、「新しい環境で友達も少ないし、いつも寂しいと感じます。今は、徐々に慣れてはいるけれども、寂しい感じがあまり消えません」。

悩みことや困難の対処法は、「寂しい時は必ず何かします。暇な時間を作らないようにします。散歩に行ったり、綺麗な景色を見たりとかしています」。

日本文化と中国文化の違いについて、「日本人の曖昧さは理解できます。彼らは「空気を読む」ことにこだわっています」。

日本文化と中国文化の違いについて、「教育では、中国には中国の良いところがあり、日本には日本の良いところがあると思います。中国では知識を重視し、日本では子供の全体的な素質を重視しています」。

日本文化への適応状態について、「今でも迷っています。卒業後どんな仕事をすればいいかわかりません」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「日本人との付き合いがそんなに多くないから、考え方など心の面では同化されていません。表面的なものだけで、例えば挨拶をする時の頷きやお辞儀などです」。

日本での自由について、「日本やアメリカでは自由は自由けれども、だからこそ、新型コロナウイルスはなかなか止められません。ある意味で中国のようにある程度の自由を制限した方がいいかもしれません。命がなければ、いくら自由があっても意味がないと思います」。



日本での平等について、「日本では、友人や恋人の間に割り勘する人が多いです。また、今回の新型コロナで外国人も日本政府から10万円の補助金を貰いました。さらに、日本人でも外国人でも同じように国民税を払わないといけないなどの点から平等と感じます」。

日本での機会について、「まず、中国と日本の人口が違うから、競争の激しいさも違います。中国なら、専門的な技術を持っている人ならチャンスが多いです。日本にいる中国人はそれほど多くないから、少数グループとしてある程度の優位性を持っています。もし中国に帰ると日中関係の仕事しかできません」。

機会について、「日本の医療資源は本当に豊かです。日本の医療は世界でも屈指のもので、これは中国では日本とは比べ物になりません」。

権利について、「権利のことはよくわかりません。私は何の権利もありません。普段、あまり関わっていないからです」。

社交力について、「社交力は中国でもっと強いです。日本人の場合は、言葉が違うし、教育や生活環境も違います。日本にいても周りの中国人と付き合いたくなります」。

日本での収穫について、「日本での最大の収穫は、彼女です」。

来日後の変化は、「来日後の変化がきっとあります。例えば、中国にいる時は、「井の中の蛙大海を知らず」のようです。日本に来てから、様々な優秀な人とのコミュニケーションの中で、知識や見方、物事の考え方および思考方式などを学びました」。

来日後高めた能力について、「来日後、年齢と体重が増えた以外に、高めた能力はないと思います。多分、まだ学生だから、就職したらわかるかもしれません。卒業したら、どんな仕事をするか今も迷っています」。

自分の長所について、「この問題は難しいです。自分の長所はよくわかりません。外向的で、誰とでも会話ができて、コミュニケーションが上手な点は長所かもしれません」。

自分の目標について、「今の目標は、順調に卒業して、仕事を見つけることです」。

自分の変換能力について、「資源転換能力が良くないと思います。どうやって転換すればいいかわかりません」。

物質と精神について、「物質重視です」。その理由は、「やはり物質が大事だと思います。衣食住が最も必要だからです」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「家族と一緒にいることだけで幸せです」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「すべての能力を高めたいです。しかし、具体的にどのようにすればいいかわかりません」。

新型コロナウエルの影響について、「帰国できなくなり、外出もできません。オンライン授業はあまり好きではありません。対面の授業の方が効果的です」。

## 27. αさんのライフヒストリー事例分析

αさんは、日本でアルバイトしながら勉強してきた。様々な苦労を経験して、自信もかなり成長したと実感している。しかし、結婚の年齢にますます近づいているので、日本でなかなか彼女も見つからなくて、卒業後、中国へ戻る予定である。

αさんの日本留学の理由は、「理想の大学に合格しなかったので、海外留学に行こうと考えました。いろいろ調べてから、日本の授業料は欧米と比べ安くて、アルバイトもできるので、日本に来ました」という。

卒業後の帰国理由は、「中国人だから、やはり中国で生活しやすいです。現在、中国の発展も速いし、これからも発展し続けるだろうと思っています」。

日常生活での悩みことは、「性格が内向的で、人とのコミュニケーションが苦手です。普段、アルバイトで忙しい時に孤独感があまり感じないけれども、コロナで閉店した時は毎日家にいて結構大変だったです」。

悩みことや困難の対処法は、「アルバイト先でよく使われる言葉や会話をできるだけ覚えておきます。時間があったら勉強したり、論文を書いたり、映画を見たり、充実した日々を過ごすようにしています」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「偶に差別されたことがあります。しかし、そんなことをする人が、普通の人ではなく、何とか精神的に不安な人みたいで。そんな人から何を言われでも全然気にしません」。

日本での印象深い人や事は、「印象深い人たちは、学校で知り合った先生たちやアルバイト先で知り合った人です。優しい人ばかりですが、そのうち、一人だけ外国人のことが嫌いな日本人がいました。特に東南アジアの人たちが匂いするから、嫌われたようです。私は仕事が真面目で、何でもやるからあまり非難されたことは、ありませんでした」。

日本文化への適応状態について、「日本での生活はいいけど、卒業後中国へ戻って仕事したいです」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「人間関係の希薄化です。クラスメートや同僚と深く付き合わないようになりました」。

日本での不自由について、「日本では言語的に不自由で、環境や文化に対して詳しくないし、何処かに旅行や出かける時、日本人よりもルールを守らなければなりません」。

日本での自由について、「中国人としては、もちろん自分の国でもっと自由に暮らすことができます。言葉の障壁がなければ、文化の違いもありません」。

中国での不自由について、「自由の基準が違います。制度的には、中国のインターネット上の審査は日本より厳しいです。しかし、日常的人間関係や人と付き合いは日本より自由です」。

中国での平等について、「日本で外国人のことを外人とも言われます。中国で外国人の社会的地位はもっと高いです」。

日本での機会について、「中国で仕事したことがないから、何も言えません。日本では、しっかりと就職活動に参加したら仕事が見つかります。もし自分で起業したいなら中国の方がいいと思います」。

中国での機会について、「もし自分で会社を作りたいなら、中国でやったほうがいいと思います」。

中国での機会について、「中国はもっと多様化しています。日本は比較的に単一です」。

機会について、「資源ならもちろん中国が多いです。家族や友人は全部中国にいます。人脈はきっと中国のほうが多いです。日本の人間関係はもともと希薄化しており、友達を作ることもさえないです。しかし、教育資源は、日本の方がもっと多いです。中国の大

学入試は地域により違います。成績いい人なら大学へ進学できるかもしれないが、成績悪い人はほぼ大学と無縁です」。

権利について、「権利といえば、日本は先進国として、制度を完備しており、国民の権利がたくさんあります。しかし、日本の若者はあまり政治に関心を持っていないような気がします。彼らは選挙権を持っているのに、自ら放棄しています。どうしてそうなったか良くわかりません」。

社交力について、「中国人としてももちろん中国での社交力が強いと思います。少なくとも言葉の障壁がありません」。

普段よく付き合っている人について、「私はもともと内向的なので、友達作りが苦手です。勉強やアルバイト以外に、運動したり、漫画を読んだり、一人で何処かへ遊びに行ったりしています」。

日本での収穫について、「日本での最大の収穫は、日本語と国際的視野です」。

来日後の変化は、「来日後は、性格がもっと明るくなり、外向的になりました。中国にいる時は、人とのコミュニケーションが苦手であり、日本でアルバイトを通して段々慣れるようになり、誰とも普通に会話できるようになりました」。

来日後高めた能力について、「日本語能力とコミュニケーション能力を高めました。勉強を通して知識が増え、アルバイトを通して経験も増えました」。

自分の長所について、「私の長所は、勤勉で責任感があることです」。

自分の目標について、「まず、できるだけ早く博士を卒業することです」。

自分の変換能力について、「この能力が弱いです。性格の問題かもしれません。柔軟性がないし、恥ずかしがり屋です」。

物質と精神について、「精神重視です」。その理由は、「やはり物質が大事だと思います。衣食住が最も必要だからです」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「私はとても満足しやすい性格なので、普段幸せを感じる時もたくさんあります」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は何があるのかよくわかりません」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「勉強と実践を通して引き出す方がいいと思います」。

新型コロナウエルの影響について、「私にあまり影響ありません。ひどい時に店が閉店しました。その間、ずっと家にいるので寂しかったです」。

## 28. βさんのライフヒストリー事例分析

βさんは、異文化体験のため、日本に留学に来た。来日後、友達が少なく、毎日ゲームをやり続けている。こんな生活はしてはいけないとわかっているけど、コロナのため、外出もできなく、友達とも出会えないので、仕方なくできるだけ一人生活を楽しもうと考えているようである。

βさんの日本留学の理由は、「大学時代、一度海外に交換留学したことがあります。中国の文化と全く違うなと思って、日本に留学に来ました」である。

卒業後の帰国理由は、「今のところ、あまり日本にいたくないです。文化が違うし、食べ物も慣れません。中国で働いたことがないけど、中国の職場ではきっと日本と違うと思っています。日本人は表面的に優しそうですが、中国人みたいに仲良くなれません」。

日常生活での悩みことは、「今年、大学院に進学して、コロナでずっとオンライン授業を受けていました。クラスメートにも会えないし、宿題も多い、ストレスがたまりやすいです」。

悩みことや困難の対処法は、「気分が悪いときは、中国にいる家族や友達に電話をかけます。ずっと一人で落ち込まないように気を付けています」。

日本文化と中国文化の違いについて、「先日、横断歩道を通る時、あるお母さんが自転車を押して歩いています。自転車の前に一人と後ろに一人の子供が座っていて、何かあって後ろの子が自転車から落ちてしまいました。そのお母さんはすぐその子供に「すみません、すみません」と謝り続けていました。私が小さい頃同じようなことがあって、母から「お前はバカじゃないの」と罵りました」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「販売店でバイトする時、ある日、先輩から何かをしなさいと言われ、聞き間違え見たいそのことをしなかったです。その先輩から、「あなたはここで何をしているの？時間を無駄にしているじゃないの？外国人だから私の言ったことを聞き取れないですか？」と言われ、すごくショックです。間違いがない時なら結構優しいけど、もし何かあったらすごく怒られます」。

日本での印象深い人や事は、「急に思い出せないけど、例えば以前の日本語学校のある先生がとても親切でみんなに優しくかったです」。

日本文化への適応状態について、「日本はあまり好きではありません。いろんなルールが多すぎて、卒業したら中国へ戻りたいです」。

異文化受容タイプは、分離である。日本文化への同化程度について、「日本では、クラスメートにしても、アルバイト先の同僚にしても、誰ともプライベートについてほとんど話しません。そのため、今の私も知り合いや親友などに対して、誰とも個人的な話をしないようになりました。例えば、昔中国でよく話す家族や彼氏、最近の状況など現在は何も言わないようになりました」。

日本での不自由について、「授業やゼミで日本の学生はほとんど何も言わないから、もう少し自分の意見を言った方がいいなと思います。日本の自己主張しないところが非常に不自由と感じます」。

日本での自由について、「中国で中国人の考え方で生きていくことができます。また、中国のインターネットも日本よりずっと発展しているから、日常生活では非常に便利です」。

中国での平等について、「日本で何年間住んでいても外国人なので、日本人と同じようになれません。やはり中国人として中国にいた方が平等感を感じます」。

中国での機会について、「仕事や企業は、言葉の問題や文化の違いがないから、中国のチャンスが多いと思います」。

中国での機会について、「人脈がかなり大事だと思います。日本ではお金もないし、友達もいない、助けてくれる人もありません。中国の人脈が多いので、何かある時の選択範囲も広いです」。

機会について、「資源なら人脈の資源も他の資源も、中国の方が多いと思います。日本では旅行や買い物に適していると思います。しかし、長く日本で住むときっと耐えられません。家族がいないし、友達もいない、利用できる資源は自分しかありません」。

社交力について、「社交力は中国でもっと強いです。日本では何らかの抵抗感があり、日本人の友達どころが、中国人の友達も一人か二人しかいないです」。

普段よく付き合っている人について、「現在の友達が本当に少ないです。寂しい時は、中国の家族や友達に電話したり、ゲームしたりしています」。

日本での収穫について、「日本での収穫は、日本に対する理解および視野と学歴です」。

来日後の変化は、「来日後は以前より根気強くなりました」。

来日後高めた能力について、「来日後、視野が広くなり、日本語能力も向上しました。日本での生活経験を通して、日本人との付き合い方がわかるようになりました」。

自分の長所について、「私の長所は、余計なことを言わず、適応力が強いことと思います」。

自分の目標について、「短期の目標は、修士論文を完成し、その後、就職するのか、それとも帰国するかを決めることです」。

自分の変換能力について、「よくないと思います。人に何かを頼むのが好きではないから、いつも我慢しちゃいます」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「物質と精神は同じ大事だと思います。状況により違います。例えば、結婚の場合は物質が大事、恋愛の場合は精神が大事です。一人生活の場合は両方大事です」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「現在の指導先生は外国を研究しているので、とっても優しくていろんなことも理解してくれています。このような素敵な先生と出会えたことを幸せだと感じます」。

自分の潜在能力について、「私は仕事の能力があると思います。一旦やり始めたら、できるだけ完璧に完成し、結果にかかわらずきちんと最後まで努力する性格です」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「引き出す必要がないと思います。誰でも短所があり、完璧な人がいません。長所があれば必ず短所もあります」。

新型コロナウエルの影響について、「自分に対して新しい発見がありました。こんなにたくさんの手料理が作れるし、こんなに長く一人で在宅ができ、こんなに長く他人と会話しなくてもいいです。学校のオンライン授業も段々好きになりました」。

## 29. γさんのライフヒストリー事例分析

γさんの夢と目標は、一流大学に進学することである。来日後、ようやく日本の一流大学に進学することができた。しかし、異文化不適應のため、日本での生活はかなり苦しんでいるようである。しかし、退学したくないので、我慢し続ける日々を送っている。

γさんの日本留学の理由は、「中国の一流大学への進学が難しく、英語の成績もよくないから、日本に来ました」という。

卒業後の帰国理由は、「日本はあまり好きではありません。毎日同じような生活を繰り返す、全く挑戦的ではありません」。

日常生活での悩みことは、「日本で様々なアルバイトをしたことがあります。アルバイト先でよく虐められて辛かったです」。

日本文化への適応状態について、「アルバイト先でいつも日本人にいじめられています。卒業したらすぐ帰国したいです」。

異文化受容タイプは、分離である。日本文化への同化程度について、「内向的な人、人付き合いが嫌いな人、他人に迷惑をかけたくない人、邪魔されたくない人なら日本に同化しやすいと思います」。

日本での不自由について、「日本で法律上では自由です。道徳上では不自由です。例えば、自分が他人と違うなら、集団から排除される可能性があるから、個人的主張ができません。いつでもみんなと同じように気をつかなければなりません。だから、日本人はみんな同じようなことを言う、同じような表情がする、もしみんなと違うなら「その人が変わっている人」と言われます」。

中国での平等について、「中国では女性の権利が男性の権利より強いのに対し、日本では男性の権利が女性の権利より強いです。男女の権利から見ると中国の方が平等です」。

機会について、「近年、中国はアリババ、テンセント、ピンドゥオドゥオ、Tik Tok、小米、滴滴、美团などの新しい会社がたくさんできています。このようなチャンスは待つではなく、自分でつくるものです」。

機会について、「日本の社会資源が多いけど、効率が低いです」。

権利について、「中国では、いい大学への進学する権利があります。もしこのチャンスをつかめれば運命を変えることができるかもしれません。中国は人口が多いから、このような方法で優秀な人材を選んでいます。成功すればすれほど有する権利も増えていきます。日本でも同じではないかと思います」。

社交力について、「社交力はどこに住んでいると関係ないと思います。社交力の強い人はどこに行っても強いです。弱い人はどこに行っても弱いです」。

普段よく付き合っている人について、「日本人の友達がいません。中国人の友達が何人かいます。現在、中国人のルームメイトと一緒に住んでいます」。

日本での収穫について、「日本での収穫は、もっと客観的に中国を見るようになりました。来日前、中国は問題だらけ、海外の全てが完璧とっていました。来日後、見方が変わり、中国のいいところもいっぱいあるし、海外も海外の問題があると認識できるようになりました」。

来日後高めた能力について、「日本に来なくても成長するし能力も高くなります。これは環境と関係なく、個人と関係すると思います」。

自分の長所について、「私の長所は、弁が立つことです」。

自分の目標について、「現在の目標は、早く卒業して、お金を稼ぐことです」。

自分の変換能力について、「普通だと思います。私はそんなに能力のある人ではないと良くわかっています」。

物質と精神について、「物質重視です」。その理由は、「私は物質をもっと重視しています。財務の自由を早く実現できることを望んでいます。一定の物質的基盤があつてこそ、自分の好きなことを好きなようにできます」。

幸福感について、「幸せではありません」。その理由は、「私は全く幸せではありません。いつかお金、マイホーム、一定の社会的地位、大好きな仕事と妻があれば幸せになれると思います」。

自分の潜在能力について、「もしどんな潜在能力を持っていることを知っていれば、既に発揮しました」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「もし私が知っていれば既に引き出しました。人のIQは生まれつきであり、教育は人のIQを変えることができるとは思いません」。

新型コロナウィルスの影響について、「ほぼ影響ありません。学校に行けなくなり、毎日マスクを掛けて外出することくらいの影響です」。

### 30. δさんのライフヒストリー事例分析

δさんは、卒業後、中国の大学の先生になる夢を持っている。日本のいいところをたくさん学習してから帰国したいと考えているようである。

δさんの日本留学の理由は、「日本で勉強することが夢であった。日本のいいところをいっぱい勉強したかったです」という。

卒業後の帰国理由は、「家族は中国にいますので、卒業後、中国での仕事もほぼ決まっています」。

日常生活での悩みことは、「日本に来たばかりの時は言語問題があり、今はよくなっているけど、中国にいる家族に会えなくてかなり悩んでいます」。

悩みことや困難の対処法は、「様々な人と接し、相手から新しいものを見つけます。迷った時、いろいろ試してやってみます」。

日本で偏見や差別を受けた経験について、「日本に来たばかりの時、言葉が通じなかったのが、電車で一回誤解されたことがあります。中国人を差別する日本人は大体年寄りの人が多いような気がします。若い日本人の場合は、あまりそんなことしません」。

日本での印象深い人や事は、「日本社会で感じた素晴らしいところがたくさんあり、勉強やバイトを通して、最初の目標を変えて、新しい目標を持つようになったことです」。

日本文化への適応状態について、「日本での最大のメリットは、新しいことをたくさん試すことができます。興味ある仕事はすぐアルバイトを通してやってみることができます」。

異文化受容タイプは、統合である。日本文化への同化程度について、「生活習慣など表面的ものは同化しやすく、中国で形成された人生観や価値観など同化しにくいと思います」。

自由について、「法を守るならどこでも自由です」。

日本での平等について、「日本人はもっと相手を尊重するかもしれません。平等なら中国と日本はほぼ同じです」。

日本での機会について、「チャンスは個人の能力と関わっていると思います。もし個人の能力を考慮しなければ、日本の方はチャンスが多いようです。日本社会は年齢を問わず、誰でも新しいことを試すアルバイトがあります。しかし、中国では高い能力を持っていないとチャンスも少ないです」。

日本での選択について、「日本で様々なアルバイトがあるから、いろいろやってみたいことを選択することができます」。

機会について、「利用可能な資源はほぼ同じだと思います。資源は社会的地位と関係があり、個人の能力によるものです」。

権利について、「日本の国民の権利は、非常に簡単に現れています。例えば、個人の身分を証明する場合は、在留カード、運転免許、国民健康保険証、学生証などを使うことが

できます。この面では非常に柔軟性があります。しかし、中国では、個人の身分を証明するものは身分証明書だけです。身分証がなければどこにも行けないし、どんなこともできません。その上、戸籍の問題がもっと複雑です」。

社交力について、「私の社交力は中国も日本も強くありません。ほぼ同じです」。

普段よく付き合っている人について、「論文やアルバイトだけで精いっぱいなので、友達と一緒に遊び時間がありません」。

日本での収穫について、「日本での収穫は、学歴と視野です」。

来日後の変化は、「来日後、年を重ねるにつれてますます成熟するようになり、心の持ち方もよくなりました」。

来日後高めた能力について、「日本では、様々な人と接触して、いろいろな事に挑戦して、勇気を持つようになりました」。

自分の長所について、「私の長所は、挑戦力があり、積極的、楽観的、家族を大事にすることです」。

自分の目標について、「できるだけ早く博士を卒業することは目標です」。

自分の変換能力について、「現在、まだよくないです。学生だから勉強とアルバイトでいそがしく、そんなことを考える余裕がありません」。

物質と精神について、「両方重視です」。その理由は、「両方とも重視しています。一定の物質的ニーズを満たすことが必要であり、その上で好きなことを選ぶ権利があります」。

幸福感について、「幸せです」。その理由は、「私の幸せは主に家庭からもらいました。家族がいつも支えてくれて、尽くしてくれて、いつか同じようにしてあげることができればもっと幸せです」。

自分の潜在能力について、「私の潜在能力は好奇心と挑戦力があることです」。

自分の潜在能力を引き出す方法について、「もっと積極的に多くの新しいものを試してみることです」。

新型コロナウエルの影響について、「一番の影響は、帰国できず家族と会えなくなりました。他の影響はあまりなかったです。いつも通りにアルバイトをしています」。



## 第3章 総合分析

### 第1節 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

以下、第3章の「個別事例分析」の内容を木下康仁(木下, 2007)が開発された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : 以下、M-GTA と称す) を用いて総合分析を行った結果を示す。

#### 1. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチとは

M-GTA は、グレーザーとストラウスによって1960年代に考案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ (戈木クレイグヒル, 2008) の検討から、その可能性を実践しやすいように改良された質的研究法である。M-GTA はデータに密着した継続的比較分析から独自の理論を生成する質的研究法として、特に医療、看護、福祉といったヒューマンサービス部門において注目されているもの(木下, 2007)である。

#### 2. 分析方法

本研究の分析方法として、質的研究法を用いた。質的研究のメリットは、調査対象者の主観的な意味づけをつかむことができる。また、調査対象者の多面性や全体像を把握することができる(大谷・木下ら, 1999)。本研究は、調査対象者の特性や体験を探求しようとするため、質的研究が適切であると判断した。

M-GTA はデータに基づいた理論であり、分析焦点者の、分析テーマについての行動や相互作用の変化、動きを説明するものである。分析焦点者とは、インタビュー対象者を抽象的に限定集団化したものである。分析テーマとは、研究テーマをデータに基づいた分析を行うために絞り込むものである。データ分析は分析焦点者と分析テーマの視点から行う。

M-GTA の分析要点として、データから分析概念を生成し、最終的に複数の概念間の関係を解釈的にまとめていくことにある。基本となる概念生成は、まず逐語されたデータの関連個所に着目しその意味を解釈する。そして、その部分を一つの具体例とする説明概念を生成する。生成した概念は、その定義、最初の具体例と共に概念表を作成していく。

データ分析方法は、木下(2007)で紹介されたM-GTAの手続きを参考に行った。具体的な手続きとして、まずインタビューの録音データを中国語で逐語化し、文字データにした。次に、切片化、コーディング、カテゴリーの作業を行った。また、切片化された元データを対照し、確認および修正を行った。その後、データに付与されたコード名を比較し、類似したものをまとめて名前をつけ、サブ・カテゴリーを生成した。最後に、サブ・カテゴリーの抽象度をさらにあげて名前をつけ、カテゴリーとした。

本研究は、カテゴリー間の関係の明らかにすることを目的としないため、分析をカテゴリー化までとした。

#### 3. 研究テーマの設定

本事例研究の研究テーマは、「中国人留学生の生活支援—ケイパビリティ・アプローチの視点からの考察—」である。中国人留学生は、日本での生活全般における生活課題の形成要因および必要な生活支援を明らかにするとともに、ケイパビリティ・アプローチの視点からの考察することを研究目的とした。

#### 4. 分析テーマの設定

分析テーマとは、事例研究テーマをデータに基づいた分析を行うために絞り込んだものである。本研究では、日本で留学中の中国人留学生は、生活全般でどのような生活課題があるのか、どのような生活支援が必要かを明らかにすることで、彼らの生活の支援方法を探りたいと考えた。よって、本研究の絞り込んだ分析テーマは、「中国人留学生の生活支援プロセス」と設定した。

#### 5. 分析焦点者の設定

分析焦点者とは、インタビュー対象者を抽象的に限定集団化したものである。本研究の抽象的限定集団は、日本の大学に通学中の外国人留学生である。よって、本研究の限定集団化した分析焦点者は、東京・名古屋・大阪・金沢にある大学や専門学校に通学中の中国人留学生である。

#### 6. 逐語録の作成

録音機に記録されたデータを記述し逐語録を作成した。まず、逐語化した中国語の生データを日本語に翻訳する。例えば、対象者から「在日本要一边学习，一边打工，忙的都没有时间准备考试。」という中国語の生データを「日本では勉強しながらアルバイトもしなければなりません。非常に忙しくて試験を準備する時間ありません」日本語に翻訳する。

#### 7. 分析ワークシートの作成

分析テーマに沿って、対象者1名分の逐語化データから概念の生成を行う。概念の生成には、分析ワークシートを用いる。分析ワークシートには、生成した概念の名称、その定義、具体例、理論的メモを記入する。データを読み込み、特徴的な個所だと考えられるところを分析ワークシートの具体例欄に書き出していく。1概念につき1分析ワークシートとして作成する。

#### 8. 概念の生成

本研究のデータは、インタビューの始終を逐語化したもので、まず1名分の逐語化データから概念を生成した。概念の生成は、分析ワークシートを用いた。1つの概念につき1つの分析ワークシートを作成した。分析ワークシートには、生成した概念の名称、その定義、具体例（バリエーション）、理論的メモを記入した。概念の生成時には、継続的比較により、概念の妥当性を確認した。抽出した具体例が既存の概念の類似例であると考えら

れる場合には、すでに作成した分析ワークシートの具体例に、新たな具体例を追記し、概念名や定義も適切な表現へ調整した。新たな概念であると考えられる場合には、新たな分析ワークシートをおこした。解釈の反対例がある場合にはそのデータを排除するのではなく、対極の概念として生成する。一人目の逐語化データの解釈が終わったら、次の対象者の逐語化データについても概念を生成した。このようにして全対象者のデータを読み込み、概念の生成を行った。

## 9. カテゴリーの生成

理論的に飽和を判断した時点で、生成した概念間の関係性を図におこした。概念間の関係が見えてきたことにより、複数の概念を1つのカテゴリーとしてまとめる。いくつかの概念のまとまりをさらにまとめることで、分析テーマのプロセスが明確になる。最終的に複数のサブ・カテゴリーとカテゴリーを生成した。

## 10. 結果の質の確保

M-GTA では、データに密着し、分析プロセスを明らかにし、継続的比較分析を行うことにより、分析と解釈の適切さに対する妥当性を確保する。また、研究では、M-GTA による分析手順を踏むこと、例えば概念の類似例を探す、対極比較を行うことでデータの解釈が偏らないようにすることにより、データをより深く理解することができた。さらに、研究の始終に至るまでスーパービジョンを受け、解釈が偏らないようにすることを心がけた。

## 第2節 調査対象者の基本属性

インタビュー対象者の基本属性(表 4-1)である。

- (1) 表 4-1 の「番号」欄は、分析の順序に従って番号を付けた。
- (2) 表 4-1 の「性別」欄は、男・女を示す。
- (3) 表 4-1 の「年齢」欄は、年齢を示す。
- (4) 表 4-1 の「出身地」欄は、中国での生まれ育った場所を示す。
- (5) 表 4-1 の「最終学歴」欄は、個人の学業上の最終学歴を示す。
- (6) 表 4-1 の「来日年数」欄は、日本での生活年数を示す。
- (7) 表 4-1 の「在学状況」欄は、学校での在学や在籍状況を示す。
- (8) 表 4-1 の「調査期日」欄は、インタビュー調査の期日を示す。
- (9) 表 4-1 の「時間」欄は、インタビュー時間(単位:分)を示す。
- (10) 表 4-1 の「頁数」欄は、収集した生データの頁数(中国語)を示す。
- (11) 表 4-1 の「文字数」欄は、収集した生データの文字数(中国語)を示す。

表 4-1 本事例研究の調査対象者の基本属性

番号	性別	年齢	出身地	最終学歴	来日年数	在学状況	調査期日	時間	頁数	文字数
1.	男	20代	江蘇省	大学	6年	修士1年生	2020.9.4	82分	12頁	17953字
2.	男	30代	黒龍江省	修士	9年	博士5年生	2020.9.22	112分	22頁	33887字
3.	女	20代	福建省	高校	1年	専門1年生	2020.9.11	38分	5頁	7666字
4.	女	20代	福建省	専門学校	1年	専門1年生	2020.9.11	66分	9頁	13354字
5.	男	20代	江蘇省	大学	5年	修士2年生	2020.9.11	57分	10頁	15290字
6.	男	20代	山東省	高校	6年	大学3年生	2020.9.12	62分	6頁	8842字
7.	女	20代	内モンゴ	専門学校	3年	修士2年生	2020.9.12	121分	15頁	23881字
8.	女	20代	山東省	専門学校	6年	大学4年生	2020.9.12	33分	4頁	5484字
9.	男	20代	山東省	高校	7年	大学4年生	2020.9.13	59分	7頁	10844字
10.	女	30代	吉林省	大学	12年	博士5年生	2020.9.12	119分	16頁	26145字
11.	女	30代	黒龍江省	修士	9年	博士1年生	2020.9.25	58分	22頁	34053字
12.	女	30代	遼寧省	大学	6年	修士2年生	2020.9.15	71分	16頁	24989字
13.	女	20代	湖北省	修士	4年	博士1年生	2020.9.16	191分	29頁	41096字
14.	女	30代	内モンゴ	大学	4年	修士2年生	2020.9.21	157分	15頁	24158字
15.	男	20代	山東省	専門学校	7年	大学4年生	2020.9.26	68分	12頁	17602字
16.	女	30代	山東省	修士	7年	博士5年生	2020.9.22	43分	8頁	12193字
17.	女	30代	遼寧省	修士	7年	博士1年生	2020.9.21	90分	7頁	10501字
18.	女	20代	山東省	修士	3年	博士2年生	2020.9.26	114分	19頁	28943字
19.	女	20代	陝西省	大学	4年	修士2年生	2020.9.21	144分	21頁	32621字
20.	女	20代	広東省	修士	8年	大学4年生	2020.9.21	118分	21頁	32701字
21.	女	30代	四川省	修士	7年	博士4年生	2020.9.25	139分	24頁	37792字
22.	男	20代	広東省	大学	3年	大学4年生	2020.9.23	177分	28頁	44581字
23.	男	20代	江西省	専門学校	1年	大学3年生	2020.9.26	122分	18頁	28318字
24.	女	20代	遼寧省	高校	6年	大学4年生	2020.9.24	39分	7頁	10171字
25.	女	20代	河南省	大学	4年	修士1年生	2020.9.27	109分	17頁	26708字
26.	男	20代	吉林省	大学	5年	大学3年生	2020.9.25	112分	22頁	46595字
27.	男	30代	山東省	修士	10年	博士4年生	2020.9.22	65分	12頁	18207字
28.	女	20代	湖南省	大学	3年	修士1年生	2020.9.26	161分	27頁	42468字
29.	男	20代	浙江省	高校	6年	大学4年生	2020.9.27	88分	15頁	23845字
30.	男	30代	河南省	修士	10年	博士6年生	2020.9.22	126分	18頁	31469字

(注：個人が特定されないように、年齢は20代とか30代で表記した)

## 1. 性別

本事例研究では、インタビュー調査対象者の中に男性 12 名、女性 18 名、である。女性は多くを占めている（表 4-2）。

表 4-2 性別割合

性別	人数
男性	12 名
女性	18 名

## 2. 年齢

本研究のインタビュー調査対象者の年齢（表 4-3）は、20 代から 30 代の間であった。20 代 20 名、30 代 10 名であった。20 代は三分の二を占めている。

対象者の年齢が 20 代から 30 代の間集中した理由は、サンプルの全部を、日本語学校や大学および大学院を通わせている中国人留学生を通して得ていることがあると思われる。

表 4-3 年齢構成

年齢	人数
20 代	20 名
30 代	10 名

## 3. 出身地

本研究のインタビュー事例調査対象者は、中国では出身地により気質が異なる。自らの習慣には出身地が強く影響を及ぼしていると思われる。出身地については、中国東北部、中国東部、中国中部、中国南部（表 4-4）に分けており、ほぼ中国の全地域に渡っている。

中国北部 9 名（内モンゴル 2 名、遼寧省 3 名、吉林省 2 名、黒龍江省 2 名）であった。中国中部 4 名（河南省 2 名、湖北省 1 名、湖南省 1 名）であった。中国東部 13 名（山東省 7 名、江蘇省 2 名、浙江省 1 名、江西省 1 名、福建省 2 名）であった。中国南部 2 名（広東省 2 名）であった。中国西部 2 名（陝西省 1 名、四川省 1 名）であった。

表 4-4 事例調査対象者の出身地

地域	地方	人数
中国北部	内モンゴル 2 名、遼寧省 3 名、吉林省 2 名、黒龍江省 2 名	9 名
中国中部	河南省 2 名、湖北省 1 名、湖南省 1 名	4 名
中国東部	山東省 7 名、江蘇省 2 名、浙江省 1 名、江西省 1 名、福建省 2 名	13 名
中国南部	広東省 2 名	2 名
中国西部	陝西省 1 名、四川省 1 名	2 名

#### 4. 最終学歴

高校卒業 5 名、専門学校卒業 5 名、大学卒業 10 名、修士卒業 10 名（表 4-5）であった。中国教育部（2019）の調査によれば、全国の小学校純入学率は 99.94% に達し、中学校の粗入学率は 102.6% で、高等教育機関への進学率は 51.6% となり、半数以上が大学に進学するようになった。本研究の調査対象者の学歴は中国の平均的な知的階級者であると言える。

表 4-5 学歴構成

学歴	人数
高校卒業	5 名
専門学校卒業	5 名
大学卒業	10 名
修士卒業	10 名

#### 5. 来日年数

本研究の事例調査対象者の来日年数は、平均の来日年数は 5.6 年である。1 年以上 11 名、5 年以上 18 名、10 年以上 1 名（表 4-6）であった。彼らの来日年数は、1 年から 12 年までに渡っているため、収集されたデータに影響を及ぼしていると思われる。

表 4-6 来日年数

来日年数	人数
1 年以上	11 名
5 年以上	18 名
10 年以上	1 名

#### 6. 在学状況および教育機関

日本語学校 2 名、大学 10 名、修士課程 8 名、博士課程 10 名であった。修士在学中と博士在学中の大学院生を合わせて 18 名であり、半分以上を占めている（表 4-7）。(4)の中国の進学率について述べたように、本研究の調査対象者は中国の平均的な知的階級者であると言える。

表 4-7 在学状況

在学状況	人数
日本語学校	2 名
大学	10 名
修士課程	8 名
博士課程	10 名

## 7. 事例調査の期日

調査期日は、2020年9月に、インタビューによる横断調査を行った。具体的な調査期日は（表4-8）により実施した。

表 4-8 調査期間

調査期日	調査人数
2020年9月4日	1名
2020年9月11日	3名
2020年9月12日	4名
2020年9月13日	1名
2020年9月15日	1名
2020年9月16日	1名
2020年9月21日	4名
2020年9月22日	4名
2020年9月23日	1名
2020年9月24日	1名
2020年9月25日	3名
2020年9月26日	4名
2020年9月27日	2名
合計	30名

## 8. インタビュー時間

本事例研究の調査対象者におけるインタビュー時間は、30分以上7名、60分以上7名、90分以上16名（表4-9）であった。インタビュー時間は90分以上の人数は約半分を占めている。インタビュー時間は33分間から191分間までに渡っているので、収集されたデータに影響を及ぼしていると思われる。

表 4-9 インタビュー時間

インタビュー時間	人数
30分以上	7名
60分以上	7名
90分以上	16名

## 9. インタビューの時間およびデータの頁数と文字数

本研究では、インタビュー総時間2941分間、一人当たりのインタビュー平均時間は98分である。収集した生データの総頁数は464頁（中国語）、一人当たりの平均頁数は15頁（中国語）である。収集した生データの総文字数は732357文字（中国語）、一人あた

りの平均文字数は 24412 文字（中国語）である。抽出した生データの総文字数は 73449 文字（中国語）、一人あたり抽出したデータの平均文字数は 2448 文字（中国語）である。抽出した生データの日本語総文字数は 71157 文字、一人あたり抽出したデータの日本語平均文字数は 2372 文字である（表 4-10）。

表 4-10 本事例調査データの総数と平均数

インタビュー総時間（分）	合計 2941 分
一人あたりインタビュー平均時間（分）	平均 98 分
データ総頁数（中国語）	合計 464 頁
一人あたりデータ平均頁数（中国語）	平均 15 頁
データ総文字数（中国語）	合計 732357 文字
一人あたりデータ平均文字数（中国語）	平均 24412 文字
抽出したデータ総文字数（中国語）	合計 73449 文字
一人あたり抽出したデータの平均文字数（中国語）	平均 2448 文字
抽出したデータ日本語文字数（日本語）	合計 71157 文字
一人あたり抽出したデータの平均文字数（日本語）	平均 2372 文字

### 第 3 節 中国人留学生の日本留学の動機および日本での滞在理由と帰国理由

#### 1. 中国人留学生の日本留学の動機

本事例研究の調査対象者における日本留学の動機は、主に【内的動機】と【外的動機】（表 4-11）に分けることができる。

【内的動機】は、日本留学を通して「より良い自分になるため」こと、文化体験や生活体験という「人生経験の充実」こと、日本で日本語やアニメなどの「技能や知識を学習する」ことや、仕事の「就職の将来性」を上げることができる。

【外的動機】は、日本は先進国であり中国との距離が近いという「日本留学の利点」こと、中国の高校や大学で日本語を学んだことがある「日本語関連」こと、日本に交換留学や旅行に来たことがある「過去の経験」こと、および現状に不満があるという「現実逃避」を上げることができる。

この結果は、第 2 章の「中国人留学生の日本留学生動機」に示されている先行研究とほぼ一致している。一方、旧世代にあたる 70 年代や 80 年代の出稼ぎ目的で来日した中国人留学生と比べ、新世代の中国人留学生は出稼ぎ目的で日本留学を選んだ学生が極めて少なくなっている。特に、本研究ではほぼ見当たらなかった。本研究の調査対象者の学費や生活費は、「親の仕送りとアルバイトの給与」が一番多く、それ以外は「貯金」「親の仕送り」「アルバイトの給与」をあげられる。



表 4-11 中国人留学生の日本留学の動機

カテゴリー	サブ・カテゴリー	コード
内的動機	よりよい自分になるため	日本留学を通して自分を変える 日本留学を通して人生を変える 自己実現を果たすため 経験を積むため 視野を広げるため 能力を高めるため
	人生経験の充実	日本文化に興味がある 日本社会について理解したい 日本人について理解したい 異文化を体験して見たいから 海外で生活して見たいから 海外で勉強して見たいから 日本で暮らして見たいから
	技能や知識を学習する	日本のアニメを習いたいから 日本語を勉強したいから 日本の大学院に進学するため 福祉を勉強するため日本に来た 日本のいいところをいっぱい勉強したいから
	就職の将来性	将来、中国の日系企業で働きたいから 将来、日中貿易の仕事をしたいから 将来、福祉領域の仕事をしたいから 将来、日本語を使って仕事をしたいから 将来、日本で仕事をしたいから
外的動機	日本留学の利点	日本は先進国である 日本の製品は世界で人気ある 日本の授業料は欧米より安いから 日本でアルバイトができるから 日本と中国が近いから
	日本語関連	中国の高校で日本語を勉強したことがある 中国の大学で日本語を勉強したことがある 大学で日本語専攻だから日本の大学院に進学した 大学での日本留学プロジェクトを利用して日本に来た
	過去の経験	以前、日本で交換留学したことがある 以前、日本に旅行に来たことがある 以前、独学で日本語を勉強したことがある 大学時代、海外に交換留学したことがある
	現実逃避	中国の大学で卒業後どうすればいいか分からない 親戚が日本にいるから 親が日本に留学に行きなさいと言われたから 中国の大学で勉強したくないから環境を変えたい 中国の大学院に進学したくないから 成績が良くないから国内より海外で留学した方がいい 大学への進学が失敗したから 理想の大学へ進学できなかったから 英語の成績が良くないから日本に来た 中国の仕事を飽きたから日本に留学に来た 中国でやりたい仕事がないから日本に留学に来た クラスメートが日本に留学に来たから たまたまチャンスがあって日本に留学に来た

## 2. 中国人留学生の日本での滞在理由と帰国理由

本事例研究の対象者のインタビューデータに対する質的分析の結果は、2個カテゴリーと6個のサブ・カテゴリーを得られた(表4-12)。以下、それぞれのカテゴリーについて説明する。

「滞在理由」カテゴリーは、サブ・カテゴリー「日本での生活のしやすさ」「日本での就職理由」「帰国後の不安」からなる。「日本での生活のしやすさ」は、主に「日本の雰囲気が好き」「日本社会は平和であり、生活水準も高い」「日本の医療や食品が安全である」「日本の公共施設が良く、サービスもいい」「日本の仕事とプライベートをはっきり分けており、生活し易い」「日本の生活はもう慣れている」「日本の『道に落とし物を拾わず』というところが好き」「日本で幸せを感じやすい」「アルバイト先の上司や同僚がとても優しい」「日本人は真面目であり、礼儀正しい」「日本人の人間関係がとても単純であり疲れない」が見られた。「日本での就職理由」は、「日本で様々な社会経験を積んでから帰国したい」「親戚が日本にいるから一緒に仕事する予定」「日本の収入は中国より高い」「すでに内定している」「日本で仕事をしたい」が挙げられた。「帰国後の不安」は、「中国の人間関係が複雑過ぎであり、帰りたくない」「日本の生活が慣れているから、帰国すると慣れないかも」「帰国したら中国の医療や食品及び人間関係など馴染めない」が含まれる。

「帰国理由」カテゴリーは、サブ・カテゴリー「日本での生活のしづらさ」「中国での就職理由」「家族のために帰国する」からなる。「日本での生活のしづらさ」は、「日本での生活は快適だが、何だか物足りない気がする」「日本社会は成熟し過ぎて分業も細くチャンスが少ない」「社会全体がすでに定型化されて、些細な変化しでも難しい」「日本で長くなると、闘志が失われやすくなり」「日本社会が単純すぎて、帰国すると適応できなくなる」「日本の雰囲気が重すぎ、人間関係も希薄で友達が作れない」「日本での生活が寂しくて文化が違うし、食べ物も慣れない」「生なお寿司や海鮮料理、冷たいお弁当が食べられない」「日本では毎日繰り返して全く挑戦的ではない」「日本での生活コストが高くて、気楽に旅行にいけない」「日本人は融通が効かない、柔軟性が足りない」「日本人は表面的優しそうけど、中国人みたいに仲良く慣れない」「日本の友達が少なく、中国人の友達も全部帰国した」「日本の会社で出世し難い」「日本の会社は融通が効かず不自由である」「日本で言葉が通じないから不便である」が挙げられた。「中国での就職理由」は、「中国は発展中なので、チャンスが多い」「中国で会社を作りたい」「中国の必要な資源は日本より豊かである」「中国の日系企業に就職したい」「これからの中国は発展し続けると思っている」「中国で仕事したことがなく、職場はきっと日本と違う」「中国での仕事はすでに決まっている」が含まれた。「家族のために帰国する」は、「家族のために帰国したい」「親が中国で仕事しなさいと言われた」「一人だけ日本にいると親が心配だから」「彼氏や彼女は中国にいる」「日本の生活が嫌いではなく、家族が側にいないと帰属感がない」が見られた。

上述のように、中国人留学生は日本での滞在理由は、「生活のしやすさ」を実感されている。この結果は、李(2019)の精神障害をもつ在日中国人における調査結果と一致している。その調査では、「精神障害をもつ中国人留学生はさまざまな『生活しづらさ』を実感しながら、同時に日本で『生活のしやすさ』も実感していると明らかにした」と示されている。

表 4-12 中国人留学生の卒業後の日本での滞在理由と帰国理由

カテゴリー	サブ・カテゴリー	コード
滞在理由	日本での生活のしやすさ	<p>日本は静かであるさくなく、雰囲気が大好き</p> <p>日本社会は平和であり、生活水準も高い</p> <p>日本の医療や食品が安全である</p> <p>日本の「道に落とし物を拾わず」というところが好き</p> <p>日本の公共施設が良くて、サービスもいい</p> <p>日本の雰囲気が落ち着いており、生活も穏やか</p> <p>日本で幸せを感じやすい</p> <p>日本の仕事とプライベートをはっきり分けており、生活し易い</p> <p>日本の生活はもう慣れている</p> <p>アルバイト先の上司や同僚がとても優しい</p> <p>日本の国民はとても優しい</p> <p>日本人は真面目であり、礼儀正しい</p> <p>日本人の人間関係がとても単純であり疲れない</p>
	日本での就職理由	<p>日本で2年くらい仕事してから帰国する予定</p> <p>日本で様々な社会経験を積んでから帰国したい</p> <p>親戚が日本にいるから一緒に仕事する予定</p> <p>日本で結婚したからこのまま日本で暮らしたい</p> <p>日本の収入は中国より高い</p> <p>すでに内定している</p> <p>日本で仕事をしたい</p> <p>卒業後、日本で会社を作りたい</p>
	帰国後の不安	<p>中国の人間関係が複雑過ぎであり、帰りたくない</p> <p>日本の生活が慣れているから、帰国すると慣れないかも</p> <p>帰国したら中国の医療や食品及び人間関係など馴染めない</p>
帰国理由	日本での生活のしづらさ	<p>日本での生活は快適だが、何だか物足りない気がする</p> <p>日本社会は成熟し過ぎて分業も細くチャンスが少ない</p> <p>社会全体がすでに定型化されて、些細な変化しても難しい</p> <p>日本で長くなると、闘志が失われやすくなり</p> <p>日本社会が単純すぎて、帰国すると適応できなくなる</p> <p>日本の雰囲気が重すぎ、人間関係も希薄で友達が作れない</p> <p>日本での生活が寂しくて文化が違うし、食べ物も慣れない</p> <p>生なお寿司や海鮮料理、冷たいお弁当が食べられない</p> <p>日本では毎日繰り返して全く挑戦的ではない</p> <p>日本での生活コストが高くて、気楽に旅行にいけない</p> <p>日本人は融通が効かない、柔軟性が足りない</p> <p>日本人は表面的優しそうけど、中国人みたいに仲良く慣れない</p> <p>日本の友達が少なく、中国人の友達も全部帰国した</p> <p>日本の会社で出世し難い</p> <p>日本の会社は融通が効かず不自由である</p> <p>日本で言葉が通じないから不便である</p>
	中国での就職理由	<p>中国は発展中なので、チャンスが多い</p> <p>中国で会社を作りたい</p> <p>中国の必要な資源は日本より豊かである</p> <p>中国の日系企業に就職したい</p> <p>これからの中国は発展し続けると思っている</p> <p>中国で仕事したことがなく、職場はきっと日本と違う</p> <p>中国での仕事はすでに決まっている</p>
	家族のために帰国する	<p>家族のために帰国したい</p> <p>親が中国で仕事しなさいと言われた</p> <p>一人だけ日本にいると親が心配だから</p> <p>彼氏や彼女は中国にいる</p> <p>日本の生活が嫌いではなく、家族が側にいないと帰属感がない</p>

## 第4節 中国人留学生の生活課題とその対処法

### 1. 中国人留学生の生活課題

本事例研究の対象者のインタビューデータに対する質的分析の結果は、8個カテゴリーと14個のサブ・カテゴリーを得られた(表4-13)。以下の発話例を取り上げ、それぞれのカテゴリーについて説明する。

「日常生活の課題」は、彼らが日本での日常的な暮らしを送る上で経験する日常生活の難しさや困りごとである。彼らは、「中国にいる時勉強だけすればいい」しかし、日本に来てから「家事やアルバイトしなければならぬ」のである。さらに、「勉強とアルバイトを両方しなければならぬ」、そのため、「悩み事をどう解決すればいいか分からない」こんな状況の中で、「目の前には問題だらけ」になり、「やるべきことがいっぱい、何をすればいいか分からない」や「悩み事をどう解決すればいいか分からない」となり、ようやく「生活リズムが潰れてしまった」のである。掃除や洗濯などの家事も自分でやらなければならない、しかし、日本のゴミの分別が厳しく、「ゴミの出し方が分からない」とか「ゴミ出しが面倒臭い」と実感する人が多く存在している。言語的障壁もあり、最初は「日本語が分からない」、時間が経つとだんだん日常会話なら話せるようになり、しかし、専門用語が聞き取れないという。一方で、「日本に来たばかりの時は興奮したけど、気持ちが段々落ち込んでいく」ことが多く、これらは、彼らが「中国にいる時悩み事ほぼ無いけど、日本に来てから急に増えた」による生活全般の不便や困難が挙げられた。

「学校生活の課題」について、多くの学生が日本留学の目的は、日本で教育を受けることである。大学での生活は、勉強の面において、「充実感がなく楽しくない」「忙しいすぎて試験の準備時間がない」「勉強は時間の無駄」「勉強する時間が足りない」を抱えていたことが明らかとなった。しかし、日本語能力不足のため「先生の言っていることがわからない」ことで、進学面において、「進学のこと悩んでいる」に悔しさを感じる面も見られた。特に、一番気になるのが先生との関係であり、「指導先生との相性が合わない」や「中国人留学生が嫌いな先生がいる」ことで、授業の質に対して、「授業を受けても達成感がない」「宿題やレポートが多すぎ」「授業に興味ないし勉強したくない」「理論的知識ばかり実践してみたい」「理論より問題解決法を習いたい」「論文の書き方が分からない」「授業を受けるより自分で資料を探して勉強したほうが良い」などの不満や困りごとが挙げられた。

「アルバイトの課題」は、彼が勉学を行うために、アルバイトを行わなければ生活ができない留学生もいる。しかし、日本語能力不足の彼らにとって、「アルバイトが見つからない」ことが珍しくない。アルバイトが見つかった人にとっても、「好きなアルバイトがない」ため、好きではないアルバイトを選んだことで、すぐに飽きてしまう。日本語が上手く話せないため、「上司の言われたことが聞き取れない」「日本人の同僚との交流が通じない」「仕事で分からないことが多い」ことが生じる。こんな状況の中に、上司や同僚が「些細なことでもすぐわあわあと言われる」、彼らから見れば、自分が「アルバイト先でよく虐められて辛い」ので、「不愉快だからすぐやめたい」といった困難が挙げられた。

「人間関係の課題」は、彼らが日本で留学生活を送る上で経験する他者との関係の難しさや戸惑い感である。彼らが日本人の友達が少ないだけではなく、中国人の友達も少ない。一方、日本人と友達になりたいけれども、日本人との付き合い方が分からないも悩みの種の一つであった。「日本では友達も少ないし、日本人と本当の友達になることがなか

なか難しいです」と語られるように、友達を作ること期待した「日本人と友達になるのが難しい」ことがあげられた。最初は日本人と友達になろうと努力したが、上手くいかなかった。その理由は、「日本人との付き合い方は中国人と違う」から「どのように付き合い合ったらいいかわからない」、また自身は「人間関係が苦手」ことなど、日本人との対人関係の難しさは言語よるものだけではなく、文化や考え方や価値観の違いによる部分もあった。このように、彼らは人間関係の課題において、さまざまな困難を抱えていた。

「言語の課題」は、言葉の壁として、日常生活や学校生活およびアルバイトにおいてかなり影響を与えている。本研究の対象者によれば、生活全般において「日本語が分からない」「日常会話なら大丈夫、専門用語が聞き取れない」「授業で聞き取れない用語が多い」「上司の言われたことが聞き取れない」「日本人の同僚との交流が通じない」などを挙げられた。

「心理面の課題」は、彼らが異国で暮らすとき異文化接触の過程で生じる心理的状态である。ライフイベントで生じた自覚されるストレスは、「受験のためストレスが溜まっている」「勉強とアルバイトでストレスが溜まりやすい」「人間関係で一番ストレスを感じる」による受験・勉強・アルバイト・人間関係上の困難が挙げられた。それ以外に、異文化接触が個人のメンタルヘルスに与える影響である。例えば、「自分の気持ちがよく分からない」「いつも不安で堪らない」「新しい環境でいつも寂しく感じる」「徐々に慣れていけど、寂しい感じが消えない」「忙しい時孤独感が感じないけど、暇の時はいつも感じる」「やる気がなくなった」「自分の将来を心配する」における困難が明らかになった。

「経済面の課題」は、彼らは日本で生活している中で経済的困難を感じていたこのである。藤井・門倉(2004)によると、複数回答で「経済的なこと」84.5%で最も多かった。また、日本学生支援機構(2021)によると、2019年に実施された私費外国人生活実態調査の結果、「日本に留学後の苦労は」複数回答で「物価が高い」70.5%が最も多い回答であった。具体的には、「収支のバランスが取れない」「親のお金を使いたくない」「経済的に悩んでいる」「欲しいものが買えない」「学費を悩んでいる」ことが挙げられた。

「文化面の課題」は、彼らが日本の文化を理解し、日本の環境や文化および生活習慣に慣れていく上で感じる困難や困惑感である。「日本の文化が分からない」や「日本の生活習慣が分からない」「刺身や冷たいお弁当が食べられない」など日本の文化や習慣および食事になれない部分が挙げられた。いろいろな不慣れさの中で、日本人に対しても「日本人が自閉的な人が多い」や「日本人が曖昧な言い方が多い」などの国民性の違いも挙げられた。

表 4-13 中国人留学生の生活課題の具体事例

カテゴリー	サブ・カテゴリー	コード
日常生活の課題	家事の悩み	料理が作れない 部屋の片付けができない ゴミの出し方が難しい
	解決するための方向性が見つからない	解決しないといけないことが多過ぎ 勉強とアルバイトの両立が難しい 悩み事をどう解決すればいいか分からない 生活リズムが潰れてしまった やるべきことがいっぱい、何をすればいいか分からない 中国では勉強だけ、日本では全てやらなければならない
学校生活の課題	大学に対する不満	大学での勉強は時間の無駄 大学では充実感がなく楽しくない 理論より問題解決法を習いたい
	先生に対する不満	先生の言っていることがわからない 中国人留学生が嫌いな先生がいる 先生が教えてくれなくて独学が多い 指導先生との相性が合わない
	授業に対する不満	授業を受けても達成感がたげない 授業より自分で資料を探し勉強した方が早い 授業に興味ないし勉強したくない
	勉強や進学の悩み	アルバイトなどで忙しいすぎて勉強する時間がない 宿題やレポートが多すぎ 論文の書き方が分からない 進学のこと悩んでいる
アルバイトの課題	アルバイトに対する不満	不愉快だからやめたい 現在のアルバイトに飽きた アルバイト先で虐められた
	上司や同僚に対する不満	上司が些細なことでわあわあと言われる 同僚が裏で私の悪口を言っている
人間関係の課題	日本人に対する不理解	日本人と友達になるのが難しい 日本人との付き合い方が分からない 日本人の考え方が理解できない
	対人関係の問題	相談相手がいない 友達作りが上手くいかない 人間関係が苦手
言語の課題	言葉の壁	日本語が分からない 日常会話なら大丈夫、専門用語が聞き取れない 授業で聞き取れない用語が多い 上司の言われたことが聞き取れない 日本人の同僚との交流が通じない
心理面の課題	メンタルヘルスの問題	勉強やアルバイトでストレスが溜まっている 徐々に慣れていくけど孤独感や不安感が消えない やる気がなくなって段々落ち込んでいる
経済面の課題	経済的問題	収支のバランスが取れない 欲しいものが買えない 学費を悩んでいる
文化面の課題	異文化不適應	日本の文化や生活習慣が慣れない 日本人の曖昧な言い方が多い 日本の食べ物が慣れない

## 2. 中国人留学生の生活課題の対処法

本事例研究の対象者のインタビューデータに対する質的分析の結果は、8個カテゴリーを得られた(表4-14)。

「日常生活の課題」のカテゴリーの対処法として、普段の生活の中で、できるだけ「考えないようにする」ことや「気にしないようにする」、あるいは「できるだけ好きなことをする」と挙げられる。何かある時に、「困ったら簡単に諦めない」ようにすることや「多くの人の意見を聞いてみる」、例えば、家族や友達と相談してから決める。新しい環境の中で、「新しいものを見つける」、できるだけ「充実した日々を過ごすようにする」のである。たまに、迷った時にもっと積極的に新しいものを試してみる。自分の能力を高めため、「自分より能力の高い人と知り合う」ことや、「たくさん経験することで問題解ける」、あるいは「苦手のことを何回も練習する」および「自分の得意なことを見つける」のである。その理由は、「なりたいたい自分になるため頑張る」こと、「すぐ諦めると一生も何もできない」ので、だから「いろいろ経験してみたい、そうしないと成長できない」という彼らの心境が見られた。

「学校生活の課題」の対処法としては、さまざまな困難や悩み事に直面し、「無理にしない」こと、「外国人だから理解できないのが当たり前」と気を遣う。ことが大事である。勉強の時間がない場合は、「スケジュールを作る」、「大事なことを先にやる、どうでもいいことしなくてもいい」ことや、「時間があったら勉強する」と挙げられる。目標を達成するため、「逃げるのではなく解決法を考える」という。例えば、「勉強しないといい大学に進学できないから一生懸命勉強する」、あるいは「時間をかけて深く勉強する」「学んだことをうまく利用する」「勉強方法を探す」「学習能力を高める」「積極的に先生に質問を聞く」「優秀な学生とコミュニケーションをとる」という対処法が挙げられた。

「アルバイトの課題」の対処法として、アルバイトで生じた困難を対処するため、彼はまずバイトで日本語という壁を乗り越えるために「よく使う言葉や会話を覚える」ことが何よりも大事である。それ以外に「時間厳守する」と「約束を守る」こともきちんとしないといけない。外国人にとって、「分からないことを直接に聞く」ことや「知らないのに知るふりをしない」という態度も必要である。それ以外に、彼らが「誤解があればすぐ解決する」「経験を積む」「柔軟性を持つ」「失敗を恐れずに実践してみる」「洞察力を高める」を語られた。

「人間関係の課題」の対処法として、日本人との接触の特徴としては、「距離を保つこと」であり、そのため、彼らも段々と「日本人と同じように距離を保つ」ようになる。人間関係でストレスを溜まりやすい留学生は、「苦手な人と接しないようにする」「嫌いな人と会わないようにする」「他人と接しないようにする」が挙げられた。そうすることで、できるだけ「人間関係のトラブルを避ける」ようにしていた。しかし、彼らは、人間関係から逃げるよりは「コミュニケーション能力を高める」ことが最も大事であると考えている。

「言語の課題」の対処法として、「普段できるだけ日本語を使う」「日本人と積極的にコミュニケーションを取る」「焦らずに少しずつ覚えていく」「外国人だから上手く聞き取れないのが当たり前」を挙げられる。

「心理面の課題」に対する対処法として、「ストレス解消法を習う」「落ち込まないように気をつける」「楽観的に考える」「落ち着くようにする」「気分悪い時家族や友達に電話する」「他人と競争しないようにする」ことが挙げられた。メンタルヘルスに対する対処法として、「自分を知る」「勇気を持ってできる限り試す」「どんなことでも気楽に受け入れる」「最善を尽くしてよく反省する」「自分の心に従う」のように心にかけていた。

「経済面の課題」の対処法としては、経済的な困難を乗り越えるため、彼らが普段の生活で、「お金を大事にする」「必要ないものを買わない」「できるだけ節約する」「アルバイトをする」「奨学金を利用する」という対処法をとっていた。

「文化面の課題」の対処法として、彼が日本の文化習慣的に慣れない対処法としては、「文化の違いに全く気にしない」「時間が経つとだんだん慣れる」ことや、少なくとも表面的には「日本人と同じ振る舞いをする」ことなどが挙げられた。積極的に「新しい環境を適応していくように」「適応力を鍛える」ことにより自己の成長にもなると考える学生も少なくな



表 4-14 中国人留学生の生活課題の対処法の具体例

カテゴリー	コード
日常生活の課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 経験を積む</li> <li>・ 他人の力を借りる</li> <li>・ 自分自身を省みる</li> <li>・ 能力を高める</li> <li>・ 積極的に新しいものを試してみる</li> <li>・ 不幸の裏には幸いがあり、幸いなことには災が潜んでいる</li> <li>・ 自分の得意なところを見つける</li> <li>・ できるだけ好きなことをする</li> </ul>
学校生活の課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 充実した日々を過ごすようにする</li> <li>・ スケジュールを作る</li> <li>・ 目標を立てる</li> <li>・ 興味ある知識だけ勉強する</li> <li>・ 学習能力を高める</li> <li>・ 積極的に先生に質問を聞く</li> <li>・ 興味ある知識を勉強する</li> </ul>
アルバイトの課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時間や約束を守る</li> <li>・ 問題があればすぐ解決する</li> <li>・ 柔軟性を持つ</li> <li>・ よく使う言葉や会話を覚える</li> <li>・ 洞察力を高める</li> <li>・ 失敗を恐れずに実践してみる</li> </ul>
人間関係の課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本人と同じように距離を保つ</li> <li>・ 苦手な人や嫌いな人と接しないようにする</li> <li>・ コミュニケーション能力を高める</li> <li>・ 人間関係のトラブルを避ける</li> <li>・ 他人と比較しないようにする</li> </ul>
言語の課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普段できるだけ日本語を使う</li> <li>・ 日本人と積極的にコミュニケーションを取る</li> <li>・ 焦らずに少しずつ覚えていく</li> <li>・ 外国人だから上手く聞き取れないのが当たり前</li> </ul>
心理面の課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分を慰める</li> <li>・ 自分を知る</li> <li>・ ストレス解消法を習う</li> <li>・ 自分の心に従う</li> <li>・ 無理にしないようにする</li> <li>・ 考えないようにする</li> <li>・ 気にしないようにする</li> <li>・ よく寝るよく運動する</li> </ul>
経済面の課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ お金を大事にする</li> <li>・ お金の管理を学ぶ</li> <li>・ できるだけ節約する</li> <li>・ 必要ないものを買わない</li> <li>・ アルバイトをする</li> <li>・ 奨学金を利用する</li> </ul>
文化面の課題の対処法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文化の違いを理解する</li> <li>・ 時間が経つとだんだん慣れていく</li> <li>・ 異文化に対して好奇心を持つ</li> <li>・ 日本人と同じ振る舞いをする</li> <li>・ 適応力を鍛える</li> </ul>

### 3. 中国人留学生の偏見や差別を受けた経験について

偏見や差別を受けた経験の有無について、あり 19 名、なし 11 名である（表 14）。

表 4-15 中国人留学生の偏見や差別を受けた経験の有無

差別経験	人数
あり	19 名
なし	11 名

具体的に、どんな状況でどのような差別や偏見されたかを明らかにする（表 4-16）。

日本政府は、外国人と共生する社会を築くためには、「人種差別撤廃条約」などを締結している。しかし、実際には偏見や差別を受けた経験がある外国人は少なくないみたいである。

例えば、本研究の対象者は、以下のような偏見や差別を受けたことがある。具体的に、「知らない日本人から『やっぱり外国人は太っているね』と言われた。」「家を借りる時外国人だから貸してくれなかった」「『中国人が勝手だ、ルールを守らない』と聞いたことがある。でも全ての中国人はそうでない」「お客さんから『これからずっと日本に住んでいくの？中国の環境が悪いから、食品も不安全、やはり日本で住むと幸せでしょう』と言われた。」「学校の先生が『私は日本人のために教えています。外国人のためではありません』と言われたことがある。」「食事の時骨が落とした。隣のおじさんが「ここは日本です。骨を勝手に捨ててはいけません」と言われた。わざわざ落としたのではないのに」「買い物する時、後ろのおじさんが『中国人が大嫌い、早く中国へ帰れ』と言ってすぐ逃げた」と語られた。

偏見や差別について、彼らの思いとしては、「差別を気にしないようにしている」「外国人だからではなく、相手がその時の気分が悪いかもしれない」「全ての中国人が嫌いではない」「日本語能力を高める」「差別されることは、自分の能力や実力が足りない証拠である、しっかりやれば差別されない」「ルールの違反や他人に迷惑をかけなければ、ほぼ差別されない」「同じ環境下で差別されない人がいれば、自分の原因を探す」「人を差別したりする人がおかしい、そんな人から何を言われても全然気にしないようにする」「中国人を差別する人はお年寄りの人が多い気がする。若者はあまりそんなことがしない」「いつも気を使う、電車やレストランで大声を出さないようにする」といったルールをしっかりと守ること、自己反省すること、自分の能力や素質を高めることなどが挙げられた。

中国人留学生の日本に対する感情について、昔から「留米親米、留日反日」（米国に留学した者は米国に親しみ、日本に留学した者は反日となる）という言い方がある。学界では一般的に、多くの留学生は日本留学中に差別などを受けたことにより反日的となったとされている。例えば、第 2 章の「中国人留学生の日本観と対日イメージ」に述べたように、山崎（1996）の研究では、対日態度に影響する要因として対人関係や差別経験は決定的な要素であると述べている。また、李（2007）の中国人留学生の日本人イメージに関する調査では、調査対象の大半は日本で差別された経験を持ち、それが日本人に対するネガティブなイメージにつながっていると示されている。一方、本研究では、たまたま買い物中やレストランで知らない人からの差別をされた以外に、もし日常生活で「日本語ができる」こと、「ルールに違反しない」こと、「他人に迷惑をかけない」こと、ある程度の能力を持っていれば、ほぼ差別されないと指摘された。

表 4-16 中国人留学生の偏見や差別を受けた経験の具体例

場所	事例	差別や偏見に対する捉え方
<p>買い物中 や食事中 および部 屋探しの 時</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ある日、買い物をする時、隣の日本人から「やっぱり外国人は太っているね」と言われた。</li> <li>• 東京に来たばかりの時、好きな物件を借りようとしたら、不動産から、「残念ながら、この物件は外国人に貸さないよ」と言われた。</li> <li>• ある日、友達と韓国の焼肉を食べている時、友達が肉を食べる時に骨が地面に落ちてしまった。隣にある年寄りの日本人がすぐ私たちに「ここは日本です。骨を勝手に地面に捨ててはいけません」と言われた。友達がわざわざ捨てたではないのに、あんなことが言われて本当に腹が立つ。日本で骨を勝手に捨ててはいけないけど、どこの国で骨を勝手に捨てることができるのか？</li> <li>• ある日、友達とデパートで買い物する時、中国語で会話をしていた。後ろのお爺さんが「中国人が大嫌い、早く中国へ帰れ」と言ってすぐ逃げた。わけがわからないと思った。</li> <li>• 買い物する時に差別されたことがあった。クリスマスに新しい腕時計を買って自分にプレゼントしようかなと思った。前に並んでいる日本人も同じ腕時計を買った。店員がその日本人に新しい腕時計を売ってあげた。しかし、私が買う時、店員から「新しい時計がない。販売カウンターに展示されている物だけ」と言われた。不思議と思って買わずに帰った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 普段、差別や偏見に対してあまり気にしていない。たまに不愉快なことがあっても、外国人や中国人だからということではなく、相手がその時気分が悪いだけかもしれないと考えている。ほとんどの日本人は例え外国人が嫌いとしても顔には現れないから、例えある中国人が嫌いでも、全ての中国人が嫌いではないと思う。</li> <li>• 差別されるとしたら、自分の能力や実力が足りないということを示していると思う。しっかりとやるべきことがやれば誰からも差別されない。</li> <li>• 日本では、ルールに違反しなければ、他人に迷惑をかけなければ、ほぼ差別されない。</li> <li>• 差別された覚えがない。しかし、周りの中国人が差別されたことをたくさん見たことがある。基本的に2種類の人がよく差別される。1つは、能力が足りない人である。もう1つは、日本の規則を守らない人である。どうして同じ環境で差別される人がいれば、差別されない人もいるのか？自分で原因を探す必要があると思う。</li> <li>• 偶に差別されたことがある。しかし、そんなことをする人が一般人ではなく、何とかに問題がある人だと思う。そんな人から何を言われでも全然気にしない。</li> <li>• 中国人を差別する日本人は、大体年寄りの人が多いような気がする。若い日本人の場合は、あまりそんなことしない気がする。</li> <li>• 日本人は、服や髪型などの外見から外国人であるどうかを判断するみたい。もし、中国人だとわかれば、嫌な顔がするかもしれない。できるだけ、日本人と同じような服や髪型をした方が良いと思う。</li> </ul>
<p>アルバイト先</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• アルバイト先の店長は中国人が大嫌いみたい。いつも些細なことでわあわあと言われる。こんなことが多くて、あんまりにも不愉快なので、すぐ辞めたいと思っている。</li> <li>• 日本に来たばかりの時、日本語が下手だから、バイト先でよくいじめられた。でも、今は、ほぼない。</li> <li>• 販売店でバイトする時、先輩から何かをしなさいと言われ、聞き取れなくてやらなかった。すると、その先輩から「あなたはここで何をしているの？時間を無駄にしているじゃないの？外国人だから私の言ったことを聞き取れないなの？」と言われた。仕事がちゃんとやる時は、すごく優しいけど、もし何かあったらすぐ怒られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 日本人は、服や髪型などの外見から外国人であるどうかを判断するみたい。もし、中国人だとわかれば、嫌な顔がするかもしれない。できるだけ、日本人と同じような服や髪型をした方が良いと思う。</li> </ul>
<p>学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 以前の学校の数学を教える先生が毎日の授業が始まる前に、私たちの中国人留学生に対して、「私は日本人のために生きています。日本人のために教えています。外国人のために生きているではありません。外個人のために教えているではありません」といつも同じことを言う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 日本人は、服や髪型などの外見から外国人であるどうかを判断するみたい。もし、中国人だとわかれば、嫌な顔がするかもしれない。できるだけ、日本人と同じような服や髪型をした方が良いと思う。</li> </ul>

#### 4. 中国人留学生の日中歴史問題による影響について

日中歴史問題影響の有無について、あり2名、なし24名、小さい頃あり・現在なし2名、来日前あり・来日後なし2名であった。影響なしはかなり多かった。影響ありは2名しかいない(表4-17)。

表4-17 中国人留学生の日中歴史問題による影響の有無

日中歴史問題影響の有無	人数
あり	2名
なし	24名
小さい頃あり・現在なし	2名
来日前あり・来日後なし	2名

日本と中国は、地理的に近いし、最も親しい隣国であるべきだと思われる。しかし、マスコミ上ではお互いの悪口ばかり強調されている。日本と中国のお互い分かり合えない部分が、その最たるものが歴史問題であると思われる。日中間の摩擦問題の一つは、歴史の認識問題である。この歴史問題は長期間に続くかもしれないことが予想される。中国人留学生の批判的な対日イメージについては、日中関係の歴史的背景や、中国のメディアによる対日報道のあり方などの社会的や歴史的要因は、中国人青年の対日イメージに多大の影響を与えている(毛里, 2006)と示されている。また、中国人留学生は、日本の大衆文化から生成された、肯定的な対日認識と歴史問題で生成された批判的な対日認識を持っている(鈴木, 2008)と指摘された。

しかし、本研究の調査対象者(表4-17)は、日中の歴史問題による影響が極めて少ないと明らかになった。例えば(表4-18)、ほぼ影響がない例として、「何の影響もなく、過去よりも現在と未来の方が大事です」「影響があまりないです。もしあったら日本へ来ないと思います」「日中の歴史問題は私への影響があまりないです。愛国心がないではありません。過去のことについて評価する資格がないし、強調しても意味がないと思います」「歴史を忘れることはできず、確かに起こったことだからです。しかし、その不満の気持ちを現代社会に持ち込む必要はありません。周りにいい日本人もたくさんいるから、みんな死ねとは言えないし、過去の悪いことは過去の日本人がやったことであり、今の日本人がやったことではありません」「私にはあまり影響がありません。中国に、もっと強くなってほしいと思います」が挙げられた。また、「小さい頃あり、現在の影響はなし」の例としては、「子供の頃は影響がありました。その時、日本人は悪い人だと思っていたが、現在は影響がありません」と言う。さらに、「来日前あり・来日後なし」の例としては、「来日前、少し影響がありました。現在、日本で何年間も生活しているから、もし影響があれば帰国した方がいいかもしれません。普段できるだけこの話をしないようにしています。歴史を忘れてはいけないけれども、いつも口にしても何の意味もありません。両国の友好を望んでいます」「もし日本に来なければ、周りの人の言いなりを信じて影響されるかもしれません。しかし、日本に来たことがあり、本当の日本の様子を知っているので、他の人が何と言っても影響されないといます」が見られた。

表 4-18 中国人留学生の日中歴史問題による影響の具体例

カテゴリー	コード
なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 何の影響もなく、過去よりも現在と未来の方が大事です。</li> <li>・ 考えると少し不愉快になります。しかし、昔のことなので、区別して対応した方がいいと思います。</li> <li>・ 影響があまりないです。もしあったら日本へ来ないと思います。</li> <li>・ 日中の歴史問題は私への影響があまりないです。愛国心がないではありません。過去のことについて評価する資格がないし、強調しても意味がないと思います。</li> <li>・ 現在を肯定することは過去を否定することではありません。</li> <li>・ 日中の歴史問題は私に全く影響がありません。自分で考える力があるから、中国の歴史だけでなく、日本の歴史も勉強しました。だから、もっと客観的にこの問題を見ることができます。</li> <li>・ 歴史を忘れることはできず、確かに起こったことだからです。しかし、その不満の気持ちを現代社会に持ち込む必要はありません。周りにいい日本人もたくさんいるから、みんな死ねとは言えないし、過去の悪いことは過去の日本人がやったことであり、今の日本人がやったことではありません。</li> <li>・ ある人やある国を知りたいとしたら、まず彼らと接触しなければなりません。しかし、日本や中国のニュースは好きじゃないし、両方とも相手の悪いニュースばかり流れています。どちらにしてもたいした差はありません。</li> <li>・ この件についてあまり気にしたことがありません。特に日本に来てから、学校でもアルバイト先でも触れたことがないです。しかし、父と祖父母への影響はかなりあると思います。</li> <li>・ 私にはあまり影響がありません。中国に、もっと強くなってほしいと思います。</li> </ul>
あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私のような年齢層にはきつと影響があります。2012 年頃中央テレビで反日や抗日ドラマを批判した後、今の若者に影響が少なくなったと思います。</li> <li>・ 私に影響があります。もっと客観的に見なければいけないと分かっているけど、できるだけ忘れようとしています。しかし、日本に来てから、アルバイト先で日本人から差別されたり、虐められたりすると日本に滞在する時間が長いと長いほど、歴史の影響が強化されます。</li> </ul>
小さい頃あり・現在なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学と高校時代で影響が大きかったです。その後ますます小さくなってきました。歴史問題を解決する前にまず他の問題を解決した方がいいと思います。</li> <li>・ 子供の頃は影響がありました。その時、日本人は悪い人だと思っていたが、現在は影響がありません。</li> </ul>
来日前あり・来日後なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 来日前、少し影響がありました。現在、日本で何年間も生活しているから、もし影響があれば帰国した方がいいかもしれません。普段できるだけこの話をしないようにしています。歴史を忘れてはいけないけど、いつも口にしても何の意味もありません。両国の友好を望んでいます。</li> <li>・ もし日本に来なければ、周りの人の言いなりを信じて影響されるかもしれません。しかし、日本に来たことがあり、本当の日本の様子を知っているのだから、他の人が何と言っても影響されないと思います。</li> </ul>

## 5. 中国人留学生の異文化受容態度

異文化受容態度として、統合・同化・分離・周辺化の4タイプに分類している。統合は、異文化と自分化の両方を認める。同化は、異文化を認め、自文化を否定する。分離は、異文化を否定し、自文化を認める。周辺化は、異文化と自文化の両方を否定する(Berry, 1997)。本研究では、異文化受容態度において、対象者の自己判断で、自分が統合あった25名、分離あった5名、同化と周辺化はなかった(表4-19)という結果を得られた。対象者の主観的な判断した可能性が高いと思われる。

表4-19 中国人留学生の異文化受容態度

異文化受容態度	人数
統合	25名
分離	5名
同化	0名
周辺化	0名

インタビューデータから「行動の同一化」「強化された個人の特性」「対人関係の同一化」という3つのカテゴリーが得られた(表4-20)。

「行動の同一化」は、主に挨拶する時のお辞儀や頷き、身だしなみなど表面的なところが多かった。生活習慣では、ゴミの処理、電車やレストランで声を小さくすること、時間や約束をきちんと守ることなどの他人に迷惑をかけない行動をするようになったこと、と挙げられた。

「強化された個人の特性」は、行動など外的な同一化以外に、性格などの内的同一化も生じた。もともとの性格がさらに強化され、例えば、細かい共感能力が高めたこと、ますます低欲望になったこと、大雑把な性格が細かくなったこと、ミスや失敗がますます怖がるようになったこと、せっかちな性格が落ち着くようになったこと、と示された。

「対人関係の同一化」は、友達との付き合いで日本人と同じように距離を保つようになったこと、自分のプライベートを言わなくなったこと、他人のプライベートを聞かないようになったことと見られた。

日本文化の特徴は、個性よりも協調性、個人よりも集団を重視しており、マイノリティの文化変容態度に対しては「同化」を望む可能性がある。しかし、中国人留学生は愛国心が高く、完全に中国文化を捨てて日本文化に同一化するように要求しても拒否され可能性が高いと思う。しかし、本研究では、中国人留学生である中国独自の文化が、日本に来てから徐々に同一化され、その拒否や抵抗感がほぼ見られなかった。このような気持ちを持ったまま日本での暮らしを始めた場合は、行動や振る舞いなどの外的な同一化しやすいかもしれないが、内的な同一化すぐには難しいかもしれない。

一方、Sun(2013)の研究では、中国人留学生が日本において周辺化という文化変容態度を取る傾向が最も多いことが指摘されていたが、その結果は、本研究で得られた結果とは異なっていた。

表 4-20 中国人留学生の異文化受容態度に関する具体例

カテゴリー	コード
行動の同一化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本人と同じように挨拶する時、すぐお辞儀するようになりました。</li> <li>・ 生活習慣では、ゴミを家まで持ち帰ること、電車の中で電話しないこと、大声で会話しないことなどです。</li> <li>・ 日本に来てから身だしなみや服装の色に気を配るようになりました。</li> <li>・ 生活習慣や言動仕草など同化されたことが多いです。例えば、時間を厳守、約束を守る、電車やレストランで小さい声で会話するなどです。</li> <li>・ 誰かと会う時に頷くやお辞儀をするような習慣になりました</li> <li>・ すぐ「ありがとう」や「ごめんなさい」をいうようになりました。</li> <li>・ 表面的なものだけで、例えば挨拶をする時の頷きやお辞儀などです。</li> <li>・ 生活習慣など表面的ものは同化しやすく、中国で形成された人生観や価値観など同化しにくいと思います。</li> </ul>
強化された個人の特性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大雑把な性格なのに、日本人と一緒にいる時非常に気をつけて、何か悪いことをしたのではないかと気を使うようになりました。</li> <li>・ 日本で小さいミスや失敗などますます怖がるようになりました。</li> <li>・ 来日前、性格がせっかちで、何かあれば落ち着かずすぐ怒ります。来日後、日本の雰囲気の中で、徐々に性格が落ち着くようになり、もっと冷静になるようになりました。</li> <li>・ 内向的な人、人付き合いが嫌いな人、他人に迷惑をかけたくない人、邪魔されたくない人なら日本に同化しやすいと思います。</li> <li>・ たまたま帰国しても日本人と同じようなやり方や考え方を持っています。</li> <li>・ 長く滞在すると、日本社会に溶け込むために考え方ややり方を変えなければなりません。</li> <li>・ 元々細かい性格ですが、日本に来てからもっと細かくなりました。また、仕事は仕事、プライベートはプライベート、はっきり分けるようになりました。</li> <li>・ 日本人の素晴らしいところは、相手の立場に立って問題を考えることです。心理学で共感能力と言います。この能力は元々少し持っているので、日本に来てから、もっと強化されるようになったと思います。</li> <li>・ 日本に来てからますます低欲望になってしまいました。中国にいるなら、いろいろ頑張って、努力してからこれ以上良くなれないと分かれば諦めます。しかし、日本でいろいろ見て、まだ頑張っていないのに、自分の能力も分かっていないのに、努力する気がなくなって、これ以上何も追求しなくなりました。</li> </ul>
対人関係の同一化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本人と同じように自分のプライベートのことを他人に言わないようになり、他人のプライベートを聞かないようになりました。</li> <li>・ 人間関係では、常に他人に迷惑をかけないことを注意することです。</li> <li>・ 日本人と同じように周りの人と距離を保つようになりました。</li> <li>・ ますます他人に無関心になり、人と付き合わなくなり、一人で過ごすようになりました。</li> <li>・ 人間関係の希薄化です。クラスメートや同僚と深く付き合わないようになりました。</li> <li>・ 日本では、クラスメートにしても、アルバイト先の同僚にしても、誰ともプライベートについてほとんど話しません。そのため、今の私も知り合いや親友などに対して、誰とも個人的な話をしないようになりました。</li> </ul>

## 第5節 中国人留学生の来日前と来日後の比較

### 1. 中国人留学生の来日前と来日後の自由の比較

本研究では、来日前と来日後の自由度の比較において、「中国での自由」、「中国での不自由」、「日本での自由」、「日本での不自由」、「中国と日本の自由の差がない」と区別することができた。

「中国での自由」(表 4-21)は、ルールやマナーが日本みたいに厳しくないし、言葉や文化の壁もないという「生活の自由」、中国の会社は管理上では柔軟性があるという「仕事の自由」、頼れる家族がいるからという「経済的自由」、一年中応募できるという「就職の自由」、時間的に厳しくないから多少遅れでも大丈夫という「時間的自由」、良いことではないけど社会的状況や人によって柔軟性があるという「法律の自由」の6個のカテゴリーが得られた。

表 4-21 中国での自由

カテゴリー	コード
生活の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活では中国の方が自由です。様々な束縛がありません。</li> <li>中国では、社会的ルールやマナーは日本みたいに厳しくないから、自由に生活ができる。</li> <li>生活において、もちろん中国でももっと自由です。好きなように生活することができます。友達と会いたいならすぐ会えるし、会いたくないなら気にせずキャンセルすることもできます。</li> <li>生活においては、中国がもっと自由です。例えば、インターネットで買い物することができ、お弁当はいつでも何時でも配達できるし、外出する時インターネットでタクシーを予約したりなどができます。</li> <li>生活の面では、間違いなく中国の方が自由です。例えば、一ヶ月外出しなくても困りません。何でもインターネットで解決することができます。</li> <li>中国では、生活がもっと自由です。そんなにたくさんの束縛やルールがありません。</li> <li>中国人としては、もちろん自分の国でもっと自由に暮らすことができます。言葉の障壁がなければ、文化の違いもありません。</li> <li>中国で中国人の考え方で生きていくことができます。また、中国のインターネットも日本よりずっと発展しているから、日常生活では非常に便利です。</li> </ul>
仕事の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>仕事では中国の方が自由です。上下関係や先輩後輩の間にそんなに厳しくありません。</li> <li>仕事なら中国の方が自由です。日本みたいにいろんなルールや規則がないから、上下関係も日本みたいに厳しくないし、もし休みたいなら上司と気楽に相談することもできます。</li> <li>中国の会社の管理がすごく柔軟性があります。</li> </ul>
経済的自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国では家族がいるから、お金のことを考えなくてもいいし、自由に使えます。</li> </ul>
就職の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>就職の面では、間違いなく中国の方が自由です。就職では、仕事探しのAPPがいっぱいあって、一年中応募する会社があります。</li> </ul>
時間的自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国では、時間について、そんなに厳しくありません。多少遅れでも大丈夫です。</li> </ul>
法律の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>法律上では中国が自由です。社会的状況や人によってすぐ変えることができる。あまり良いことではないと思っています。それに対して、日本の法律はかなり成熟しているから、法律の執行も非常に厳しいです。</li> </ul>



「中国での不自由」（表 4-22）は、「生活の不自由」、「生き方の不自由」「政治的不自由・言論の不自由」「勉強の不自由」の4個のカテゴリーが得られた。

生活の不自由は、家族と一緒に住んだり、学校の寮に住んだり、好きなようにできない。また、日常生活では、掃除や洗濯などの家事は、全て母がやってくれたり、何かある時に決めてくれたり、全く自由が自由に決められない。生き方の不自由は、一定の年齢になると結婚しないと周りから色々言われる。また、結婚、仕事、家や車の購入など、周りの人が持っていれば自分も用意しなければならない。そのため、自分のために生きているのではなく、他人のために生きているような発言が得られた。政治や言論の不自由は、特に、インターネット上の審査が厳しいから中国では少し考えてからという必要があり、好きなように言えない時がある。勉強の不自由は、子供の成績を重視する親が多い、学校の先生も宿題や受験などに対して非常に厳しい。このような状況下で、親や学校および同級生など周りのすべての人たちに監視されて、常に勉強しなければならない。一方、「日本やアメリカでは自由は自由けれども、だからこそ、新型コロナウイルスはなかなか止められません。ある意味で中国のようにある程度の自由を制限した方がいいかもしれません。命がなければ、いくら自由があっても意味がないと思います」という意見もあった。

表 4-22 中国での不自由

カテゴリー	コード
生活の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国では母がやってくれたり、決めてくれたり、全く自由がありません。</li> <li>中国で一人生活をしたことがないから、家族と一緒に住んだり、学校の寮でルームメイトと一緒に住んだりして、好きなようにできません。</li> <li>中国では、親が厳しくて、例えば、朝起きる時間や夜寝る時間など何もかも干渉されます。</li> <li>中国では服や携帯電話などを買う時、両親の同意をえないといけません。</li> </ul>
生き方の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国の社会ではいろんなストレスを感じます。結婚、仕事、家や車の購入など、周りの人が持っていれば自分も用意しなければなりません。</li> <li>中国では、大学や専攻を自分で選ぶことができません。</li> <li>中国では一定の年齢になると結婚しないと周りから色々言われます。</li> <li>中国では、親戚からの個人のプライバシーへの干渉は大変です。会う度に、成績、仕事、結婚、給料など平気に聞かれて、本当に災厄です。</li> <li>中国では、自分のために生きているのではなく、他人のために生きているような感じがします。例えば、親や周りの人のためにいい成績を取らないといけない、いい大学に進学しないといけない、いい仕事を見つからないといけないなどがあります。</li> <li>中国で出世するには、個人の能力だけでなく、人脈やお金、権利などに関わっていると良く聞かれます。これについて、非常に不自由と感じます。</li> </ul>
政治的不自由・言論の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>言論においては、中国では少し考えてからという必要があります。好きなように言えません。</li> <li>中国では、言論の自由以外に日本とほぼ同じだと思います。</li> <li>制度的には、中国のインターネット上の審査は日本より厳しいです。</li> </ul>
勉強の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>勉強では、中国の先生がとても厳しくて宿題をやらなければいけません。</li> <li>中国の親が子供の成績すごく重視している。日本の親は子供の成績についてどうでも良い感じがします。</li> <li>勉強において、中国では本当に不自由です。親や学校および同級生など周りのすべての人たちに監視されて、勉強しなければなりません。例えば、勉強したくてもしたくなくてもしなければなりません。そのため、勉強を嫌いになります。</li> <li>中国で親や先生たちはいつも「勉強しなさい、宿題をやりなさい」などばかり言われて本当にうるさいです。</li> </ul>

「日本での自由」は、「生き方の自由」「教育の自由」「生活の自由」「政治的自由・言語の自由」の4個のカテゴリーが得られた。

日本での「生き方の自由」は、日本では他人のプライベートを尊重するところが非常に気楽である。日本に来てから「30歳結婚しなくてもいい、結婚すれば家を買わなくてもいい」と語られた中国人留学生もいた。「教育の自由」は、日本の親は成績にあまり拘らなくて、子供が自由に成長していくことを重視している。また、大学での勉強も自由で、宿題もそんなに多くないし、学校の先生も中国の先生と違って、枠を決めずに学生の自由のままにさせてあげる。「生活の自由」は、彼らは来日後一人暮らしの学生が多くいる。自分で好きな大学や科目を一人で決めることができる。また、日本人も他人のプライベートに干渉しないし、他人に迷惑をかけなければ、好きなようにすれば誰も何も言われない。「政治的自由・言論の自由」においては、日本では民主主義には文章や言論の内容を統制することはほとんどない。特に政治や公共問題に関する言論は、通常に自由に開かれた討論は最良の選択肢として、できる限り全面的な討論が行われるように促進する。

表 4-23 日本での自由

カテゴリー	コード
生き方の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本に来てから「30歳結婚しなくてもいい、結婚すれば家を買わなくてもいい」という生き方があります。</li> <li>日本では他人のプライベートを尊重するところに自由度を感じます。</li> <li>日本での経済的な自由および結婚やシングルマザーに対する自由度を感じます。</li> <li>日本では、大学や専攻など全部自分で好きなように選ぶことができます。</li> <li>日本に来なければ多分もう結婚しているかもしれません。日本では結婚しなくても周りから何も言われません。</li> <li>日本社会では受容度があり、他人に迷惑をかけなければ、様々な生き方ができます。また、精神的、思想的な自由があります。</li> </ul>
教育の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>例えば、絵を描くとき、日本の先生は何も言わずに、自分で考えて絵を描くようにしています。中国の先生は、いろんな枠を決めて、その枠の中で絵を描かなければなりません。日本は個人的な考えを重視し、思想的には自由です。</li> <li>日本の先生は勉強に緩いです。宿題もそんなに多くないし、やらなくても厳しく言われません。</li> <li>日本の親は成績にあまり拘らなくて、子供が自由に成長していくことを重視していると感じます。</li> <li>日本の大学で勉強は自由ですが、もし卒業できなければ不自由です。</li> </ul>
生活の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本では好きな洋服、好きな食べ物、好きな専門科目、好きなアルバイトなど全部自分で選ぶことができます。</li> <li>日本では他人に余計な干渉をしないから気楽です。</li> <li>服装においては、日本が自由です。日本で奇抜な服装を着ても、誰も変だとは言われません。</li> <li>日本に来てから完全な一人生活ができ、好きなようにできるから非常に自由と感じました。</li> <li>生活において、日本では一人生活だから、どんなことをやっても文句を言われません。</li> <li>日本でアルバイトを通してお金を稼ぐことができ、これもある程度の自由だと思います。</li> <li>日本では親がそばにいないから、好きな物を買うことができます。</li> </ul>
政治的自由・ 言論の自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>言論においては、日本の方が自由です。好きなように言えばいいです。</li> <li>政治的には日本の方が自由です。</li> </ul>

「日本での不自由」（表-4-24）は、「言葉の不自由」「仕事の不自由」「生活の不自由」「生き方の不自由」「人間関係の不自由」の5個のカテゴリーが得られた。

言葉の不自由は、つまり表現の自由である。表現の自由は個人の人生の根幹を支えるである。しかし、言語の壁がある場合は、自分の意見をスムーズに表現できない。日本ではほぼ日本語以外に通じないので、日本語があまりできない人としてはかなり不自由と感じる。自分の意見をもっと自由に言え、思っていることをうまく相手に伝えることができたなら安心できる。つまり、自由にコミュニケーションがとれることが非常に大事である。仕事の不自由は、職場での上下関係や先輩後輩などの等級制度の厳しさのこと、日本での就職や転職の不便さのこと、簡単に休めないから風邪や熱が出ても我慢して出勤しないといけないことなどである。生活の不自由は、ゴミの処理、ルールやマナーの厳しさ、勉強とアルバイトの両立、敬語の使い方、インターネットの不便さなどが挙げられた。生き方の不自由は、自己主張しないこと、もし皆と違うなら「その人が変わっている人」という集団から排除される可能性があることと挙げられた。対人関係の不自由は、主に他人に迷惑をかけないため、いつも他人に気を遣わないといけないので非常に疲れるし不自由に感じる。

一方、日本でも中国でもどこでも自由の差がない（表 4-25）と主張する留学生もいた。その理由は、「法を守るならどこでも同じ」「絶対的な自由はどこにもない」「日本でも中国でも自由の差についてあまり感じていない」などを挙げられた。

表 4-25 日本も中国も自由の差がない

カテゴリー	コード
自由の差がない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中国と日本での自由の差はあまり感じていません。</li> <li>・ 自由というものは、どこに住んでいても、経済が独立すれば真の自由を得ることができます。</li> <li>・ どこにいでも自由を得るために、多くの不自由なことをしなければなりません。絶対的な自由はどこにもありません。</li> <li>・ 中国では、「人生、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳従う、七十にして心の欲する所に従う。」という諺があります。これも自由に対する解釈であり、世界で通用すると思います。</li> <li>・ 中国では外的な力に制約され、日本では自分の力で制約されます。本当の自由は、したくないことはしなくてもいいことです。ですから、私は中国でも日本でもどこでも本当の自由がありません。</li> <li>・ 日本でも中国でも同じだと思います。日本に来てから自由に関してあまり変わっていません。</li> <li>・ 法を守るならどこでも自由です。</li> </ul>

表 4-24 日本での不自由

カテゴリー	コード
言葉の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本での一番の不自由は、言語的不自由です。</li> </ul>
仕事の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の職場では、先輩後輩などの上下関係はすごく厳しいです。</li> <li>仕事の面では、日本の会社は融通がきかない、柔軟性がありません。</li> <li>日本の職場では、上下関係、失敗やミスを許さない、何もかも我慢しなければならないなど非常に不自由と感じます。</li> <li>日本で就職したことがないけれども、友人たちによると、社内での上下関係や先輩後輩などの等級制度は中国よりずっと厳しいです。</li> <li>日本では、簡単に休めないから、例えば風邪や熱が出てても我慢して出勤しないとダメです。</li> <li>日本の職場では、上下関係が厳しくて、先輩と後輩の呼び方までも決められています。</li> <li>日本で約束を守らないと相手に迷惑をかけるから、簡単に変更やキャンセルすることが難しいです。</li> <li>もし卒業後日本で仕事するのなら、多分一生もこの仕事を続けなければなりません。日本人の考え方では、何度も転職することは許されません。</li> </ul>
生活の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の環境や文化に対して詳しくないから、何処かに旅行や出かける時、日本人よりもルールを守らなければなりません。</li> <li>日本では、食事のマナー、座るマナー、歩くマナー、服装のマナー、温泉でのマナー、目上に敬語を使うマナーなど様々な制限があります。これもだめあれもだめ、ゴミも決まっている日に捨てなければなりません。</li> <li>日本は、インターネットが中国のように発達していないから、今でも昔のように、非常に不便だと思います。</li> <li>日本では、周りの人たちがみんな忙しくて、ほとんど休まないような気がします。たまには友達とのんびりお茶を飲みたいです。中国での生活はもっと緩やかです。</li> <li>日本では、留学生としての身分だけが不自由と感じます。例えば、留学生に対するアルバイトや就職の制限があります。中国では、大学院の学生はもっと自由に自分がやりたいことができます。</li> <li>日本人は、ルールに厳しいからいつも緊張してのんびりできません。</li> </ul>
生き方の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の他人に迷惑をかけないと言う教育文化は、個人の個性を殺してしまいます。</li> <li>授業やゼミで日本の学生はほとんど何も言わないから、もう少し自分の意見を言った方がいいなと思います。日本の自己主張しないところが非常に不自由と感じます。</li> <li>自分が他人と違うなら、集団から排除される可能性があるから、個人的主張ができません。いつでもみんなと同じように気をつかなければなりません。だから、日本人はみんな同じようなことを言う、同じような表情がする、もし皆と違うなら「その人が変わっている人」と言われます。</li> </ul>
対人関係の不自由	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本では、他人との付き合い方はすごく不自由と感じます。</li> <li>日本人と一緒にいる時、いつも気を遣って非常に疲れます。だから、あまり日本人と一緒に食事や遊びなどしたくありません。自由に食べることができなくて、半分しか食べられず、お腹いっぱいになりません。遊びも相手の気持ちを考えすぎて、好きなように遊ぶことができません。</li> </ul>

## 2. 中国人留学生の来日前と来日後の平等の比較

「中国での平等」について（表 4-26）、「職場での平等」は、中国で先輩や後輩という概念があまりないので、同僚関係は比較的平等と感じられる。「男女平等」においては、歴史的、文化的に残っている男女不平等の古い習慣が今なお完全には排除されていない。1949年の建国以来、女性の社会進出が進み、「同工同酬」の原則（女性が男性と平等に仕事をし、同じ給料を得ること）により女性も男性と平等な社会的役割と責任を担ってきた。例えば、中国の求人広告には、よく「男女問わず応募可能」と書かれている。中国の女性の社会進出では日本よりずっと進んでおり、夫婦共働きが大半で、昇進や転職のチャンスもほぼ男女平等である。社会主義体制の下、女性は着実に社会に進出し、おおむね性差のない実力社会となっているとも言えよう。

表 4-26 中国での平等

カテゴリー	コード
職場での平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国で同僚の間に先輩や後輩という地位の差がありません。</li> <li>同僚関係なら、中国もっと平等です。</li> </ul>
男女平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国は男女平等です。しかも、家庭内では女性の地位は男性よりも高いです。上下関係も日本ほど厳しくありません。</li> <li>中国では、女性が男性より強いのに対し、日本では男性が女性より強いです。男女の権利から見ると中国の方が平等です。</li> </ul>

「中国の不平等」については（表 4-27）、主に「階級間の不平等」「教育の不平等」「医療の不平等」が得られた。これらの不平等の背景には、近年中国の経済格差と所得格差にあると考えられる。

表 4-27 中国での不平等

カテゴリー	コード
階級間の不平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国では社会階級が同じなら、わりと平等です。違う社会階級ならかなり差があると思います。しかし、周りにそんなに権力がある人やお金持ちの人がいないから、劣等感を感じたことはありません。</li> <li>中国では、田舎の人や貧しい人がよく差別されます。しかし、日本では田舎の人だから、お金がないからとあまり差別されません。</li> <li>中国は貧富の差が大きいから、富裕層の人はますますお金持ちになり、貧乏人はますます貧乏になります。</li> </ul>
教育の不平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育において、中国の地域差があります。大学への進学も地域ごとに点数も違います。中国と日本の人口の差が大きいから、教育体制も違うし、比べられないかもしれません。</li> <li>中国の幼稚園は高いところは本当に高いです。中国の子供が多いから、競争も激しいし、いい学校に入るにはかなりお金をかかります。</li> </ul>
医療の不平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>医療において、非常に問題があると思います。大都市と地方の差、医療費の差などがかなり大きいです。</li> </ul>

「日本での平等」（表 4-28）は、「制度の平等」「医療の平等」「教育の平等」「階級間の平等」「機会の平等」の4個のカテゴリーが得られた。「制度の平等」は、区役所などの公的機関で手続きを行う時に提供されたサービス、納税の方法、法律の整備、コロナで外国人にも給付対象となる10万円の補助金などを挙げられた。「医療の平等」は、国民皆保険制度や医療や福祉の高水準であった。「教育の平等」は、大都市も地方もほぼ同じ教育レベル、教育機関の豊かさ、教師と生徒の平等感などを挙げられた。「階級間の平等」や「機会の平等」は、職種間収入の差が小さいこと、努力すれば誰でも成功できることが挙げられた。

表 4-28 日本での平等

カテゴリー	コード
制度の平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本では区役所などの公的機関に行く時、必要な資料を提出して、番号をとって、必要な資料を提出したら、順番にやってくれます。その職員さんもうまいから、尊重と平等を感じます。</li> <li>日本では、収入が高いと高いほど税金が高くなり、収入が少ないと少ないほど税金も低くなります。</li> <li>日本では裏口を利用したり、コネを使ったりする人が少ないです。</li> <li>平等は法律に基づいているから、法律があれば平等もあります。日本の法律はかなり整えています。</li> <li>日本は弱い人や貧しい人を守る国なので、非常に平等と感じます。</li> <li>今回の新型コロナで外国人も日本政府から10万円の補助金を貰いました。さらに、日本人でも外国人でも同じように国民税を払わないといけないなどの点から平等と感じます。</li> </ul>
医療の平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の国民皆保険制度は、所得に限らず原則として自己負担は3割です。</li> <li>日本の医療や福祉の面では、非常に平等と感じます。</li> </ul>
教育の平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の大都市と地方の教育レベルほぼ同じで、誰でも良い教育を受ける機会があり、良い仕事を得る機会もあります。</li> <li>日本人は大学への進学をそんなに重視していないような気がします。中国人は一生懸命に大学へ進学しようとしています。日本の教育チャンスが多いから、だから大学への進学もそんなに気にしていないかもしれません。</li> <li>日本の大学院では、純粋な教師と生徒の関係から平等感を感じます。</li> </ul>
階級間の平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本では平等か不平等の問題は誰も気にしていないような気がします。日本人はお互いに尊重し合い、どんな仕事をやっている人に対しても偏見や差別をしません。</li> <li>日本の貧富の差が小さいから、ここから平等と感じます。</li> <li>日本では、東京の出身でも、田舎の出身でも、地域差別が小さいです。</li> <li>日本人は謙虚な人が多いです。例えば、自分がいい仕事があるから、社会的地位が高いから、お金がたくさん持っているから、偉そうに他人を苛めたり、差別したりというようなことをしません。</li> <li>日本の職種の間収入差はそんなに多くありません。例えば、以前アルバイト店のバーテンダーの収入と大学教授の給料がほぼ同じです。日本では等級序列があるけど、等級間の差別が少ないです。</li> <li>日本では、例えばホームレスのような人でも堂々とレストランに入って、店員も追いかけようとしません。</li> <li>日本人は他人を尊重する民族です。店員でも弁護士でも同じような態度で接します。</li> <li>日本の地域差別がますます良くなっています。外国人への受容度もますます高くなっています。</li> </ul>
機会の平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本では、努力した分と収穫した分がほぼ同じです。</li> <li>日本では、努力すれば誰でも好きな大学に合格できます。</li> <li>日本では、外国人でも努力すれば日本人と同じように競争できます。</li> </ul>

「日本での不平等」（表 4-29）について、「外国人に対する不平等」と「職場での不平等」の2個のカテゴリーが得られた。「外国人に対する不平等」は、外国人に対する入居拒否、外国人と日本人の給料の差、外国人が出世することの難しさ、マイノリティグループなどを挙げられた。「職場での不平等」は、職場内の階級観念、上司と部下、先輩と後輩の呼び名の違い、男女の給料の差などを見られた。

表 4-29 日本での不平等

カテゴリー	コード
外国人に対する不平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>外国人に不平等です。例えば、外国人に部屋を貸さない物件が多いです。</li> <li>仕事の面では、外国人にはまた不平等と感ずます。例えば同じ仕事であれば、外国人と日本人がいれば、日本人を選ぶ会社が多いようです。また、給料も不平等です。知人が勤務している会社では、同じマネージャーの場合は、日本人のマネージャーの給料は外国人のマネージャーよりずっと高いです。外国人が日本の会社で出世することも難しいことがよく知られています。しかも、こんなことは、少数の会社ではなく、たくさんの会社で見られることです。</li> <li>日本で平等を感じたことがありません。外国人留学生は日本の社会的少数者として特殊なグループです。多数の日本人と比べられません。不公平や不平等な扱いを受けたことがないけど、平等を感じていません。</li> <li>日本で外国人のことを外人とも言われます。中国で外国人の社会的地位はもっと高いです。</li> <li>日本で何年間住んでいても外国人なので、日本人と同じようになれません。やはり中国人として中国にいた方が平等感を感じます。</li> </ul>
職場での不平等	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の会社の上司と部下、先輩と後輩の間は、非常に不平等に感ずます。呼び名までも違います。例えば、後輩に「君」「ちゃん」とかつけてもいいけど、先輩には絶対にダメです。</li> <li>日本の会社の階級観念は本当に恐ろしいです。しかし、現在の若者は昔の日本人と全然違うから、これから少しずつよくなっていくのではないかと思います。</li> <li>日本では、男性の社会地位が女性より高いです。特に職場や給料で男女の差が大きいです。</li> </ul>

「日本でも中国でも平等の差がない」（表 4-30）については、どこの国でも大部分の国民は平等であるが、社会的特権を持っている少数のエリート階層が存在すること、平等を得るには個人の能力によること、努力すればどこでも平等に生きていけることなどが挙げられた。

表 4-30 日本でも中国でも平等の差がない

カテゴリー	コード
平等の差がない	<ul style="list-style-type: none"> <li>どこの国でも大部分の国民は平等ですが、社会的特権を持っている少数のエリート階層が存在している。例えば、池袋の自動車暴走事件で死亡した母子の犯人に対する取り扱いは非常に不平等だと思います。</li> <li>よく考えてみると、どこも同じかもしれません。</li> <li>日本と中国はほぼ同じです。</li> <li>中国でも日本でも差別を受けたことがないから、平等は個人の能力と関わっていると思います。</li> <li>努力すればどこでも平等に生きて行くことができます。</li> <li>平等ならどこの国でも同じであり、比較する必要はないと思います。</li> <li>日本人はもっと相手を尊重するかもしれません。平等なら中国と日本はほぼ同じです。</li> </ul>

### 3. 中国人留学生の来日前と来日後の選択の比較

「中国での選択」(表 4-31)は、「中国での就職の利点」「中国での就職の欠点」「人脈」「生活の選択肢」「医療の選択肢」の5個のカテゴリが得られた。

表 4-31 中国での選択

カテゴリ	コード
中国での就職利点	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国の優秀な人材の選択範囲が広いです。中国では、大手企業だけでなく、中小企業を選んで挑戦する人もいれば、自分で起業する人もいます。</li> <li>中国の様々な領域は発展中なので、いろんなことを試すことができます。</li> <li>機会と資源は中国が多いから、経済発展の空間もあり、もちろん選択範囲も中国が広いです。</li> <li>中国で仕事しながら他の副業もできるし、余った時間をいろいろ試すことができます。</li> <li>就職の場合、中国の選択範囲も広くて、豊かです。特にインターネット業界は日本より豊富です。</li> <li>就職において、中国の選択肢はもっと多いです。人口が多いから競争が激しいかもしれないけどチャンスも多いです。</li> <li>中国の市場が大きいので、選択肢も多いです。</li> </ul>
中国での就職欠点	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国でやりたい仕事を選ぶと給料が少ないから、生きていけないかもしれません。</li> <li>中国で就職したことがないけれども、親の話によると、中国で仕事を探す時に、学歴や人脈などが大事であり、競争も激しくて、本当のやりたい仕事を見つけるのは非常に難しいです。</li> <li>中国は学歴重視しているので、大学受験の道しかありません。学歴が低いと普通の仕事も見つかりません。</li> <li>中国では、給料も低くて、生活の質を保証することが難しいです。</li> </ul>
人脈	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国の人脈が多いから、もちろん選択範囲も広いです。</li> <li>中国で親や親戚および友達がたくさんいるから、頼れる人がいます。</li> <li>人脈がかなり大事だと思います。中国の人脈が多いので、何かある時の選択範囲も広いです。</li> </ul>
生活の選択肢	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国のインターネットと配達サービスが発達しているから、衣食住などの日常生活は中国の選択範囲がもっと広いです。何でもオンラインで解決することができます。</li> <li>インターネットを利用して買い物やご飯を注文することで、時間の節約ができます。</li> <li>中国でいろんな生活スタイルを選ぶことができます。もしのんびりしたいなら結婚します。もし一人前になりたいなら仕事を頑張ります。北京上海みたいな大都市を選ぶことができれば実家を選ぶこともできます。</li> <li>中国の新しいものが多すぎて選択肢も多いです。ものの更新が速いし変化も早いです。大都市だけでなく地方も毎年様子が変わっています。中国のオンライン授業も何年前から始まっています。日本は今回のコロナの影響で最近ようやく始まりました。</li> <li>中国はもっと多様化しているから選択肢も多いです。</li> </ul>
医療の選択肢	<ul style="list-style-type: none"> <li>医療においては、中国で予約しなくても大丈夫です。オンラインサービスがあり、総合病院も多いです。</li> <li>医療資源なら日本は本当に不便であり、予約しないといけません。中国ならそのままいけるし、時間も自由です。最近、オンライン診療も流行っているから、簡単に写真を送って見てくれて、とても便利です。</li> </ul>



「日本での選択」（表 4-32）は、「日本での就職利点」「日本での就職欠点」「人脈」「教育や進学の実選肢」の4個のカテゴリーが得られた。

表 4-32 日本での選択

カテゴリー	コード
日本での就職利点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本でやりたい仕事を選ぶと何とか生きていけます。</li> <li>・ 日本の学習資源が豊かだから、仕事を探すこともそんなに難しくありません。</li> <li>・ 私が卒業後やりたい仕事は、日本での実選肢が多いです。</li> <li>・ 日本でやりたいことや仕事を選び、自分の気持ちに従えばいいです。誰も干渉せず、他人のことを気にする必要もありません。</li> <li>・ 日本での就職は競争激しくないから、実選肢が多いです。</li> <li>・ 私の専攻なら、日本での就職実選肢範囲がもっと広いです。中国では限られています。</li> <li>・ 質から言えば日本で普通の職員であっても、生活の質は確保されます。</li> <li>・ 日本は仕事の職種において階級差別がないから、大企業で仕事しても、コンビニで仕事しても、差別されないし、給料の差もそんなに大きくありません。そうするとほとんどの人は自分がしたい仕事を選びます。また、未婚者や単身ママに対する社会的受容度も高いので、自分の好きな生き方を選ぶことができます。</li> <li>・ 個人の時間から見れば、日本は仕事とプライベートをしっかりと分けているから、休みの日は仕事を考えずに、ゆっくりと休むことができます。</li> <li>・ 日本で様々なアルバイトがあるから、いろいろやってみたいことを実選肢することができます。</li> </ul>
日本での就職欠点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本社会は比較的単一なので、実選肢も少ないです。</li> <li>・ 日本の会社は、外国人というよりもっと日本人を雇いたい会社が多いみたいです。</li> <li>・ さっきの自由と同じで、留学生の身分としての制限が多いです。</li> <li>・ 日本で就職の場合は、友人の紹介や就職説明会に参加すること、およびインターネットから履歴書を投稿するだけです。しかも、会社の応募や入社の実時期は4月くらいに限られています。</li> </ul>
人脈	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本ではお金もないし、友達もない、助けてくれる人もありません。もちろん実選肢も少ないです。</li> <li>・ 人脈以外に、日本の実選肢範囲がかなり広いと思います。</li> </ul>
教育や進学の実選肢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本の教育レベルはどこでも同じくらいです。勉強したい専攻があればゆっくり選んだらいいです。</li> <li>・ 日本はあまり学歴に拘っていないから、大学以外に短期大学や専門学校など多様な道があります。</li> </ul>

#### 4. 中国人留学生の来日前と来日後の機会の比較

「中国での機会」（表 4-33）に関しては、「発展途上国だから機会が多い」「就職の機会が多い」「能力が高い人の機会が多い」「競争激しくて機会が少ない」の4個のカテゴリーが得られた。

表 4-33 中国での機会

カテゴリー	・ コード
発展途上国だから機会が多い	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国は発展途上国なので、いろんな点で未成熟で、チャンスも多いと思います。</li> <li>中国は発展途上国であり、就職と起業のチャンスなら、中国は日本より多いと思います。</li> <li>中国のチャンスが多いと思います。特に中国の南の都市は今後さらに発展すると考えられます。</li> <li>日本のチャンスは、ほぼ社会が必要とする固定な職位であり、新しい職位が非常に少ないです。しかし、中国は発展段階で、社会が必要とする様々な職位があり、社会から提供する新しい仕事も多いと思います。</li> <li>中国は発展途上国として、高欲望社会として機会が多いと思います。しかし、日本は発達国として、低欲望社会と言われています。失敗を恐れる人も多く、新しいことに挑戦せず昔のままを維持する会社や個人がたくさん存在しており、当然機会も少ないと思います。</li> <li>日本は先進国として、社会全体も成熟しています。自分が考えたチャンスは、既にほかの人が考えました。市場には大手企業や財閥に独占され、若者のチャンスが少なく、例え起業しても全く競争相手になりません。こう考えるとやはり中国のチャンスが日本より多いと思います。</li> <li>中国人は柔軟性を持っているから、これからのチャンスも多いではないかと思います。</li> </ul>
就職の機会が多い	<ul style="list-style-type: none"> <li>仕事のチャンスなら、中国が多いと思います。</li> <li>中国には就職をサポートする APP がたくさんあります。オンラインで就職者の性格や特徴によって、自分に似合う仕事を見つけやすいです。しかし、日本の多くはまだ対面式の面接が多く、毎年の就職期間も限られています。</li> <li>言葉や文化が違うから仕事するなら中国のチャンスが多いと思います。</li> <li>中国と日本の発展方向が異なるから、自分の選択も違うと思います。例えば、インターネット業界なら、中国はチャンスが多いと思います。</li> <li>自分で起業したいなら中国の方がいいと思います。</li> <li>もし自分で会社を創るなら、中国でやったほうがいいと思います。</li> <li>仕事のチャンスと友達作りのチャンスなら、中国が多いと思います。日本人は内向的で、自分の世界に閉じこもる人が多いからです。</li> </ul>
能力が高い人の機会が多い	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国では高い能力を持っていないければチャンスも少ないです。</li> <li>能力があれば中国でのチャンスが多いです。</li> <li>中国と日本の人口が違うから、競争の激しいさも違います。中国なら、専門的な技術を持っている人ならチャンスが多いです。</li> <li>アニメ関係の仕事なら中国はチャンスが多いと思います。中国のアニメ業界はまだ上昇段階にあり、日本は飽和状態となっています。</li> </ul>
競争激しくて機会が少ない	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国の大学院進学は本当に競争激しくて、進学難しいです。</li> <li>中国でいい大学への進学が非常に難しいです。</li> <li>中国では、人間関係が苦手な人は、機会が非常に少ないと思います。</li> </ul>

「日本での機会」（4-34）に関しては、「労働力不足のため機会が多い」「教育の機会が多い」「就職の機会が多い」の3個のカテゴリーが得られた。

表 4-34 日本での機会

カテゴリー	コード
労働力不足のため機会が多い	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本は労働力が不足しているから競争もそんなに激しくありません。</li> <li>普通人なら、日本でのチャンスが多いです。</li> </ul>
教育の機会が多い	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の若者は大学院への進学率が低いので、大学院進学なら日本の機会が多いです。</li> <li>教育では、日本でのチャンスはかなり多いです。</li> <li>大学院への進学は、日本のほうが中国より本当に多いです。中国の大学院進学は本当に競争激しいです。</li> </ul>
就職の機会が多い	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国語も日本語もできし、中国の文化も日本の文化も詳しいなので、日中に関する貿易の仕事が見つかりやすいと思います。</li> <li>私の専攻は日本で仕事が見つかりやすい、給料も中国より高いです。</li> <li>日本にいる中国人はそれほど多くないから、少数グループとしてある程度の優位性を持っています。</li> <li>日本では、しっかりと就職活動に参加したら仕事が見つかります。</li> <li>チャンスは個人の能力と関わっていると思います。もし個人の能力を考慮しなければ、日本のチャンスが多いようです。例えば、日本社会は年齢を問わず、誰でも新しいことを試すアルバイトがあります</li> <li>日本の社会的自由度が高いからチャンスも多いと思います。怠け物じゃなければ何とか生きていけます。</li> <li>私から見れば日本でのチャンスは多いです。日本は発達した国ですが、国民は伝統的で古い考え方を持っている人がかなり多いです。社会全体も保守的で、新しいことに挑戦をする人が少ないです。</li> </ul>

「日本と中国での機会が同じ」（4-35）に関しては、「個人の能力によるもの」と「社会状況によるもの」の2個のカテゴリーが得られた。

表 4-35 日本と中国での機会が同じ

カテゴリー	コード
個人の能力によるもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本に住んでいる中国人だから、日中の架け橋として、両国のチャンスを掴むことができます。</li> <li>チャンスと言えば、個人の能力によるものであり、能力のある人ならどこでもチャンスが多いと思います。</li> <li>チャンスは自分でつかむべきで、完全に個人の能力によると思います。</li> <li>日本で暮らすなら、日本のチャンスが多いです。中国で暮らすなら、中国のチャンスが多いです。どこで暮らすどこでチャンスを作ります。</li> <li>どこもチャンスがあると思います。どうやって自分の強みを引き出すかは重要と思います。</li> <li>チャンスは自分で作ったものであり、どこにいるかとは関係ないと思います。もし日本のチャンスが多いなら日本で頑張ったからです。もし日本のチャンスが少ないなら日本で頑張らなかったからです。</li> </ul>
社会状況によるもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国のチャンスが多いけど人口も多いから競争が激しいです。日本はそんなにチャンスが多くないけど人口が少ないから競争が激しくないです。区別は中国では狼が多い、日本は羊が多いです。</li> <li>チャンスについてはほとんど気にしていません。どこにいても同じように感じています。</li> </ul>

## 5. 中国人留学生の来日前と来日後の資源の比較

「中国での資源」（表 4-36）に関しては、「人的資源の豊かさ」「人的資源の乏しさ」「その他の資源」の3個のカテゴリーが得られた。

表 4-36 中国での資源

カテゴリー	コード
人的資源の豊かさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国の可利用資源が多いです。中国は人情社会なので、例えば人脈資源がなくても何とかして作ることができます。</li> <li>人脈資源ならもちろん中国が多いです。中国なら、様々なコミュニティやグループがあり、そのようなところに参加すれば多くの人と知り合うことができます。例えば、夏休みや冬休みに1ヶ月くらい帰国する間に100人くらいの友達を作ることができます。</li> <li>人脈資源なら中国が多いです。</li> <li>もちろん中国の資源が多いです。知識も人脈も、自分の国や故郷でもっと多いと思います。</li> <li>人脈資源は中国の方が多いです。</li> <li>資源ならもちろん中国が多いです。家族や友人は全部中国にいます。人脈はきっと中国のほうが多いです。</li> <li>資源なら人脈の資源も他の資源も、中国の方が多いと思います。</li> <li>私の資源は親のお金です。</li> <li>利用できる資源なら、やはり中国が多いです。親や親戚などの知り合いは全部中国にいるから。</li> <li>就職の資源なら、中国の資源が間違いなく日本より豊かです。頼めば誰かはいいい仕事を紹介してくれるかもしれません。</li> </ul>
人的資源の乏しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国で利用できる資源がほぼありません。中国は人間関係の社会なので、人間関係が苦手だから、自分で努力するしかありません。しかし、中国では、個人の努力だけで、目標を達成は難しいです。</li> <li>今、利用できる資源はほぼありません。帰国しても母が既に退職したし、父もすぐ退職する予定です。中国でも日本でも頼れる人は自分しかありません。例えば、親の関係で仕事が見つかったも、本当にやりたい仕事ではないかもしれません。</li> <li>この4年間は中国にいないし、以前の友達との連絡も少なくなり、中国の発展も早いし、もしかしたら中国についていけないかもしれません。</li> </ul>
その他の資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国の就職の情報は日本より多いです。毎日に様々な就職会があり、会社の応募や入社時期も決まりなくいつでもできます。</li> <li>中国の情報伝達が早いから、情報量も非常に大きいです。いろんな話題がすぐ流行り、新しいものも多いです。</li> <li>インターネットの資源は、日本は中国に及ばないです。日本は知的財産の保護はやりすぎで、ほとんどの音楽や映画をダウンロードできず、費用も高すぎです。比べると中国のインターネットが便利で、音楽や映画をダウンロードする選択肢がたくさんあり、費用もかなり安いです。</li> </ul>

「日本での資源」（表 4-37）に関しては、「教育資源」「医療資源」「言語資源」「人的資源」の4個のカテゴリーが得られた。

表 4-37 日本での資源

カテゴリー	コード
教育資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育資源なら日本の方が多いです。日本で努力すれば有名大学への進学も可能です。中国では絶対にできないと思います。</li> <li>・ 学校で学んだ知識も資源であり、日中文化についての理解も資源です。</li> <li>・ 教育資源なら日本が多いです。日本はそんなに成績を重視していないから、私立学校や公立学校も多くて、日本の教育資源は本当に豊かです。</li> <li>・ 教育資源なら量的に中国のほうが多く、質的には日本のほうが多いです。</li> <li>・ 学習の資源なら、日本で関連する使える資料を集めやすいと思います。</li> <li>・ 教育資源は、日本の方がもっと多いです。中国の大学入試は地域により違います。成績いい人なら大学へ進学できるかもしれないが、成績悪い人はほぼ大学と無縁です。</li> </ul>
医療資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本の医療資源が多いと思います。様々なクリニックがあるから非常に便利で、医師への信頼度も高いです。</li> <li>・ 医療資源なら日本が多いです。日本は国民皆保険制度なので、病気になってもそんなに心配することはありません。</li> <li>・ 日本の医療資源は本当に豊かです。日本の医療は世界でも屈指のもので、これは中国では日本とは比べ物になりません。</li> <li>・ 日本の医療や福祉等の社会的資源が多いけど利用したことがありません</li> </ul>
言語資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 言語の資源です。日本語ができるから、多くの日本の友達を作ることができます。また、日中翻訳の仕事もできます。日本の人脈を通して、お互いに勉強をしたり、仕事をしたりなどのことができます。</li> <li>・ 外国人としてある程度の日本語レベルがないと就職できません。能力ないと仕事ができない、いじめられる可能性も高いです。</li> </ul>
人的資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一緒に住んでいるルームメイトや学校の先生は、潜在的な人的資源かもしれませんが。これらの資源を利用するより自分が強くなるのが最も大事です。そのため、まず自分の能力を高めることが一番大事です。</li> <li>・ アルバイト先の同僚やクラスメートという人脈しかありません。友達と一緒にお酒を飲んだり、遊んだりすることが苦手なので、これは欠点だと思います。つまり、人脈の資源を利用できない人間です。</li> <li>・ 利用できる資源なら日本は多いかもしれません。日本で4年間も住んでいるから、少なくとも学校の先生やクラスメートおよび友人がいます。</li> <li>・ 日本で利用可能な資源は周りの友人だけ何かある時に彼らと相談します。</li> <li>・ 中国での知り合いは、住んでいるところの人だけです。しかし、日本では、様々な国や都市から来た外国人や中国人がいます。いろんな人と接することで私への影響も大きいです。</li> <li>・ 日本での資源は留学生と日系企業での知り合いです。人脈は、イベントに参加するとき知り合った日本の友人や在日中国人です。知り合いはそんなに多くないけれども、仲の良い友達が何人います。</li> <li>・ 日本での唯一の資源は学校の先生や先輩です。彼らからたくさんのアドバイスを貰うことができます。</li> <li>・ 外国人留学生は少数グループとして、人脈も限られています。日本で何年間住んでも、知り合いは数えられる何人の友達しかありません。これは少数グループと多数グループの違いです。</li> <li>・ 日本の人間関係はもともと希薄化し、友達を作ることも難しいです。</li> <li>・ 家族がいないし友達もいない、利用できる資源は自分しかありません。</li> <li>・ 日本では、努力すれば目標を達成することも可能です。だから、日本で利用できる資源は私本人です。</li> <li>・ 日本は人脈をほぼ使わないから、もし使うと代わりに逆効果になります。</li> <li>・ 日本では何かをするときにあまり人脈を使いません。</li> </ul>

「日本と中国での資源が同じ」（4-38）に関しては、「資源は自分で作るもの」と「どこも資源がない」の2個のカテゴリーが得られた。

表 4-38 日本と中国での資源が同じ

カテゴリー	コード
資源は自分で作るもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資源はすでに存在するものとこれから生じものがあります。これからどんな領域を選ぶか、どんな人生を送りたいのか、全部自分次第です。</li> <li>・ 資源においては、中国と日本は同じと思います。自分で必要な資源を作ります。</li> <li>・ 資源どこでも同じです。日本に住んでいるなら日本で必要な資源を作ります。中国に住んでいるなら中国で必要な資源を作ります。</li> <li>・ 利用可能な資源はほぼ同じと思います。資源は社会的地位と関係があり、個人の能力によるものです。</li> </ul>
どこも資源がない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中国に資源がないし、日本にも資源がありません。</li> <li>・ 私の資源を持っておりません。</li> <li>・ よく考えれば本当に何の資源もありません。</li> </ul>

## 6. 中国人留学生の来日前と来日後の権利の比較

「中国での権利」（表 4-39）に関しては、「権利と義務の論争」「身分証がないと何の権利もない」の2個のカテゴリーが得られた。

表 4-39 中国での権利

カテゴリー	コード
権利と義務の論争	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中国では主に義務を強調され、権利は薄れているような感じです。</li> <li>・ 小さい頃から「義務教育」や「親孝行は義務である」とかもう耳慣れです。しかし、権利という言葉は普段あまり使わないような気がします。</li> </ul>
身分証がないと何の権利もない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中国では、個人の身分を証明するものは身分証明書だけです。身分証がなければどこにも行けないし、どんなこともできません。その上、戸籍の問題がもっと複雑です。</li> <li>・ 身分証明書がなければ、何の権利もありません。</li> </ul>

「日本での権利」（表 4-40）に関しては、「外国人としての権利の欠如」と「日本人としての権利の尊重」の2個のカテゴリーが得られた。

表 4-40 日本での権利

カテゴリー	コード
外国人としての権利の欠如	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本では、一人の国民ではなく留学生としての限られた権利しか持っていません。外国人の場合は、マイホームを買うことや会社を作る場合など何でも永住権が必要です。権利の面では中国と日本は比べられません。</li> <li>・ 日本では家の中だけで生活する権利しかないような感じがする。</li> <li>・ 外国人として日本で選挙権や被選挙権がないけど、全く気にしません。</li> <li>・ 日本で留学生としての身分に様々な制限があり、留学生の権利と社会人の権利と全く違います。</li> <li>・ 日本の警察は権利の侵害が非常に多いような感じがします。いつも在留カードを調べたり、自転車を調べたりしています。何も悪いことをしていないのに、調べられることは本当に警察の権利かなと思います。</li> <li>・ 日本では社会参加が少なく、活動範囲も狭いから持つ権利が少ないような気がします。</li> <li>・ 留学生として、日本では勉強の権利しか持っていないような気がします。</li> </ul>
日本人としての権利の尊重	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本の法律は中国よりはもっと整備されています。例えば、国民皆社会保険、児童を守る児童福祉法、母子を守る母子及び父子並びに寡婦福祉法、年寄りを守る老人福祉法、障害者を守る障害者福祉法、貧しい人を守る生活保護法などがあります。多分日本は福祉国家だから、これらの法律は普通の国民にかなり普及しているような感じがします。</li> <li>・ 日本ではもっと尊重されているような感じがします。それは日本人の教養の高さと礼儀正しさと関係があると思います。</li> <li>・ 日本で一般人として尊重され、いいサービスを受けることができます。日本の警察も庶民的で、いつも自転車で回っています。これは中国であり得ないから、本当に珍しい風景です。中国の警察はみんな車に乗っています。</li> <li>・ 日本の国民の権利は中国よりよく保障されているような感じがします。</li> <li>・ 日本人は法律やルールに従って物事を行なっています。すべての人に与えられる権利と義務は非常に明確です。国民が持っている権利や福祉も明らかに決まっています。</li> <li>・ 日本では国民の権利を保障され、とてもいい国だと思います。</li> <li>・ 日本の法律は非常に透明です。例えば、今住んでいる家に、毎月1回無料の雑誌が届きます。その雑誌には地方の収支、交通事故や犯罪記録などが記録されています。それを読むといつも心が温かく感じます。</li> <li>・ 日本は非常に生活しやすい国だと思います。例えば北京上海のような大都市では、社会保険や戸籍およびたくさんのお金がなければ、マイホームや車をほぼ買えません。日本でちゃんとした仕事があれば、普通のサラリーマンでもマイホームや車を買えるし、普通の日本人とあまり変わりません。外国人として選挙権がないけれども、安全や医療および福祉などが保障されます。</li> <li>・ 権利といえば、日本は先進国として、制度を完備しており、国民の権利がたくさんあります。しかし、日本の若者はあまり政治に関心を持っていないような気がします。彼らは選挙権を持っているのに、自ら放棄しています。</li> <li>・ 日本の国民の権利は、非常に簡単に現れています。例えば、個人の身分を証明する場合は、在留カード、運転免許、国民健康保険証、学生証などを使うことができます。</li> <li>・ 日本で感じたよい権利は、例えば子供の教育において、金持ちの人も貧乏な人もほぼ同じくらいです。どの学校に行っても大丈夫であり、しかも基本的に無料です。</li> </ul>

「日本と中国での権利が同じ」（4-41）に関しては、「権利は自分次第」と「どこも資源がない」の2個のカテゴリーが得られた。

表 4-41 日本と中国での権利は同じ

カテゴリー	コード
権利は自分 次第	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国でも日本でもほぼ同じで、ほとんど差がありません。</li> <li>権利はどこでも同じです。自分の努力により得たものです。</li> <li>中国では、いい大学への進学する権利があります。もしこのチャンスをつかめれば運命を変えるかもしれません。中国は人口が多いから、このような方法で優秀な人材を選んでいます。成功すればすれほど有する権利も増えていきます。日本でも同じではないかと思います。</li> </ul>
どこも権利 がない	<ul style="list-style-type: none"> <li>どこで住んでも本当の権利は持っていません。生きている権利しかないと思います。</li> <li>普段あまり触れないことなので権利というものはほとんど知りません。</li> <li>権利のことはよくわかりません。私は何の権利もありません。普段、あまり関わっていないからです。</li> </ul>

## 第6節 中国人留学生の自己認識

### 1. 自分の長所について

自分の長所について、わかる人24名、わからない人6名であった(表4-42)。

表 4-42 自分の長所について

自分の長所について	人数
わかる	24名
わからない	6名

自分の長所や短所を把握できている人は、自己分析力や客観的にものをみる力があるということである。つまり、ある問題や困難に直面した時に冷静に解決できる能力があり、徐々に成長していけると判断できるわけである。本研究の対象者は、自分の長所と聞かれた時に、ほとんどはスムーズに答えられたが、何人かは自分の短所はすぐ思い付くけれども、長所はなかなか思いつきづらいのである(表4-43)。



表 4-43 自分の長所についての具体例

カテゴリー	コード
わかる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私の長所は失敗を恐れず、挑戦することが好きで、好奇心や向上心および行動力があり、家族を大事にすることです。</li> <li>・ 客観的、計画性があり、受容度が高く、分析力があることです。</li> <li>・ 私の長所は、本を読むことが好きであり、何かする前にいろいろ考えてからやります。独立性があり、自分のことを自分でやれます。</li> <li>・ 真面目です。たまに真面目すぎて融通がきかなくなることがあります。</li> <li>・ 辛抱強い、自己反省、明るい、楽観的、積極的、受容度が高いなどです。</li> <li>・ 私の長所は、真面目であり、責任感が強く、勉強好き、細かいところ気がつく、綺麗好き、優しいなどです。</li> <li>・ 様々な人とコミュニケーションをとり、聞き上手な点だと思えます。</li> <li>・ 私の長所は、怒らない、勉強好き、行動力があり、他人の立場に立って問題を考えるなどです。</li> <li>・ 私の長所は、適応力が強い、計画性があり、行動力があり、率直であり、学習能力があることです。</li> <li>・ 真面目であり、効率的、責任感が強い、思いやりがあるなどです。</li> <li>・ ユーモア、勉強好き、面白い、目標があり、思考力があることなどです。</li> <li>・ 心が強くて、独立性があり、目標が明確、問題解決能力が高いなどです。</li> <li>・ 私の長所は、第一真面目、第二楽観的、第三問題解決能力が高い、第四負けず嫌い、第五調整力が強いことです。</li> <li>・ 私の長所は、自己開示が高い、拘りが無い、性格が明るい、素直です。</li> <li>・ 長所は、目標が明確、おおらか、コミュニケーション能力が高いことです。</li> <li>・ 以前の長所は、行動力があることです。最近はぐずぐずになってしまいました。ストレス耐性も段々弱くなりました。長所といえば、人を助けたい気持ち強いかもしれません。</li> <li>・ 客観的、観察力が高いことです。</li> <li>・ 苦しみや辛さを耐え忍ぶ力が強いことです。</li> <li>・ 拘りしない、よく自己反省することです。</li> <li>・ 性格が明るくコミュニケーション能力もいいことです。</li> <li>・ 勤勉で責任感があることです。</li> <li>・ 余計なことを言わず、適応力が強いことと思います。</li> <li>・ 弁が立つことです。</li> <li>・ 挑戦力があり、積極的、楽観的、家族を大事にすることです。</li> </ul>
わからない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私の長所がよく知らないけれども、短所がよく知っています。</li> <li>・ 自分でよくわからない、周りから優しい人とよく言われています。</li> <li>・ 長所は思い出せません。しかし、短所なら例えば軽い強迫症があり、完璧すぎてよくない、優しすぎて虐められやすいなどです。</li> <li>・ 自分の長所良くわからない、友達からよく心が綺麗いと言われています。</li> <li>・ 自分で良くわからない、彼氏からあなたの一番いいところは、言い訳をしないというところです。</li> <li>・ この問題は難しいです。自分の長所よくわかりません。</li> </ul>

## 2. 自分の目標について

自分の目標について、全員が自分の目標を持っている(4-44)。

表 4-44 自分の目標について

自分の目標について	人数
持っている	30名
持っていない	0名

適切な目標を設定することは、目標達成に向けた行動を実践し、最終的に目標の実現に近づくことができる(4-45)。

表 4-45 自分の目標についての具体例

カテゴリー	コード
自分の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 勉強の目標は、さらに多くの知識を身につけることです。仕事の目標は、一人前になり、家族によい生活環境を提供することです。</li> <li>・ 目標は早く卒業することです。</li> <li>・ 今、最も大事な目標は大学に合格することです。</li> <li>・ 短期の目標は、大学に合格することです。長期の目標は、好きなことをやることで達成感を楽しむ、将来は良い会社やチームに入って、私の作品がもっと多くの人に見せられることです。</li> <li>・ 卒業後、よい仕事を見つけて、英語の受験を合格することです。</li> <li>・ 現在の目標は、早く大学を卒業して、日本で会社を作ることです。</li> <li>・ 現在の目標は、修士論文を完成し、できるだけ早く卒業することです。</li> <li>・ 私の目標は、自己実現することです。</li> <li>・ 日本一周旅行です。今は半分以上のところにきました。</li> <li>・ 私の目標は、早く卒業することです。</li> <li>・ 現在の目標は、アルバイトを頑張ってお金に困らないことです。</li> <li>・ 今の目標は、目の前のことをしっかりやることです。</li> <li>・ 大きな目標を持っていない、人生の目標は楽しく過ごすことです。</li> <li>・ 早く卒業して給料高い仕事を見つけてお金を稼ぐことです。</li> <li>・ 私の目標は、来年卒業後、自分で起業し、会社を大きくすることです。</li> <li>・ 私の目標は、早く卒業して、仕事を見つけることです。</li> <li>・ 現在の目標は、少しずつ前に進んで、博士を卒業することです。</li> <li>・ 最近の目標は、もっと痩せて、肌をもっときれいになることです。</li> <li>・ 現在の目標は、早く卒業し帰国して仕事を探すことです。</li> <li>・ 私の目標は、早く卒業することです。</li> <li>・ 私の目標は、早く卒業することです。</li> <li>・ 現在の目標は、本当のやりたいことを見つけることです。</li> <li>・ 私の目標は、順調に大学を卒業し、大学院に進学することです。</li> <li>・ 来年卒業後、現在内定した会社で転職せずにしっかりと仕事をして、優秀な人材となり、お金を貯めて、マイホームを買うことです。</li> <li>・ 現在の目標は、卒業論文を完成することです。</li> <li>・ 今の目標は、順調に卒業して、仕事を見つけることです。</li> <li>・ まず、できるだけ早く博士を卒業することです。</li> <li>・ 短期の目標は、修士論文を完成し、その後、就職するのか、それとも帰国するかを決めることです。</li> <li>・ 現在の目標は、早く卒業して、お金を稼ぐことです。</li> <li>・ できるだけ早く博士を卒業することは目標です。</li> </ul>

### 3. 自分の資源変換能力について

自分の資源変換能力について、良いと思う人5名、良くないと思う人12名、普通と思う人4名、わからない人9名であった（表4-46）。

表 4-46 自分の資源変換能力について

自分の資源変換能力について	人数
良い	5名
良くない	12名
普通	4名
わからない	9名

資源変換能力（表4-47）とは、資源を価値ある活動に変換する能力であり、個人によって違うことである（sen, 1999）。

表 4-47 自分の資源変換能力についての具体例

カテゴリ	コード
良い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人脈の資源なら一番得意です。もし友達から頼みごとがあればできるだけ断りません。友達を助けてあげれば、次回に相手も助けてくれるから、このようにお互い助け合いながら友情も深めることができます。</li> <li>・ 資源によります。人間関係なら苦手です。専門的な知識なら得意です。</li> <li>・ 資源の変換はかなり強いです。資源がなければ自分で作り出して、あればできる限り利用して、最大な価値を生み出していきます。</li> <li>・ 他人の力を借りて、資源を最大化することが非常に得意です。例えば、友達の中で、誰が何をしているのか、誰が何を得意なのか、すべて携帯に記録します。必要な場合はすぐその友達と相談します。</li> <li>・ 資源変換能力かなり得意だと思います。何か困ったことがある時に、気にせず友達に頼むことができます。普段、自分の最大価値を出す方法もいつも考えています。</li> </ul>
良くない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資源変換することをあまりしたことがないです。人脈を利用することが苦手です。他人にお願いする時はとても恥ずかしくて、なかなか言いづらいです。しかし、私自身ももっと価値のあるものを生み出すことができると信じています。</li> <li>・ 資源変換が苦手だと思います。一つだけのことを深く掘り込むことが得意ですが、広く浅くすることが苦手です。</li> <li>・ この能力は弱いかもしれません。自分がどんな資源を持っているかを認識していないからかもしれないし、あるいはこのような問題を考えたことがないからかもしれません。</li> <li>・ 資源変換能力は高くありません。お金に対する欲望が少ないから、自分が学んだ知識をお金になろうと考えたことがなく、いつも好きだからやっているだけです。</li> <li>・ この能力はかなり弱いと思います。やり続けることが少なく、いつもすぐ飽きてしまいます。だから理想な結果がなかなか得られません。</li> <li>・ 資源変換能力は良くないです。メンツを重んじるから、なかなか他人に助けを求めるのがむづかしいです。他人に迷惑をかけたくありません。</li> <li>・ 中国にいる時は、まあまあいいです。しかし、日本に来てから悪くなりました。日本でなかなかいい友達を作れないから、何もかも自分で解決しなければなりません。</li> <li>・ 資源変換能力を高める必要があります。</li> <li>・ 資源変換能力が良くないと思います。どうやって変換すればいいかわかりません。</li> <li>・ この能力が弱いです。性格の問題かもしれません。柔軟性がないし、恥ずかしがり屋です。</li> <li>・ よくないと思います。人に何かを頼むのが好きではないから、いつも我慢しちゃいます。</li> <li>・ 現在、まだよくないです。学生だから勉強とアルバイトでいそがしく、そんなことを考える余裕がありません。</li> </ul>
普通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資源変換能力はまあまあ有ると思います。例えば、アルバイトの仕事は、殆ど友達から紹介してくれたものです。旅行に行く時も、友達と一緒にいたり、あるいは友達の家で宿泊したりしています。</li> <li>・ まあまあと思います。現在、利用できる資源は日本語くらいです。仕事で日本語が利用するならば大丈夫です。</li> <li>・ まあまあいいと思います。将来に役に立つアルバイトをやったり、自分の得意ことをやったりしています。</li> <li>・ 普通だと思います。そんなに能力のある人ではないと思います。</li> </ul>

#### 4. 自分の精神と物質について

物質重視それとも精神重視について、精神重視 14 人、物質重視 7 人、両方とも重視 9 人であった。精神重視はやや多い（表 4-48）。

表 4-48 精神と物質について

物質重視それとも精神重視	人数
精神重視	14 名
物質重視	7 名
両方とも重視	9 名

中国人は昔から「物的な世界」に住んでおり、これらの「非物的」なものは役に立たないと思っている人が多くいる。しかも、哲学を知らなくても日常生活に支障はないはずであると思っている人は少なくない。

以下、中国人留学生の精神と物質について、どのように捉えているかを見てみる（4-49）。

表 4-49 自分の精神と物質についての具体例

カテゴリー	コード
精神重視	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 精神がもっと大事であり、物質的には普通にあれば十分です。</li> <li>・ 精神がもっと大切だと思います。物質なら少し我慢すればいいです。しかし、精神的には悲しくてコントロールが難しい場合があります。</li> <li>・ 精神面であるべきです。お金があれば必ず幸せになれるとは限りません。</li> <li>・ 精神を重視と思います。物質をあまり気にしません。食べたり飲んだりして、人の最も基本的なニーズを満たすことができればいいです。</li> <li>・ もちろん精神が大事です。物質の有無は気にしません。</li> <li>・ 物質的に足りない時がないので、普段は精神をもっと豊かにしています。</li> <li>・ 割合を言えば、精神がやや高いかもしれませんが。物質的には一定のレベルに達すればいい、勉強するとは心の不安を解消することができます。</li> <li>・ 精神をもっと重視しています。日本でマイホームや車を買うことがそんなに難しくないの、精神的な幸せを求める傾向が高くなると思います。</li> <li>・ 精神をより重視する人間だと思います。物質にそんなに強い欲望がありません。逆に精神では欲望が強いです。私の希望は、毎日楽しくて、何の悩みもなく、周りの人と仲良く暮らしていくことです。</li> <li>・ もちろん精神が大切です。私の人脈や知識や能力などをお金に変えようと一度も考えたことはありません。</li> <li>・ 精神がもっと大事だと思います。社会に貢献できる人間のような人間になるには精神的に豊かにならないとダメです。</li> <li>・ 精神です。人生を楽しみながら思想のある人間になりたいです。</li> <li>・ 精神的追求がやや多いと思います。魚や猫、植物などが大好きです。これらの小さなものを大事にすることで精神的な満足感を得られます。</li> <li>・ やはり物質が大事だと思います。衣食住が最も必要だからです。</li> </ul>
物質重視	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在なら物質がもっと重視です。物質が一定のレベルになれば精神を追求します。</li> <li>・ 物質をもっと重視していると思います。もちろん物質的にも精神的にも両方が豊かであれば最高です。今はしっかりコントロールしているので、バランスがよくとれています。勉強の時はしっかり勉強する、アルバイトの時はしっかりアルバイトする、休憩する時はゆっくり休む、できるだけやりたいことをします。もし一定の物質レベルを維持できなければ、現状も維持できません。</li> <li>・ 今でも精神的な幸せとは一体どんなものがよくわかりません。だからもちろん物質を重視します。精神はご飯になりません。ご飯を食べないと歩く力もでません。物質と精神は両立できないので、どっちを選べなければならなりません。精神は現実的ではないので、まず物質を追求したほうがいいと思います。</li> <li>・ 誰も2つの夢を持っています。1つは精神的な夢で、もう1つは物質的な夢です。物質の夢は馬雲のような人になることです。精神的な夢は神のような生活をする事です。私は将来に起業家になりたいので、物質を追求しなければなりません。</li> <li>・ 物質を重視しています。精神は物質の基に成り立っていると思います。</li> <li>・ やはり物質が大事だと思います。衣食住が最も必要だからです。</li> <li>・ 私は物質をもっと重視しています。財務の自由を早く実現できることを望んでいます。一定の物質的基盤があつてこそ、自分の好きなことを好きなようにできます。</li> </ul>
両方重視	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 物質を重視していますが、精神も大切だと思います。精神状態が悪ければ、物質生活がいくら良くても無駄だと思います。例えば、毎日気分が悪くて、いくら美味しいものがあつても、豪邸や高級車があつても、楽しむことができません。</li> <li>・ 物質と精神が半分ずつです。普段は物質をそんなに重視していないが、しかし、ないと生活できません。精神的な追求は無敵だと思います。もっと多くの物質を得るには、まず脳を充実しなければならぬと思</li> </ul>

	<p>ます。両者は相補的で、どちらも欠かせません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 物質はまず必要だと思います。しかし、物質ばかりを追求すると本末転倒になります。物質が高めれば高めるほど、精神的な追求も高めることができます。</li> <li>・ 私は普通の人だと思います。物質がないときは物質を追求し、精神がないときは精神を追求します。だから両方が大事です。</li> <li>・ 物質と精神を両方大事です。私は「物質を追求する人は悪い、精神を追求する人が偉い」とは思いません。お金や物のため一生懸命に頑張る人は非常に素晴らしと思います。人の追求や欲しいものはそれぞれであり、どっちがよいかどっちが悪いかは分かりません。私は思想のある人間になりたいです。自分なりの見方や考え方が持ってあれば、人間関係もうまく行きます。</li> <li>・ 物質と精神は両方大事だと思います。物質的な幸せを全く追求しないことは無理で、ある程度があれば十分です。</li> <li>・ 物質も精神も重視しています。物質的には好きなものを買ってご褒美します。精神的には適度に休んで、好きなことをすることです。</li> <li>・ 物質と精神は同じ大事だと思います。状況により違います。例えば、結婚の場合は物質が大事、恋愛の場合は精神が大事です。一人生活の場合両方大事です。</li> <li>・ 両方とも重視しています。ある程度の物質的ニーズを満たすことができれば、その上に好きなことを選びます。</li> </ul>
--	--

## 5. 自分の幸福感について

幸福感について、幸せと思っている人は25名、幸せではないと思っている人が5名であった(4-50)。

表 4-50 幸福感

幸福感	人数
はい	25名
いいえ	5名

中国人は自己中心で、わがままな人が多いとよく言われる。「わがまま」という言葉は何となく否定的に捉えられることが多い。しかし、わがままな人は自分のニーズを最優先に考えられるので、自分自身のニーズがきちんとできていれば、幸せを感じやすいのではないかと思う。

幸福感受力の個人差が多いと思う。しかし、本研究の対象者の幸福感の由来は、日常的に小さなことから幸せを感じられる。例えば、家族や恋人、友達と一緒にいる時、美味しいものを食べる時、好きなことをやる時、達成感を感じられる時、から由来する。自分で問題解決ができた時、日本の穏やかな社会環境で幸せを感じやすいかもしれない。

以下、中国人留学生の幸福感についての具体例(4-51)である。

表 4-52 自分の幸福感についての具体例

カテゴリー	コード
幸福の源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普段、家族や友達と一緒にいる時は、とても楽しくて幸せです。</li> <li>・ 私にとって幸せは平常の状態です。例えば、好きなものを買ったり、美味しいものを食べたり、小さな目標を達成したりなどです。</li> <li>・ テレビや映画を見る時、好きな本を読む時、全部楽しいです。</li> <li>・ 幸福感は達成感から由来します。例えば、描いた絵は先生に褒められるととても幸せです。また、電話で家族と会話をする時もとても幸せです。</li> <li>・ 家族と一緒にいるととても幸せです。公園で座っている時も幸せです。欲しいものを買った時も幸せですが、物質からの幸せはあまり長く続きません。</li> <li>・ 友達と一緒にドライブや遊びに行く時、帰国時に飛行機から降りた瞬間も幸せです。自分で問題解決した瞬間の達成感と満足感からも幸せを感じます。</li> <li>・ 満足しやすい性格なので幸福感を得ることが得意です。美味しいものを食べたらい日中も幸せです。旅行に行った時、友達と一緒にいる時も幸せです。</li> <li>・ 旅行や買い物、ゲームをやる時は楽しくて幸せです。</li> <li>・ 美味しいものを食べると幸せを感じます。お花を買くと幸せを感じます。目標を達成する時も幸せを感じます。</li> <li>・ 幸せを感じやすい性格です。散歩する時小さなお花を見つけた瞬間、朝目が醒める瞬間、カーテンが開いた瞬間などの小さな瞬間から幸せを感じます。</li> <li>・ 普段、幸せを感じる瞬間は、主に家族の存在です。</li> <li>・ 彼女と一緒にいる時、一番幸せです。</li> <li>・ 誰かが笑ってくれる時にとても幸せです。家族と一緒にいるすべての時間が幸せです。他の人にとって普通のことでも私は幸せを感じます。</li> <li>・ 今はとても幸せです。何も欠けていません。</li> <li>・ 幸せな瞬間はたくさんあります。例えば、美味しい料理を食べる時、お金が足りている時、普段の小さなことがらに幸せをかんじます。</li> <li>・ 幸せの時はとても多いです。例えば、旅行の時、彼氏とドライブの時、太陽に浴びる時、親が健康であることなどすべて幸せを感じます。</li> <li>・ 毎朝、目が覚めた瞬間に、生きているだけで幸せと感ずります。食べたいものを食べて、やりたいことがやれます。</li> <li>・ 友達と一緒に美味しいものを食べるだけで幸せがいっぱいです。</li> <li>・ 友達と会話すること、お互いに助け合い、健康であれば十分幸せです。</li> <li>・ 家族と一緒にいることだけで幸せです。</li> <li>・ とても満足しやすい性格なので幸せを感じる時もたくさんあります。</li> <li>・ 指導先生は外国を研究しているので、とっても優しくよく理解してくれています。このような素敵な先生と出会えたことを幸せだと感じます。</li> <li>・ 幸せは主に家庭からもらいました。家族がいつも支えてくれて、尽くしてくれて、いつか同じようにしてあげることができればもっと幸せです。</li> </ul>
幸せではない理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私にとっての幸せは、衣食住の心配がなく、お金もあり、愛してくれる人がいることです。しかし、現在、何もないから不幸です。</li> <li>・ 全く幸せではありません。いつかお金、マイホーム、一定の社会的地位、大好きな仕事と妻があれば幸せになれると思います。</li> <li>・ 外から見れば幸せかもしれない、親や彼氏との仲がいいし、仲の良い友達も何人かいます。お金も足りるし、日常生活にもそんなにストレスを溜まっています。しかし、本当に幸せですかと聞かれると、そうではありません。なぜならば、今やっていることは本当に意味があるのか、続けていく必要があるのか、たまに疑問に思います。現在やっていることが何の意味があるのか。生活はとても退屈です。ただ仕方がないからやっているだけです。だから、物質面から見れば幸せですが精神的には幸せではありません。</li> <li>・ 幸せ？ この問題はとても難しいです。好きなことをやっているかどうか、理想を達成しているかどうか、求めている夢のために頑張っているかどうかから見れば、幸せな人間ではないかもしれません。</li> <li>・ 期待している幸せはパートナーと一緒に好きなことをやって、同じ目標のために頑張っていくことです。でも今は一人暮らしです。</li> </ul>



## 6. 自分の潜在能力について

自分の潜在能力について、分かる人は17名、分からない人は13名であった(4-53)。

表 4-53 自分の潜在能力について

自分の潜在能力	人数
分かる	17名
分からない	13名

近年、中国人はますます能力の向上を重視するようになり、成功学に関する教材や講座がいたるところにある。中国で一般的に考えている「能力」は実用性があり、最も重要なのは即効果があるものである。「汝自身をしれ」という言葉がある。つまり、自分のことを知れば、たいていの問題は解決し、物事はうまくいく。したがって、正確に自分の能力や潜在能力を把握することも自分を成長させることができる。

以下、中国人留学生の自分の潜在能力についての具体例を示す(4-54)。

表 4-54 自分の潜在能力についての具体例

カテゴリー	・ コード
分かる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私の潜在能力は、前向き、向上心が強い、勇気がある、楽観的、好奇心旺盛、我慢強い、行動力があることです。</li> <li>・ 私の長所はすべて私の潜在能力です。</li> <li>・ 私の潜在能力は、コミュニケーション能力です。何かわからないことがあればすぐ相手に聞きます。多くのことはコミュニケーションによって解決できると思っています。</li> <li>・ やりたいことなら最後まで頑張ることは私の潜在能力と思います。</li> <li>・ 他人が解決できない問題を解決できるようになることが私の潜在能力と思います。</li> <li>・ 絵画と芸術の面で潜在能力があると思います。また、漢方医と栄養および健康管理の面でも一定の潜在能力があると思います。</li> <li>・ 私の潜在能力は、一つのことをやり続けることであると思います。</li> <li>・ 私の潜在能力は、問題解決力を持っていることです。</li> <li>・ 私の潜在能力は、勇気があり、他人に頼らず、困難を克服し、文句を言わないことです。</li> <li>・ 私の潜在能力は、勉強好き、「足るを知る」ことです。(対象者 17)</li> <li>・ 私の潜在能力は、他人を助ける力です。他人を助けることを通して自分の存在価値を感じることができます。</li> <li>・ 私の潜在能力は、直感で物事を判断することです。</li> <li>・ 私の潜在能力は、様々な可能性があることです。</li> <li>・ 私の潜在能力は、講演者や政治家になれることです。</li> <li>・ 私の潜在能力は、管理能力と組織能力とイノベーション能力です。</li> <li>・ 私の潜在能力は、一旦やり始めたら、できるだけ完璧に完成し、結果にかかわらずきちんと最後まで努力するところです。</li> <li>・ 私の潜在能力は、好奇心と挑戦力があることです。</li> </ul>
分からない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私も自分の潜在能力を知りたいです。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ 私の潜在能力は何かな？日本語能力はこれからです。</li> <li>・ この質問はあなたに聞きたいです。私もどんな潜在能力を持っているか知りたいです。普段このことをあまり考えたことはありません。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ 私はどんな潜在能力があるのか分かりません。知っていればもう発揮しています。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ 私の潜在能力は、何があるのかよく分かりません。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ もし自分の潜在能力がわかれば、すでに発揮しています。</li> </ul>

## 7. 自分の潜在能力を引き出す方法について

自分の潜在能力を引き出す方法について、分かる人は22名、分からない人は8名であった(4-55)。

表 4-55 自分の潜在能力を引き出す方法について

自分の潜在能力を引き出す方法	人数
分かる	22名
分からない	8名

自分の潜在能力を知れば、その次は、どのように自分の潜在能力を引き出すことができるかを考え始めると思う。自分を高めるということは、今まで知らなかった知識を身につけることである。今までできなかったことができるようになることである。今まで気づけなかったことに気づくことになることである。人は自分の能力を高めることで、様々な困難や課題を乗り越えたことができ、着実に目標の達成に近づいている。

以下、中国人留学生の自分の潜在能力を引き出す方法についての具体例を示す(表 4-56)。

表 4-56 自分の潜在能力を引き出す方法についての具体例

カテゴリー	コード
分かる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ たくさん勉強して、たくさん鍛えて、自分より優秀な人とコミュニケーションをとることです。</li> <li>・ チャンスと環境が必要で、他人と競争することで能力も高めます。</li> <li>・ 時間を使って、様々な活動に参加し、いろんな経験を積むことです。</li> <li>・ 勉強すること、反省することです。</li> <li>・ 多くの経験を積むことです。</li> <li>・ 勇気を持って色々試すこと、失敗を恐れずに実践してみることです。</li> <li>・ 多くのところに行ってみること、多くの人の意見を聞いてみることで、洞察力を高めること、視野を広げることです。</li> <li>・ 時間をかけて勉強すること、学んだだけでなく、学んだ知識をうまく利用することです。</li> <li>・ 自分で解決すべきことがある時です。</li> <li>・ 無理にすることではなく、自分の心に従い、自由に発揮することができれば一番いいと思います。</li> <li>・ 準備できている人は必ずいいチャンスと出会います。能力は後天的に鍛えられたものだと思います。すべての方法を考えて、自分より能力の高い人から学ぶことです。</li> <li>・ できるだけ頑張ってみればいいと思います。</li> <li>・ できるだけ早めに独立し、能力を持つ友達をたくさん作れば、徐々に同じ能力を持つようになります。また、自分を見知らぬ環境に置くことで、能力育てることもできると思います。そうすることで、段々強くなり、落ち着くようになります。</li> <li>・ ある程度の欲望があれば、目標を達成するため最大な潜在能力を発揮することができると思います。</li> <li>・ 自分の強みを知ることです。それ以外はありのままです。</li> <li>・ 良いチャンスが必要であり、仕事の中で鍛えられると思います。</li> <li>・ 先天的な才能と後天的な能力があると思います。先天的な才能を持っていないから、後天的に努力するしかありません。</li> <li>・ 仕事の中で様々な能力を育てる方がいいと思います。</li> <li>・ 勉強と実践を通して引き出す方がいいと思います。</li> <li>・ 自分の能力を高める必要がないと思います。誰でも短所があり、完璧な人がいません。長所があれば必ず短所もあります。</li> <li>・ 人の IQ は生まれつきであり、教育は人の IQ を変えることはできません。</li> <li>・ 積極的に新しいことを試してみることです。</li> </ul>
分からない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ これはよくわかりません。ずっと学校で勉強しているから、仕事をしたことがありません。仕事をすれば段々わかるかもしれません。</li> <li>・ わかりませんね。</li> <li>・ 私も知りたいです。</li> <li>・ わかりません。</li> <li>・ すべての能力を高めたいです。しかし、具体的にどのようにすればいいかわかりません。</li> <li>・ 教えてください。</li> <li>・ 分からないです。</li> <li>・ 私も知りたいです。</li> </ul>

## 8. 自分の来日後の変化について

本研究の調査対象者は、ほぼ全員来日後何らかの変化があった。主に「外的変化」「内的変化」「対人関係の変化」の3個のカテゴリーが得られた(表4-57)。

「外的変化」について、例えば、生活習慣の変化において、①来日後、日本人と同じ毎日シャワーや着替えをするようになった。②来日前、不健康な食べ物をたくさん食べたり飲んだりしていた。来日後、健康意識が強くなり、もっと健康な食生活を始めた。③日本人はきれい好きで、来日後、私もきれい好きになり、毎日、部屋の掃除やシャワーをするようになった。④来日後、例えば、ゴミを家まで持ち帰ること、電車の中で電話しないこと、大声で会話しないことなどを守るようになった。⑤来日後、身だしなみや服装の色に気を配るようになった。⑥たまに帰国する時日本人と同じようなやり方や考え方を持っていることに気づいた。例えば、列に並ばない、ゴミを投棄する、サービスが悪いなどの行為を見ると腹が立つようになる。もし、日本に来なければ、中国でこのようなことを見てもそんなに気にしないと思う。⑦来日後、時間を厳守すること、約束を守ること、電車やレストランで小さい声で会話することなどをできるようになった。⑧来日後、礼儀正しくなった。⑨来日後、日本人と同じように挨拶する時にすぐお辞儀するようになった。⑩来日前、悪い習慣が多く、挨拶しないし、感謝や謝りもしない。来日後、これらを自然にするようになった。

学習能力において、①中国の先生はかなり厳しくて、勉強や宿題などしないとすぐ怒られる。日本の先生たちが優しくて、宿題しなくてもほとんど何も言わないし、怒らないし、その代わりに自分で勉強するようになった。②来日後、独学能力が高まった。中国では、先生が知識を教えてくれて、先生の教えた通りに覚えるのが普通である。しかし、日本の大学や大学院は、先生から教えるだけではなく、自分で勉強して調べてレポートを書いたり発表したりする授業が多い。③来日前、勉強したいものがないから悩むけど、来日後の今は勉強したいものが多すぎて悩む。④中国では、何を勉強するか、何を勉強しないかはほとんど学校の先生や親が決める。日本では、学習計画表に沿って自分で勉強することになっている。

「内的変化」について、考え方の変化において、①どうしたらより良い自分になれるかを考え始めた。②より客観的になった。③考え方が多様化になった。④日本の教育は学生の考え方を重視しているので、思考の独立性を鍛えた。⑤思考方式において、来日前は学歴ばかり考えていた。来日後は学歴より自分が本当にやりたいことを大事にするようになった。⑥来日前、結果を重視し、来日後は過程を重視するようになった。現在、結果はどうでもいいから、過程を楽しむことが最も大事であり、最後は成功しても失敗してもあまり気にしなくなった。⑦外国人と中国人の考え方がやはり違う、それは海外で暮らして見ないと分からない。⑧人間関係、家族関係、生き甲斐などに対する認識はかなり変わった。⑨来日前、様々なニュースに対して、専門家の意見を疑わずに信じていた。来日後、ある事に対して様々な認識や考え方があり、他人の言いなりに信じるのではなく、自分なりの考え方や判断力を持つようになった。⑩来日前、やりたいことがあれば、何も考えずにすぐやる。来日後、熟考の上に行うようになった。

視野の変化において、①来日前に身の回りのことばかりしか見えない、どんなことにも関心がない、来日後は好奇心が強くなり、日中関係・米中関係などの国際的な事に関心を持つようになり、昔に嫌いな歴史や政治、経済などにも興味を持つようになった。②中国

で経験できないことが日本で経験できた。③来日前、中国の全てが当たり前と知っている。来日後、中国の当たり前のことは日本で当たり前ではない、日本の当たり前のことは中国で当たり前ではないと分かった。④来日前、「井の中の蛙大海を知らず」のようである。来日後、様々な優秀な人とのコミュニケーションの中で、知識や見方、物事の考え方および思考方式などを学んだ。⑤来日前、周りの人達や住む都市しか見えない。来日後、中国と日本だけでなく世界中を見るようになった。⑥来日前、周りの人達がいつも変わらず同じような人ばかりである。来日後、色んな人と出会い、一生懸命に頑張る人がいれば、何もせずに遊んでばかりの人もいる。このような様々な人を見て、将来、どのような人生を歩んでいきたいのか分かった。

性格の変化において、①来日前、衝動的であり、来日後、理性的になった。②来日前、いつも慌てている。来日後、落ち着くようになった。③来日前、何かあるとすぐ怒る。来日後はそんなに怒らないようになった。④来日前、いつもイライラする。来日後、平和的な雰囲気の中で心が穏やかになった。⑤来日前、短気であり、自己中心で非常にわがままであった。来日後、他人の立場に立って物事を考えるようになった。⑥元々細かい性格が来日後もっと細かくなった。⑦元々共感力がある人なので、来日後、もっと強化されるようになった。⑧来日前、あれこれが受け入れないことが多く、来日後いろんなことを受け入れるようになった。

「対人関係の変化」について、①日本人と同じように職場で自分のプライベートのことを他人に話さず、そして他人にも聞かないようになった。②来日後、人間関係では、常に他人に迷惑をかけないようにいつも気をつけている。③日本人と同じように周りの人と距離を保つようになった。④来日後、ますます他人に無関心になり、人と付き合わなくなり、一人で過ごすようになった。⑤アルバイト先で、同僚と一緒にいる時、わざわざプライベート的な質問をしないようになっている。⑥来日後、人間関係の希薄化になり、クラスメートや同僚と深く付き合わないようになった。⑦来日前、クラスメートや友達によく家族や彼氏、最近の状況などについて会話する。来日後、言わないようになった。インタビューの時期は、コロナ下であったが、聴取内容はコロナ以前のものであり、影響はないと考える。

表 4-57 自分の来日後の変化についての具体例

カテゴリー	コード
外的変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生活習慣において、来日前は不健康な食べ物をたくさん食べたり飲んだり、来日後は健康意識が強くなり、もっと健康な食生活を始めました。</li> <li>・ 来日後の変化は生活習慣です。日本人はきれい好きで、私もきれい好きになりました。毎日、部屋の掃除やシャワーをするようになり、環境や自分がきれいになる事は精神的によい影響を与えます。それ以外は、自立性です。日本で頼れる人がいないから、以前よりもっと自立できるようになりました。</li> <li>・ 来日後、礼儀正しくなり、生活習慣もよくなりました。</li> <li>・ 来日後の変化は、以前より顔が若くなり、心も若くなりました。</li> <li>・ 来日後は、礼儀正しくなりました。以前は、悪い習慣が多かったです。例えば、挨拶しない、感謝や謝りをしないなどです。</li> <li>・ 来日後、もっと社交的になりました。中国でいろいろやりたいことがあっても親が認めないから、何もできません。日本では一人生活なので、何でも自分一人で解決しなければなりません。経験を積んでいけば、さらにもっと多くのことができるようになります。</li> <li>・ 以前の話し方は非常に率直で何も考えずにすぐ言う、今は少し考えてから言うようになっています。仕事も以前よりずっとまじめにするようになりました。</li> <li>・ 中国にいる時は、勉強以外に何もしません。しかし、日本では勉強とアルバイトを両立しながら、自分で部屋を探し、引越し、家事をする。周りの人間関係への対応、毎月の支出の配分など全部自分でできるようになりました。</li> <li>・ もし日本に来なければ、中国の普通の大学生と同じように、卒業したら就職して、その後ある男と結婚して子供を作ります。そうすると、現在の自分と出会えなくなります。やはり、今の自分、今の状態が好きです。</li> <li>・ 中国にいる時は周りの人達や住む都市しか見えません。日本では中国と日本だけでなく世界中を見るようになりました。独立性も変わりました。中国にいる時に頼れる人がいるからすぐ家族や親友などを頼ってしまいます。しかし、日本では一人だけなので頼れる人が誰もいない。自分で何かしないと生きていけません。</li> <li>・ 以前は一人生活をしたことがないから、自分の意見も言えない人間でした。いつも周りの言いなりに行動します。日本に来てから、自分がどんな人間で、どんなことが好きで、どんな人生を生きていきたいかなどを考えるようになりました。</li> <li>・ 以前は勉強したいものがないから悩むけど、今は勉強したいものが多すぎて悩みます。</li> <li>・ 独立性です。中国で生活費や生活費は当たり前のように親から貰っていました。日本に来てから、少なくとも生活費は自分で稼ぐようになりました。日常生活の問題もすべて一人で対応できるようになりました。</li> <li>・ 日本で彼氏との出会いで自分の人生も変わりました。</li> <li>・ 以前、中国で毎日忙しくてトイレに行く時間ありません。今はゆったりした生活ができて、何よりです。</li> <li>・ 来日後、個人の能力の大事さを実感するようになりました。以前、いつも一夜にして成功することばかり考えたが、現在は慌てずに一步一步前に進むようになりました。</li> <li>・ 中国で何でも親と相談してから決めます。日本に来てから、全部自分で決めるようになりました。</li> <li>・ 中国では何かあると、いつもすぐ親に電話して助けを求めています。日本でも親に電話できますが、ほとんどは自分で問題の解決方法を考えるようになりました。</li> <li>・ 日常生活では、以前は自炊や家事ができなかったが、今は全部できるようになりました。以前、自分の考え方とかあまり言わないけど、今は躊躇せ</li> </ul>

	<p>ずに言えるようになりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本に来てからアルバイト先で、上司や同僚とのコミュニケーションを通して、勉強や問題解決をすることでもっと自信がありました。</li> <li>・ 自分で学校を選んで進学準備をする、自分で住む場所を決めて契約する、自分で料理や家事をする、自分で友達を選んで仲良く付き合う、自分でアルバイトを探す、自分で好きな専攻を選ぶなど教え切れないほど一人でできるようになりました。これこそが成長だと思います。</li> <li>・ 親と離れて一人でどうやって生きるべきかを自分で考えなければなりません。どんな辛いことがあっても親に何も言いません。いつも良いことばかり言って悪いことは隠す、親に心配をかけたくないからです。これはとてもいい経験だと思います。アルバイトで苦労して稼いだお金を使って、買い物する時は非常に誇りと思います。</li> <li>・ 中国で親と一緒に暮らしていたから、一人生活をしたことがありません。日本での一人生活は、相談する人がいない、親が日本の状況や問題がよく分からないから、自分で解決するようになりました。</li> <li>・ 中国では、先生が知識を教えてくれて、先生の教えた通りに覚えればいいです。しかし、日本の大学や大学院は、先生から教えてくれるだけではなく、自分で勉強して調べてレポートを書いたり発表したりするようになりました。</li> <li>・ 来日後、学習能力が高めました。中国では、何を勉強するか、何を勉強しないかはほとんど学校の先生や親が決めます。しかし、日本では、半年や一年の学習計画表が既に決めています。その間は、その計画表に沿って勉強すれば良いです。普段、先生はほとんど何も言わないから、勉強は自分ですることになりました。</li> <li>・ 来日後、日本語能力と生活技能が高めました。もともと家事は一切できない私でも、現在は料理や洗濯など全部できるようになりました。</li> <li>・ 来日後、独立性と適応能力を高めました。独立しないと生きていけない、適応しないと帰国するしかありません。</li> <li>・ 来日後、勉強を通して知識が増え、アルバイトを通して経験を積みました。</li> <li>・ 日本での生活経験を通して、日本人との付き合い方がわかるようになりました。</li> </ul>
内的変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 来日後の考え方が変わりました。来日前はこれも欲しいあれも欲しい、いつもお金を稼ぐことばかりを考えていました。来日後、どうしたらより良い自分になれるかを考え始めました。</li> <li>・ やり始めてから考えるというやり方は、考えてからやるようになりました。</li> <li>・ 日本では、様々な人と接触して、いろんな事に挑戦して、勇気を持つようになりました。</li> <li>・ 来日後、私の包容力が高くなりました。アルバイト先の上司や同僚から学びました。</li> <li>・ 来日後、自分なりの考え方や判断力を持つようになりました。海外で暮らして見ないと、中国の生活はすべて当たり前のように思ってしまう。様々なニュースや専門家が言ったことに疑わずに信じてしまいます。しかし、海外で暮らして見ると、同じ事に対して、様々な認識や考え方があったと分かりました。ある事に対してどのように受け止めるかは他人の言いなりを聞くだけではなく、自分で考えて自分で決めます。これは海外留学の一番良いところです。</li> <li>・ 以前よりもっと自信を持つようになりました。</li> <li>・ 以前は、短気であり、飽きたらすぐやめます。今は嫌でも我慢して続けるようになりました。</li> <li>・ もっと客観的に中国を見るようになりました。来日前、中国は問題だらけ、海外の全てが完璧とっていました。来日後、見方が変わり、中国のいいところもいっぱいあるし、海外も海外の問題があると認識できるようになりました。</li> </ul>



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 心の持ち方がよくなりました。以前はいつも落ち着かなくて、負けず嫌いだから、心理状態が悪かったです。</li> <li>・ 物事の考え方が少し変わりました。来日後、より客観的になりました。</li> <li>・ 来日前、衝動的であり、来日後、理性的になりました。性格が落ち着くようになり、思考方法が柔軟的になり、物事を別の角度から見るようになりました。</li> <li>・ 中国にいる時、いつもそわそわして落ち着きません。日本に来てから、周りの日本人を見て自分の考え方や性格も変わりました。</li> <li>・ 日本社会は非常に平和的であり、このような雰囲気の中で心も穏やかになりました。来日前は劣等感があり、来日後は自信を持つようになりました。来日前はすぐ怒る、来日後はそんなに怒らないようになり、いろんなことを受けとめるようになりました。</li> <li>・ 来日後、質的な変化が現れました。まずは視野です。来日前に毎日身の回りのつまらないことばかりしか見えないし、どんなことにも関心がない、来日後は好奇心が非常に強くなり、日中関係・米中関係などの国際的な事に関心を持つようになり、昔に嫌いな歴史や政治、経済などにも興味を持つようになりました。</li> <li>・ 思考方式において、来日前は学歴ばかり考えていました。来日後は学歴より自分が本当にやりたいことを大事にするようになりました。来日前は結果を重視し、来日後は過程を重視するようになりました。現在、結果はどうでもいいから、過程を楽しむことが最も大事であり、最後は成功しても失敗してもあまり気にしません。</li> <li>・ 考え方において、今まで中国人として形成した生活習慣や文化習慣などは当たり前のことと思いました。しかし、日本に来てから、日本の生活習慣や文化習慣を経験して、中国の当たり前のことは日本で当たり前ではなく、日本の当たり前のことは中国で当たり前ではありません。</li> <li>・ 独立性において、来日前、生活の面ではすべて親が世話してくれました。来日後はすべて自分でやるようになりました。</li> <li>・ 来日後、性格が良くなりました。来日前、短気であり、自己中心で非常にわがままです。来日後、福祉を勉強してから、他人の立場に立って物事を考えるようになりました。</li> <li>・ 来日後、心がより強くなりました。視野が広がり、より客観的できになり、教養も高めるようになりました。アルバイトを通して、お金を稼ぐ能力も大幅に高くなりました。</li> <li>・ 来日後、本当の自分を見つけるようになり、自己認識する能力を高めました。</li> <li>・ 来日後は、判断や考え方がもっと深慮深くなりました。コミュニケーション能力も高くなりました。つまり、成長した感じです。</li> <li>・ 来日後、考え方の変化が一番大きいです。例えば、人間関係、家族関係、生き甲斐などに対する認識はかなり変わりました。</li> <li>・ 来日後、一人暮らしが始めてから気にすることが少なくなり、心が広くなりました。</li> <li>・ 来日後、いろんな人と出会い、一生懸命に頑張る人がいれば、何もせずに遊んでばかりの人もいます。視野が広がり、生活や経験も豊になりました。もし中国にいるなら、周りの人達が多分ずっと変わらず同じような人ばかりです。将来、どのような人生を歩んでいきたいのか分かりました。</li> <li>・ 来日後、独立心が強くなりました。お金に対する見方も変わりました。以前、教育を受ける目的は、いい仕事を見つけるためであり、たくさんのお金を稼ぐためと思っていました。しかし、日本では平凡な生活が慣れて、お金を気にしなくなりました。</li> <li>・ 来日後、独立心が強くなりました。中国で、アルバイトをしたことがあります。日本に来てから自分でアルバイトを探し、自分で生活費を稼いでいます。以前よりもっと自信を持てるようになりました。</li> <li>・ 来日後の変化がきつとあります。例えば、中国にいる時は、「井の中の蛙大</li> </ul>
--	---

	<p>海を知らず」のようです。日本に来てから、様々な優秀な人とのコミュニケーションの中で、知識や見方、物事の考え方および思考方式などを学びました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 来日後は、性格がもっと明るくなり、外向的になりました。</li> <li>・ 来日後は以前より根気強くなりました。</li> <li>・ 来日後、年を重ねるにつれてますます成熟するようになり、心の持ち方もよくなりました。</li> </ul>
対人関係の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中国にいる時は、人とのコミュニケーションが苦手であり、日本でアルバイトを通して段々慣れるようになり、誰とも普通に会話できるようになりました。</li> <li>・ 日本では日本人のやり方に従うしかない、いくら日本語が上手でも日本人の特有な「裏」のものがわからないと上手くいきません。</li> <li>・ 日本人はとても正直で、相手が言ったことはどういう意味かを推測する必要がありません。だから、日本の人間関係はとても簡単です。</li> <li>・ 日本では誰とでもコミュニケーションを取ることができます。学校の先生やクラスメート、アルバイト先の上司や同僚、すべての人間関係は自分一人で対応しなければなりません。中国の先生や年長者はいつも説教することが好きで、あまり話したくありません。</li> <li>・ 日本人とのコミュニケーションは本当に詰まらなくて、どんなことをいっても「すごいね」「素晴らしいね」しかいえません。日本人は自分のことや自分の意見とかあまり言わないから、ルールに従って仕事をすると同じのように、話す内容や使う言葉もほとんど同じです。だから、日本であまり日本人とコミュニケーションを取りたくないです。</li> <li>・ 中国人は会ったばかりでも、思わずに自己開示をして深いところまで会話ができ、親しみを感じてすぐいい友達になれます。しかし、日本人は自己開示に抵抗感があり、少しずつ時間をかけて受け入れてくれるかもしれないし、あるいはずっと受け入れてくれないかもしれません。いつも表面的な会話しかできず、親しいな友達になり難いです。これは日本人と中国人との付き合いで一番違うところです。</li> <li>・ 日本でたくさんの日本人と出会ったけれども、仲のいい友達を作れなかったです。日本人との文化や性格の違いが大きいから、なかなか深い交流ができません。中国人と同じような友達になるのがほぼ不可能です。日本人との交友関係は、荘子の諺「君子の交わりは淡きこと水の如し」と同じです。しかし、中国人から見ればこれは本当の友達ではありません。</li> <li>・ 日本社会に溶け込みたいなら何も気にしない方がいいです。外国人として、例えば日本で80歳まで暮らしても外国人です。日本人の文化や考え方が分からないのが当然です。ある単語の背後に隠されている意味がわからないのも当然です。分からない時は素直に「すみません、分かりません」といえばいいです。「もっと分かりやすく説明してください」と頼めばいいです。恥ずかしいとか、挫折感があるとか、何も気にする必要がありません。もし中国にいるなら、中国人として中国人の言ったことが理解できなければ、それが本当のショックです。頭悪い人や異常な人間として見られるかもしれません。しかし、日本ではこのような心配が全くないです。</li> <li>・ 日本で他人との付き合いが少なくなったような気がします。特に、日本人との付き合いが非常に少ない、日本人や日本文化はそんなに詳しくありません。</li> <li>・ もともと社会力が不得手なため、アルバイトで中国人や日本人とコミュニケーションを取らなければならない、現在は以前よりずっと良くなっています。</li> <li>・ 日本の人間関係はモデル化しているので非常に簡単です。そのモデルに従ってやっていけばほぼ問題ないです。例えば、挨拶の場合は一言が言われたら、一言で返せばいいです。中国の場合は、人によって話しの内容や話し方も変わる必要があり、さらに複雑です。</li> <li>・ 中国では一クラスの学生が多いです。私はクラス委員として、知り合いも</li> </ul>

	<p>多いです。そして学生会にも参加し、また数百人と知り合うことができました。その上、毎日いろんな会議や活動を参加することで、たくさんの先生や学生とますます仲良くなりました。しかし、日本ではクラスの学生も少ないし、クラスとクラス間の交流も少ないし、学校の活動も少ないです。知り合いがかなり限られています。アルバイト先では、仕事は仕事、プライベートはプライベートとはっきりと分けているので、同僚が友達になる可能性も少ないです。日本での社交範囲は中国と全く比べに成りません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本に来たばかりの時は若すぎて、学校でずっと勉強ばかりしていました。人間関係の重要性を全く意識しなかったです。その後、少しずつ練習してから、他人との付き合い方も段々上手くなりました。</li> <li>・ 日本人の場合は、言葉が違ったり、教育や生活環境も違います。日本にいても周りの中国人と付き合いたくなくなります。</li> <li>・ 中国でもっと社交的です。少なくとも言葉の障壁がないからです。</li> <li>・ 日本では何らかの抵抗感があり、日本人の友達どころが、中国人の友達も一人か二人しかいないです。</li> <li>・ 現在の人間関係はかなり簡単です。アルバイト先ではただの同僚だけなので、中国人の友達もそんなに多くありません。彼氏と一緒にいる時間が一番多いです。</li> <li>・ 普段、友達とたまに連絡するけど、アルバイトや論文など忙しいから、友達と会うチャンスそんなに多くありません。</li> <li>・ 日本に来てから、友達を作ることあまり興味なくなりました。勉強やアルバイトも忙しくて、わざわざ時間をとって友達を作る余裕がありません。</li> <li>・ 来日後、友達は本当に少ないです。学校やアルバイト以外に、家でのおんびりする時間が多いです。</li> <li>・ 日本で友達を作らなくなりました。クラスメイトは年下の子が多く、考え方や趣味が違うため、仲良くなるのは無理じゃないかなと思っています。アルバイト先の同僚は日本人が多いから、親友になることも難しいです。普段、一人で散歩したり、家でゆっくり休んだりしています。</li> <li>・ 日本人とコミュニケーションが取れるますが、仲いい友達となることは難しいです。</li> <li>・ 論文やアルバイトだけで精いっぱいなので、友達と一緒に遊び時間ありません。</li> </ul>
--	---

## 9. 新型コロナウイルス感染症の影響について

「新型コロナウイルス感染症の影響」（表 4-58）に関しては、「生活の影響」と「経済の影響」「心理の影響」「良い影響」の4個のカテゴリーが得られた。

表 4-58 新型コロナウイルス感染症の影響についての具体例

カテゴリー	・ コード
生活の影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外食や旅行、友達に会うことができなくなり、アルバイトもやめています。</li> <li>・ 体重が増えました。</li> <li>・ 影響がかなり大きいです。すべての計画もほぼ停止状態です。</li> <li>・ 7月の試験は12月に延期になった一生懸命に準備したのに残念です。</li> <li>・ 今年帰国できず家族と会えなくなりました。</li> <li>・ 一番大きな影響は、帰国して調査することができなくなりました。普段の生活も不便で、夏もマスクをしなければならないです。</li> <li>・ 帰国もできないし、旅行も行けません。</li> <li>・ 一番大きい影響は、今年、親が日本に来ることができなくなり、私も帰国することができなくなったのです。</li> <li>・ 今年は旅行に行きませんでした。以前は毎年2回くらい旅行に出かけていました。また、帰国して調査する予定も延期になりました。</li> <li>・ 影響がかなり大きいです。普段、できるだけ外出を押さえながら、どうしても外出しなければならない場合も外でびくびくしています。</li> <li>・ 悪い影響は帰国できなくなったことです。</li> <li>・ マイナスの影響は、帰国できず家族と会えなくなりました。友達と会うと感染する可能性があるからできるだけしないようにしています。</li> <li>・ いつも通りの生活や勉強および仕事ができなくなりました。</li> <li>・ 就職のつもりですが、コロナのため諦めました。</li> <li>・ すべての人が大変だと思いました。実際の生活への影響もたくさんあります。例えば、帰国できなくなり、学校へいけなくなり、外出やアルバイトもできなくなりました。</li> <li>・ 買い物の回数、外出の回数、友達と会う回数などが大幅に減少しました。</li> <li>・ 帰国するつもりですが、結局帰れなくなりました。他にはほぼ影響がありません。いつも通りの生活です。</li> <li>・ 帰国できなくなり、外出もできません。オンライン授業はあまり好きではありません。対面の授業の方が効果的です。</li> </ul>
経済的影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 収入が減りました。</li> <li>・ アルバイトできないから収入が大幅に減少しました。</li> <li>・ コロナでアルバイトをやめました。</li> <li>・ 仕事できなくなくなり、収入も少なくなり、でも生活には困っていません。</li> <li>・ かなり影響が大きいです。災厄なことは今年あまりアルバイトをしていないから、生活水準もかなり下がりました。</li> <li>・ 収入なくなりました。</li> <li>・ アルバイトも影響され、収入が減りました。</li> <li>・ 仕事がなくなって、収入もなくなりました。</li> <li>・ アルバイトの店が閉店しました。</li> <li>・ 学校に行けなくなったこと、毎日マスクを掛けて外出することです。</li> <li>・ 学校に行けなくて、仕事も影響されて、アルバイトの店が閉店しました。</li> <li>・ アルバイトの店が1か月休業し、その1か月はずっと家で休みました。</li> <li>・ 一番の影響は、帰国できず家族と会えなくなりました。他の影響はほぼありません。いつも通りにアルバイトをしています。</li> </ul>
心理的影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分が感染することをいつも心配しています。</li> <li>・ 毎日家にいると、うつになりそうです。毎日家で日本語を勉強したり、テレビをみたり、ゲームをやったり、外との接触はほぼありません。</li> <li>・ 最初の時は、毎日不安で堪らなくて、時間が経つと段々慣れてきました。</li> <li>・ ずっと一人で家にいるので寂しかったです。</li> </ul>
良い影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家でゆっくりすることができ、体調や健康を気遣うようになりました。</li> <li>・ 時間が多くなり、やりたいことをたくさんやれるようになりました。</li> <li>・ コロナの影響で気づいたことは、新興産業の抵抗力が強く、伝統的な産業はたくさん倒産しました。これから就職する時、必ず新興産業を選ぶようにしなければなりません。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"><li>・ 良い影響は、自分で学習計画を立てて、たくさんの過去問題をやりました。</li><li>・ 良い影響は、家にいる時間が増え、英語を勉強したり、本を読んだり、自分を高めるいいチャンスだと思っています。</li><li>・ いい影響は、オンラインの授業を受けているので、学校に行かなくても大丈夫です。家から学校までかなり遠いから、時間とお金を節約できました。</li><li>・ 私にとって大きいな影響がありません。幸いなのは、親からお金をもらっているから、アルバイトをしなくても大丈夫です。経済的に問題がありません。大自然の前では、人間は小さい存在です。自然を大切にしなければならぬと思うようになりました。</li><li>・ プラスの影響は、医学知識に関心があり、新型コロナやインフルエンザなどの予防措置も学びました。マスクをつけることと手洗うことを習慣となり、他の病気の予防にも効果があります。</li><li>・ 良い面は、ようやく家でのんびりすることができ、お金の節約、旅費の節約、時間の節約などができました。</li><li>・ 手料理ができるようになったこと、自分と家族の健康管理を重視するようになったこと、生きているだけで幸せと思うようになりました。</li><li>・ 外出せずに家でのんびりでき、やりたいことを楽しむことができました。</li><li>・ 自分に対して新しい発見がたくさんあり、こんなにたくさんの手料理が作れること、こんなに長く一人で在宅できこと、こんなに長く他人と会話しなくてもいいこと、学校のオンライン授業も段々好きになりました。</li></ul>
--

## 第4章 考察

本研究は、日本の教育機関に通学中の30名の中国人留学生を対象に、彼らの基本属性・日本留学の動機・卒業後の日本での滞在理由と帰国理由・彼らが抱えている生活課題とその対処法・来日前と来日後の比較、および自己認識を明らかにした。ここでは、ケイパビリティ・アプローチの視点から考察した上で、生活支援の必要性について論じる。

### 1. 中国人留学生の生活課題に関する考察

第3章に示したように、本研究の対象者のインタビューデータに対する質的分析の結果は、「日常生活の課題」「学校生活の課題」「アルバイトの課題」「人間関係の課題」「言語の課題」「心理面の課題」「経済面の課題」「文化面の課題」および「偏見や差別を受けた経験の課題」など多くの局面にわたっていることが示唆された。

これらの生活全般の解決すべき課題をマクロな視点、メゾな視点、ミクロな視点に分類し整理してみる。中国人留学生の生活課題をまずマクロな視点で最初に考え、それを踏まえてメゾな視点とミクロな視点で考えていくことにする。それら課題をどうしよう、どうやって解決しよう、どのような支援を必要としているのだろうか。最後にケイパビリティ・アプローチの視点から考察を行う。

マクロな視点とは、より大きな世界を考える視点である。本研究における中国人留学生の生活課題は、マクロな視点で捉えると、環境的・物理的な要因による「日常生活の課題」「経済面の課題」「文化面の課題」「偏見や差別を受けた経験の課題」である。

「日常生活の課題」については、中国にいる時は、一人っ子の家庭が多いため、普段の生活では勉強だけやれば良いという暮らしをしていた。日本に来てから、料理が作れない、掃除や部屋の片付けができない、ゴミの出し方が難しくてわからない。数少ない留学生にとっては、勉強とアルバイトの両立だけではなく、勉強と家事だけで精一杯でかなり大変みたいなのである。

「経済面の課題」については、現在、9割以上の留学生が私費留学生であり、生活費や学費は親の仕送りやアルバイトの収入で賄っている。留学生にとって奨学金や授業料免除の有無は日本での生活の保障に関わる重要な要素となっている。応募できる奨学金は限定されており、授業料免除も制限があるため、多くの留学生が親の仕送りやアルバイトを生活基盤としている。

「文化面の課題」については、新しい環境に適応していく上での物理的な困難から人との関わりへの希求やホームシックに伴い、望む留学生活と現実の悩みとのギャップで苦しんでいることもある。異文化適応は、ある人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に慣れていく過程（高井，1989）である。同時に、自己の内面的環境との戦いで自己挑戦と自己変革の過程（江淵，1991）でもある。本研究の結果からは、日常生活などの外的環境への適応から、学校の先生とクラスメイトや、アルバイト先の上司と同僚との関わりなどの文化的環境への適応まで、また自己の内面的環境との戦いで自己挑戦や変革への移行が示された。この結果は、先行研究を支持している。

「偏見や差別を受けた経験の課題」について、人種差別を乗り越えようと努めながら苦しむアメリカと同じ、日本でも人種・国籍の違いから生まれる差別や偏見は、今も残っている。日本政府は、外国人と共生する社会を築くためには、「人種差別撤廃条約」と「地域に

における多文化共生推進プラン」などを策定している。しかし、総務省(2017)の調査によると、「外国人であることを理由に入居を断れた」経験のある人は39.3%、「外国人であることを理由に就職を断れた」を挙げた人が25%、「同じ仕事をしているのに、賃金が日本人より低かった」が19.6%、「外国人であることを理由に、昇進できないという不利益を受けた」が17.1%、「勤務時間や休暇日数などの労働条件が日本人より悪かった」が12.8%となっている。本研究の結果からは、中国人留学生に対する差別的表現について、①買い物をする時、隣の日本人から「やっぱり外国人は太っているねと言われた。②東京に来たばかりの時に、好きな物件を借りようとしたら、不動産から「残念ながら、この物件は外国人に貸さないよ」と言われた。③友達とデパートで買い物する時、中国語で会話をしていた。後ろのお爺さんが「中国人が大嫌い、早く中国へ帰れ」と言ってすぐ逃げた。④先輩から何かをしなさいと言われ、聞き取れなくてやらなかった。すると、その先輩から「あなたはここで何をしているの？時間を無駄にしているじゃないの？外国人だから私の言ったことを聞き取れないなの？」と言われた。⑤以前の学校にある先生が私たち中国人留学生に対して、「私は日本人のために生きています。日本人のために教えています。外国人のために生きていてはいません。外国人のために教えていてはいません」といつも言っていた、などの偏見や差別を受けた経験があった。この結果は、先行研究と同じような傾向が見られた。

メゾな視点とは、マクロとミクロを繋ぐような視点である。本研究における中国人留学生の生活課題は、メゾな視点で捉えると、情報を提供する学校やアルバイト先での「学校生活の課題」と「アルバイトの課題」、および「人間関係の課題」に関連するのである。「学校生活の課題」と「アルバイトの課題」については、言語問題によるものが多く、次のミクロな視点で捉える「言語問題」にて一緒に述べるので、ここでは省略することになる。

「人間関係の課題」については、中国人留学生が日本での留学生活を送る上で経験する他者との関係の難しさや悩み事は、日本人との人間関係だけでなく、中国人同士との関係もあり、離れた親との家族関係も悩みの種の一つであった(安, 2016)と指摘された。つまり、母国に住んでいる時に存在していた家族問題や親子問題、および友人関係の悩みを抱えていることも存在している。本研究の結果からは、①ルームシェアの中国人の友達と大喧嘩した。彼女は私を裏切られた。勝手に彼氏に私の悪口を言った。こんな酷いことをする人は絶対に許さない。②母が中国にいるのに、毎日電話で「遊ばないで、ちゃんと勉強しなさい、しっかりご飯を食べて」など色々言われている。今でも私を子供扱いして本当に腹が立つ、しかもうるさくて堪らない。これから母の電話を出ないようにしようかなと思っている。③何年間も働いているアルバイト先の同僚と、今でも全くプライベートの話しがしない。彼女のことが大好きで、すごく良い友達になりたいのに、なかなかなくて、もう諦めた。日本人と友達になることが本当に難しいね。この結果は、先行研究と同じような結果を得た。

一方、多くの対象者から「日本社会はあまり変化しない」「日本人は融通が効かない」と語られた。どうして中国人は「変化」や「融通」がこんなに拘るか。中国で非常に有名な「易経」という本は、最初は「易経」ではなく「変経」と呼ばれていたという。それは変化を研究していたからだ。この本によると、世界に陰があれば陽があり、変化があれば不変があり、これらは同時に存在し、分けられない。そして、変化の中には不変が含まれ、不変の中には変化が含まれる。中国で「不変をもって万変に應ずる」という言葉がある。変化しない原則で変化する現象に対応しなければならないという意味である。多くの

中国人はこの言葉をあまり好きではない。何故なら、ある人がいつも変わり原則がないと、人から嫌われる。ある人が原則を死守すれば、融通がきかず、皆はその人を恐れる。だから中国人は融通性に拘り、「変わらない立場に立って変わってこそ、乱れない」と思っている。中国人は、すべての変化は、合理的であるかどうかに見なければならぬ。合理的は評価の基準であり、合理的であれば、みんなは同意する。不合理であれば、皆は同意しない。だからこそ、中国人はいつも変化・融通をこだわるのではないかと考えられる。

ミクロな視点とは、より小さな世界を考える視点である。本研究における中国人留学生の生活課題は、ミクロな視点で捉えると、「言語の課題」と「心理面の課題」がある。授業で先生が言っている日本語が聞き取れないと、学習に集中できなくなったり、授業に興味を無くなったり、勉強しなくなったりになる中国人留学生がいる。アルバイト先で上司や同僚の話が上手く聞き取れないと、上司に怒られたり、同僚にいじめられたり、アルバイトが苦痛になる中国人留学生もいる。自信や自尊心を喪失になり、ストレスが溜まってしまい、不安で堪らない、やる気がなくなり、気持ちが段々落ち込みうつ傾向になった人もいる。

こうした中国人留学生の生活課題は、来日後に文化移行が原因で生じる文化的ストレスや自我同一性の混乱など青年期特有の問題に伴っていることが見られた。さらに、大学の宿題やレポート、修士論文や博士論文執筆など留学長期化によるストレス、勉強・家事・アルバイトなどライフ・サイクル上の問題などの危険因子が複合的に関わって、深刻な実態に陥る可能性も推測される。

以上のように、中国人留学生の生活全般における解決すべき課題の実態を正確に把握することができた。彼らが質の高い自分らしい生活の維持を目指すために、それらの生活課題を軽減する必要がある。そのため、本研究が数ある理論の中でケイパビリティ・アプローチを取り上げ、中国人留学の生活課題を多角的に評価することが考えられているからである。

## 2. ケイパビリティ・アプローチの視点から見た中国人留学生の生活課題

ケイパビリティ・アプローチでは、生活の良さは、その人が何をできるか、どんな状態にいるのか、つまり、持っている選択肢の豊かさによって測ろうとする。この意味で、選択肢の幅が広がることで様々な生き方を選択する自由が増すことができる。豊かな生活は、単に物的に満たされていることだけではなく、精神的なものも満たされていることを意味している。逆に、生活課題は、その選択肢の幅が制約を受けていることを意味する。

ケイパビリティ・アプローチの理論によれば、所得によって精神的・文化的な側面を論じることはできない。このことは、これらの側面が重要となる中国人留学生の生活上の困難や悩み事を考える上で非常に重要になる。所得や財によって生活上の困難を測ろうとしても同様の問題に直面することになる。生活課題で幸福で論じようとする複雑な問題を生じる。もし様々な生活困難を抱えている中国人留学生を不幸だとみなすと、不幸であれば例え経済的に豊かな人であっても援助を与えるべきだという結論になる。逆に、さまざまな日本留生活生活困難の中で暮らしているが、その状況に適応している一部の中国人留学生は、その状況を不幸であるとは言わないだろう。すなわち、その一部の生活困難の中で適応している中国人留学生の幸福は、所得や財によって決まらない結果に導かれる。



上述のように、ケイパビリティ・アプローチを用いた理由は、中国人留学生の生活課題を正しく捉えるためである。さまざまな生活困難を抱えている中国人留学生の生活の質をいかに保障するかが大きな問題となる。そうしたなか、生活課題を軽減する対策を講ずる際に、新たな選択肢として生活支援（例えば、学費や生活費を支援する・奨学金を提供する・授業料を免除する・寮を提供するなど）をいかに拡大するかが議論になる。同時に、さまざまな生活困難を抱えている学生に対しては、その学歴や進学および就職をいかに保障していくかという課題について考える必要になる。しかし、ケイパビリティ・アプローチの視点から見れば、生活支援の選択肢を増やすことはあくまで個人の自由を拡大させるための「手段」でしかなく、同時に学歴取得（進学・就職）という「達成」もまた、中国人留学生の生活の質を評価する上で必要条件ではあっても十分条件ではない、と考えられる。

このように、中国人留学生の生活課題にケイパビリティ・アプローチの視点を導入することで、生活困難を抱えている学生がその負担を軽減するために、「生活援助に介入するための根拠」を多角的に考察することができたのではないだろうかと思う。同時に、ケイパビリティ・アプローチは、個人の水準である「ケイパビリティ」をいかにある程度の水準として実現させるか、言い換えれば、ケイパビリティの「個人の実質的自由」と「能力の豊かさ」の観点から検討していくための手がかりになりうる、と考えられる。

本研究の課題は、中国人留学生の生活支援が生活課題にどのような効果を持つかを論じるための基礎となる「生活課題」概念について整理し、それを若干の生活支援の経験に照らして「生活課題」概念の差が生活支援のあり方にどのような違いをもたらすかを提示し、ケイパビリティ・アプローチの有効性を検討することである。本研究では、対象とするのは、いわゆる「発展途上国の中国」から日本に住むマイノリティグループである中国人留学生に関わる生活支援である。先進国で生活しているマイノリティグループは、一般に「貧困者」や「要支援者」であると見做される一方、生活の質を求める対象者でもあり、生活支援の対象となる。本研究で取り上げる事例は、日本の教育機関に通っている中国人留学生からのインタビューデータに基づいている。本研究の着目点は、望ましい日本留学生生活のためにどのような生活課題概念を用いるべきかを論じる点にあり、これらの生活課題の事例について詳しい記述は第2章と第3章の分析結果にご参考にしてください。

生活課題を論じる時、その論じ方には大きく二つのタイプに分かれるように思われる。一つは、貧困や要支援な人たちを見下ろし、助けてやらなければならない人たちとみなすタイプである。もう一つは、貧困や要支援な人たちと同じ視線で、対等な立場で関わろうとする人たちである。見下ろすという態度は先進国の人々の意識の裏返しである。日本人は勤勉で礼儀正しくて他人に迷惑をかけないから「先進国」になったのに対して、「発展途上国」の中国の人たちは自己中心でわがまま、特にマナーが悪くてルールを守らない、だから「発展途上国」はいつまで立っても発展しないのだというような議論は、彼らはマナーが悪くてルールを守らない歴史的背景や原因を知らない。「発展途上国」は貧しいと信じ込んでおり、その理由は所得が低いからである。

中国の李克強首相 2020年5月28日の記者会見で「中国では6億人の月収が千元（約17000円）前後である」と発言し、中国などで話題となっている。6億人の月収17000円は平均的な日本人の10%以下の所得しかないの、どんな生活をしているかはわからない。所得が低いという問題にするなら、日本人の月収17000円の所得での生活にどんな問題が起こっているのかをまず考えるべきなのである。収入分配研究院の李実所長によれ

ば、「月収千元以下の6億人」には老人や子供も含まれ、最低賃金の対象となるような賃金労働者はその4割に満たない（東洋経済，2020）。

一方、月収17000円の数字だけを見て貧しいと判断する人たちもいるかもしれない。実際の生活の中身はどうなっているのか、ただ所得に換算すると貧しいというレッテルを貼られてしまい、貧しい人たちは支援されるべき対象になり、それまでの生活は破壊されたと考える。極貧と判断されると極端であり、現実はその間のどこかにある。そうなると、所得統計に頼るのでもなく、イメージに頼るのでもなく、いったいどれくらいの月収があれば生活が豊かになれるか、さまざまな立場に立って考えてみるという態度は正しいものである。この理論的問題を解決されたのは、ケイパビリティ・アプローチである。

ケイパビリティ・アプローチは、個々人の暮らしの豊かさによって行うべきであるという人間中心のアプローチである。国連開発計画（UNDP）の「人間開発報告」に示された人間開発指標は、「開発」の評価をGDPのみによって行うのではなく、健康や教育といった非経済的側面まで考慮して行うべきものである（東郷，2006）と述べている。センが強調する「開発とは、人々が享受するさまざまな本質的自由を増大させるプロセスである。また、開発の目的は、不自由の主要な原因を取り除くことだ」（Sen, 1999）とみることができる。しかし、開発をGDPや所得によって捉えられるという信念は強かった。そのことが実際に開発を歪んだものにしてきた。センがいうように、多元的な現象は多元的に捉えるべきであり、曖昧なものは曖昧なままに捉えるべきなのである。

このような態度は、所得以外にもっと大切なものがあるという考え方があり。つまり、人々の「豊かな生き方」を重視すべきである。人々の「豊かな生き方」に着目するなら、豊かさとは、「本人が価値あるものと考える生き方と選択する自由があること」である。この立場からすれば「中国人留学生の生活課題は、彼らが価値あるものと考える生き方を選択する自由を奪われていること」である。この考え方がケイパビリティ・アプローチの視点であり、同時に「人間開発」の視点であり、さらに「人間の安全保障」の考え方である。この立場から出てくる生活支援の対策は、中国人留学生から「価値あるものと考える生き方を選択する自由」を奪っている要因を取り除くことであり、生活課題の分析はそのような要因を明らかにすることである。

同じように、「生活支援」を強調しながら、「生活課題」をどう定義するかによってその対策は全く異なってくる。生活課題をどう定義するかの違いは、それぞれの立場で何を焦点変数とするかの違いである。センの『不平等の再検討』によれば、「平等は、ある人の特定の側面（例えば、所得・富・幸福・自由・機会・権利・ニーズの充足など）を他の人の同じ側面と比較することによって判断することができる。このように不平等の判断はそのような比較を行う変数（所得・富・幸福など）の選択に依存している。このような変数のことを、異なった人々を比較する際に分析の焦点となる変数であるという意味で『焦点変数』と呼ぶことにする」（Sen, 1992）と述べている。

例えば、所得によって中国人留学生の経済問題を測ろうとすると所得を焦点変数と見なしており、所得が不足することこそが貧困であると考え。経済問題を自由の喪失と捉えれば自由を焦点変数と見なしており、自由が失われることこそが貧困であると考え。人々の多様な生き方を選択する自由を重視する人たちは自由を焦点変数と見なしており、その自由が欠如することこそが貧困であると考え。このように、生活課題をどう論じるかは、何を焦点変数と見做しているかに依存している。すなわち、何を焦点変数と見なす

かは中国人留学生の生活支援や生活課題を論じる上で決定的に重要である。以下、焦点変数として、所得・資源・効用・ケイパビリティの順に論じる。

### 3. 所得による中国人留学生の生活支援の捉え方

生活課題の定義として、一般的にクライアントの生活全般における解決すべき課題を抽出したもの、あるいはニーズのことを指す。この場合、最低限のニーズを得ていない人たちは要支援の対象となる。生活支援は、利用者の意思を尊重し、その生活を支えるのが生活支援である。その作業は、必要最低限のニーズによって求められる。最低限のニーズは国によって推計されており、国によって違ってくる。経済発展が進めば物質的な生活水準は上昇し、その平均的な水準を満たすための所得水準も高くなり、それだけ最低限のニーズの水準は高く設定される。また経済発展の進んだ国ほど物価水準は高くなる傾向があり、その分、最低限のニーズの水準も高くなる。先進国の生活に慣れてしまっている人にとっては、発展途上国の暮らしは極めて貧しく、その生活環境は劣悪であると思うかもしれない。このような見方で「生活課題」を探し出し、それを「生活支援」しようとしている。

さらに言えば、必要最低限のニーズと言っても、どのような職業についているかによって違ってくる。年齢性別や健康状態、性格の特徴によっても違ってくる。文化によっても、社会状況によっても、周りの物理的環境によっても違う。しかし、そのような個人あるいは地域の多様性を反映するような最低限のニーズの水準を設定することは容易ではないし、そのコストの算定も現実的でもない。逆に言えば、必要最低限のニーズ以下でも豊かな暮らしをしている人もいれば、必要最低限のニーズ以上があっても苦しい生活を強いられている人もいるだろう。

生まれ育てが異なり、住む環境が異なり、文化も異なる中国人留学生に日本人と同じ必要最低限のニーズを当てはめることは難しいことである。このような環境や文化の違いは、ある程度は解消できるかもしれないが、それは新たな問題を引き起こす。例えば、中国人留学生の必要最低限のニーズは所得に表せない「豊かさ」を反映して低めに設定されることになると、このことは、経済的に不利な立場に置かれる中国人留学生の必要最低限のニーズは過小評価され、生活課題はそれほど深刻ではないと見なされ、その結果、生活支援対策のための予算は削られるかもしれない。その結果は、日本人と外国人の間の格差はますます広がっていくことになるだろう。自給自足的なイメージで中国人留学生の生活を眺めることは、彼らが抱える本当の問題を見落とすことになるだろう。必要最低限のニーズをどちらの方向に修正したとしても、中国人留学生にとっては都合の悪いことが起こる。だから、一元的アプローチでは無駄なのである。

上述のように、所得のような単純な指標で表現する数量的な手段を欠いている。やるべきことは、中国人留学生の暮らしがどういう点で悪化しているのかを記述することである。それを機能として理論化し、どの機能が彼らの暮らしにとって不可欠であるかを選択し、それを改善していくことが妥当な生活支援対策となる。これこそがケイパビリティ・アプローチの意義なのである。

#### 4. 資源による中国人留学生の生活支援の捉え方

何を持っているかによって「豊かさ」を測り、何を持っていないかによって「要支援」を測ろうとするアプローチもある。後者の場合、ある社会が持つべき財を設定し、それを持っていないければ「要支援」とみなす。例えば、中国人留学生に住宅、家具、スマートフォン、ノートパソコン、教科書などを必需品として設定することが考えられる。しかし、何を必需品とするかは恣意的であり、その国で一般的に多くの人が持つべき財と考えられれば、必需品のリストに加えられる。しかし、いったんそのリストに加えられると、全ての人がその財を購入することが生活支援対策となり、それは特定の産業と結びつく結果になる。例えば、教科書があっても、日本語が分からなければ意味がないのと同じである。したがって、生活支援の基準は、財にあるのではなく、それをを用いて何ができるのか、できないのかで判断すべきなのである。

このように、どのような財が必要かは環境によって違い、文化によって違い、価値観によっても違う。スマートフォンがなければ暮らしていけないような社会では、スマートフォンは必需品となるのに対し、ネットが繋がらない社会ではスマートフォンを持っていても必需品ではない。このような多様性を考えると、財によって「要支援」を測ろうとすることも容易なことではない。したがって、財によるアプローチは多元的である。多元的アプローチで生活支援を定義するやり方は、最低限持つべき財の集合として表される。これらの財はお金に換算され、資産やそこから生まれる所得として計算し直せば、所得による定義と同じ問題を引き起こすことになる。

#### 5. 効用による中国人留学生の生活支援の捉え方

所得によって生活支援を測ろうとするアプローチを批判しようとする、生活支援は心の問題であるという反応が返ってくることが多い。しかし、ケイパビリティ・アプローチが目指しているのは心の支援ではない。伝統的な厚生経済学において、幸せであるかどうかを貧困や豊かさの基準と見做していることができる。厚生経済学では、幸福を効用と表現する。厚生経済学の基本哲学は功利主義であり、マイクロモデルでは人は自分自身の効用を最大化するように行動すると仮定している。現代の厚生経済学において特殊なのは、人々の効用は財やサービスの消費のみによって決まるという過程にある。財やサービスの消費量が多ければ多いほど、人の効用は高まり、幸せになれると考える。どれだけ消費したとしても限界効用はプラスであり、満足するということを知らない。消費できる財やサービスはどれだけ所得を得ているかによって決まり、結局、人々の効用はどれだけ所得を得ているかによって決まる。

つまり、効用は所得のみによって決まるのではないとのことである。例えば、お金に困っていない中国人留学生は、本人が幸せだと感じなければ要支援者であると見なされる。逆に、さまざまな生活困難や悩み事を抱えていても、本人が幸せであれば、要支援者であるとは見做されず、生活支援は受けられなくなる。したがって、効用は重要であるにも関わらず、社会が支援する対象かどうかを判断する基準としては不適當である。

## 6. ケイパビリティによる中国人留学生の生活支援の捉え方

ケイパビリティ・アプローチは、人々の暮らしの良さは、資源アプローチと効用アプローチの間であって「何ができるか」という選択肢の幅によって捉えられている。人は与えられた社会経済的条件下で何ができるかというさまざまな選択肢の組み合わせを持っている。つまり、人が何かできること、何になれることの可能性として表されることになり、これがケイパビリティである。例えば、ある中国人留学生は、持っているお金を全て自分のために消費してしまうこともできるし、将来のために貯金することもできるし、あるいは、恋人のために使うこともできる。このような選択肢の幅は広いほど選択の自由は広がっていく。ケイパビリティ・アプローチが自由と密接に結びついているのはこのためである。

センの「自由としての開発」(Sen, 1999)というのは、開発とは人々の価値ある選択肢の幅が増えることだからである。しかし、単に選択肢の数が増えることを開発ではない。どこのレストランを選ぶかというような選択肢がどれだけ増えたとしても、我々の生活は豊かにならない。むしろ、選択肢が少ない方が、選択のために時間を浪費せずに済むということもある。大事なのは、生きていく上で重要な選択肢が増えることである。その重要な選択肢を欠いていることこそがケイパビリティの欠如であると見做される。中国人留学生の「偏見や差別の問題」を例にすると、彼らが差別によって社会的活動から排除されていて、それが彼らにとって重要な機能を欠いていると判断すれば、それは支援すべきとなる。

センによれば、機能とは、健康であること、病気になっていないこと、必要な教育を受けていること、これらはセンが基礎的機能と呼ばれている。基礎的機能とは、どのような状態にありたいのか、どのような行動をとりたいのか、とされている。ケイパビリティ・アプローチでは、人々の現実の暮らしの良さは達成された機能によって測られる。この意味で人のケイパビリティは、人がどんな生活をするかについての自由に相当するものである。以下、ケイパビリティ・アプローチの視点から中国人留学生の自由を論じてみる。

## 7. ケイパビリティ・アプローチの視点から見た中国人留学生の自由

ケイパビリティアプローチの基本概念を踏まえて、中国人留学生の自由について検討してみる。センは、ケイパビリティの本質を評価する際、「選択の自由」という重要性を特に強調している。ケイパビリティは自由を広げる過程である。ここでいう自由とは、実質的な自由、つまり人々が大切にすることの実行可能性、及び自由に生活を享受することである。この点において、中国人留学生の来日留学の目的を分析してみると、一部の中国人留学生は日本の文化や漫画が好きだから来日を選んだのは「選択の自由」である。一方、欧米に留学しようとしたが行けなかったり、両親の意見に従って来日留学したりする中国人留学生もいる、これらの場合は選択の自由性の欠如であろう。また、中国ではほとんどの子供が学校の先生や親の指示に従い、自分で選択できないことも選択の自由の欠如であろう。さらに、中国を離れて日本に来てから、自分はどのような生活を選択し、どこに住む、どんな学校に進学し、どんな専門科目を選び、いつ勉強する、週末はどのように過ごすなどのことは、自分で決めることは選択の自由度を拡大することに相当すると考える。

センは、人のケイパビリティは、その人の個人的な自由の重要な部分を占める。自由は、人々のケイパビリティを直接向上させる (Sen, 1999)。ケイパビリティは、人が行うことのできる様々な機能の組合せであり、どのような生活を選択できるのかという個人の自由である (後藤, 2017)。本研究の調査結果から、中国人留学生は「言葉の不自由」「生活の不自由」「生き方の不自由」「対人関係の不自由」を抱えていることが明らかになった。センは「開発の目的は、不自由の主要な原因取り除くことである」 (Sen, 1999) と述べている。したがって、これらの不自由を取り除くことで、彼らの自由度を拡大することで、同時にケイパビリティも向上させることができると考えられる。

また、センは、「経済的不自由は社会的不自由を生む。社会的不自由や政治的不自由が経済的不自由を生むのと全く同じである」 (Sen, 1999) と言っている。つまり、中国人留学生の経済的問題は、彼らの社会的不自由を生むことになり、同時に身分の制限や就職の制限としての社会的不自由は彼らの経済的問題を生んでしまうことになる。

## 8. ケイパビリティ・アプローチの視点から見た中国人留学生の資源

ケイパビリティアプローチは他のアプローチと比べると、大きく異なるのは人間の多様性に重点を置いていることである。人間の多様性は、「人間は様々な面でお互いに異なった存在であり、外的な特徴や環境の面で異なっている。環境は人々の健康や福祉に大きな影響を与える。このような自然的・社会的環境や外的特徴の差に加えて、個人的な特徴 (例えば、年齢・性別・身体的・知的能力など) の面でもお互いに異なっている」 (Sen, 1992) と述べている。

人が保有している資源や基本財は、その人がそれをもって何かをしたり何かになったりする自由を実際にどのくらい享受しているのかについての不完全な指標に過ぎない。個人的・社会的特性が人によって大きく異なっているということは、資源や基本材から成果への変換についても大きな個人間の差異が存在する。この理由によって、資源や基本財から「成果を達成するための自由」への変換についても同様である (Sen, 1992) と述べている。つまり、所得や財などの資源をケイパビリティに変換する能力が人によって違う可能性がある。

資源には、所得、資産、時間など個人に属するものだけでなく、公共的な財・サービス、人間関係も含まれる (山本, 2017)。しかし、資源は、社会的条件や環境によって変わっていく。例えば、中国人留学生の来日前の資源は、親・親の財産と所得・親の人間関係・親戚・友達・学校・学校の先生などがあげられる。来日後の資源は、学校・学校の先生・日本で知り合った友達・アルバイト先の同僚・日本の公的機関やサービスなどと変わっていくことになる。

資源利用能力とは、生産・消費といった一般的な能力だけでなく、その人の価値観や特性も含む。したがって、中国人留学生は、どのように中国の資源と日本の資源を自分のケイパビリティに変換するか、それは彼らがそれぞれの変換する能力によって違う可能性がある。

## 9. 中国人留学生の変化と成長する可能性

すべての人の一生は継続性があり、その成長も一生涯に続くことができる。年を重ねるごとに新しい経験を積むことができ、それにより人の変化の可能性には限りがない。すなわち、人は一生変化し、成長する可能性をもっている。

成長とは、技術的な成長と精神的な成長で分けて捉えることができる。技術においては、物事をこなす巧拙が問題になることである。技術的な成長の大部分は、「できないことができるようになる」「もっと上手くできるようになる」という技術の習得にある。それに対し、精神的成長は、「できるようになりたいことが上手くできない」「あることに我慢したいけど我慢できない」といった状態の中で育まれるものであり、忍耐力や持続力がつくことは精神的な成長の典型といえよう。

また、困難を乗り越えることで、自信を得たり、勇気を持つようになり、やりがいを感じたり、そうした内的変化はこの種類の成長である。しかし、人の次の成長ステージに上がっていくためには、内からの変化が必要である。真の成長は、内的変革にあり、これが成されてこそ次の技術的成長も起こる。そしてそこからさらに精神的な成長があり、内的変化が起こる。その内的変化は、ある時点から、成長というよりも成熟という名の変化にもなっていくことができる。

上述のように、人の成長とは、限界の幅が広がって他人に認められること、出来なかったことが自然とできるようになること、課題を解決する力が大きくなることなどが挙げられる。中国人留学生にとっての技術的な成長は、「日本語が話せるようになる」「日本語の文章をもっと上手く書けるようになる」「日本での生活課題を自分の力で解決すること」などである。彼らの精神的成長は、「日本の習慣や文化を適応できるようになること」「先生に認められて、自信を持つようになること」「他人に迷惑をかけないように我慢すること」などである。

## 第5章 結論

### 1. 五つの結論

本事例研究の調査対象者を通して描かれた現在の中国人留学生たちの姿は、以下のような結論に達した。

一つは、これらの中国人留学生たちは、125年にもわたって日本に留学している旧世代の中国人留学生と比べ、現在の中国人留学生たちは、多様な留学目的や生き方を持っており、より良い留學生活を求められている。こうした特質は、現在の中国人の若者の価値観を反映しており、来日後の変化過程には、すでに来日前よりも、むしろ中国人としての文化的価値や特性が顕著に現れていると考えられる。この結果は、調査内容の中国人留学生の日本留学の動機および卒業後の日本での滞在理由と帰国理由を表れている。

二つは、新しい環境の中でやっていく決意を持つことによって、彼らの日本留學生活に対して積極的な態度をとることができるようになる。一方、現在の状況への対処能力を身につけることによって、より良い感情を持つことができるように導かれると考えられる。例えば、日本語の熟達は、進学や就職を得る機会に影響を及ぼすことができる。異文化への理解は、彼らの精神保健や他の社会状況に影響を及ぼす主要因となっている。この結果は、調査内容の中国人留学生の生活課題とその対処法に表れる。

三つは、自由・平等・選択・機会・資源・権利の拡大は、彼らの生活困難や課題を改善し、生きたいと思える暮らしを選ぶ、彼らが追求する目的や価値の達成に繋げることができる。他方、社会的不利もまた、ケイパビリティの欠如から生じている。社会参加が制限されたり、あるいは、避けられたりすることによって、社会活動や地域活動も制約される可能性がある。このような社会との接触の在り方は、中国人留学生の生活にさまざまな影響を及ぼしている。この結果は、調査内容の来日前と来日後の自由・平等・選択・機会・資源・権利の比較に表れる。

四つは、自分の長所・目標・資源変化能力・精神と物資のバランス・幸福感・潜在能力・潜在能力を高める方法・来日後の変化・新型コロナウイルス感染症の影響についての自覚は、生活に対する満足度のレベルに影響を及ぼしている。この結果は、調査内容の中国人留学生の自己認識に表れる。

五つは、中国人留学生の生活全般における解決すべき課題の実態を正確に把握することができた。中国人留学生の生活課題と生活支援にケイパビリティ・アプローチの視点を導入することで、生活課題を正しく捉えることができ、生活支援に介入するための根拠も多角的に考察することができた。

### 2. 本研究の限界

本事例研究の限界は、以下の通りである。

#### (1) サンプルと選択に関する問題

本事例研究の調査対象者において、30名の中国人留学生のうち、14名が筆者の学校やアルバイト先での知り合い、11名は知り合いの紹介、5名はWeChatの留学生グループで協力を得た見知らない中国人留学生である。筆者の周りの知り合いは、真面目な人が多



く、知り合いが紹介してくれた友達も真面目な人が多いと思う。また、サンプル参加者タイプや能力、地理的領域、来日年数、学歴によりさまざま限りや偏りがある。そのため、中国人留学生全体の傾向を十分に反映していない可能性がある。

#### (2) 中国語から日本語への翻訳に関する問題

インタビュー調査において、中国語でのインタビューとなっている。データ分析では筆者により日本語に翻訳した。中国語のデータを日本語に訳す際において、筆者が微妙なニュアンスの違いを感じたことがあり、この欠点を補うべく、曖昧にやり過ぎず同じ内容に対して何度も翻訳を繰り返した。そのため、調査対象者の語りをそのまま訳すということが筆者にとっての大きな課題であると実感した。

#### (3) インタビュー時間に関する問題

調査対象者のインタビュー時間の長さがそれぞれで、長い人は191分、短い人は33分で終わってしまった。さらに、有効な時間内に信頼関係ができていない対象者の回答が表面化した傾向が見られた。これは、インタビュアーとしての筆者の未熟さのためであり、この点でのスキルの向上が必要であると痛感した。

### 3. 今後の課題

今後の課題としては、以下の通りである。

(1) 今までケイパビリティ・アプローチを取り上げ、中国人留学生に関する諸研究は、限られている。今後、本事例研究で提示された論点をめぐって理論と実証の双方の視点から議論を深めていく作業が期待される。

(2) 中国人留学生などの外国人の住まいや生活に対する相談を受け付け、必要な情報を提供・対応するほか、中国語ポータルサイトに生活支援に関する情報を掲載することが望ましい。

(3) 今後、適切な生活支援により、留学生が暮らしやすい地域づくりや、彼らが能力を發揮しながら活躍できる機会の提供などを通じ、地域に活力をもたらすとともに、留学生との長期的なネットワークを築いていけるよう引き続き取り組んで行くことと願っている。

### 4. 倫理的配慮

本研究は、調査対象者のプライベートなことを聴取するという極めて私的な情報を扱うものである。そのため、本研究では、調査対象者のプライバシーへの配慮、次の対応を行った。

#### (1) インタビュー調査ご協力をお願い（付録A・付録B）

調査を依頼する際、文書と口頭によって研究の目的、意義、研究結果公表の仕方、調査に参加することを拒否できること、参加中でも中断したい場合にはいつでも中断すること

ができることを口頭および文書で説明を行い、同意が得られた場合はオンラインインタビュー調査を行った。説明時は中国語を用いて、中国語で作成された調査協力書を用意した。

## (2) 事例研究成果の報告の際の匿名性の確保

本研究の調査対象者は中国人留学生であり、プライバシーが公開されることで、迷惑をかける可能性がある。研究成果の報告する際には、調査対象者の氏名をはじめとした具体的なバックグラウンド（名前・学校・居住地など）は公開せず、調査対象者が特定できないようにした。具体的には、年齢は20代や30代と記載し、結果や考察では誰の発言かの記載を省いた。また、インタビューを通じて提供した情報は研究者以外の第三者が触れないことを保証した。

## (3) データ収集時のスーパービジョン

研究者はデータ収集前と収集過程で、精神医学専門家の指導教授先崎章先生によるスーパービジョンを受け、かつ1名の日本人友人と2名の中国人友人による相談のもとで調査を行い、調査内容の的確な確保、調査対象者の意見尊重するように務めた。

## 5. 謝辞

博士論文の完成にあたって、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。

教育学博士中島恒雄先生に厚く御礼申し上げます。中島先生の指導なくては、博士論文の完成ができません。中島先生は、東京福祉大学の創立者であり、昔アメリカに留学し、フォーダム大学で修士号と博士号を取得され、ハーバード大学教育学大学院招聘学者として務められました。

2011年、大学の学部在籍時に、中島先生の面接を受け、東京福祉大学の「第31回アメリカ夏期短期研修」（Aコース2011年7月14日から8月7日まで）に参加することができました。当時、フォーダム大学とハーバード大学の寮に住むことができました。また、アメリカの福祉・医療・心理・教育の専門家や教授による講義を直接に受けることもできました。さらに、アメリカの福祉・病院・医療・教育施設などへの見学、アメリカの学生との交流、ニューヨークとボストンでの有名地などの観光など、かけがえのない体験をすることと一生も忘れられない思い出がいっぱいです。尚且つ、日本へ帰国後、アメリカ短期研修の奨学金までももらいました。アメリカ短期研修のおかげで、異文化への理解が深まり、価値観や視野が広がり、自信や度胸がつくようになりました。

博士論文の指導において、中島先生に第一回目の研究指導で言われたことは、「いろいろ考えずに、まず博士論文の完成に集中してください」と語ってくれました。シンプルかつ明確に私の一番大きいな問題点を指摘してくださいました。私は、神経質の性格のためディテールに拘りすぎてなかなか論文が進みませんでした。

第二回目の研究指導で言われたことは、「あなたの論文は、よく読んでみたら、感想文みたいに一般論しか書いていません。博士論文のレベルになっていない」と厳しく叱られました。同時に、事例研究を用いて解説すること、論文の構成や組み立て方、根拠のある結論を導き出す方法など論文の足りないところを分かりやすく教えていただきました。

第三回目の研究指導で言われたことは、「中国の社会問題を改善し、中国の社会福祉を高める福祉人材になってください」と激励されました。また、論文のいいところを褒めてくれました。さらに、論文の細いところまでも相談に乗ってくれました。

中島先生の指導には妥協せず、自分の意見や考え方を素直に伝え、お互いに納得できる一致点を探し、一生懸命に論文を書き直し続けました。「博士論文のレベルまでを追求し、より良い論文を目指すこと」を突き詰める作業を行うことを諦めず行うことを、中島先生の指導を通じて身についたことがたくさんありました。

医学博士先崎章先生にも心より深く感謝いたします。修士課程の時から先崎先生の授業を受け、精神医学やリハビリテーションおよび ICF と QOL などの知識を教えていただき、いつもさまざまな資料を提供してくれました。そして博士論文の初めから作成まで熱心かつ辛抱強くご指導いただきました。博士課程在籍中にずっと暖かく見守ってくれて、自分の先延ばし癖や怠け癖を克服に掛け替えのない役割となっております。

経済学博士伊東真理子先生にも謹んで感謝申し上げます。伊東先生は、「中国人留学生の留学状況の把握や捉え方、ケイパビリティ・アプローチへの着目や探求および関係性、結論に導かれた道筋の再検討、先行研究との比較、3 週間の間に 7 万字中国語データの日本語への翻訳力に対する褒め言葉など」の大切なご助言を賜りました。有益なご指摘と心温まる励ましをいただき、博士論文の遂行にあたり重要な役割を果たしています。

加えて、インタビュー調査に協力いただいた中国人留学生の皆様にも深謝いたします。

最後に、博士論文の完成にサポートとご協力してくださったすべての方々にお礼を申し上げます。皆様にとありがとうございました。

## 文献

1. 明石純一(2007) : 「日本の留学生政策をめぐる一考察—『10万人計画』から『新たな留学生政策』へ」『国際政治経済学研究』19号.
2. 青木保 (1988) : 『文化の否定性』, 中央公論社.
3. 青木正子 (2011) : 「留学とアイデンティティの形成: 中国人の日本留学を中心に」 慶應義塾大学学術情報リポジトリ, pp2-5.
4. 浅野慎一(1997): 『日本で学ぶアジア系外国人—研修生・留学生・就学生の生活と文化変容』, 大学教育出版, pp120-178.
5. 浅野弘毅 (2000) : 『精神医療論争史 我が国における「社会復帰」論争批判 メンタルヘルス・ライブラリー③』, 批判者, pp137-141.
6. Adler, P. S. (1972). Culture shock and the crosscultural learning experience. Readings in Intercultural Education, vol. 2. Pittsburgh: Intercultural Communication Network.
7. Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. Journal of Humanistic Psychology, pp13-23.
8. 天野正子 (1996) : 「生活者」とはだれか—自立的市民像の系譜, 中公新書, pp13-14.
9. 新井郁男 (1995) : 「日本人の異文化接触とアイデンティティ」, 異文化間教育, 9, pp4-17.
10. 安婷婷 (2016) : 「日本語学校に在籍する中国人留学生の段階的サポートニーズフォーカス・グループ・インタビューから—」, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 第56巻, pp110-119.
11. 猪飼周平(2014): 「ケアの生活モデル化とは」季刊家計経済研究, WINTER No. 101 pp13-19.
12. 池本幸生 (2007) : 「ケイパビリティから見た貧困削減のための観光開発」立命館大学人文科学研究所紀要 (89), pp113-148.
13. 石塚迅(2001:) 「言論の自由の位置づけをめぐる中国法学界の今日的議論」一橋論業, 第126巻, 第1号, pp54-66.
14. 石附実 (1989) : 『日本の対外教育-国際化と留学生教育』, 東倍堂, p108.
15. 石陶鈞 (1981) : 「六十年的我」, 「湖南歴史資料」, 第二輯.
16. 一般財団法人・自治体国際化協会・北京事務所 (2015) : 「中国の教育制度と留学事情」Clair Report No. 427 pp25-30.
17. いとう総研資格取得支援センター (2019) : 「見て覚える! 精神保健福祉士国試ナビ [専門科目] 2020」中央法規出版株式会社, pp217-218.
18. 伊藤武彦・井上孝代 (1998) : 「全国高等教育機関の留学生相談の実態調査第1報告 井上孝代 留学生の中途退学に関する異文化間心理学的研究」, 平成8年度・9年度科学研究費補助金 (基礎研究 C) 研究成果報告書, pp6-38.
19. 稲増龍夫 (1982) : 「直接接触の効果」辻村明・金圭煥・生田正輝編『日本と韓国の文化摩擦—日韓コミュニケーション・ギャップの研究』, 出光書店.
20. 稲村博 (1980) : 『日本人の海外不適應』. 日本放送出版社, pp15-32.

21. 井上明俊 (2011) : 「最近における国の政策形成と大学の戦略」『関西学院大学高等教育研究』創刊号, 関西学院大学高等教育推進センター, pp17-30.
22. 井上孝代(1996) : 「外国人留学生のアカルチュレーション態度と留學生活の満足度」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』22, pp209-221.
23. 井上孝代 (2001) : 「留学生の異文化間心理学 : 文化受容と援助の視点から」, 玉川大学出版部, 東京, pp7-12.
24. 異文化間教育学会 (1987) : 「異文化間教育文献目録 1 異文化間教育」1, pp127-145.
25. 異文化間教育学会 (1991) : 「異文化間教育文献目録 5 異文化間教育」5, pp153-165.
26. 異文化間教育学会 (1996) : 「異文化間教育文献目録 10 異文化間教育」10, pp182-204.
27. 今関忠馬(2020) : 「中国人留学生が語る 日本留学を選んだ理由=中国メディア」([https://www.excite.co.jp/news/article/Searchina\\_20200117088](https://www.excite.co.jp/news/article/Searchina_20200117088), 2021年10月20日アクセス)
28. 岩崎晋也 (1998) : 「社会福祉の人間観と潜在能力アプローチ」, 人文学報, No. 291, pp49-68.
29. 岩田正美・小林良二ら(2006) : 「社会福祉研究法・現実世界に迫る 14 レッスン」, 有斐閣アルマ.
30. 殷夢茜・青木紀久代(2017) : 「在日中国人留学生の異文化適応に関する質的研究」, お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 第 19 号, pp49-59.
31. 江暉 (2014) : 「現代中国人が抱く対日イメージの形成における情報源の役割」『情報学研究』No. 87, pp53-68.
32. 江淵一公 (1991) : 「在日留学生と異文化間教育」, 異文化間教育, 5, pp1-19.
33. Erikson, E.H. (1959). Identity and the life cycle. New York, NY: International Universities Press. (小此木啓吾 (編訳) 自我同一性, 誠信書房)
34. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (1992) : 『セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求』ナカニシヤ出版.
35. 遠藤誉(1994, 1995, 1996) : (研究代表者), 平成 6・7・8 年度文部省科学研究費補助金・国際学術研究・学術調査報告書, 『帰国中国人留学生の比較追跡調査による留学生教育の改善と展望に関わる研究』, pp91-98.
36. 王律(2001) : 「中国留学生送り出し政策の沿革と留学生ブームの推移」『中国研究月報』.
37. 大里浩秋・孫安石(2009) : 『留学生派遣から見た近代日中関係史』, 御茶の水書房.
38. 大塚豊(1991) : 「中国の留学生策と日中教育交流」『世界の留学—現状と課題』, 東信堂, pp36-59.
39. 岡益巳・深田博己著(1995) : 『中国人留学生と日本』, 白帝社, p3.
40. 岡益巳・深田博己・周玉慧(1996) : 「中国人私費留学生の留学目的及び適応」岡山大学経済学会雑誌, 27, pp25-49.
41. 岡村重夫 (1983) : 「社会福祉原論」, 全国社会福祉協議会, pp72-84.
42. 岡本祐子 (2002) : 『アイデンティティ生涯発達論の射程』, ミネルヴァ書房.

43. 大川弥生 (2006) : 「第 1 回 社会保障審議会統計分科会・生活機能分類専門委員会参考資料 3 「ICF (国際生活機能分類) - 『生きることの全体像』についての『共通言語』 - 」, 国立長寿医療センター, 研究所, pp1-11.
44. 小笠原春菜 (2008) : 「ケイパビリティ・アプローチの再検討-自由と必要」, 千葉大学人文社会科学研究所, No. 17, pp165-181.
45. 奥川義尚・梶川裕司 (1999) : 「中国人元留学生の帰国後の日本留学評価に関する一考察」, 京都外国語大学 [編], 『Cosmica』, Vol. 29.
46. 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武 (1999) : 『社会調査へのアプローチ 第 2 版 - 論理と方法 -』, ミネルヴァ書房, pp216-250.
47. Oberg, K. (1960). Cultural shock: Adjustment to new cultural environment. *Practical Anthropology*. July-August, 177-182.
48. 科学技術・学術審議会資源調査分科会 (2010) : 『我が国における自然資源の統合管理の在り方について』.
49. 加賀美常美代 (1994) : 「異文化接触における不満の決定因-中国人就学生の場合」, 『異文化間教育』 8 号, 異文化間教育学会編集, アカデミア出版会, p122.
50. 梶谷真司 (2004) : 「文化的アイデンティティとグローバリゼーション - 社会現象学的考察- 帝京国際文化」, 第 17 号, pp121-146.
51. 葛文綺 (1999) : 「留学生の異文化適応に関する研究- 来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に -」 名古屋大学教育学部紀要, 46, pp287-297.
52. 葛文綺 (2003) : 「中国人留学生の適応度に影響を与える個人属性について」. 学生相談研究, 23, pp274-283.
53. 河内智子 (2014) : 「変化・転機についての振り返りを通じた異文化適応教育の試み: 異文化適応の W 型曲線モデルと変化に対処するための 4S モデルを用いて」, 神奈川大学国際経営論集 (48), 2014-10, pp71-83.
54. 川本隆史 (2012) : 「ケイパビリティ」, 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編集委員・見田宗介編集顧問, 『現代社会学事典』 弘文堂, pp343-401.
55. Gitterman, A. & Germain, C. (2008) *The life model of social work practice*, Third ed., Columbia Univ. Press.
56. 木下康仁 (2007) : 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』. 弘文堂, pp7-216.
57. Kim, Y. Y. (1988). Preface. In Y. Y. Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Cross-cultural adaptation: Current approaches*. Sage.
58. 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008) : 「対人恐怖心性- 自己愛傾向 2 次元モデルにおける自我同一性の様相 -」, 心理臨床学研究, 26 (1) : pp97-103.
59. Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. (1963). An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*, 19(3), 33-47.
60. 窪田暁子 (1998) : 「精神障害者リハビリテーションにおける生活概念」, 精神障害とリハビリテーション, 2(1) : pp4-9.
61. 巖安生 (1991) : 『日本留学精神史』, 岩波書店, pp33-76.
62. 呉稚暉 (1902) : 「志士呉稚暉説留学東洋之便利」, 『選報』第三十二期.
63. 厚生労働省 (2021) : 『外国人雇用状況』の届出状況まとめ (令和 2 年 10 月末現在) (<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/000728546.pdf>, 2021 年 10 月 15 日アクセス)

セス)

64. 後藤玲子 (2007) : 「潜在能力アプローチにおける社会的選択問題-「すべての個人に基本的潜在能力を保障する」社会的評価は形成可能か?-」, 国立社会保障・人口問題研究所, 季刊・社会保障研究, Vol. 43 No. 1, pp15-26.
65. 後藤玲子 (2017) : 「潜在能力アプローチ-倫理と経済-」, 岩波書店, 東京, pp1-65.
66. 小沢一仁 (2002) : 「居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み」, 東京工芸大学工学部紀要 Vol. 25 No. 2, pp30-40.
67. 小林亮 (2010) : 「留学生の社会的アイデンティティと対日イメージとの関連について-ドイツ人留学生と中国人留学生の比較-」, 異文化間教育 32 号, pp64-79.
68. 駒形作次(1955):「資源と技術」『紙パ技協誌』第9巻,第7号,紙パルプ技術協会, pp266-266.
69. 児美川孝一郎 (2006) : 『若者とアイデンティティ』, 法政大学出版局, p3.
70. Collier, M. J. (2009). Negotiating intercommunity and community group identity positions: Summary discourses from two Northern Ireland intercommunity groups. *Negotiation and Conflict Management Research*, 2, 285-306.
71. Crocker, J.・Luhtanen, R. (1990). Collective Self-esteem and ingroup bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 60-67.
72. 戈木クレイグヒル滋子(2008):「実践グラウンデッド・セオリーアプローチ現象をとらえる」, 新曜社, pp2-8.
73. 酒井彩 (2015) : 中国人留学生の進路選択自己効力と進路探索行動との関連-長期的目標であるキャリアという視点から考える進路サポートに向けて」, 高等教育と学生支援, 第6号, pp19-25.
74. 迫こゆり (2015) : 「在ブラジル日本人の異文化適応過程に関する探索的検討」, 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 40, pp125-144.
75. 佐々木亘 (2020) : 「ロビズンのケイパビリティ・アプローチ-ケイパビリティ・アプローチの強みと弱み-」, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, No. 50, pp37-53.
76. 佐藤仁 (2011) : 『「持たざる国」の資源論』, 東京大学出版会.
77. 佐藤由利子 (2014) : 「外国人留学生支援」, 自治体国際化フォーラム, May pp1-9.
78. 佐藤由利子 (2018) : 「移民・難民政策と留学生政策——留学生政策の多義性の利点と課題」, 移民政策研究学会誌, 第10号, Vol. 10, 29-43.
79. 実藤恵秀 a (1960) : 『中国人日本留学史』, くろしお出版, pp138-140.
80. 実藤恵秀 b (1981) : 『中国人日本留学史談』, 第一書房, p15.
81. Germain, C. B. and A. Gitterman. (1980). *The Life Model of Social Work Practice: Advances in Theory & Practice*, New York: Columbia University Press.
82. 篠田英朗(2003):「平和構築と選挙支援」,財団法人日本国際問題研究所・平成14年度外務省委託研究報告書『紛争予防』, pp6-16.
83. 社会福祉養成講座編集委員会 (2015) : 『相談援助の理論と方法』, 中央法規出版, pp100-103.
84. 週間現代 (2018) : 「米中貿易戦争のウラで、いま中国で起きているヤバすぎる現実」 2018年8月28日 (<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/56400>, 2021年10月25日アクセス)

85. Schmitz, P. (1992). Immigrant mental and physical health. *Psychol. Dev. Soc. J*, 4, 117-131.
86. 邵春芬(2000):「在日中国人の日本観—留学生・就学生を事例として」,『東京女子大学比較文化研究所紀要』,第61巻,東京女子大学比較文化研究所刊,pp91-103.
87. J・S・ミル(1859):『自由論』(斉藤悦則訳(2012):光文社古典新訳文庫.)
88. 徐垂文・阿部康久(2012):「日本留学経験が就職活動とキャリア形成に与える効果に関する研究」『九州大学留学生センター紀要』20号,pp67-83.
89. 徐光興・蔭山英順(1994):「在日中国人留学生の適応に関する実体と問題」名古屋大学教育學部紀要,教育心理学科,41,pp39-47.
90. 徐光興(1996):「帰国留学生の対日イメージと態度に関する研究」,『名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科』,第43巻,pp90-93.
91. John Rawls. (1999). *A Theory of Justice: Revised Edition*. Cambridge, Mass: Harvard University Press. (川本隆史・福間聡・神島裕子訳(2010):『正義論改訂版』紀伊國屋書店).
92. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 a(2012):『改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー 精神保健福祉の理論と相談援助の展開』,へるす出版,pp13-182.
93. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 b(2012):『改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー 精神保健福祉援助実習指導・現場実習』,へるす出版,p17.
94. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 c(2012):『改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー 精神保健福祉援助の基盤 [基礎] [専門]』,へるす出版,pp150-152.
95. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 d(2012):『改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー 精神障害者の生活支援—制度・システムとサービス』,へるす出版,pp195-196.
96. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 e(2012):『改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー 精神保健学—精神保健の課題と支援』,へるす出版,p144.
97. 新日本有限責任監査法人(2015):『平成26年度産業経済研究委託事業(外国人留学生の就職及び定着状況に関する調査)報告書』,新日本有限責任監査法人.
98. 末弘美樹(2006):「日本人留学生のアイデンティティの変容」,大阪大学出版会.
99. 杉原弘恭・田口玄一郎(2019):「・アプローチ再考」,生活大学研究,Vol. 4, pp42-68.
100. 鈴木明(1990):『中国にも革命が起きる』,文藝春秋,pp112-255.
101. 鈴木一代(2008):「海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成」,ブレーン出版,p33.
102. 鈴木満(2012):「異国でこころを病んだとき—在外メンタルヘルスの現場から」,弘文堂,pp12-56.
103. 栖原暁(1999):「日本で学ぶ中国人留学生」.歴史教育者協議会,『歴史地理教育』599,p12.
104. Segal, L. (1997). *Sexualities in Woodward, K, (ed.). Identity and Difference*, London, Sage/Open University.
105. Sen, Amartya. (1982). *Poverty and Famines: An essay on entitlement and deprivation*. Clarendon Press. (黒崎卓・山崎幸治訳(2017):『貧困と飢饉』岩波書店,東京,pp15-24.)



106. Sen, Amartya. (1985). *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: North-Holland. (鈴木興太郎訳 (1988) : 『福祉の経済学-財と潜在能力-』. 岩波書店, 東京, pp13-99.)
107. Sen, Amartya. (1992). *Inequality Reexamined*, Oxford: Clarendon Press. (池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳 (1999) : 『不平等の再検討 -潜在能力と自由-』, 岩波書店, 東京, pp2-188.)
108. Sen, Amartya. (1993). *Capability and Well-Being, The Quality of Life*, Nussbaum, M. and Sen, A., eds., Clarendon Press. (竹友安彦監修・水谷めぐみ訳 (2006) : 『クオリティー・オブ・ライフ-豊かさの本質とは-』. 里文出版, 東京, pp23-116.)
109. Sen, Amartya. (1999). *Development as Freedom*, Alfrd A. Knoph, New York. (石塚雅彦訳 (2000) : 『自由と経済開発』 日本経済新聞社, pp1-10.)
110. Sen, Amartya. (2004). *Dialogue: Capabilities lists, and public reason: Continuing the conversation*. *Feminist Economics*, Vol. 10, No. 3, 77-80.
111. 戦慶勝 (2014) : 「接尾語の“族”を通じて中国社会の現状をみる」, pp293-301.
112. 銭哲婷 (1993) : 「高卒留学生の異文化適応についての研究-台湾からの留学生を中心に - 平成4年度筑波大学教育研究科」, 修士論文 (未公開) .
113. 総務省 (2017) : 平成28年度 法務省委託調査研究事業「外国人住民調査報告書ー訂正版ー」, 公益財団法人 人権教育啓発推進センター, pp22-51.
114. 総務省 (2020) : 「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の更なる推進に向けて～」. pp12-18.
115. 総務省行政評価局 (2013) : 「外国人の受入れ対策に関する行政評価・監視ー技能実習制度等を中心としてー結果報告書」, pp267-269.
116. Sun, Y. (2013). *Chinese students in Japan: The mediator and the moderator between their personality and mental health*. *International Journal of Psychology*, 48, 215-223.
117. 孫怡 (2011) : 「在日中国人留学生の異文化適応に影響を及ぼす個人の内的資源と外的資源」, パーソナリティ研究, 第20巻, 第2号, pp73-83.
118. 孫長虹 (2004) : 「中国人留学生の日本観」, 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻, pp217-229.
119. 高井次郎 (1989) : 「在日外国人留学生の適応研究の総括」, 名古屋大学教育学部紀要 36, pp139-147.
120. Tajfel, H. (1982). *Social Psychology of Intergroup Relations*. *Annual Review of Psychology*, 33, 1-39.
121. Tajfel, H.・Turner, J.C. (1986). *The Social Identity Theory of Intergroup Behavior*. In S. Worchel & W.G. Austin (eds.). *Psychology of Intergroup relations*, Chicago: Nelson-Hall, 7-24.
122. 田中共子 (1996) : 「日本人チューター学生の異文化接触体験 (2), その役割と異文化交流に関する質問紙調査」 広島大学留学生センター紀要, 7, pp84-108.
123. 田中宏 (1990) : 「80年代における日本の留学生受け入れ政策と中国人留学生」, 「季刊中国研究」, 第18号, pp23-56.
124. 谷冬彦 (2004) : 「青年期における同一性の感覚の構造ー多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成ー」 *教育心理学研究*, 49(3), pp265-273.

125. 段躍中 (2003) : 『現代中国人の日本留学』, 明石書店, pp22-119.
126. 張之洞 (1998) : 『勸学篇』『張之洞全集』第 12 冊, 苑書義・孫華峰・李秉新主編, 河北出版社.
127. 陳金婷・高田谷久美子 (2008) : 「在日中国人留學生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果」. 山梨大学看護学会誌, 6, pp17-24.
128. 坪井健(2005) : 「在日中国人留學生の動向と今後の課題 —中国と日本の留學生政策を背景にして—」. 2005 年 11 月 25 日筑波大学東京キャンパスで開催された日中社会学会研究会に於いて、「在日中国人留學生の動向—留學生調査 15 年より—」.
129. 坪井健 (2007) : 「留學生受け入れ 20 年間の動向と在日留學生の生活実態の変容に関する実証的研究」, 駒澤大学, 教育社会学, p1.
130. 鄭玉善(2008) : 「中国人留學生の来日前の対日観調査報告とその要因考察」名古屋大学留學生センター紀要 6, pp5-16.
131. 丁謙(1994) : 『中国人留學生の日本人観』, ライフデザイン研究所, p19.
132. Turner, J.C. (1987) . Rediscovering the Social Groups: A Self-categorization Theory. Oxford: Blackwell. (蘭千壽・磯崎三喜年・内容哲雄・遠藤由美訳 (1995) : 「社会集団の再発見」, 誠信書房.)
133. 東郷えりか(2006) : 『人間の安全保障』, 集英社, pp36-43.
134. 湯玉梅(2004) : 「在日中国人留學生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の視点から—」, 国際文化研究紀要, 10, pp293-328.
135. 東洋経済 (2020) : 「中国に衝撃『月収 1.5 万円が 6 億人』の貧しさ家計資産 1 億円超える大都市との巨大な格差」 2020 年 6 月 18 日記事  
(<https://toyokeizai.net/articles/-/357314>, 2021 年 11 月 5 日アクセス)
136. 竇碩華・佐藤由利子 (2017) : 「中国人元日本留學生の進路選択の影響要因と職場環境・生活環境に関する研究 —理工系と文系の比較, 主な職場別の分析から」, 移民政策研究, 第 9 号, pp89-105.
137. 独立行政法人日本学生支援機構 (2021) : 「令和元年度 私費外国人留學生生活実態調査」, pp1-2.
138. 苫野一徳 (2014) : 『自由はいかに可能か 社会構想のための哲学』, 講談社現代新書.
139. 塘利枝子・廿日出里美・小澤理恵子・鈴木一代 (2008) : 「文化間移動とアイデンティティ形成—生涯発達の視点から—」, 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, pp144-145.
140. 中村和彦 (2009) : 「さまざまな実践モデルとアプローチ」, 『相談援助の理論と方法 II』中央法規, pp131-139.
141. 永吉敬太 (2008) : 「人間開発論の変遷とその重要性について」, 鹿児島国際大学経済学研究科博士後期課程, pp1-4.
142. 中島恒雄 (1993) : 「『一人っ子』と家庭教育問題—教育学、心理学的立場からの考察」『父母必読』北京新聞社刊.
143. 中島恒雄 (1996) : 『社会福祉士・介護福祉士になる法』, 日本実業出版社.
144. 中島恒雄 (1997) : 『できなかった子をできる子にするのが教育』, ミネルヴァ書房.
145. 中島恒雄 (1998) : 『らくらくクリア保育士試験』(監修) 梧桐書院.
146. 中島恒雄 (1999) : 『福祉の仕事がわかる本』, 日本実業出版社.
147. 中島恒雄 (2000) : 『二十一世紀の大学教育改革』, ミネルヴァ書房.

148. 中島恒雄 (2001) : 『二十一世紀の高齢者福祉 [第3版]』, ミネルヴァ書房.
149. 中島恒雄 (2001) : 『[改訂版] レポート・試験はこう書く 社会福祉要説』, ミネルヴァ書房.
150. 中島恒雄 (2003) : 『二十一世紀の高齢者福祉と医療』, ミネルヴァ書房.
151. 中島恒雄 (2004) : 『保育児童福祉要説』(編著) 中央法規出版.
152. 中島恒雄 (2007) : 『新でできなかった子をできる子にするのが教育 私の体験的教育論』, ミネルヴァ書房, pp39-81.
153. 中島恒雄 (2007) : 『二十一世紀の高齢者福祉と医療 [第3版] 日本とアメリカ』 ミネルヴァ書房, pp177-196.
154. 中島恒雄 (2007) : 『教職科目要説 中等教育編』(編著) ミネルヴァ書房.
155. 中島恒雄 (2007) : 『教職科目要説 初等教育編』(編著) ミネルヴァ書房.
156. 中島恒雄 (2021) : 「中国の高齢化社会に役立つ人材を」, 人民日報海外版日本月刊, 2021年1月25日.
157. 日本学生支援機構 (2021) : 「令和元年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」, ([https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2021/03/date2019sg.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/03/date2019sg.pdf), 2021年11月3日アクセス)
158. 日本学生支援機構 (2021) : 「2020(令和2)年度外国人在籍状況調査結果」([https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2021/04/date2020z.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf), 2021年10月15日アクセス)
159. 日本経済再生本部 (2016) : 「日本再興戦略 2016—第4次産業革命に向けて」([https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/zentaihombun\\_160602.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/zentaihombun_160602.pdf), 2021年10月15日アクセス)
160. Norton, P. B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, ethnicity and educational change*. London: Pearson Education.
161. 班偉 (2004) : 「中国人留学生の異文化不適應と日本コンプレックス」, 山陽論業, 第11巻, p105.
162. 樋口陽一 (1994) : 『近代憲法学にとっての論理と価値』, 日本評論社.
163. 久野研二・David Seddon (2003) : 『開発における障害(者)分野のTwin-track Approachの実現に向けて: 「開発の障害分析」と「Community-Based Rehabilitation: CBR」の現状と課題, そして効果的な実践についての考察』国際協力事業団 準客員研究員報告書.
164. 福士正博 (2014) : 「持続可能な消費とニーズ(2)」東京経大会誌, 第283号, pp185-203.
165. 藤井桂子・門倉正美 (2004) : 「留学生は何に困難を感じているか -2003年度前期アンケート調査から-」『横浜国立大学留学生センター紀要』第11号, pp113-137.
166. Block, D. (2007). *Second language identities*. NY: Continuum.
167. Berry, J. W. (1997). *Immigration, Acculturation, and Adaptation*, *Applied Psychology: An International Review*, 46, 5-68.
168. Berry, J. W. & Sam, D. L. (1997). *Acculturation and adaptation*. In J. W. Berry, M. H. Segall, & C. Kagitcibasi (eds.), *Handbook of cross-cultural psychology*, 3, 291-326. Needham Heights, MA: Viacom.

169. Berry, J. W. (2006). Acculturative stress. In P. T. P. Wong, & L. C. J. Wong (eds.), *Handbook of multicultural perspectives on stress and coping*, 287-298. New York: Springer.
170. 方萍・松岡知津子・福岡昌子(2016):「日本語を学習する中国大学生に対する日本留学への意識調査—南京工業大学を対象に—」, 三重大学国際交流センター紀要, 第11号(通巻18号)。
171. 牧野真理子(2002):「異文化ストレスと心身医療」, 株式会社新興医学出版社。
172. 星野命(1992):『異文化間関係学の現在』, 金子書房。
173. Hobfoll, S.E. (1998). *Stress, Culture, and community*. New York: Plenum press.
174. 堀場裕紀江(2013):「第二言語とアイデンティティ:言語文化教育学の観点から」, 言語科学研究, 神田外国語大学院紀要, 19, pp37-56.
175. 馬上美知(2009):「ケイパビリティ・アプローチにおける「自由」及び「平等」の概念について—教育における公共性概念の再考のために—」, 東京大学大学院教育学研究科・教育学研究室・研究室紀要, No. 35, pp23-32.
176. 牧野廣義(2006):「自由・平等とケイパビリティ—アマルティア・センの倫理思想—」, 阪南論集, 人文・自然科学編 Vol. 42 No. 1, pp1-15.
177. Martha Nussbaum. (2000). *Women and Human Development*, Cambridge: Cambridge University Press. (池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳(2005):『女性と人間開発』岩波書店)。
178. 増井金典(2012):『日本語源広辞典』, ミネルヴァ書房。
179. 松原達哉・石隈利紀(1993):「外国人留学生相談の実態カウンセリング研究」26, pp50-59.
180. 松本基子(1999):「誰がになう私の介護 外国人研修生・技能実習生に関する一考察」, 社会福祉論集, 2, pp45-54.
181. 馬斌(2007):「在日中国人大学院生における精神的健康度とその心理・社会的要因」, 順天堂医学, 53, pp200-210.
182. 馬文甜(2016):「現代日本における中国出身留学生の将来設計に関する一考察」, 筑波大学大学院博士後期課程, 移民政策研究, 第8号, pp71-88.
183. 宮沢俊義(1958):『法律学全集(4)憲法II新版』有斐閣, pp90-94.
184. 宮本聡介・太田信夫(2008):『単純接触効果研究の最前線』, 北大路書房。
185. 村田雅之(1994):「留学生の『適応に要する時間』に関する分析」, 飯山論叢, 11(2), pp88-105.
186. Merriam SB, (1998). *Qualitative Research and Case Study Applications in Education*. San Francisco: Jossey-Bass. (堀薫夫・久保真人・成島美弥(訳)(2004):『質的調査法入門』, ミネルヴァ書房.)
187. 毛里和子(2006):『日中関係—戦後から新時代へ』, 岩波書店。
188. 文部科学省(2008):「『留学生30万人計画』骨子の策定について」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/07/08080109.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm), 2021年10月15日アクセス)
189. 文部科学省(2021):「外国人留学生の就職促進について」.(外国人留学生の就職に関する課題等), pp3-12.

190. 山崎瑞紀(1996):「アジア出身の留学生及び就学生の日本観」,『学術研究(教育心理学編)』,第44号,早稲田大学教育学部, p41.
191. 山本耕太(2014):「日本の臨床心理学領域におけるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を用いた研究の概観」.
192. 山本咲子(2017):「ケイパビリティ・アプローチからみた未婚の女性非正規雇用者の生活課題」日本家政学誌, Vol. 68, No. 8, pp421-429.
193. ユネスコ(2019): <https://en.unesco.org/news/unesco-adopts-first-united-nations-international-treaty-higher-education>, 2021年12月5日アクセス).
194. 楊暁(2000):『勸学篇と20世紀初期の日本留学ブーム』,華東師範大学学報, p74.
195. 姚霞玲・松原達哉(1990):「留学生のストレスに関する研究1生活ストレスを中心に」学生相談研究11, pp1-11.
196. 吉田竜平(2020):「ケイパビリティ・アプローチの再検討-その限界と今後に向けて-」,北星論集(社),第57号,pp13-23.
197. 李協京・田淵(1997):「中国人の日本留学の百年-歴史的軌跡と現在の留学事情について」,奈良教育大学紀要,第46巻,第1号(人文・社会), pp21-33.
198. 李亨(2019):「精神障害をもつ在日中国人における『生活のしづらさ』-中国語精神科専門外来から-」,茶屋四郎次郎記念学術学会誌,第9巻, pp39-55.
199. 李敏(2016):「中国人留学生の日本留学決定要因に関する研究-Push-and-Pullモデルに基づいて-」,広島大学,高等教育研究開発センター,大学論集,第48集, pp97-112.
200. 劉志明(1998):『中国のマスメディアと対日イメージ』,エピック.
201. 劉傑(1999):『中国人の歴史観』,文藝春秋.
202. 李洋陽(2007):「中国人の日本人イメージとその形成要因」,東京大学文学部大学院人文社会系研究科博士論文.
203. 梁晋衡(2012):「異文化体験におけるアイデンティティの形成-日本語学校で学ぶ中国人留学生を対象-」,日本青年心理学会大会発表論文集(20), pp24-25.
204. Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
205. 労働政策研究・研修機構(2009):「日本企業における留学生の就労に関する調査(<https://www.jil.go.jp/institute/research/2009/documents/057.pdf>, 2021年11月3日アクセス)
206. Ronald Dworkin. (2000). What is equality? part 1: Equality of welfare. *Philosophy and Public Affairs*, Vol. 10, No. 3, pp. 185-246, 1981; reprinted in Ronald Dworkin, *Sovereign Virtue: The Theory and Practice of Equality*, 11-64. (小林公・大江洋・高橋文彦訳(2002):「福利の平等」『平等とは何か?』木鐸社.)
207. Ward, C. & Rana-Deuba, R. (1999). Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Cross-cultural Psychology*. 30, 422-442.

## 付録

### 付録A インタビュー調査ご協力のお願い（日本語版）

#### 在日中国人留学生の生活支援に関する調査ご協力のお願い

拝啓 新秋の候、さわやかな秋を満喫されますよう、お祈り申し上げます。

東京福祉大学社会福祉学研究科の李亭と申します。現在わたしは、中国人留学生の生活支援について研究を進めており、その一環として、以下の通りインタビュー調査を実施しております。

このインタビューには30分～1時間程度の時間がかかります。インタビューへのご協力は任意です。このインタビューを通じてご提供いただいた情報に、研究者以外の第三者が触れることはありません。

また、研究成果の報告では、個人名が出ることはありません。研究データに誤りがないよう、インタビューの音声を記録させていただきます。

回答していただいたデータは、個人が特定されることはありません。皆さんにご迷惑をおかけすることはありません。どうか率直なご回答をお願いいたします。なお、調査の結果は博士論文の執筆や学会発表などの研究報告のみに利用いたします。

もし、質問に答えたくない場合には、お答えいただかなくても結構です。また、インタビュー調査への協力を中断したい場合には、その旨お申し出があればいつでも中断いたします。

ご多忙中のところ誠に恐縮ですが、以上の主旨をご理解いただき、この調査にご協力くださいますよう何卒お願い申し上げます。

敬具

担当者氏名：李 亭

担当者所属：東京福祉大学大学院 社会福祉学研究 博士課程後期

Email：litingjapan@yahoo.co.jp

2020年9月1日

## 采访调查协助书

亲爱的同学：您好

新秋之际，祝您每日神清气爽！

我是东京福祉大学社会福祉学研究科的李亭。目前我正在研究有关中国留学生的生活援助，作为研究中的一环，需进行如下采访调查。

这次采访需要 30 分钟至 1 小时左右的时间，协助采访是任意的。除了研究者以外，其他人都不會接触到您这次采访中所提供的信息。

本次研究的采访人数为 30 人左右，在研究成果的报告中，不会出现您的个人信息。为了研究数据无误，采访过程中会使用录音的方式，敬请谅解。

您所提供的信息会以数据的形式进行处理，不会给您带来任何不便。如实的回答您的所思所想所感即可。调查结果仅用于我的博士论文和学会发表，如果有不想回答的问题的话，不回答也没关系。另外，如果中途您想中断对此次采访的协助的话，随时中断也可以的。

谢谢您在百忙之中协助我的采访！

祝：学习进步 身体健康 万事如意

采访负责人姓名：李 亭

采访负责人单位：东京福祉大学 社会福祉学研究 博士课程后期

Email: litingjapan@yahoo.co.jp

2020 年 9 月 1 日

**Life Support for Chinese Students**  
**From the perspective of the capability approach, Case Study**

According to the Japan Student Services Organization (JASSO) (2020), the total number of international students accepted in Japan is 279,597. According to JASSO report, 43.6% of the international students in Japan are Chinese students, making them the largest group.

The purpose of this study is to discuss the capability approach to Chinese students, the largest group of international students, and to examine their life challenges and life support.

The reason why this study focuses on the capability approach among other theories is that this approach is one of the few theories that can evaluate the life challenges and life support of Chinese students from multiple perspectives in terms of the individual's "substantive freedom" and "capability richness". For this study, an online interview survey was conducted in September 2020 with 30 Chinese students attending a Japanese university. The data were analyzed using the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA).

The study was able to accurately identify the actual situation of Chinese students' problems to be solved in their overall life. By introducing the capability approach perspective into the life challenges and life support of Chinese students, we were able to correctly identify the life challenges and consider the rationale for intervention in life support from multiple perspectives.